熊本城調査研究センター報告書　第７集

熊本城跡発掘調査報告書５

―整備基本計画策定に向けた千葉城地区の発掘調査―

２０２４

熊本市熊本城調査研究センター

熊本城跡発掘調査報告書５　―整備基本計画策定に向けた千葉城地区の発掘調査―　２０２４　熊本市熊本城調査研究センター

熊本城調査研究センター報告書　第７集

熊本城跡発掘調査報告書５

―整備基本計画策定に向けた千葉城地区の発掘調査―

２０２４

熊本市熊本城調査研究センター

序　文

熊本城は、昭和８年（1933年）に石垣や堀が史跡に、宇土櫓等13棟の建造物が国宝に指定され、早くから文化財としての価値が認識されていました。その後、文化財保護法の制定や史跡の追加指定等を経て、現在は城域の約57.8haが国の特別史跡に、13棟の建造物が国の重要文化財に、１棟の建造物が県の重要文化財に指定されており、熊本を代表する歴史遺産として、市民・県民だけでなく国内外の多くの観光客の皆様にも親しまれています。

しかし、熊本県内外で甚大な被害を出した平成28年熊本地震は、この熊本城にも容赦なく襲いかかりました。その被害状況は、倒壊・崩落・一部損壊等を含め国指定重要文化財建造物13棟及び県指定重要文化財建造物１棟、そして再建・復元建造物20棟のすべてが被災し、石垣は全体の約３割に当たる約 23,600㎡に崩落や膨らみ・緩みなど修復を要する箇所が見受けられるというおびただしいものでした。また、地盤についても約 12,345 ㎡に陥没や地割れが発生するなど、被害は熊本城全域に及びました。現在、全体の復旧完了までを35年と見込み、計画的に復旧事業を進めているところです。

そのような中、令和元年（2019年）10月16日に、千葉城町の日本放送協会熊本放送会館跡地と日本たばこ産業株式会社熊本支店跡地が国の特別史跡に追加指定されました。千葉城町の一帯は中世千葉城があったとも言われる場所で、近世に入ると剣豪宮本武蔵居宅や藩蔵のほか、幕末まで武家屋敷が置かれました。また、近代には聯隊区司令部や憲兵隊本部、偕行社などがありました。追加指定をうけ、改めて保存と活用にどう取り組むかが重要な課題となりました。

本報告書は、『特別史跡熊本城跡保存活用計画』及び『熊本城跡千葉城地区（ＪＴ跡地、ＮＨＫ跡地）保存活用基本構想』に基づきながら、整備計画策定に向けて日本放送協会熊本放送会館跡地で実施した発掘調査の成果をまとめたものです。発掘調査では、近世の遺物だけでなく、７世紀とみられる紀年銘象嵌鉄刀が出土するという大きな発見がありました。これらの調査成果が、熊本城の今後の保存・活用、そして災害復旧へのはずみとなれば幸いです。

最後になりますが、本報告書を刊行するにあたって、これまでご指導、ご協力いただきました方々に深く感謝申し上げます。

令和６年（2024年）３月

熊本城調査研究センター
所長　網 田 龍 生

例　言

1．本書は、令和元年（2019 年）に特別史跡熊本城跡に追加指定された千葉城地区の日本放送協会熊本放送会館跡地において、整備基本計画策定に向けて基本土層や遺構等の把握のために実施した発掘調査の報告書である。

2．発掘調査（現場作業･整理作業）は令和３年度（2021 年度）～令和５年度（2023 年度）に熊本市熊本城調査研究センターが行った。

3．発掘調査期間（現場作業）は、令和４年（2022 年）３月 10 日～令和４年（2022 年）年９月 30 日である。

4．発掘調査（現場作業）は林田和人（主査）、永島さくら（文化財保護主事）、野上寛登（文化財保護主事）、矢野稔貴（文化財保護主事）が担当した。

5．整理作業・報告書作成は、令和４年度（2022 年度）～令和５年度（2023 年度）に熊本城調査研究センター内の作業室において行った。

6．現場作業における実測図作成は林田、永島、野上、矢野が行い、一部を株式会社四航コンサルタントに業務委託した。また現場での写真撮影は林田、永島、野上、矢野が行った。

7．現場作業における土色の表記は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。

8．座標は、世界測地系（JGD2011）に基づく平面直角座標系（Ⅱ系）による。

9．整理作業における出土遺物の分類は、林田、永島が行った。また報告書作成における遺物実測図作成は主に株式会社九州文化財研究所に業務委託し、一部を竹田知美（会計年度任用職員）、竹林香菜（会計年度任用職員）が行った。報告書作成における遺構図面作成は、竹田、竹林が行った。

10. 遺物写真撮影は、主として株式会社九州文化財研究所に業務委託し、一部を林田が行った。鉄刀については牛島茂（敬称略）のご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

11. 本書の編集は三好栄太郎（文化財保護参事）が行った。

12. 本書の執筆分担は下記の通りである。

第１章、第２章１・２・３・５、第３章：三好、永島

第２章４：木下泰葉（文化財保護主任主事）

第４章、第５章：三好

13. 令和４年度（2022 年度）～令和５年度（2023 年度）の調査に係る図面・写真・出土品は熊本城調査研究センターが所蔵・保管している。

昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物については熊本市立熊本博物館が所蔵・保管しており、本書への掲載にあたりご配慮を賜った。記して感謝申し上げる。

14. 鉄刀のＸ線ＣＴ調査は､熊本市との合同調査として熊本大学キャンパスミュージアム推進室に実施いただいたものである。また、ＣＴ画像の掲載許可にあたっては同機関にご配慮を賜った。記して感謝申し上げる。

15. 鉄刀の科学分析については、福岡市埋蔵文化財センターからもご協力とご指導を賜った。記して感謝申し上げる。

16. 鉄刀の所見については、下記の方々よりご指導を賜った。記して感謝申し上げる。（50 音順、敬称略）

奥山誠義、坂上康俊、佐藤信、杉井健、塚本敏夫、豊島直博、比佐陽一郎、柳田明進

17. 本書の絵図、古写真の掲載許可にあたり、下記の方々にご配慮を賜った。記して感謝申し上げる。（50 音順、敬称略）

一般財団法人熊本城顕彰会、熊本県立図書館、熊本市立熊本博物館、熊本市歴史文書資料室、熊本大学キャンパスミュージアム推進室、熊本大学附属図書館、公益財団法人永青文庫、国立国会図書館

18. 発掘調査に際し、下記の方々・機関よりご指導を賜った。記して感謝申し上げる。（50 音順、敬称略）

市原富士夫、岩井浩介、小畑弘己、北野博司、木村龍生、木庭真由子、特別史跡熊本城跡保存活用委員会、能登原孝道

目　次

本文

第１章　序説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　１．調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　２．事業体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　（１）事業の体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　（２）事務局 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　３．経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　　（１）発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　　（２）報告書作成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第２章　熊本城の位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　１．特別史跡熊本城跡について ・・・・・・・・・・・・ 4
　２．地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　　（１）概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　　（２）金峰山塊の岩質 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　　（３）熊本城跡の地形 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　３．歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
　　（１）周辺遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
　　（２）熊本城と城下の変遷 ・・・・・・・・・・・・・13
　４．千葉城地区の歴史的変遷 ・・・・・・・・・・・・・16
　　（１）千葉城地区の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・16
　　（２）千葉城地区の歴史的変遷 ・・・・・・・・・・16
　　（３）絵図・地図からみた地形の変化 ・・・・18
　５．既往の発掘調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・32
　　（１）発掘調査成果の概略 ・・・・・・・・・・・・・32
　　（２）千葉城横穴群の調査 ・・・・・・・・・・・・・38
第３章　発掘調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・49
　１．発掘調査の方法と調査区の設定 ・・・・・・49
　２．発掘調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
　　（１）基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
　　（２）発掘調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・49
　　（３）各トレンチの所見 ・・・・・・・・・・・・・・51
　　（４）遺物の所見 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第４章　地質調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
　１．調査方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
　２．調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第５章　総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
　１．出土遺物について ・・・・・・・・・・・・・・・・・95
　２．土層及び遺構について ・・・・・・・・・・・・・・97
　３．調査地の旧地形について ・・・・・・・・・・・・97

挿図

第１図　熊本城跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第２図　熊本城周辺の地質図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第３図　金峰火山と熊本城周辺の山地 ・・・・・・・・・・・・・ 7
第４図　三河川の流路と城下町のイメージ ・・・・・・・・・・・ 8
第５図　茶臼山ト隈本之絵図（写）（熊本博物館蔵）・・・・・ 9
第６図　熊本城周辺遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第７図　熊本城と城下周辺図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第８図　特別史跡熊本城跡 地区区分図 ・・・・・・・・・・・・・ 20
第９図　千葉城地区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第10図　熊本屋鋪割下絵図（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・ 22
第11図　肥後国熊本城廻普請仕度所絵図
　　（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第12図　熊本城廻絵図（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・・・ 22
第13図　明暦前後 二ノ丸之絵図（熊本県立図書館蔵）・・・・ 22
第14図　元禄前後 二ノ丸之絵図（熊本県立図書館蔵）・・・・ 22
第15図　宝暦九年迄 二ノ丸之絵図（熊本県立図書館蔵）・・ 22
第16図　天明七年迄 二ノ丸之絵図（熊本県立図書館蔵）・・ 23
第17図　二ノ丸之絵図（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・・・ 23
第18図　二丸之絵図（永青文庫蔵）・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第19図　熊本焼場方角図（熊本博物館蔵）・・・・・・・・・・・ 23
第20図　両軍配備図（熊本博物館蔵）・・・・・・・・・・・・・・ 23
第21図　熊本城郭及市街之図（国立国会図書館蔵）・・・・・・ 23
第22図　熊本全図 明治３年版（熊本県立図書館蔵）・・・・・ 24
第23図　熊本市街全図 明治26年版
　　（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第24図　熊本市明細地図 明治38年版
　　（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第25図　５万分１地形図（国土地理院ＨＰ 旧版地図）・・・・ 24
第26図　最近実測熊本市街地図 大正13年版
　　（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第27図　熊本城阯地籍図（熊本市蔵）・・・・・・・・・・・・・・ 24
第28図　航空写真（国土地理院）・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第29図　国土地理院発行１万分１地形図 熊本東北部 ・・・・ 25
第30図　放送会館建築配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第31図　明治10年（1877）撮影 南から見た熊本中学校
　　（熊本城顕彰会蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第32図　明治10年（1877）撮影 熊本中学校
　　（熊本城顕彰会蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第33図　明治10年（1877）撮影 西南戦争時の千葉城
　　（熊本城顕彰会蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第34図　明治10年（1877）撮影　西南戦争時の千葉城
　　（熊本城顕彰会蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第35図　明治10年（1877）撮影　西南戦争時の千葉城
　　（熊本城顕彰会蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第36図　明治10年（1877）撮影　西南戦争時の千葉城
　　（熊本城顕彰会蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第37図　南西から見た偕行社
　　（熊本市歴史文書資料室蔵）・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第38図　偕行社近景（熊本市歴史文書資料室蔵）・・・・・・・・ 29
第39図　上林ヨリ薮内橋迄（熊本県立図書館蔵）・・・・・・・・ 30
第40図　上林ヨリ薮内橋迄　トレース図・・・・・・・・・・・・・ 31
第41図　千葉城地区に関する調査地点位置図・・・・・・・・・・ 32
第42図　１地点で確認された旧坪井川・・・・・・・・・・・・・・ 34
第43図　大木家屋敷地の調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第44図　11地点で確認された玉川水路の位置・・・・・・・・・・ 36
第45図　８地点のＳＫ02出土陶磁器・・・・・・・・・・・・・・ 37
第46図　千葉城横穴群配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第47図　千葉城横穴群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第48図　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第49図　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第50図　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第51図　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
実測図４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第52図　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
実測図５・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第53図　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
実測図６・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第54図　トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第55図　１トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 51
第56図　２トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 52
第57図　３トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 52
第58図　４トレンチ平面図・土層断面図・鉄刀出土
状況図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第59図　５トレンチ平面図・土層断面模式図・・・・・・・・・・ 54
第60図　６トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 55
第61図　７トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 55
第62図　８トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 56
第63図　９トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 57
第64図　10トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 58
第65図　11トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 58
第66図　12トレンチ（東側）平面図・土層断面図・・・・・・・ 59
第67図　12トレンチ（西側）平面図・土層断面図・・・・・・・ 60
第68図　13トレンチ平面図・土層断面模式図・・・・・・・・・・ 61
第69図　14トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 62
第70図　15トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 62
第71図　16トレンチ平面図・土層断面模式図・・・・・・・・・・ 63
第72図　17トレンチ平面図・土層断面模式図・・・・・・・・・・ 63
第73図　19トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 64
第74図　20トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・ 64
第75図　Ⅱ層出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第76図　Ⅲ層出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第77図　Ⅲ層出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第78図　Ⅲ層出土遺物実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第79図　Ⅲ層出土遺物実測図４・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
第80図　Ⅲ層出土遺物実測図５・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第81図　Ⅲ層出土遺物実測図６・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第82図　Ⅲ層出土遺物実測図７・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第83図　Ⅲ層出土遺物実測図８・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第84図　Ⅲ層出土遺物実測図９・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
第85図　Ⅲ層出土遺物実測図10・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第86図　Ⅲ層出土遺物実測図11・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第87図　Ⅲ層出土遺物実測図12・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第88図　Ⅲ層出土遺物実測図13及び写真とＸ線ＣＴ画像、
銘文のトレース図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第89図　Ⅳ層出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第90図　Ⅳ層出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第91図　Ⅴ層出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第92図　排土出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第93図　調査地点位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第94図　想定地質断面図（A-A’）・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第95図　想定地質断面図（B-B’）・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第96図　調査区と横穴の位置関係の概略図・・・・・・・・・・・ 95
第97図　千葉城地区と箕谷２号墳の紀年銘象嵌鉄刀・・・・・ 96

表

第１表　特別史跡熊本城跡保存活用委員会における千葉城
地区に関する審議事項一覧表・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２表　熊本城周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第３表　千葉城地区変遷一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第４表　千葉城地区発掘調査等一覧表・・・・・・・・・・・・・ 33
第５表　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
観察表１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第６表　昭和37年（1962年）の千葉城横穴群出土遺物
観察表２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第７表　軒桟瓦（桔梗紋）観察表・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第８表　軒桟瓦（三巴紋）観察表・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第９表　軒桟瓦（その他）観察表・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第10表　（軒）目板桟瓦観察表・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第11表　軒丸瓦観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第12表　軒平瓦観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第13表　丸瓦観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第14表　平瓦観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第15表　道具瓦観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第16表　陶磁器・土器観察表１・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第17表　陶磁器・土器観察表２・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第18表　陶磁器・土器観察表３・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第19表　陶磁器・土器観察表４・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第20表　陶磁器・土器観察表５・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第21表　金属製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第22表　銭観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第23表　調査地の地質層序表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93

写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121

第１章　序説

１．調査に至る経緯

千葉城地区は、「特別史跡熊本城跡保存活用計画」（以下、「保存活用計画」）において旧熊本城域を６地区に区分した１つで、熊本市中央区千葉城町一帯に該当する地区である。「保存活用計画」では、特別史跡の指定範囲を旧城域まで拡大することに努めるとしており、また千葉城地区については地形の保存と本丸地区と一体となった景観の形成に努める保存管理方針とともに、「文化交流ゾーン」としての整備方針が示されている。

そのような中、千葉城地区の日本たばこ産業株式会社熊本支店（以下、ＪＴ熊本支店）が平成27年（2015年）に移転し平成29年（2017年）に建物が解体され、また日本放送協会熊本放送会館（以下、ＮＨＫ熊本放送会館）も平成29年（2017年）に移転した。一方、熊本城は平成28年熊本地震によって大きな被害が生じ、熊本市は「熊本城復旧基本計画」に基づいて復旧事業を進めている。

熊本城の復旧には今後も長い年月を要し、ＪＴ熊本支店とＮＨＫ熊本放送会館の跡地の利用が必要と見込まれた。また、千葉城地区の歴史的・文化財的価値の保存及び調査研究の情報発信、そして「保存活用計画」に定める「文化交流ゾーン」としての活用を図るため、熊本市は両跡地の保存活用について、平成31年に「熊本城跡　千葉城地区（ＪＴ跡地、ＮＨＫ跡地）保存活用基本構想」を策定し、その中で両者の特別史跡への追加指定と、その後の活用・整備を適切に進めていくための基本方針を定めた。そして令和元年（2019年）に両者が特別史跡に追加指定され、令和２年（2020年）にＪＴ熊本支店跡地を、令和４年（2022年）にＮＨＫ熊本放送会館跡地を熊本市が取得した。

本発掘調査は、これらの事業を受けて、整備基本計画の策定に向けてＮＨＫ熊本放送会館跡地における基本土層や遺構等を把握することを目的として実施したものである。令和４年（2022年）２月18日付で文化庁の現状変更許可を受け、同年３月10日から調査を開始した。また、発掘調査後に発掘調査成果を補足するため地質調査を行った。

２．事業体制

（１）事業の体制

特別史跡熊本城跡の史跡整備に伴う各種事業については熊本市文化市民局熊本城総合事務所及び熊本城調査研究センターが所管し、事業の方針・方向性については特別史跡熊本城跡保存活用委員会で審議し、熊本県や文化庁と協議を重ねながら進めている。中でも、各事業を進めるにあたっての発掘調査については熊本城調査研究センターが行い、それらの成果を踏まえて事業が進められている。

（２）事務局

本報告に係る熊本城調査研究センターの発掘調査等の調査体制については以下の通りである。

［令和３年度］（現場作業）

熊本城調査研究センター

所　長　　網田龍生（兼熊本城総合事務所所長）

副所長　　小関秀典

調査研究班（担当班）

主　査　　林田和人、山下宗親

主任主事　　村上里美（事務担当）

文化財保護主任主事　木下泰葉

文化財保護主事　　永島さくら
会計年度任用職員　　奥山穂津美（事務担当）、竹田知美、後藤　恵
復旧事業班
文化財保護主任主事　下高大輔（調整担当）
［令和４年度］（現場作業・整理作業）
熊本城調査研究センター
所　長　　網田龍生
主　幹　　橋本昌宜（兼調査研究班主査）
調査研究班（担当班）
主　査　　増田直人、林田和人
主任主事　　村上里美（事務担当）
文化財保護主任主事　嘉村哲也（調整担当）、木下泰葉
文化財保護主事　　永島さくら、矢野稔貴、野上寛登
会計年度任用職員　　相藤美樹（事務担当）、竹田知美、後藤　恵、坂梨　學、永野久治、
宮田義則、山戸　徹、小林美和子、古閑文江
［令和５年度］（整理作業）
熊本城調査研究センター
所　長　　網田龍生
主　幹　　橋本昌宜（兼総務班主査）
文化財保護主幹　増田直人（兼調査研究班主査）
総務班
参　事　　村上里美（事務担当）
会計年度任用職員　　相藤美樹（事務担当）

第１表　特別史跡熊本城跡保存活用委員会における千葉城地区に関する審議事項一覧表

番号	日　時	内　容
1	平成30年12月６日	・千葉城地区保存活用基本構想（案）について
2	平成31年３月28日	・「熊本城千葉城地区（ＪＴ跡地、ＮＨＫ跡地）保存活用基本構想」について
3	令和元年５月31日	・「千葉城地区（ＪＴ跡地、ＮＨＫ跡地）」について
4	令和元年７月30日	・「千葉城地区（ＪＴ跡地、ＮＨＫ跡地）」について
5	令和元年11月13日	・「千葉城地区（ＪＴ跡地、ＮＨＫ跡地）」について ・特別史跡熊本城跡の追加指定について
6	令和２年７月21日	・「千葉城地区（ＪＴ跡地、ＮＨＫ跡地）」について
7	令和２年11月11日	・ＮＨＫ跡地の土地取得について
8	令和３年７月27日	・千葉城地区（ＮＨＫ跡地等）の史跡整備計画について
9	令和３年11月29日	・史跡整備にＮＨＫ跡地の発掘調査について
10	令和４年３月29日	・史跡整備にＮＨＫ跡地の発掘調査について（現地視察）
11	令和４年８月３日	・ＮＨＫ跡地の発掘調査について
12	令和４年11月25日	・「熊本城千葉城地区（ＮＨＫ跡地）の復旧事業への活用について
13	令和５年３月24日	・ＮＨＫ跡地発掘調査の結果について

調査研究班（担当班）
文化財保護参事　　三好栄太郎
文化財保護主任主事　木下泰葉
文化財保護主事　　矢野稔貴、野上寛登
会計年度任用職員　　竹田知美、竹林香菜、川崎まさ代、小林美和子、村田優美

３．経過

（１）発掘調査

発掘調査は令和４年（2022年）２月18日付で文化庁の現状変更許可を受け、同年３月10日から開始し、同年９月30日に終了した。３～４月にまず丘陵上の南～西側でトレンチを掘削し、西側ではかなり撹乱を受けている状況が明らかとなった。また、４トレンチでは４月22日に須恵器が、続いて４月25日に鉄刀が検出され、昭和37年（1962年）に発見された千葉城横穴群との関係が想定された。一方、南側に設けた１トレンチについては、調査範囲では土層の解釈が困難であったため、拡張の必要性が生じた。３月29日には特別史跡熊本城跡保存活用委員会の現地視察、４月19日には小畑弘己委員（特別史跡熊本城跡保存活用委員会及び熊本市文化財保護委員会）の現地指導を受けている。

５月からは丘陵上の北～東側及び中央部でトレンチ調査を順次開始した。北側から中央部では近代や近世の可能性がある土層が確認され、北側で調査区の拡張等の必要性が生じた。同時に、撹乱の範囲が当初の想定より広いことも判明し、トレンチの位置を見直す必要性が生じた。

８月には丘陵下の千葉城公園でもトレンチ調査を開始したが、近世の土層は残っていなかった。なお、８月16日には４トレンチで、鉄刀の出土位置と近い箇所から須恵器と耳環が出土した。また、トレンチの拡張や配置変更についての計画変更が文化庁より８月25日付けで承認され、これ以降は主に計画を変更した部分の調査を行っている。９月12日には小畑委員の現地指導を受け、９月17日には市民向けの現地説明会を開催した。９月22日には文化庁の文化財調査官の視察を受け、９月30日にすべてのトレンチを埋め戻し終わって発掘調査を終了した。

また、発掘調査終了後の令和５年（2023年）１月20日から２月３日に、地形の成り立ちや詳細な地質を把握して発掘調査成果を補足することを目的として地質調査を行っている。

（２）報告書作成

調査終了後の令和４年（2022年）10月からは出土遺物の洗浄、注記、接合、台帳作成及び報告書掲載遺物の抽出といった一次整理作業を主に行い、並行して現場図面のデジタルトレースも行った。また、10月14日に熊本市と熊本大学との合同調査としてＸ線ＣＴ調査を実施したところ、４トレンチから出土した鉄刀に銘文があることが判明し、令和５年（2023年）１月27日に報道発表を行った。令和５年度（2023年度）には抽出した遺物の実測、デジタルトレース、観察表作成、写真撮影といった二次整理作業を主に行い、調査成果を報告書にまとめた。また合わせて、熊本市立熊本博物館の協力により、昭和37年（1962年）調査の千葉城横穴群出土遺物の図化を行った。

第２章　熊本城の位置と環境

１．特別史跡熊本城跡について

熊本城は、天正16年（1588年）に肥後に入国した加藤清正が茶臼山丘陵全体を取り込んで築城し、明治10年（1877年）の西南戦争では政府軍が籠城した平山城である。13棟の櫓や城門等が残存し、石垣や城壕の多くが旧規を保つとして昭和８年（1933年）に建物は国宝に、石垣や空堀、水壕などが史蹟「熊本城」に指定された。昭和25年（1950年）に文化財保護法が制定されると、重要文化財と史跡「熊本城跡」に名称が変更となり、史跡は追加指定を経て昭和30年（1955年）に特別史跡に指定されている。城域は約98ha と広大で、現在ではこのうちの約57.8ha が史跡指定地となっている。

昭和57年度（1982年度）には「特別史跡熊本城跡保存管理計画」（以下、「保存管理計画」）を策定し、特別史跡としての熊本城跡を良好な状態で保存していくことを最優先に考え、残存する遺構の維持保存はもとより、城域の境界を明確にするために石垣や堀の積極的な復元なども行うべきであるとまとめている。また、平成９年度（1997年度）には「熊本城復元整備計画」を策定し、地域の貴重な歴史遺産であり文化の象徴でもある熊本城跡の価値をより一層高めるため、史実に基づいた建造物・遺構の復元・修理を行う考え方を示した。この復元整備計画は短期・中期・長期に分けて進められ、短期スケジュールの第１期では西出丸（奉行丸）一帯を対象として復元整備が実施された。続く第２期では対象地区を飯田丸一帯とし、五階櫓の復元とともに石垣の膨らみが著しい箇所や明治初期に撤去された部分の石垣解体修理及び復元整備が実施された。第３期では本丸御殿建物群の大広間・大御台所棟及び数寄屋の復元整備が実施された。

こうしたなか、平成28年（2016年）４月に発生した「平成28年熊本地震」は、重要文化財建造物13棟、再建・復元建造物20棟の倒壊・一部損壊、石垣の３割に崩落や膨らみ・緩みが生じるなど、熊本城に甚大な被害を及ぼした。これを受けて平成30年（2018年）３月に「熊本城復旧基本計画」を策定、令和５年（2023年）３月にはこれを改訂し、現在、復旧事業を進めている。

あわせて平成29年度（2017年度）には「保存管理計画」について、熊本城跡の本質的な価値とそれを構成する諸要素を再確認し、そのうえでより適切な保存・管理のあり方や、現状変更等の取扱基準を定めて活用・整備の方向性を示した「保存活用計画」に改訂した。熊本城跡の本質的価値は、熊本城にまつわる歴史資料や城域の縄張、石垣、歴史的建造物などの諸要素で構成され、これらを堅実な調査によって史実に正しく解釈することで不変の価値と認識できるものとなる。特別史跡である熊本城跡の保存活用は、その上で保存や整備、啓発を図っていくことが特に肝要となる。

２．地理的環境

（１）概要

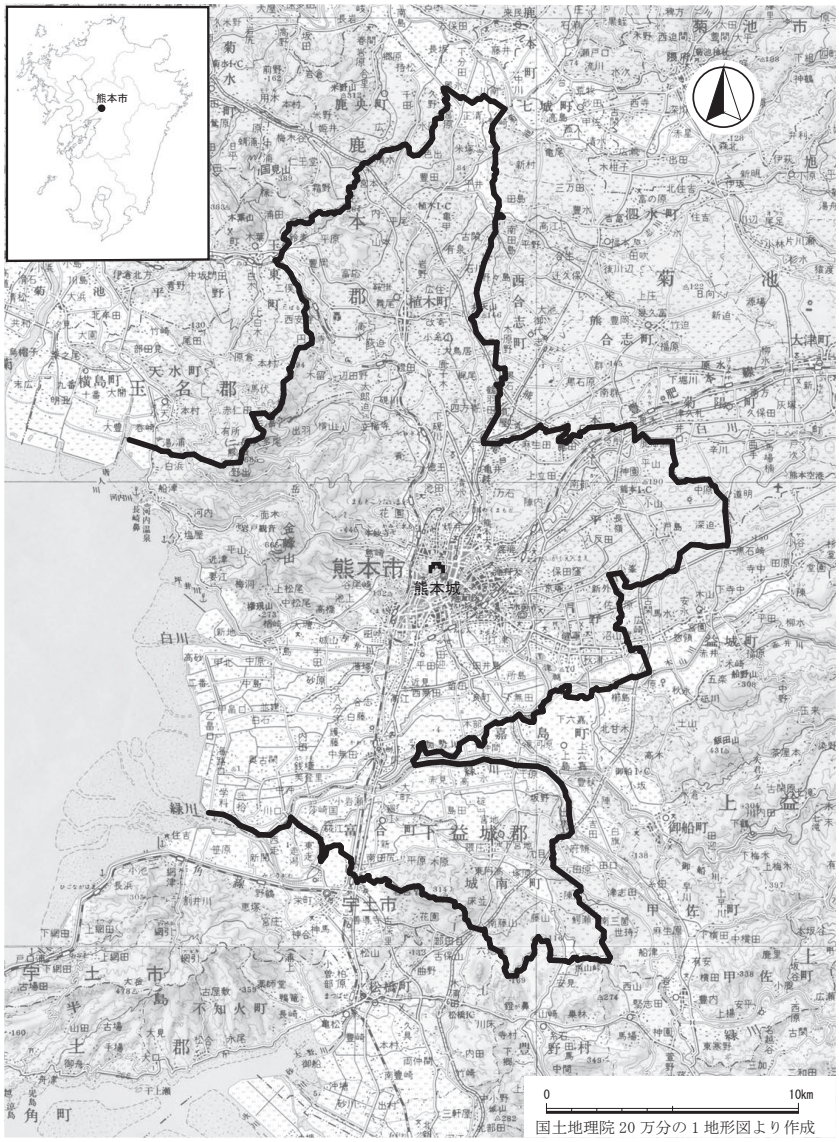
熊本市は、熊本県の県庁所在地として発展し、平成20年（2008年）に富合町、平成22年（2010年）に植木町・城南町と合併した結果、人口が73万人に達し平成24年度（2012年度）に政令指定都市に移行した。この合併により市域は大幅に拡大し、面積は熊本県の5.3％にあたる約390㎢を占めるに至った。以下に、熊本城周辺を中心に熊本市域の地勢について概観する。

市域は大きく分けて、有明海と内陸部を隔てている中央西側の金峰山塊、市域南西側にあって有明海に臨み、台地と山地で縁どられた広大な熊本平野、北部・東部・南部にかけての台地（火砕流台地・河岸段丘）で構成される。市域には、東西に貫流する白川、南東から東西に貫流する緑川の水系があり、熊本平野に臨む台地は両水系によって開析され、活発な沖積作用により熊本平野は形成された。

東部の台地は、先端の熊本平野から東方へ向かって標高を増し、阿蘇外輪山西側斜面へと続く。北側の台地も熊本平野から北へ向かってやや標高を増しながら続き、国道208号線・県道30号線付近を境に標高

を下げて、山鹿盆地・玉名平野に臨む。先の道路付近が分水嶺境界となり、境界から北側は木葉川や合志川などの菊池川水系の河川に開析されている。

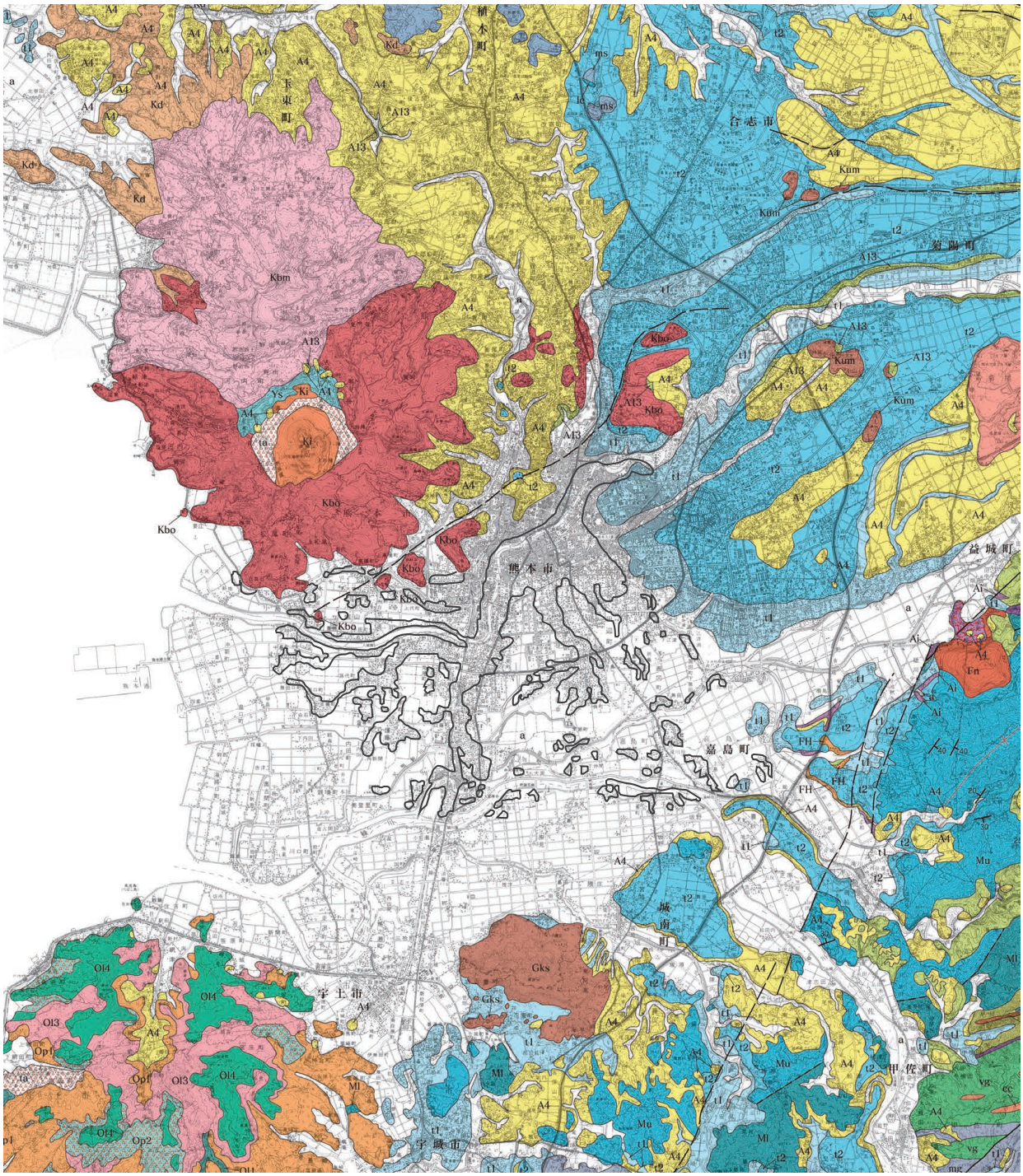
熊本城跡は、通称京町台地先端の茶臼山に立地する。この台地は、阿蘇火山起源の火砕流堆積物が基盤をなす。阿蘇火山からの火砕流は、数万年の間隔をおいて４回起こり、最大規模であった約９万年前と言われる最後の火砕流（Aso-４）が熊本市域を広範に厚く覆っている。京町台地より東側の台地は、さらにAso-４以後の砂礫層に覆われているが、この砂礫層は京町台地までは到達していない。このため、京町台地を含めて金峰山塊までの間はAso-４の端部の様相を呈し、火砕流が金峰山塊にのり上げた格好になるため、噴出源である阿蘇火山に対して逆傾斜の地形になる。火砕流は花岡山にも到達し、その先は沖積平野の下に潜っている。この火砕流による堆積物は、深い部分では溶結し硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分は溶結が進まず軟質の非溶結凝灰岩となる。熊本城域においては、熊本県立第一高等学校（以下、第一高校）グラウンド・藤崎台県営野球場・清爽園（明治時代に整備された庭園）などの崖面に非溶結凝灰岩の露頭が確認できる。



第１図　熊本城跡位置図

Aso-４の後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、熊本市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰に覆われている。火山灰層の上位は腐食の集積した黒土層で、黒ボクと呼ばれる現在の表土となる。下部は粘性の強い褐色土で赤ボクと呼ばれる。黒ボクの下位には、約26,000～29,000年前とされる鹿児島湾の姶良大噴火に起因する姶良丹沢火山灰が混入し、肉眼でも火山ガラスの結晶を観察できる。その上位に、7,300年前の鬼界カルデラ大噴火に起因する鬼界アカホヤ火山灰が確認される地域があり、遠隔地の火山活動による火山灰が人類史を区分する鍵層となっている。

火砕流堆積物と火山灰によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芹川とその支流により開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びる。河川の浸食は非溶結凝灰岩だけでなく溶結凝灰岩も樹枝状に開析し、京町台地は急崖に縁どられる特徴的な地形を呈している。台地表面の起伏は弱く、基盤である火砕流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至る。



熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

凡　例

A4：阿蘇 - 4 火砕流堆積物
t1：低位段丘堆積物
Ys：芳野層
Kum：熊本層群
FH：布田層・花房層
cc：結晶質チャート
Ol1：大岳古期輝石安山岩溶岩
Op1：大岳新期角閃石安山岩火砕岩
Kbo：金峰火山古期噴出物
t2：中位段丘堆積物
ta：崖錐堆積物
Ai：赤井火山（砥川溶岩）
MI：御船層群下部層
um：超苦鉄質岩類
Ol3：大岳新期角閃石安山岩溶岩
Op2：大岳新期輝石安山岩火砕岩
A13：阿蘇 - 1～3 火砕流堆積物
Ki：金峰火山新期堆積物
Kbm：金峰火山中期噴出物
Mu：御船層群上部層
vg：苦鉄質火山岩類
Gks：雁回山層
Ol4：大岳新期輝石安山岩溶岩

※黒線の範囲は自然堤防の範囲を示す。

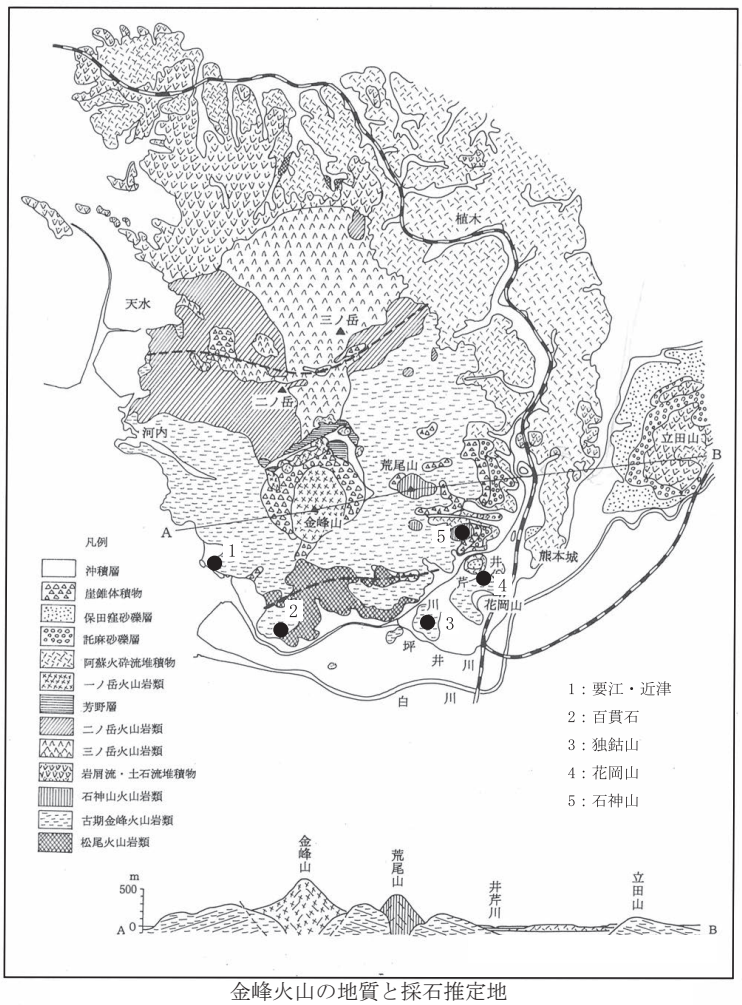
第２図　熊本城周辺の地質図

（2）金峰山塊の岩質

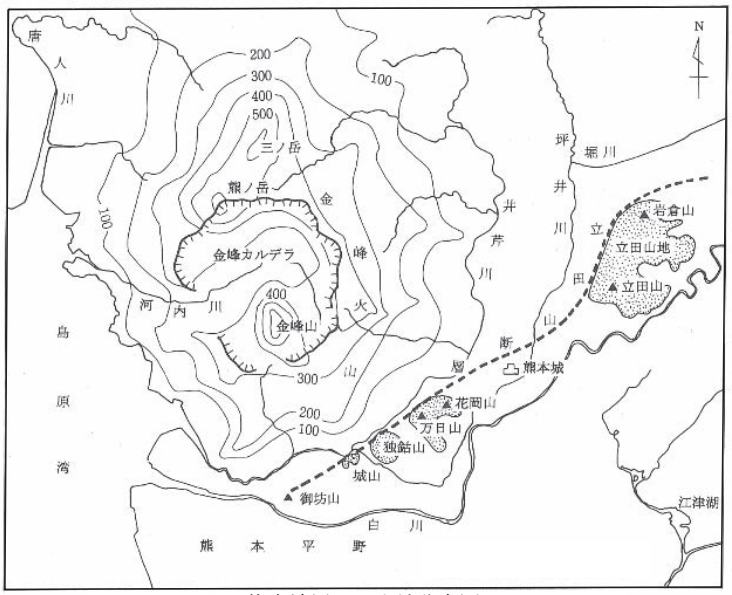
熊本城跡の石垣の大半は輝石安山岩である。これは金峰山塊で産出される安山岩の一つで、立地も含めて金峰山塊が主産地と想定されている。実際に、矢穴の痕が残る転石も確認されている。以下に石垣石材の生成に絡む金峰山塊について記す。

金峰山塊は、一つの大きな成層火山ではなく、多くの火山の集合体である。火山の活動は２期に大別され、古期噴出物としては、80～120万年前の活動による松尾山火山岩類・古期金峰火山岩類・石神山火山岩類があり、新期噴出物としては、三ノ岳火山岩類・二ノ岳火山岩類・カルデラ形成後に成長した一ノ岳（中央火口丘）火山岩類がある（第３図上）。古期噴出物の岩質は、玄武岩・輝石安山岩・角閃石安山岩など多様であり、うち角閃石を少量含む輝石安山岩が主体をなす。これは、粘性の強い溶岩噴出によって生成されたもので、肌理が細かく、割るのにも適していることから、加工石材として現在も広く利用されている。現在の安山岩類の採掘場は、古期噴出物から形成される地域、すなわち外輪部の南東－南－西側で数箇所が知られる。

外輪部とはやや離れるが、地質的に同質の火山噴出物で構成された丘陵がみられる（第３図下）。岩倉山・立田山・花岡山・万日山・独鈷山・城山・御坊山で、北東－南西方向に並び、南西になるにつれて、順次、面積・高度が小さくなる。この丘陵群は、西側・北東側斜面が急であるのに対して、東側・南西側斜面が緩やかな非対称な断面形を呈する傾向を示す。これは丘陵群にそって立田山断層が存在することに起因しており、本来、外輪部であった丘陵群が断層活動によって金峰山塊から切り離されたためと考えられている。熊本城が立地する茶臼山もこの並び上に当たる。現状では安山岩の露頭はみられないが、昭和35年（1960年）の天守再建に先立つボーリング調査で、天守東側



金峰火山の地質と採石推定地



熊本城周辺の山地分布図

0　　10km

※熊本市『新熊本市史　通史編第1巻』1998 より転載

第３図　金峰火山と熊本城周辺の山地

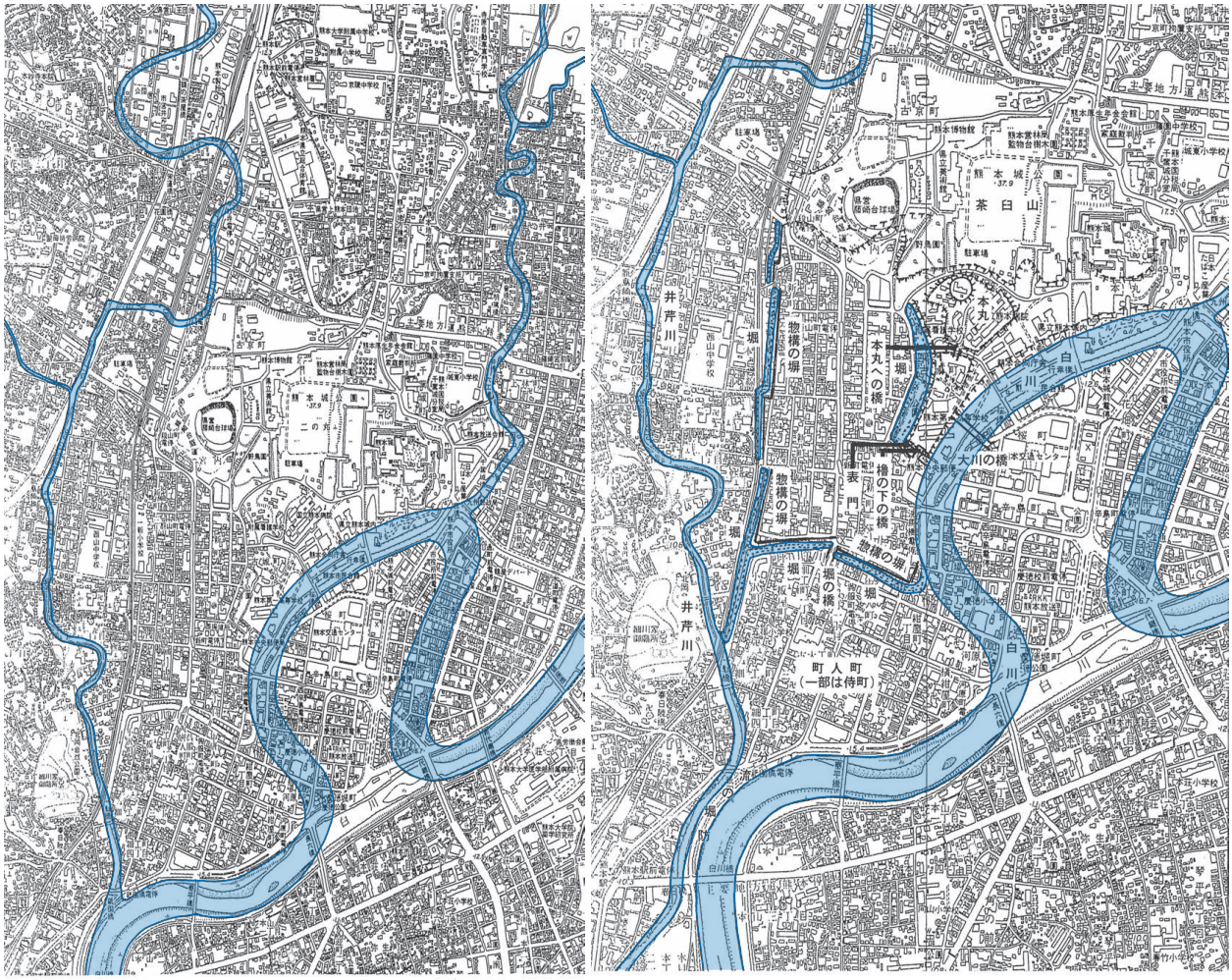
地下約35mに安山岩塊を含む層が存在するとされている。先述の丘陵群と同様に金峰山塊から切り離された後で火砕流に覆われ小高い地形になった可能性が高い。

立田山断層は、熊本城の北側付近を走ると想定されている。城内と京町を分ける新堀も、立田山断層に起因する丘陵の狭隘部を利用したとされ、京町台地と茶臼山丘陵を分ける高低差もこの断層によるずれとも考えられている。なお、地質図（第２図）によれば津浦・高平・徳王付近にも同質の噴出物が表示されている。

熊本城石垣の石取場の推定については、富田紘一氏の研究（富田紘一「『熊本城の歴史と探訪』第６回加藤清正の熊本城築城」『熊本城復刊68号』2007年）がある。これによれば、石垣採石により地形が大きく変化している可能性が高いことから、大量の熊本城石垣の供給を賄い得た場所として、坪井川河口付近の要江・近津を主要採掘地の有力候補としている。この他、岩石学的成果の援用、『肥後国誌』等の伝承、矢穴の痕跡を認める転石などの存在から、石神山・花岡山・独鈷山・百貫石付近などを採石地として紹介している。

（３）熊本城跡の地形

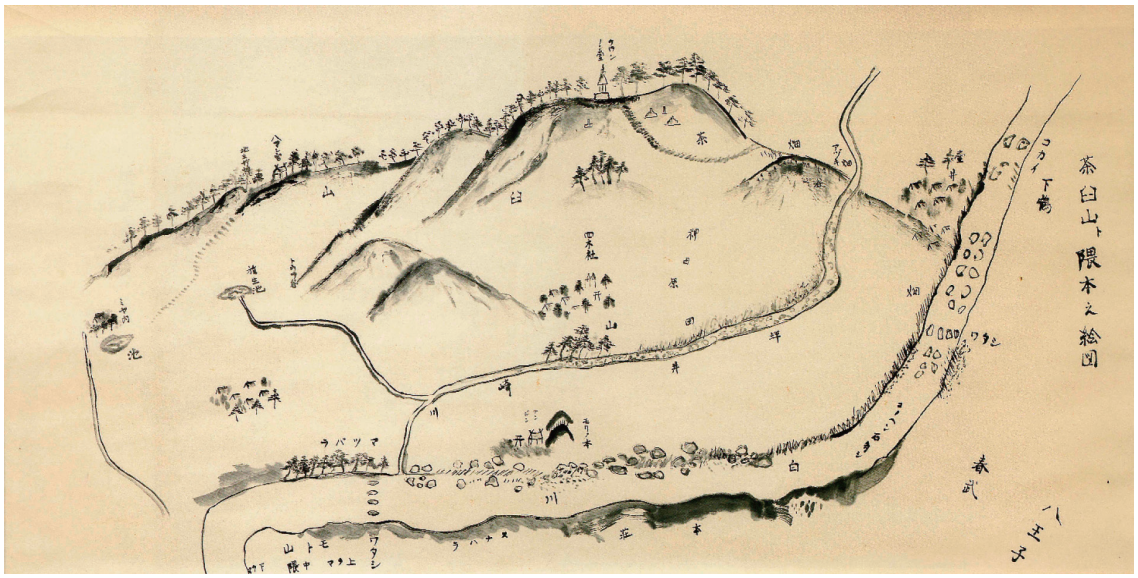
京町台地の先端は、現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなり、古来より茶臼山とも呼ばれていたように独立丘陵状を呈している。平面形は、河川開析による大小の弧の連続で構成されており、全体としては現在の第一高校を要とした扇形の地形で、東の千葉城、西の藤崎台、清爽園などの崖面に Aso- 4 火砕流堆積



三河川の原流路推定復元図　　隈本城と城下町の概念図（慶長初年頃のイメージ）

※富田紘一「白川・坪井川流路と城下町の形成」『市史研究くまもと』第７号　熊本市　1996 年より一部改変

第４図　三河川の流路と城下町のイメージ



第５図　茶臼山ト隈本之絵図（写）（熊本博物館蔵）

物の非溶結凝灰岩露頭がみられる。

崖面の形成は海進や河川等により削られたものだが、富田の研究成果（富田紘一「白川・坪井川流路と城下町の形成」『市史研究くまもと』第７号　熊本市　1996年）によれば、熊本城築城時、白川も京町台地に接して流れていたとされる（第４図）。「慶長国絵図」（公益財団法人永青文庫蔵）などをもとに、現在熊本城跡の南を流れる白川が、世継橋から北側へ大きく蛇行し、熊本市役所付近で坪井川と合流していて、これを17世紀初頭に加藤清正が白川を直線化し、現在の流路に付け替えたとするもので、旧白川跡想定地となる下通筋には、現在でも帯状窪地がみられる。この河川の流路変更と合わせて城内の南崖面を概観すると、第一高校のグラウンドに面した崖面、国立病院機構熊本医療センター（以下、「国立病院」という）と桜馬場の間の段差、桜馬場と奉行丸の間の段差、東竹の丸の高石垣と連続した高低差の大きい弧状の地形は、白川・坪井川の浸食面であった可能性を想定できる。実際、桜馬場の発掘調査や第一高校校長官舎建設に伴う発掘調査の際に、流路であった部分を２～５ｍほどの厚さで埋め立てていることが確認されている。埋立前は、白川・坪井川に削られた崖面が連続していたのであろう。飯田丸は、浸食面と思われる地形の一部に当たると思われるが、曲輪はやや南へ突出した地形となっている。

築城前の旧地形を知る資料としては、「茶臼山ト隈本之絵図」（第５図）がある。築城前の地形が独立丘陵状に描かれ、「クワンノン堂」など築城前の土地利用状況を示している。しかし、先の白川の蛇行の表現もなく、いつ頃の景観として描かれたものかわかっていない。ただ旧地形は、この絵図にあるように、現在の本丸付近を最高所として東には急に、西へは緩やかに下がる地形であったと考えられる。

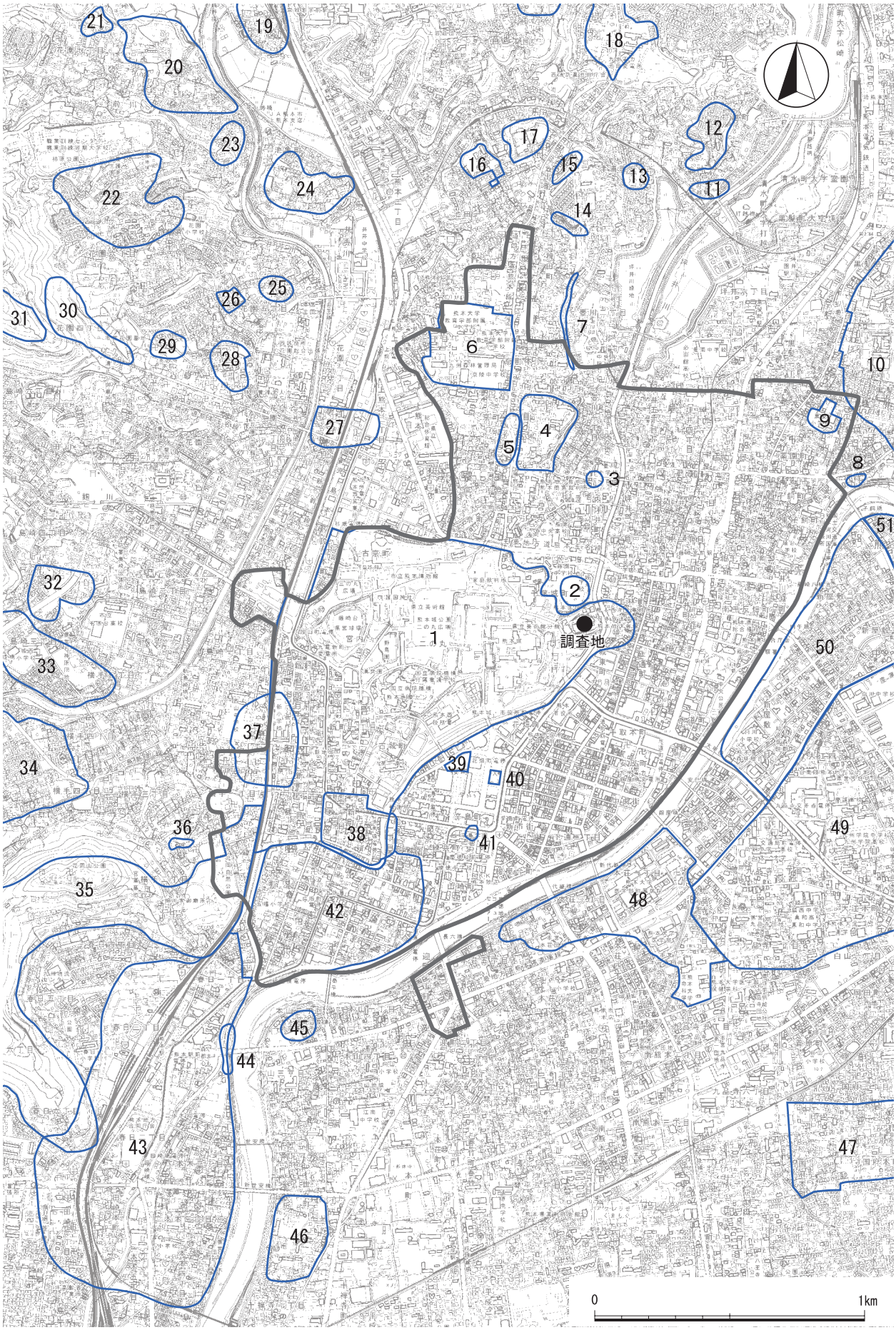
３．歴史的環境

（１）周辺遺跡の概要

熊本城跡の土地利用の概略としては、古代から中世の国府所在地と考えられている二本木遺跡群をはじめ各所へ向かう官道などの交通の要所、中世の寺院、戦国期の城を経て、近世城郭の築城となり、近代の軍用地を経て現在に至る。城下町の形成にあたっては、加藤清正が二本木遺跡群の町屋・寺院を古町に移したと言われている。

以下に、熊本城跡遺跡群周辺の旧石器時代～中世について、時代ごとに記す。

市域における旧石器時代の遺跡は、金峰山麓・立田山麓にみられ、山麓から派生する丘陵裾部でも近年出土例が増加しているが、熊本城周辺域ではまだ出土例がない。



（黒線は、『平山城肥後国熊本城廻絵図』（熊本県立図書館蔵）の城下の範囲を示す）

第６図　熊本城周辺遺跡分布図（数字は第２表に対応）

第２表　熊本城周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な時代	No.	遺跡名	主な時代
1	熊本城跡遺跡群	古墳～近代	27	牧崎遺跡（牧崎甕棺遺跡）	弥生
2	藤園中学校校庭遺跡	弥生・古代	28	中尾丸城跡	中世
3	内坪井遺跡	弥生	29	本妙寺北遺跡	古墳～中世
4	伝大道寺遺跡群	弥生～近世	30	本妙寺Ａ箱式石棺群	古墳
5	京町２丁目遺跡	縄文～中世	31	本妙寺Ｂ箱式石棺群	古墳
6	京町台遺跡群	弥生・中世	32	石神原遺跡	縄文～中世
7	寺原横穴群	古墳	33	千原台遺跡群	縄文～古代
8	子飼遺跡	古代	34	戸坂遺跡	弥生・古代
9	七軒町遺跡	古代	35	花岡山・万日山遺跡群	古墳
10	黒髪町遺跡群	縄文～中世	36	吉祥寺横穴群	古墳
11	打越貝塚	縄文	37	新馬借遺跡	弥生～近世
12	打越遺跡群	弥生・中世	38	船場町遺跡	弥生
13	舟場山古墳	古墳	39	山崎古墳	弥生・古墳
14	稗田横穴群	古墳	40	花畑邸跡	近世
15	津浦一ノ谷横穴群	古墳	41	辛島町遺跡	弥生・古墳
16	池田城跡	中世	42	古町遺跡（中唐人町遺跡）	弥生～近代
17	池田町遺跡（池田小学校遺跡）	弥生・古代	43	二本木遺跡群	縄文～近世
18	池田山伏塚遺跡群	弥生・古墳	44	石塘遺跡（白川橋遺跡）	弥生・中世
19	北島遺跡群	弥生・中世	45	本山城跡（本庄城跡）	中世
20	柿原遺跡群	弥生・中世	46	世安池田遺跡	弥生～中世
21	シブラ墓地	中世	47	出水国府跡	縄文・古代
22	経塚遺跡群	弥生・古墳	48	本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）	縄文～近代
23	柿原宮ノ原廃寺	中世	49	大江遺跡群	縄文～中世
24	池亀遺跡	弥生	50	新屋敷遺跡	縄文～中世
25	井芹遺跡（井芹甕棺遺跡）	弥生	51	大江白川遺跡	弥生～中世
26	井芹城跡	中世			

縄文時代の遺跡は、金峰山周辺に濃密に分布する。特に後晩期の遺跡が多く、井芹川上流には太郎迫遺跡や四方寄遺跡など著名な遺跡もある。熊本城跡遺跡群周辺域では、二本木遺跡群で中期から晩期の土器・石器、京町台遺跡群で晩期の遺物、熊本城跡遺跡群の西縁部に当たる段山遺跡で打製石斧や磨製石斧が採集されている。島崎遺跡でも同時期の遺物が出土している。また、熊本城跡においても地蔵門の脇から縄文時代後期の土器がまとまって出土している。

弥生時代の遺跡は、市域全体で早・前期は少なく、中期から急増する傾向がある。早・前期の資料は、二本木遺跡群から出土している。縄文時代晩期で途切れて弥生時代に連続しない遺跡が多い中で、この二本木遺跡群は、縄文時代晩期から継続して弥生時代早・前期の資料がみられる。扇状地と低地の境界に立地している点など、縄文時代から弥生時代への過渡期を考える上で注目される。弥生時代中期の甕棺も出土し、後期には壕や多数の竪穴建物群が出土している。銅鏃の出土例もあり有力な集落が形成されていたようである。二本木遺跡群の南に位置する八島町遺跡でも多数の竪穴建物が見つかっており、二本木遺跡群と同様な状況がうかがえる。熊本城跡遺跡群の周辺では、城下町が形成された白川右岸の京町台地の先端から南南西に伸びる緩扇状地にかけて、船場町遺跡の中期の甕棺、古町遺跡の中期の甕棺（唐人町遺跡）や、後期の竪穴建物群が出土しており、弥生時代中期頃から本格的な土地利用が始まったようである。後期には、桜町周辺・古町遺跡・二本木遺跡群・八島町遺跡・南新宮遺跡など、数百ｍから１㎞程度の距離をおきながら集落が営まれており、各集落間の関係性が注目される。他にも井芹遺跡・牧崎遺跡・藤園中学校校庭遺跡で中期の甕棺が出土している。

古墳時代の熊本城跡遺跡群周辺については、前期に京町台遺跡群と本庄遺跡で区画溝が見つかっており、ともに前期後半～末に集落の形成が始まっている。中期は本庄遺跡で多数の竪穴建物群が見つかっている。後期は京町台地に特徴的な崖地形に多数の横穴墓が造られている。熊本城跡遺跡群内にも古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群がある。さらに北には、寺原横穴群や、津浦一の谷横穴群などがあり、熊本市域の横穴墓集中地の一つである。古城横穴群は、崖面に３段にわたって築かれ、数回の発掘調査で53基の横穴墓が確認されている。そのうち39号には「火守」あるいは「火安」と読める文字が刻まれた閉塞石があり、墓室からは鉄滓が出土している。被葬者の職制を反映したものと想定されている。千葉城横穴群は、昭和37年（1962年）にＮＨＫ熊本放送局建設の際に発掘調査が行われ、10基の横穴墓が出土した。横穴墓の配置は、「コ」字状に前庭部を共有した横穴群であった可能性もある。これらの横穴群の集中に対して、墳丘を持つ古墳の分布は少ない。緩扇状地上にあった船場山古墳・長迫古墳・山崎古墳は、開発によって消滅し位置も不明瞭である。その中で山崎古墳は、長瀬真幸の調査記録により、寛政８年（1796年）に主体部が発見されたことが知られる。発見の経緯と人骨や遺物の良好な出土状況は、長瀬の知友であった伴信友の『信友随筆』などに収録されて今日に伝えられている。

京町台地から離れたところでは、花岡山・万日山遺跡群や二本木遺跡群で墳墓がみられる。古墳についてはいずれも現存していないが、注目事例を記しておく。花岡山箱式石棺群（花岡山・万日山遺跡群）では、箱式石棺の近くから中期の土師器壺が出土している。この壺には、中に碧玉製勾玉２個、碧玉製管玉１個、ガラス玉26個が納められており、地鎮行為に伴い埋納されたものと考えられている。万日山古墳（花岡山・万日山遺跡群）は、石室の構造、出土遺物から７世紀前半に比定される。全長12.3ｍの特異な構造の横穴式石室は、玄室の左右に石屋形を設け奥壁に刳抜式の家形石棺を設置している。家形石棺については畿内的要素がみられる。これらの点から、本古墳は当該地域における首長墳と捉えられ、安閑２年（535年）に当該地域に設置されたとされる春日の屯倉との関連も指摘されている。北岡横穴群（二本木遺跡群）は、上下３段に展開し、下段は枝分かれ状に伸びる長い前庭部をもつ。前庭部を派生させて新たな造墓を行ったもので、県下に類例は少なく、北部九州の遠賀川流域に認められる特徴である。墳墓に対して集落は調査例が少なく、二本木遺跡群で後期の井戸が見つかっている。

古代において最も注目されるのは二本木遺跡群で、７世紀末以降、遺跡の隆盛が著しく、特に８世紀後半～９世紀前半において充実している。これまでの発掘調査で、大規模な建物を含む規格的な配置の建物群や、陶硯・瓦の大量出土から官衙施設と想定される遺構を検出している。少なくとも郡衙以上の規模と内容を持った施設で、国府とみなしても他県の事例と遜色ない。官衙施設の周辺には、竪穴住居や掘立柱建物で構成される大規模な集落が広がっており、輸入陶磁器や国産陶器、腰帯具、墨書土器や線刻土器などの希少遺物も大量に出土している。唐三彩が出土していることも特に注目される。二本木遺跡群以外に、古代飽田郡の施設とみられるのが京町の伝大道寺跡遺跡群である。京町一帯は近世に武家屋敷・町人町として開発され、そのまま現在の市街地になっているため近世以前の様相はわかりにくいが、本遺跡からは７世紀後半から９世紀の瓦が出土している。この期間の瓦が継続して出土する遺跡は熊本市域では今のところ本遺跡のみである。伝大道寺跡遺跡群付近には、蚕養駅から西へ延びる官道が想定されており、飽田郡の重要地点に造られた施設であった可能性もある。なお、熊本城内でも二の丸・三の丸・監物台で古瓦や土師器・腰帯具が出土している。ほか戸坂遺跡でも古代の集落（竪穴建物・掘立柱建物）が確認されている。

中世も引き続き二本木遺跡群が隆盛する。二本木遺跡群では近世まで遺構・遺物が途切れなく認められる。10世紀代に当該地に国府が移転・設置され、これに連動して肥後国の中心として周辺域が発展したとみられる。遺構・遺物ともに膨大・多様であり、溝による半町単位の矩形土地区画がみられるなど、都市的な様相を呈する。資料数・範囲は10世紀後半～11世紀代において限定的であるものの、12世紀代には

急増してピークをみる。その後も多くの資料が認められ、都市として繁栄したことがうかがわれる。しかし17世紀前半には急減・衰退する。これは加藤清正の入国により、熊本城下（古町遺跡）に町屋・寺院が移転したことによるものと理解されている。古町遺跡にも中世の資料が認められるが、これは二本木遺跡群における都市の拡大・伸長によるものと想定される。

中世城としては、国衆といわれる在地豪族の居城である隈本城（千葉城・古城跡－いずれも熊本城跡遺跡群内）、鎌倉御家人詫磨氏の居城とされる本山城があげられる。第一高校では、発掘調査により、散兵線とされる溝や版築土塁を検出している。本山城跡は字名から城域が想定されているが、現況の地形や試掘確認調査の成果からは城の存在は不明瞭である。京町台遺跡群で中世末期の堀が確認されている。

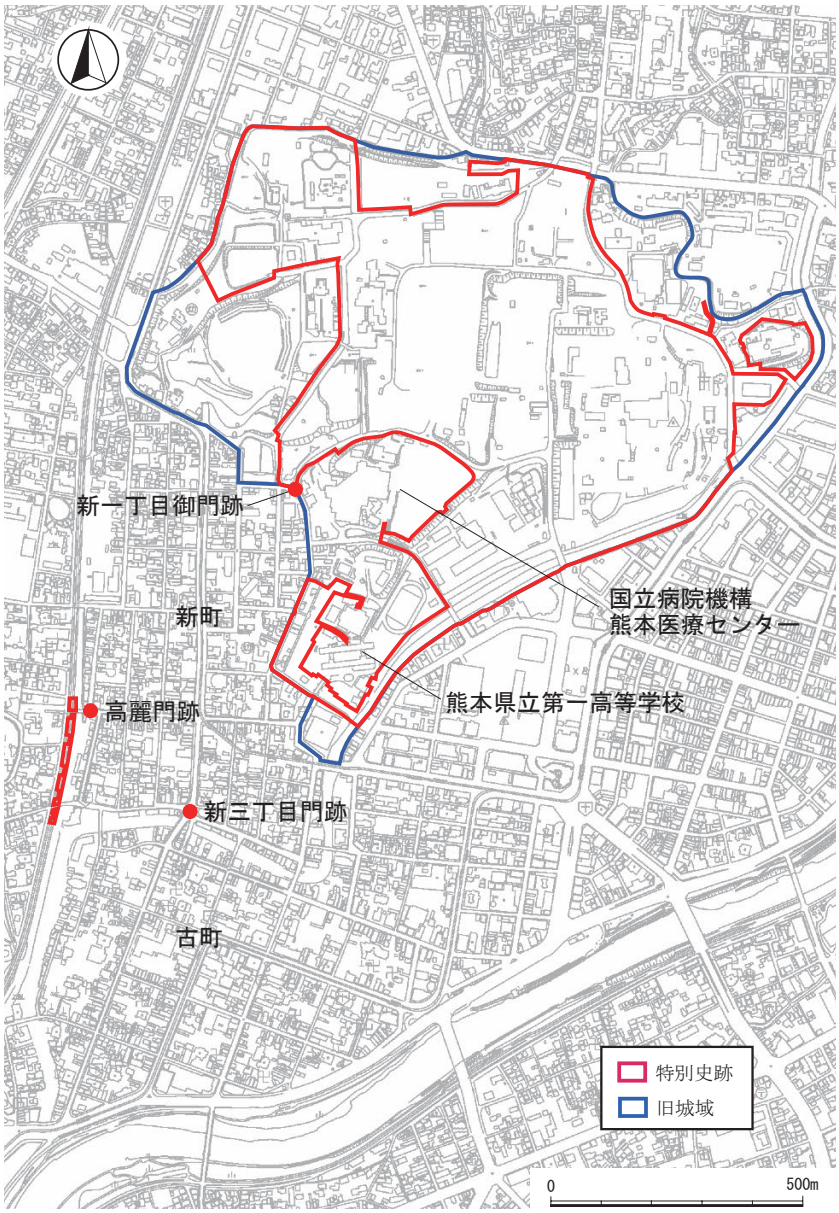
中世の石造物資料は、熊本城内（熊本城跡遺跡群）や古町遺跡内の寺院に分布している。熊本城内のものとしては、大永２年（1522年）銘「釈迦立像線刻板碑」、本丸御殿南に大永４年（1524年）銘「如意輪観音像線刻板碑」、天文５年（1536年）銘「阿弥陀三尊種子板碑」など、16世紀前半までの板碑がある。五輪塔も礎石や石垣の一部に転用されており、熊本城築城以前の茶臼山には中世寺院（茶臼山廃寺）が存在したと想定されている。古町遺跡の寺院内には、善教寺境内の建長２年（1250年）銘宝塔塔身が最古例としてあり、15世紀末から16世紀前半の板碑が多く見られる。

（２）熊本城と城下の変遷

熊本城や城下について、文献のほか発掘調査などで考古学的所見が得られた内容を加味し、時代を追いながら記述する。

熊本城が文献に登場するのは、南北朝時代である。肥前国松浦の大嶋堅と大嶋政の永和３年（1377年）の軍忠状に見える「隈本城」が初出で、位置の特定はされていない。熊本城跡遺跡群内での端緒は、応仁年間に出田秀信が茶臼山の東側に迫り出した千葉城と呼ばれる一帯に城を築いたことに始まるとされる。なお地名としての千葉城は熊本城域の中で東端台地にある。ＮＨＫ熊本放送会館建設時の発掘調査で横穴群が発見されたことから、旧地形が残存していると想定されている。

またその北側にはかつて旧城域を区分していた旧坪井川の流路も残り、歴史的景観を留めている。その後、『肥後国誌』によれば、明応５年（1496年）に鹿



第７図　熊本城と城下周辺図

子木親員（寂心）が築き、城親冬が天文19年（1550年）に入城したという隈本城の城域は、第一高校から国立病院敷地内一帯と想定されている。現在でも古城という地名が残り、第一高校周辺には城内最古の石垣が残存している。発掘調査としては、第一高校セミナーハウス建築に伴う調査で15世紀中葉から16世紀後半の陶磁器が出土し、国立病院の看護学校建設に伴う調査で16世紀前葉からの掘立柱建物群が出土している。この掘立柱建物群は堀・柵・櫓で構成された防御施設で、鹿子木氏・城氏の在城時期と合致することから、当時の城域を考える上で重要な調査成果となった。

隈本城には、天正15年（1587年）に佐々成政が、翌天正16年（1588年）には加藤清正が入城し、清正は中世の城を織豊城郭に改修を進めている。その後、加藤清正は隈本城を拡大して、京町台地南端の茶臼山一帯に熊本城を築城した。出土資料としては、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土しており、少なくとも慶長４年（1599年）には何らかの工事が行われていたと考えられる。本城整備に伴って、白川・坪井川の改修、城下町の再編成も行われた。

先述のように、大きく蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路と隈本城惣堀を利用して坪井川を開削したと考えられている。これにより、熊本城南側の防御線は、坪井川を内堀、白川を外堀に相当させることで強化され、加えて城下の洪水軽減、武家屋敷の面積拡大、船運路の整備にもつながった。

旧白川の流路にあたると想定される桜の馬場地区の発掘調査でも、17世紀初頭に埋め立てられた土層が確認されている。同じ旧流路の下流にあたると想定される第一高校の校長官舎建設に伴う発掘調査でも、厚さ５ｍにわたる版築層が検出され、その下位に河道を示す砂地が確認されている。同様の旧河道の痕跡は備前堀でも検出された。いずれも旧白川の埋め立てに関連する調査成果である。国立病院の看護学校建設に伴う調査では、加藤期と想定される道路が見つかっており、築城に際した資材運搬用の修羅道の可能性が指摘されている。

加藤治世期の末、寛永６～８年（1629～1631年）頃の作と推定される「熊本鋪屋割下絵図」（熊本県立図書館蔵）は、拡大・再編された城下町の様子を知る最古の資料である。この絵図にみえる城下町の範囲は、東から南は白川、北は出京町、西は段山から新町の高麗門・古町西側の坪井川・井芹川・石塘までである。

北側の京町は、京町台地の東側・西側が急崖で囲まれており、北端に空堀と土塁を設けていた。

現在の新町は、隈本城時代の侍町として始まり、その後惣構として整備された。惣構は、西側には新町西側の水堀と堀の東側に土塁を設け、南側は新たに掘削した坪井川で区切った。惣構と城内を区切るのは新一丁目御門で、現在の法華坂の清爽園付近にあった。枡形を伴う櫓門であったが、枡形を含めて現存しない。門の前は広場となり、高札が掲げられた札ノ辻と呼ばれ、各方面に延びる街道の起点となったとされる。惣構の西側は城の裏鬼門にあたるため寺町を整備し、惣構との連絡に「こうらい（高麗）門」が設けられた。

惣構の南側の古町には、古府中から移転した町屋が整備された。古町遺跡の発掘調査資料は、このことを反映しており、16世紀末～17世紀初頭から増加する。惣構内の新町が短冊形の町割で、「Ｔ」「Ｌ」字状の道が多いのに対して、古町は方一町の碁盤目状の区画の中央に寺院を配置するという特異な町割が形成された。町割形成当初の武家地と町屋の違いと考えられ、その間は坪井川で明確に区切られている。惣構と町屋の連絡には、惣構側に新三丁目門と坪井川に現明八橋が設けられた。新三丁目門は、絵図では枡形を伴う櫓門であることが分かっていたが、近年発見された長崎大学図書館所蔵の古写真で、城内の櫓門に匹敵する規模であったことが判明した。古町の一角の阿弥陀寺周辺に土塁の残存がみられ、惣構のように戦略上の配慮や水害対策が施されていた可能性もある。

明治維新の後、明治４年（1871年）に、城内に鎮西鎮台が設置され、その後熊本城は第二次世界大戦終

了まで大日本帝国陸軍の管理下に置かれた。明治初期には、各地の城郭と同じように熊本城でも櫓・塀・石垣の解体や改修が行われ、明治10年（1877年）には西南戦争の主戦場の一つとなり、天守をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失した。本丸御殿の発掘調査では、焼失した御殿の建築材、金具などが焼損した状態で焼土とともに多量に出土している。西南戦争では城下町も戦場となり、「射界の清掃」戦略で意図的に火が放たれたものと考えられ、大半が焼失した。その痕跡は、新馬借遺跡や古町遺跡での発掘調査でも確認されており、古町遺跡の発掘調査では、江戸期の表土を広範に覆う焼土層と判断された。

西南戦争の後、軍施設はさらに整備され、明治21年（1888年）には第六師団となる。軍の組織が整備されるに伴い、城内各所に新たな施設が建てられ、現在の天守前広場には大正６年（1917年）に師団司令部が置かれた。桜の馬場地区は、西南戦争以前から砲兵隊が置かれ、その後兵器工廠となった場所で、平成20・21年（2008・2009年）に行われた同地区の確認調査で、大正年間（1912～1926年）に造られた工廠の煉瓦造り建物の基礎が確認されている。西南戦争で焼失した城下町にも、戦後、山崎練兵場など軍関係の施設が整備されていく。

明治22年（1889年）に就任した第３代熊本市長辛島格は、熊本市を九州地方の中枢管理都市にすべく尽力し、周辺町村との合併や三大事業と呼ばれる上水道の整備・市電の敷設・歩兵第二十三連隊の移転を推進した。旧城下町にあたる山崎練兵場などの軍施設の移転は、当時の時代性もあり難航を極めたが、託麻郡大江村（現在の熊本市中央区大江）に移転することで同意がなされた。移転は明治33年（1900年）に行われ、市街地を分断していた練兵場跡地は新市街となり、現在につながる市街地形成が行われた。山崎練兵場が移転した先の大江遺跡群では、移転後、軍による大規模な造成が行われ、土地が平坦化された。発掘調査では、三角兵舎の柱穴跡や塹壕跡がしばしば確認され、第二次世界大戦頃の軍用品が出土することも少なくない。

熊本城は、大正末期から城跡の保存・顕彰が叫ばれるようになり、熊本城址保存会が発足した。この会が中心となって、昭和２年（1927年）に宇土櫓を解体・修理、長塀を改築している。昭和８年（1933年）には熊本城全域が史跡となり、残存していた建造物が国宝に指定されている。昭和25年（1950年）、文化財保護法により国宝建造物が重要文化財に指定され、昭和30年（1955年）には城内の主要部分が特別史跡に指定されている。昭和35年（1960年）には天守が鉄骨鉄筋コンクリートで外観復元された。昭和50年（1975年）には西出丸戌亥櫓跡から西大手門跡の石垣が復元され、昭和56年（1981年）には西大手門の再建が行われた。昭和57年（1982年）には「保存管理計画」がまとめられ、保存と整備の方針が決まる。平成元年（1989年）には宇土櫓の修復と数寄屋丸二階御広間の復元が行われた。平成３年（1991年）、台風19号の襲来により長塀中央部分が倒壊した。平成５年（1993年）には熊本城三の丸一帯を熊本市が買収し、東子飼町にあった旧細川刑部邸を移築復元している。平成11年（1999年）、台風18号により西大手門が倒壊する。平成14年（2002年）の南大手門の復元をはじめ、平成15年（2003年）には戌亥櫓、未申櫓、元太鼓櫓、西大手門と西出丸一帯の復元が完了した。平成17年（2005年）には飯田丸五階櫓の復元が完了する。平成19年（2007年）には熊本城築城400年を記念して本丸御殿大広間を復元し、平成20年（2008年）から公開した。

平成28年熊本地震で石垣、地盤、重要文化財建造物、再建・復元建造物、便益・管理施設などに甚大な被害が発生した。現在は平成28 年（2016年）12 月に策定された「熊本城復旧基本方針」及び平成30年（2018年）３月に策定、令和５年（2023年）３月に改定された「熊本城復旧基本計画」に基づいて、城内各所の復旧工事を進めている。また昭和57年（1982年）作成の「保存管理計画」を大幅に改訂する形で、平成30年（2018年）３月に「保存活用計画」がまとめられ、今後の特別史跡熊本城跡についての保存と活用や整備の方針を策定した。

４. 千葉城地区の歴史的変遷

（１）千葉城地区の概要

千葉城地区は特別史跡熊本城跡の東部に位置し、磐根橋から厩橋に通じる県道四方寄熊本線と旧坪井川に挟まれた地区（第８・９図）である。「保存活用計画」において、旧熊本城域を６地区に分けたうちの一つで、現在の千葉城町一帯にあたる。一部に民有地はあるものの、熊本家庭裁判所、旧九州財務局分室、熊本県伝統工芸館、熊本県立美術館分館などの公共施設が所在する。

千葉城地区の東に位置する丘陵には昭和38年（1963年）にＮＨＫ熊本放送会館が開局した。また、丘陵の南には昭和46年（1971年）に熊本地方専売局（のちＪＴ熊本支店）が設置されている。平成27年（2015年）にＪＴ熊本支店が移転し平成29年度（2017年度）に建物が解体、同年にはＮＨＫ熊本放送会館が移転し令和3年度（2021年度）に建物が解体されることとなった。熊本市はこれらの二つの用地を取得し、令和元年（2019年）に特別史跡熊本城跡に追加指定された。

（２）千葉城地区の歴史的変遷

ここではＮＨＫ熊本放送会館跡地を中心に、千葉城地区の歴史的変遷を述べておく（第３表）。まず昭和37年（1962年）のＮＨＫ熊本放送会館建築時、７世紀代の所産と考えられる横穴10基が確認された（次節で詳説）。

７世紀以降の様相は詳らかではないが、18世紀中ごろに成立した『肥後国誌』によると応永・文明の頃に、出田秀信が隈本城を構えたとされ、この場所は現在の千葉城であると記載されている[(1)]。一方、一次史料では「隈本城」は「藤崎城」と対峙する南朝側の城であり、茶臼山周辺地域に立地したと推定されるが[(2)]、隈本城が千葉城地区に位置したかは明らかでない。

加藤清正は慶長４年（1599年）頃から茶臼山頂部での新城の築城を開始し、千葉城地区も城域に取り込まれた。寛永６～８年（1629～1631年）の「熊本屋鋪割下絵図」（第10図）によると、千葉城地区一帯は武家屋敷として利用されており、ＮＨＫ熊本放送会館跡地は西側に長尾左衛門尉屋敷（1500石）、東側に冨田内膳屋敷（970石）が置かれた。また、棒庵坂下の熊本家庭裁判所付近は下津棒庵屋敷で、熊本県伝統工芸館付近は野尻久左衛門屋敷であった。

その後、寛永９年（1632年）に加藤家が改易となり、細川家が新たな藩主として入城した。寛永11年（1634年）の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（第11図）は、細川家が江戸幕府に熊本城の普請・作事を願って提出した絵図の写で、本図によると棒庵坂下から坪井川まで長さ221間、幅３間、両脇を石垣で護岸した水道（玉川）がつくられた。また、細川家入国後も一帯は武家屋敷として利用され、入国後間もないとみえる「熊本城廻絵図」（第12図）によると、ＮＨＫ熊本放送会館跡地に「長尾伊織」、ＪＴ熊本支店跡地に「古木小屋」、棒庵坂下に「大木織部」、熊本県伝統工芸館敷地西側に「大工小屋」、東側に「朝山斎助」の記載がある。明暦３年（1657年）以降とされる「二ノ丸之絵図」（第13図）によるとＮＨＫ熊本放送会館跡地にあたる丘陵は加藤時代から引き続き２区画の武家屋敷で、西側が吉田庄右衛門尉屋敷、東側が松野善右衛門尉屋敷であった。松野家は江戸時代を通じて同じ位置に屋敷を構えていたことが絵図からわかる。丘陵の北側は３区画に分かれ、上林次郎左衛門尉屋敷と伊藤太左衛門尉後家屋敷である。また、地区の東端の坪井川に面する一帯は「えんしやう小や」（煙硝小屋）となっている。ＪＴ熊本支店跡地は御仕置所となり、熊本県立美術館分館敷地は楯岡孫市郎屋敷、熊本県伝統工芸館敷地西側は大工小屋を前身とする「御作事会所」、東側が「長岡左京亮殿」（右京家2代目細川忠春）、すなわち細川右京（通称、内膳）家が上屋敷として拝領している[(3)]。また、熊本家庭裁判所付近は大木織部屋敷、沼田半之助屋敷である。

その後、元禄（1688～1703年）前後の絵図（第14図）では、ＮＨＫ熊本放送会館跡地の２区画は屋敷の

所有者が変遷し、熊本市教育センター付近にあった屋敷地は、東側の上林家屋敷を残して西側は「御掃除方会所」となっている。熊本県伝統工芸館敷地西側にあった作事所は「役割所」、ＪＴ熊本支店跡地は「御賄物所」となるが、宝暦年間の絵図では「御仕置所」に戻り（第15図）、天明期の絵図では再び「御賄物所」となった（第16図）。また、天明期以降の絵図では地区東端の煙硝小屋がなくなり、小区画の武家屋敷地となっている。文政期には熊本県立美術館分館の一画が「櫨方御用屋敷」となり、天保９年（1838年）には役割所御門南手に新たに蔵の建築が指示され（東蔵）、天保14年（1843年）には役割所が熊本県伝統工芸館西側から熊本県立美術館分館北側の一画に移転した[(4)]。この頃とみられる図（第17図）によると、役割所西側には「飽田詫摩人馬所」、ＮＨＫ熊本放送会館跡地の北西側の一画に「掃除方用屋敷」、国税局跡地に「新牢」など、藩役所が次第に増加する。また、文久元年（1861年）以降の図（第18図）によると、賄物所の西側に新たに蔵が建築されており、これに伴って玉川の流路が西寄りに変更されたとみられる。この蔵は嘉永４年（1851年）に建てられたことから[(5)]、「嘉永（加永）蔵」と呼ばれた。

明治時代になって鎮台の本営が熊本に置かれると、明治９年（1876年）に工兵第六小隊が花畑から棒庵坂下に仮営した。また、同年にＮＨＫ熊本放送会館跡地の高台には熊本中学校が置かれた（第19図）。熊本中学校は学制に基づいて熊本県で初めて設置された県立中学校で、明治７年（1874年）に文部省の許可を得て設置が決定した[(6)]。明治８年（1875年）12月25日付で白川県権令安岡良亮が内務卿大久保利通に宛てた伺[(7)]によると、中学校は第一大区四小区内の古屋を買い上げて設立したが、入校生が多いために県庁移転に際して県庁の一部の建物を中学校に下げ渡して三小区内に建築することが検討されていた。この伺は聞き届けられたが、結果的に県庁のあった古城ではなく、千葉城地区の高屋敷と呼ばれるＮＨＫ熊本放送会館跡地の屋敷地を買い上げ[(8)]、移転したものとみられる。その後、明治10年（1877年）の西南戦争開戦前である２月上旬までに熊本中学校は廃止となり、跡地は陸軍省の所管となったとみられる[(9)]。

西南戦争の政府軍・薩摩軍の配備状況を示した「両軍配備図」（第20図）によると、ＮＨＫ熊本放送会跡地のある丘陵の東端部には政府軍の砲台が設置され、砲台の周辺には堡藍が置かれた。西南戦争の前後間もないとみられる、丘陵全体を南から撮影した写真（第31図）には、東西に長い複数棟からなる建物が写る。この建物はおそらく陸軍に引き継がれた熊本中学校の校舎で、台地の南側に現在の坂道につながるような坂が造成されている。この坂を登り切った付近に門が設けられており、門に近接して撮影された写真（第33図）では、門柱に「軍団砲兵部」と掲げられているのが確認できる。建物は東端が写っているが、銃の弾痕とみられる穴が複数みられ、この建物の東側に前述した堡藍が確認できる（第34～36図）。

西南戦争後、ＮＨＫ熊本放送会館跡地・ＪＴ熊本支店跡地ともに工兵営となり（第21・22図）、明治23年（1890年）にはＮＨＫ熊本放送会館跡地に憲兵隊本部（第23図）、ＪＴ熊本支店跡地には大隊区がおかれた（第24図）。大正年間にはＫＫＲホテル熊本から国税局跡地付近一帯が陸軍馬廠となる（第26図）。その後、昭和４年（1929年）にはＮＨＫ熊本放送会館跡地に偕行社が落成しており（第37・38図）、この時にあわせて南側の坂の整備が行われたと考えられる（第27図）。昭和12年（1937年）には坪井川の流路が現在のように変更され（第28図）、昭和36年（1961年）の市街図（第29図）では、千葉城地区に済生会病院、農地事務局が確認できる。済生会病院は昭和26年（1951年）に花畑町から移転してきたもので、段山本町に移転する昭和33年（1958年）まで存続した[(10)]。昭和33年（1958年）には熊本県立図書館が開館し、その後、国税局施設、国家公務員共済組合連合会のホテル五峯閣（のちＫＫＲホテル熊本）が建築された。昭和38年（1963年）にＮＨＫ熊本放送会館が落成（第30図）、昭和46年（1971年）には日本専売公社（日本たばこ産業株式会社）が落成した。昭和57年（1982年）には熊本県伝統工芸館が開館、平成４年（1992年）には熊本県立図書館跡地に熊本県立美術館分館が開館した。

（３）絵図・地図からみた地形の変化

江戸時代の千葉城地区の地形を詳細に描いたものとして「上林ヨリ藪内橋迄」（第39・40図）がある。本図は「御土居絵図」と呼ばれる絵図のうちの一枚である[11]。文政元年（1818年）に「御府中御土居」（熊本城の惣構を構成する土居）についての図を作成するようにという命を受けて、熊本藩の御掃除頭・御掃除方目付・同所役人などの立会いのもと文政４年（1821年）まで実地検分が行われて絵図が作成され、文政10年（1827年）に提出された。本図によると、ＮＨＫ熊本放送会館跡地の丘陵は、北側で最大13間、東側で12間、南側で10間ほどの斜面となっている。丘陵の上部は２区画の武家屋敷で、それぞれ南側に登り口が設けられており、幅はおよそ２間半であった。東側の松野善右衛門屋敷と西側の永島仁右衛門屋敷の間には土塁状の構造物があり、高さは1間、幅は南で２間、北で６間である。永島仁右衛門屋敷から一段下がった西側は現在の熊本県立美術館分館にあたり、栖本冨太屋敷と櫨方御用屋敷があった。ここは、西側の玉川からおよそ４間半の高さがあったが、近代に削平され現在はその高低差はない。栖本冨太屋敷から北側にさらに一段下がった地形があり、ここは妻木吉左衛門屋敷と冨田家の屋敷であった。北側の坪井川沿いの道からはおよそ１間の高低差である。また、妻木吉左衛門屋敷にあたる西面は石垣であった。ＪＴ熊本支店跡地には御賄物所があり、ここから東の坪井川に面する狩野源内左衛門屋敷までは緩やかに下る地形であると推定される。

明治時代になると、丘陵上にあった武家屋敷は県が買い上げ、明治９年（1876年）には熊本中学校が設立された。熊本中学校については詳細な平面図等の史料は残されていないが、明治10年（1877年）の西南戦争前後とみられる写真が数点残されている（第31・32図）。これらによると、熊本中学校は東西に長大な複数の建物からなっていることから、江戸時代に屋敷を区画していた中央部の土塁は撤去されたと考えられる。また、江戸時代は南側に各武家屋敷に向かう坂道が設けられていたが、明治10年（1877年）の写真では現在につながるようなスロープが南側に大きく造られている。丘陵西側は明治時代に「土取場」となっており[12]、大きく削平された。その後の西南戦争中、東側から攻め込んでくる薩摩軍の攻撃拠点として、東端には砲台や塹壕が造られた（第34～36図）。

西南戦争後のＮＨＫ熊本放送会館局跡地は工兵営として利用された。明治11年（1878年）６月から翌年５月の間に作成されたと考えられる「熊本市街之図」（第21図）では等高線とともに標高が記載され、最高所は「30.0」と記載されるが、本図は全体として現在の標高から2.5m～４m程度高い数値となっている[13]。その後、明治44年（1911年）測量の５万分１地形図（第25図）では、標高21.7mと記載がある。明治～大正期の図の変遷では地形に影響を与えるような大きな変化はみられないが、昭和４年（1929年）に偕行社が新たに建築されると、あわせて丘陵南側の坂道を整備したことが竣工後の写真（第37図）から読み取れる。昭和12年（1937年）には坪井川の改修が完了し現在の流路となった。昭和36年（1961年）にはＮＨＫ熊本放送会館の新築に伴って造成が行われている。

註

(1) 後藤是山編 1971『肥後国誌』青潮社

(2) 中世隈本城の研究史については熊本市 2020「第３章　熊本城研究史」『特別史跡熊本城跡総括報告書　調査研究編　第１分冊』

(3) 菅　芳生編 2013『細川右京家資料集』右京家細川事務所

(4) 公益財団法人永青文庫蔵熊本大学附属図書館寄託細川家文書 10.6.18「壁書控」

(5) 註４に同じ

(6) 熊本県 1961『熊本県史　近代編　第一』 702 頁

(7) 熊本県立図書館蔵　ﾓｺｱ /14-1/「熊本県公文類纂 14- 1　土地　官地払下　自明治６年至明治 20 年」

(8) 熊本県立図書館蔵　ﾓｺｱ /14-18/「熊本県公文類纂 14-18　土地　官地払下　明治９年　11 冊ノ内 11」

明治 9 年 3 月 20 日付で第一大区五小区藪之内に居住する士族・藤本彌から提出された土地の払下願によると、藤本が所有していた第一大区四小区高屋敷百七拾弐番地の土地を中学校敷地として買い上げられている。また、同年 12 月 15 日付で中川改平という人物から提出された官地の払下願に付属する図によると、現在の熊本市教育センター付近が最初に設立された中学校の位置で、図中に「元中学校」の記載がある。その後、中学校は移転し、NHK 熊本放送会館跡地には「中学校」と記載される。また、中学校の西にあたる現在の熊本県立美術館分館の位置に「土取場」の記載がある。

(9) 宇野東風 1931『我観・熊本教育の変遷』大同館書店　195 頁、熊本縣教育会 1931『熊本縣教育史』 466 頁

(10)社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院 2011『済生会熊本病院 75 年誌』

(11)熊本市 2019『特別史跡熊本城跡総括報告書』歴史資料編　史料・解説

(12)註 8 に同じ

(13)鶴嶋俊彦 2015「新史料　熊本城郭及市街之図」『熊本城調査研究センター年報』 1　熊本市熊本城調査研究センター、熊本市 2019『特別史跡熊本城跡総括報告書』 歴史資料編　史料・解説　399 頁

参考文献

熊本市教育委員会 1971『熊本市北部地区文化財調査報告書』

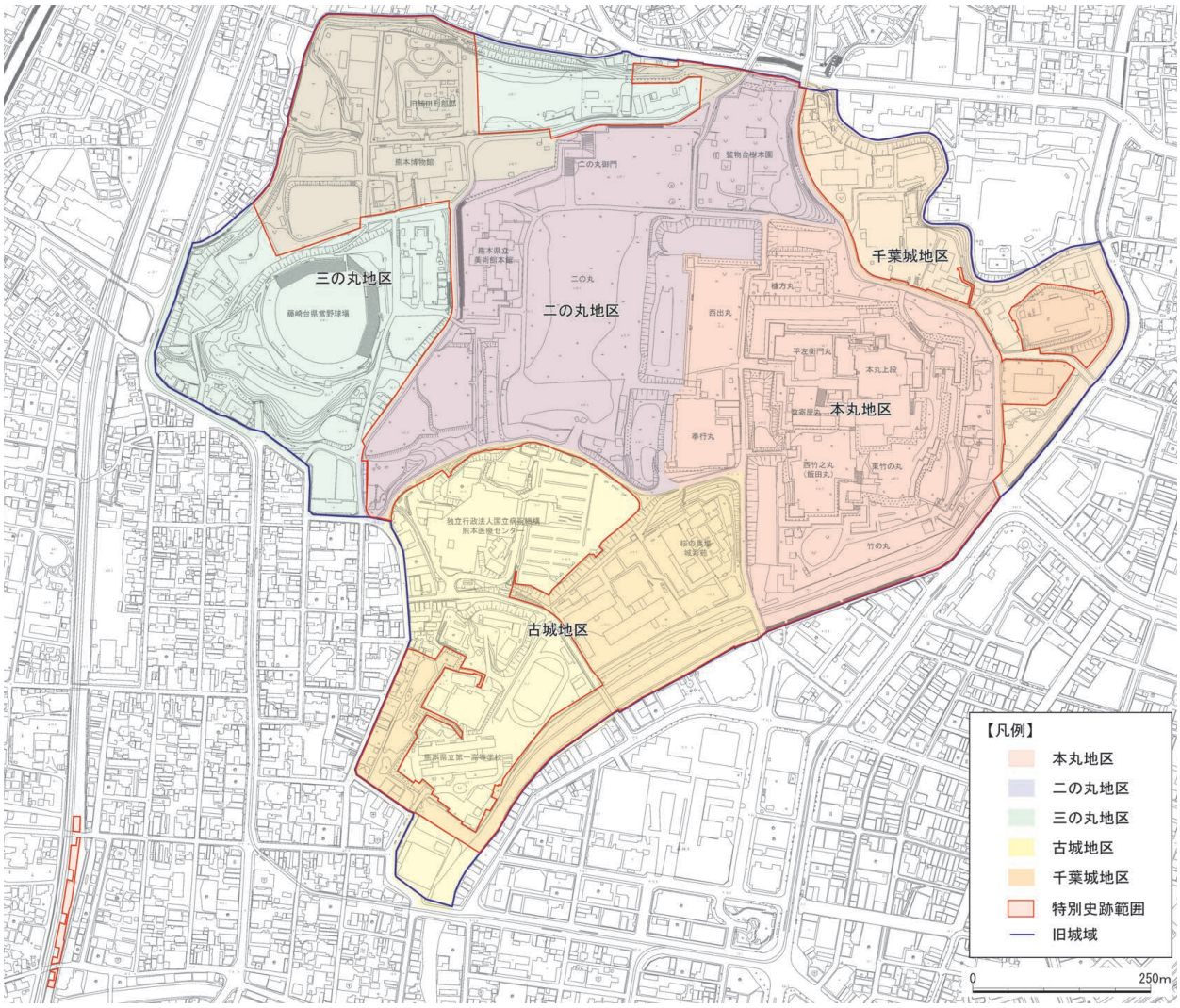
山田康弘・高野和人編 1987『青潮社歴史選書 4　肥後加藤侯分限帳』青潮社

新熊本市史編さん委員会 1993『新熊本市史　別編第一巻　絵図・地図上　近世・近代』熊本市

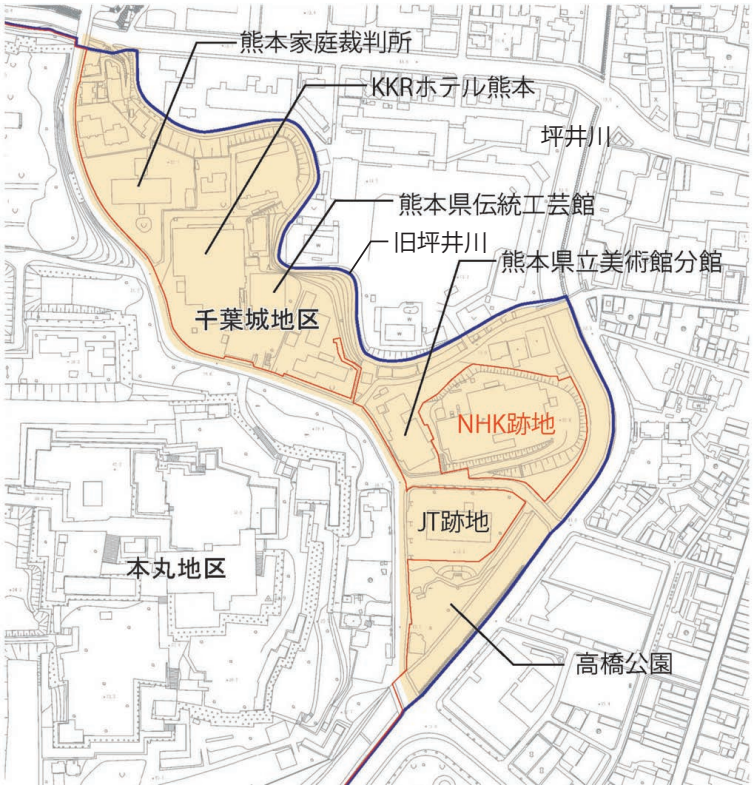
熊本市都市政策研究所編 2014『熊本市都市形成史図集―戦前編―』、同 2016『熊本市都市形成史図集―戦後編―』

熊本市 2018『特別史跡熊本城跡保存活用計画』

熊本市 2019『特別史跡熊本城跡総括報告書』歴史資料編　絵図・地図・写真



第８図　特別史跡熊本城跡 地区区分図



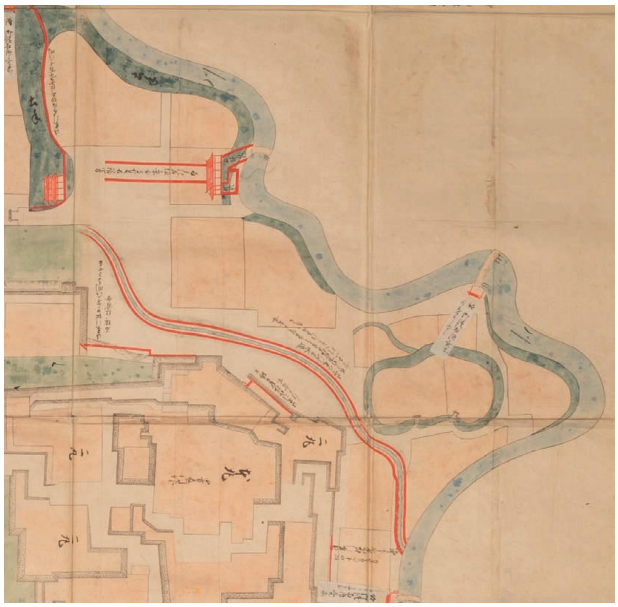
第９図　千葉城地区位置図

第３表　千葉城地区変遷一覧表

※空白部分は不明で、施設の廃止・未設置を示すものではない。

西暦	名称	地番	高橋公園	JT跡地	NHK跡地	県立美術館分館 北	県立美術館分館 南	千葉城公園	教育センター	年金事務所	熊本国税局千葉城分室	伝統工芸館	KKR	九州財務局分室	家庭裁判所
	中世以前				横穴										
	中世														
	加藤時代		武家屋敷												
	細川時代		仕置所 御賄物所 仕置所 御賄物所 蔵		武家屋敷	飽田詫摩人馬会所	武家屋敷 櫨方御用屋敷	煙硝小屋	武家屋敷 御掃除方会所		新牢	穿鑿所	役割所 蔵		
1868	明治	1		嘉永蔵											
1869		2													
1870		3													
1871		4													
1872		5													
1873		6													
1874		7													
1875		8													
1876		9			熊本中学校（西南戦争で焼失）								工兵第六小隊仮兵舎		
1877		10									陸軍倉庫 →千葉城倉庫		輜重兵営		
1878		11	工兵営												
1879		12													
1880		13													
1881		14													
1882		15													
1883		16													
1884		17													
1885		18													
1886		19													
1887		20													
1888		21													
1889		22													
1890		23			憲兵本部	大隊区司令部 →聯隊区司令部 →連隊区司令部					経理部・監督部			熊本大隊区調馬場 → 陸軍馬廠	
1891		24													
1892		25													
1893		26													
1894		27													
1895		28													
1896		29													
1897		30													
1898		31													
1899		32													
1900		33													
1901		34	大隊区												
1902		35													
1903		36													
1904		37													
1905		38													
1906		39													
1907		40													
1908		41													
1909		42													
1910		43													
1911		44													
1912	大正	1													
1913		2													
1914		3													
1915		4													
1916		5													
1917		6													
1918		7													
1919		8		陸軍官舎											
1920		9													
1921		10													
1922		11													
1923		12													
1924		13													
1925		14													
1926	昭和	1	第六師団長官舎												
1927		2													
1928		3													
1929		4													
1930		5													
1931		6													
1932		7													
1933		8			偕行社										
1934		9													
1935		10													
1936		11													
1937		12													
1938		13													
1939		14													
1940		15													
1941		16													
1942		17													
1943		18													
1944		19													
1945		20													
1946		21	進駐軍官舎 →専売公社官舎												
1947		22													
1948		23													
1949		24													
1950		25													
1951		26													
1952		27			熊本市 教育研究所						済生会病院				
1953		28													
1954		29													
1955		30													
1956		31													
1957		32													
1958		33													
1959		34												電波管理局	
1960		35													
1961		36													
1962		37													
1963		38													
1964		39													
1965		40													
1966		41													
1967		42													
1968		43													
1969		44													
1970		45													
1971		46													
1972		47	高橋公園	熊本地方専売局 → 日本たばこ産業株式会社熊本支社	日本放送協会（NHK）熊本放送会館	熊本県立図書館					熊本国税局分室 （平成28年度より熊本市へ無償貸与）	熊本県伝統工芸館	熊本共済会館五峯閣 → KKRホテル熊本	九州財務局分室	熊本家庭裁判所
1973		48													
1974		49													
1975		50													
1976		51													
1977		52													
1978		53													
1979		54													
1980		55													
1981		56													
1982		57													
1983		58													
1984		59													
1985		60				熊本県文化財収蔵庫									
1986		61													
1987		62													
1988		63													
1989	平成	1					熊本県立美術館分館		教育センター						
1990		2													
1991		3													
1992		4													
1993		5													
1994		6													
1995		7													
1996		8													
1997		9													
1998		10													
1999		11													
2000		12													
2001		13													
2002		14													
2003		15													
2004		16													
2005		17													
2006		18													
2007		19													
2008		20													
2009		21													
2010		22													
2011		23													
2012		24													
2013		25													
2014		26													
2015		27													
2016		28													
2017		29													
2018		30													
2019	令和	1													
2020		2													
2021		3													
2022		4													
2023		5													

第 10 図　熊本屋鋪割下絵図（熊本県立図書館蔵）



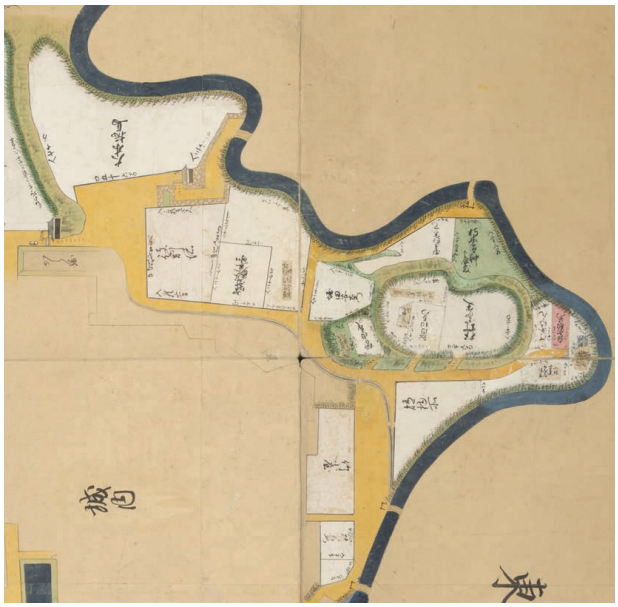
第11図　肥後国熊本城廻普請仕度所絵図(熊本県立図書館蔵)

第 12 図　熊本城廻絵図（熊本県立図書館蔵）

第13図　明暦前後 二ノ丸之絵図(熊本県立図書館蔵)

第14図　元禄前後 二ノ丸之絵図(熊本県立図書館蔵)

第15図　宝暦九年迄 二ノ丸之絵図(熊本県立図書館蔵)

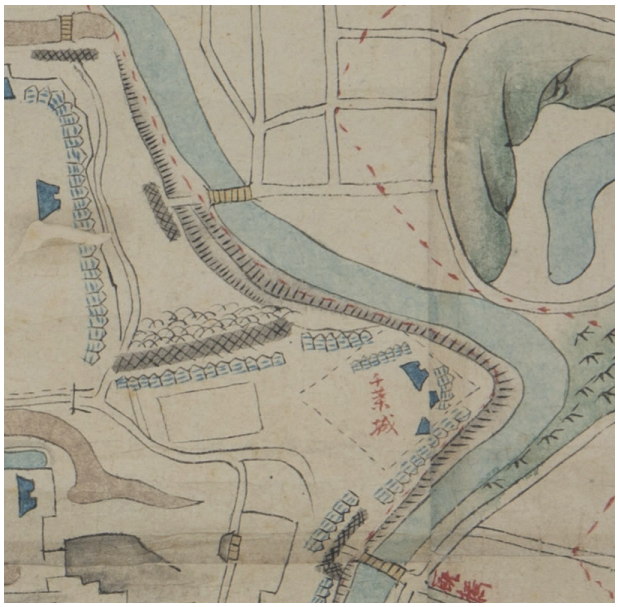


第16図　天明七年迄 二ノ丸之絵図(熊本県立図書館蔵)

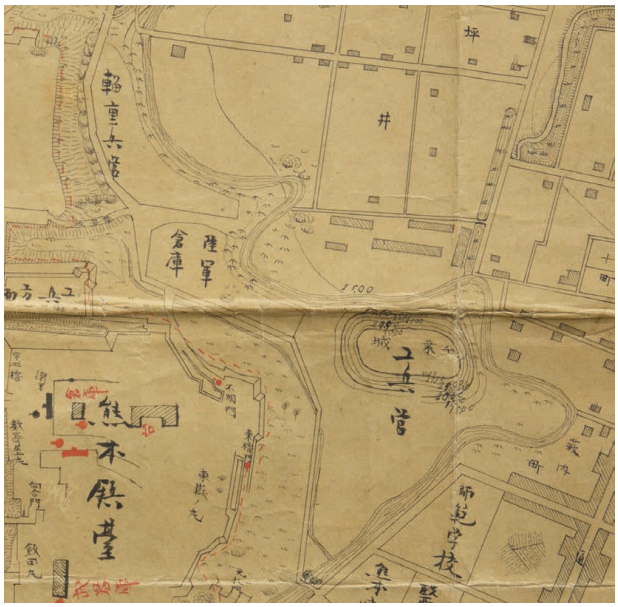
第 17 図　二ノ丸之絵図（熊本県立図書館蔵）

第 18 図　二丸之絵図（永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託）

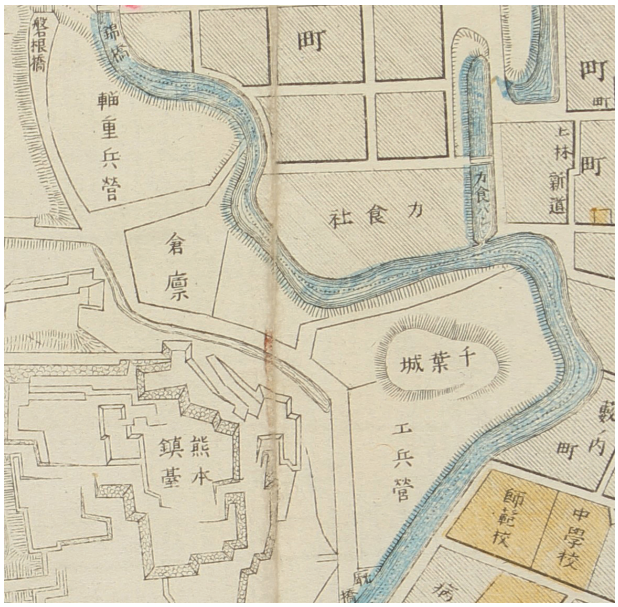
第 19 図　熊本焼場方角図（熊本博物館蔵）



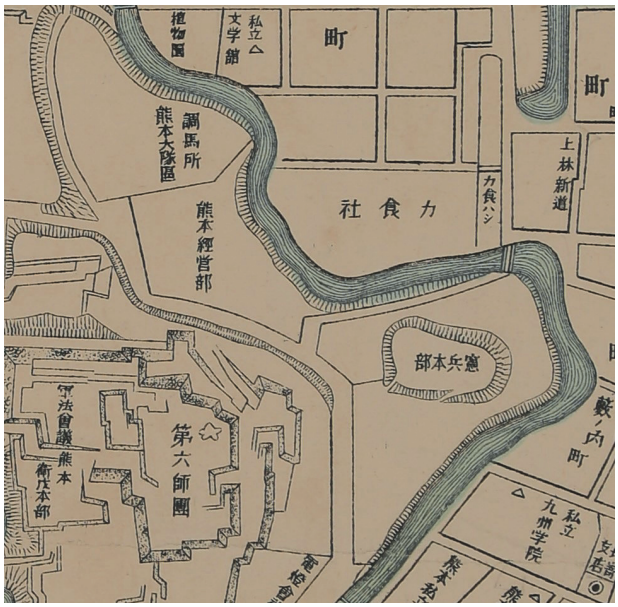
第 20 図　両軍配備図（熊本博物館蔵）



第 21 図　熊本城郭及市街之図（国立国会図書館蔵）

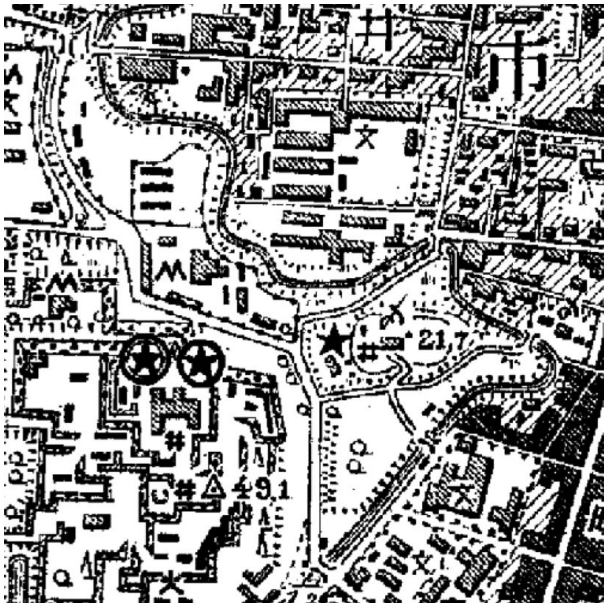


第22図　熊本全図 明治３年版（熊本県立図書館蔵）

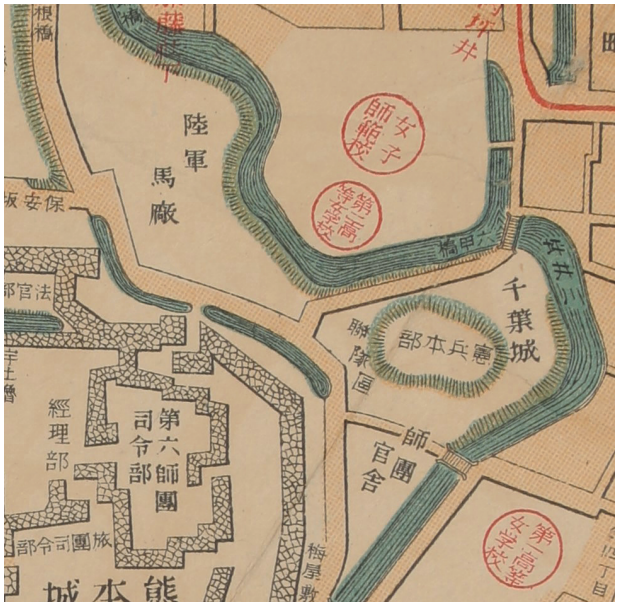


第23図　熊本市街全図 明治26年版（熊本県立図書館蔵）

第24図　熊本市明細地図 明治38年版（熊本県立図書館蔵）



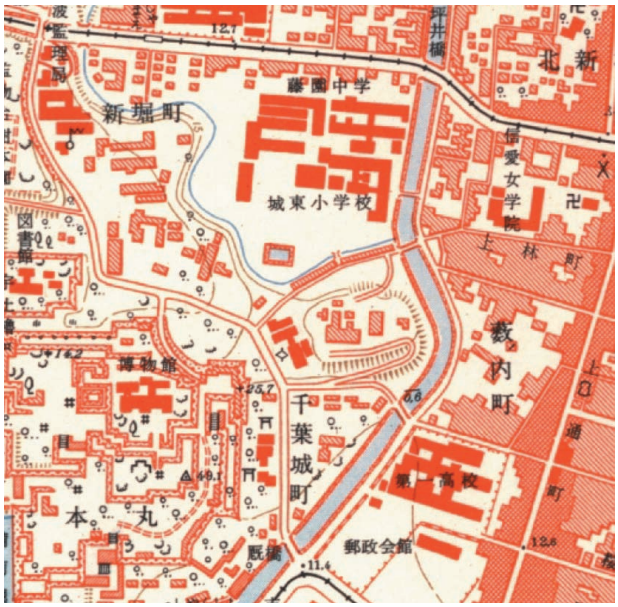
第25図　５万分１地形図（国土地理院ＨＰ　旧版地図）



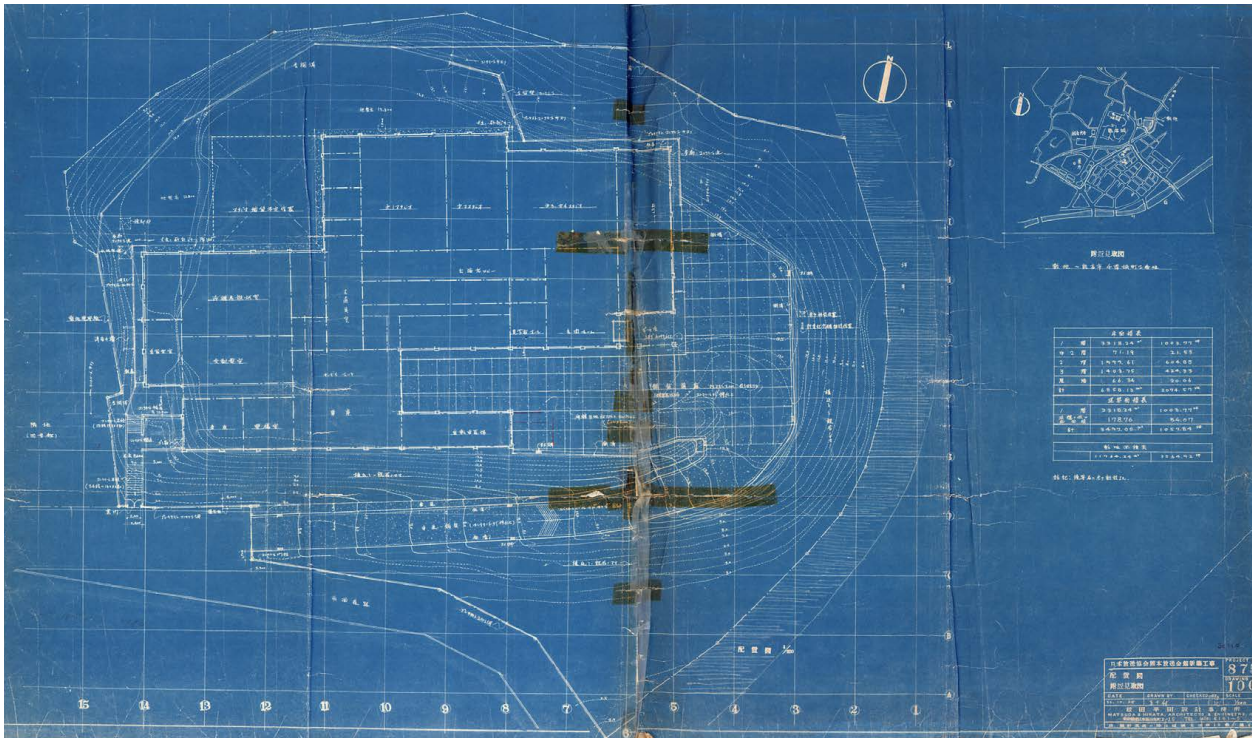
第 26 図　最近実測熊本市街地図 大正 13 年版
（熊本県立図書館蔵）

第 27 図　熊本城阯地籍図（熊本市蔵）

第 28 図　航空写真（国土地理院）



第29図　国土地理院発行１万分１地形図　熊本東北部



第 30 図　放送会館建築配置図

第 31 図　明治 10 年（1877）撮影　南から見た熊本中学校（熊本城顕彰会蔵）

第 32 図　明治 10 年（1877）撮影　熊本中学校（熊本城顕彰会蔵）

第 33 図　明治 10 年（1877）撮影　西南戦争時の千葉城（熊本城顕彰会蔵）

第 34 図　明治 10 年（1877）撮影　西南戦争時の千葉城（熊本城顕彰会蔵）

第 35 図　明治 10 年（1877）撮影　西南戦争時の千葉城（熊本城顕彰会蔵）

第 36 図　明治 10 年（1877）撮影　西南戦争時の千葉城（熊本城顕彰会蔵）

第 37 図　南西から見た偕行社（熊本市歴史文書資料室蔵）

第 38 図　偕行社近景（熊本市歴史文書資料室蔵）

第 39 図　上林ヨリ薮内橋迄（熊本県立図書館蔵）

第 40 図　上林ヨリ数内橋迄　トレース図

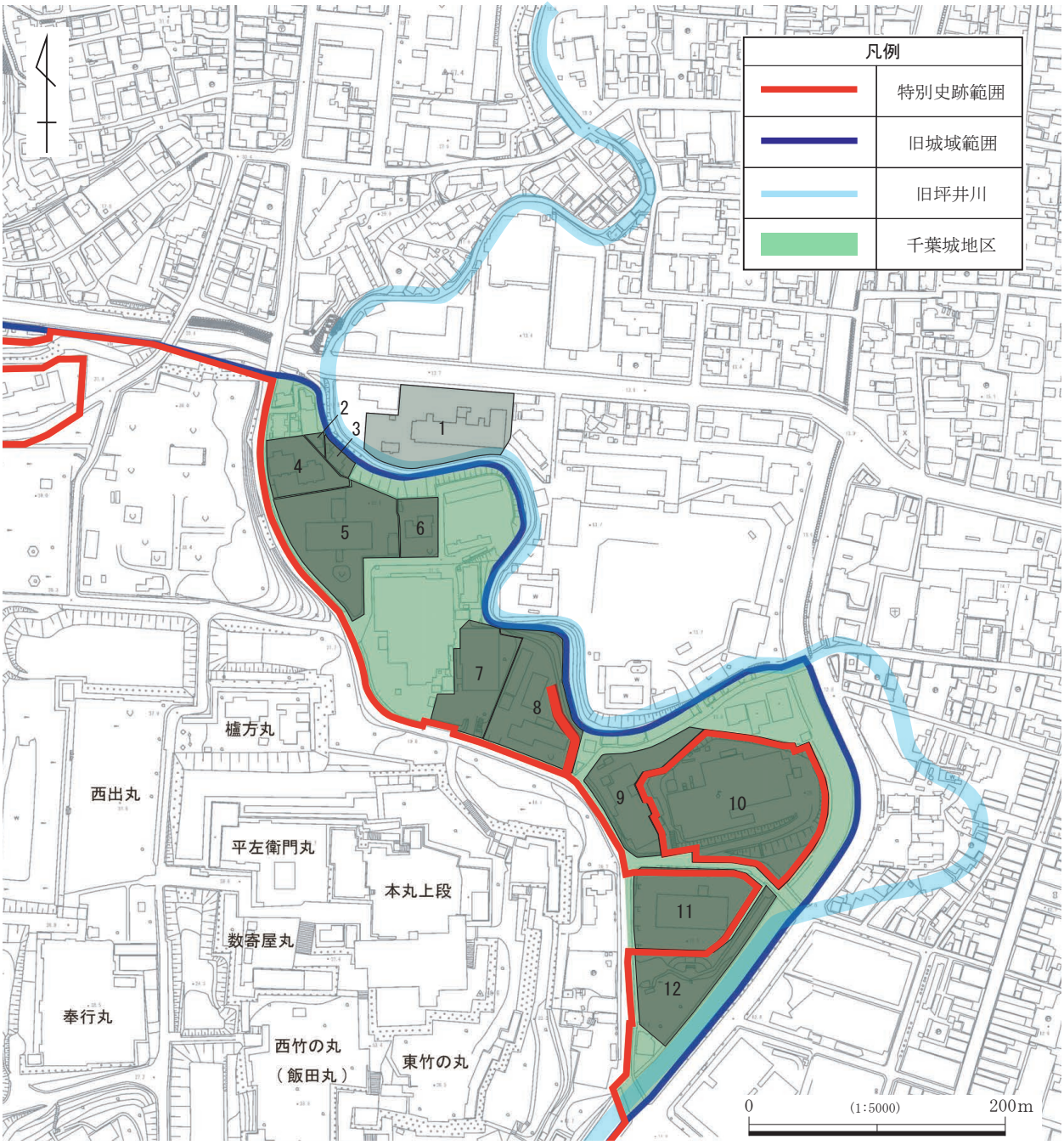
５．既往の発掘調査成果

（１）発掘調査成果の概略

千葉城地区の発掘調査事例は小規模な事前調査が多く、大規模な発掘調査は少ないが、これまで古墳時代の横穴群と近世の遺構等が確認されている。また、近代以降の遺構等も確認されている。以下に、遺構等が見つかった調査の成果を概観していく。

横穴群は昭和37年（1962年）２月、10地点（地点の番号は第41図に対応する。以下同じ。）でＮＨＫ熊本放送会館の建設工事中に発見されたことにより、緊急の調査が行われ千葉城横穴群と呼ばれた。丘陵の南側斜面で、東西２群に分かれて合計10基の横穴が確認された。玄室内の出土遺物はなかったが、５号横穴の前庭部等から須恵器が出土している。この横穴群の調査については、次項で詳述する。

発掘調査で近世の遺構等が見つかっているのは１・４・５・６・７・11地点である。１地点では昭和



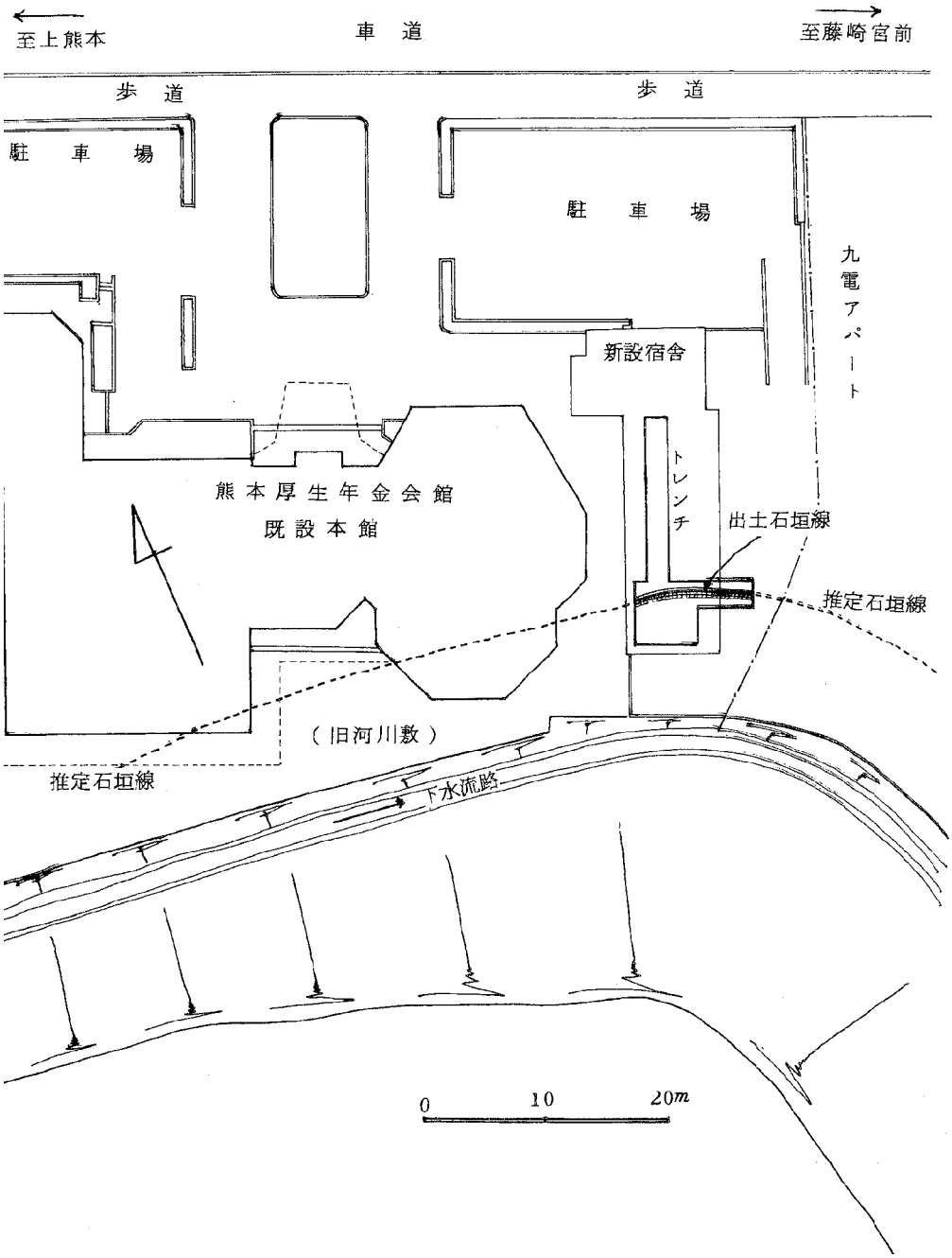
第 41 図　千葉城地区に関する調査地点位置図

第４表　千葉城地区発掘調査等一覧表

地図番号	年度	調査名	文献
1	S49	旧坪井川畔遺跡発掘調査	熊本城調査委員会 1976『熊本城跡旧坪井川畔遺跡調査報告書』熊本城調査委員会
2	R1	個人住宅建築に伴う確認調査	熊本市熊本城調査研究センター 2020『熊本城調査研究センター年報』６　令和元年度　熊本市熊本城調査研究センター
3	R1	個人住宅建築に伴う確認調査	熊本市熊本城調査研究センター 2020『熊本城調査研究センター年報』６　令和元年度　熊本市熊本城調査研究センター
4	H22	共同住宅建設に伴う確認調査	熊本市 2021『特別史跡熊本城跡総括報告書』調査研究編第３分冊　熊本市熊本城調査研究センター
5	H27	熊本家庭裁判所存在状況確認調査	熊本市 2021『特別史跡熊本城跡総括報告書』調査研究編第３分冊　熊本市熊本城調査研究センター
	H28	熊本家庭裁判所存在状況確認調査	熊本市熊本城調査研究センター 2017『熊本城調査研究センター年報』３　平成 28 年度　熊本市熊本城調査研究センター
	H30	熊本家庭裁判所工作物改修に伴う確認調査	熊本市熊本城調査研究センター 2019『熊本城調査研究センター年報』５　平成 30 年度　熊本市熊本城調査研究センター
	R2	熊本家庭裁判所庁舎増築に伴う確認調査	熊本市熊本城調査研究センター 2021『熊本城調査研究センター年報』７　令和２年度　熊本市熊本城調査研究センター
6	R3	九州財務局分室存在状況確認調査	熊本市熊本城調査研究センター 2022『熊本城調査研究センター年報』８　令和３年度　熊本市熊本城調査研究センター
7	S55	熊本県伝統工芸館建設に伴う発掘調査	熊本市 2021『特別史跡熊本城跡総括報告書』調査研究編第３分冊　熊本市熊本城調査研究センター
8	H28	旧熊本国税局石垣崩落部分の法面整形に伴う確認調査	熊本市熊本城調査研究センター 2017『熊本城調査研究センター年報』３　平成 28 年度　熊本市熊本城調査研究センター
9	H3	熊本県立美術館分館改修工事に伴う発掘調査	熊本市 2021『特別史跡熊本城跡総括報告書』調査研究編第３分冊　熊本市熊本城調査研究センター
10	S36	日本放送協会熊本放送会館建設に伴う発掘調査	熊本市教育委員会 1971『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
	R4～5	史跡整備に伴う発掘調査	本報告書
11	H28	日本たばこ産業株式会社熊本支店解体に伴う工事立会	熊本市熊本城調査研究センター 2017『熊本城調査研究センター年報』３　平成 28 年度　熊本市熊本城調査研究センター
	H29	日本たばこ産業株式会社熊本支店解体に伴う工事立会	熊本市熊本城調査研究センター 2018『熊本城調査研究センター年報』４　平成 29 年度　熊本市熊本城調査研究センター
12	H11	銅像建設に伴う確認調査	熊本市 2021『特別史跡熊本城跡総括報告書』調査研究編第３分冊　熊本市熊本城調査研究センター

50年（1975年）１月に、当時の熊本厚生年金会館の増築に伴う調査が行われ、埋め立てられた旧坪井川が確認された。旧坪井川は熊本城の内堀となっていた川であるが、土層を調査した結果、元々自然に存在していた河川とは考えにくく、おそらく人工的に造られたものだと判断されている。また、河川敷の石垣も検出されているが、これは形状から近代以降のものだと考えられる。

４・５・６地点は、近世の絵図によると細川入国後は大木家の屋敷地にあたるところで、調査により近世の整地土、造成土、土坑が検出されている。４地点では共同住宅建設に伴う確認調査が行われ、地山の火砕流堆積物の上に近世の整地土が確認されている。５地点では家庭裁判所の埋蔵文化財存在状況

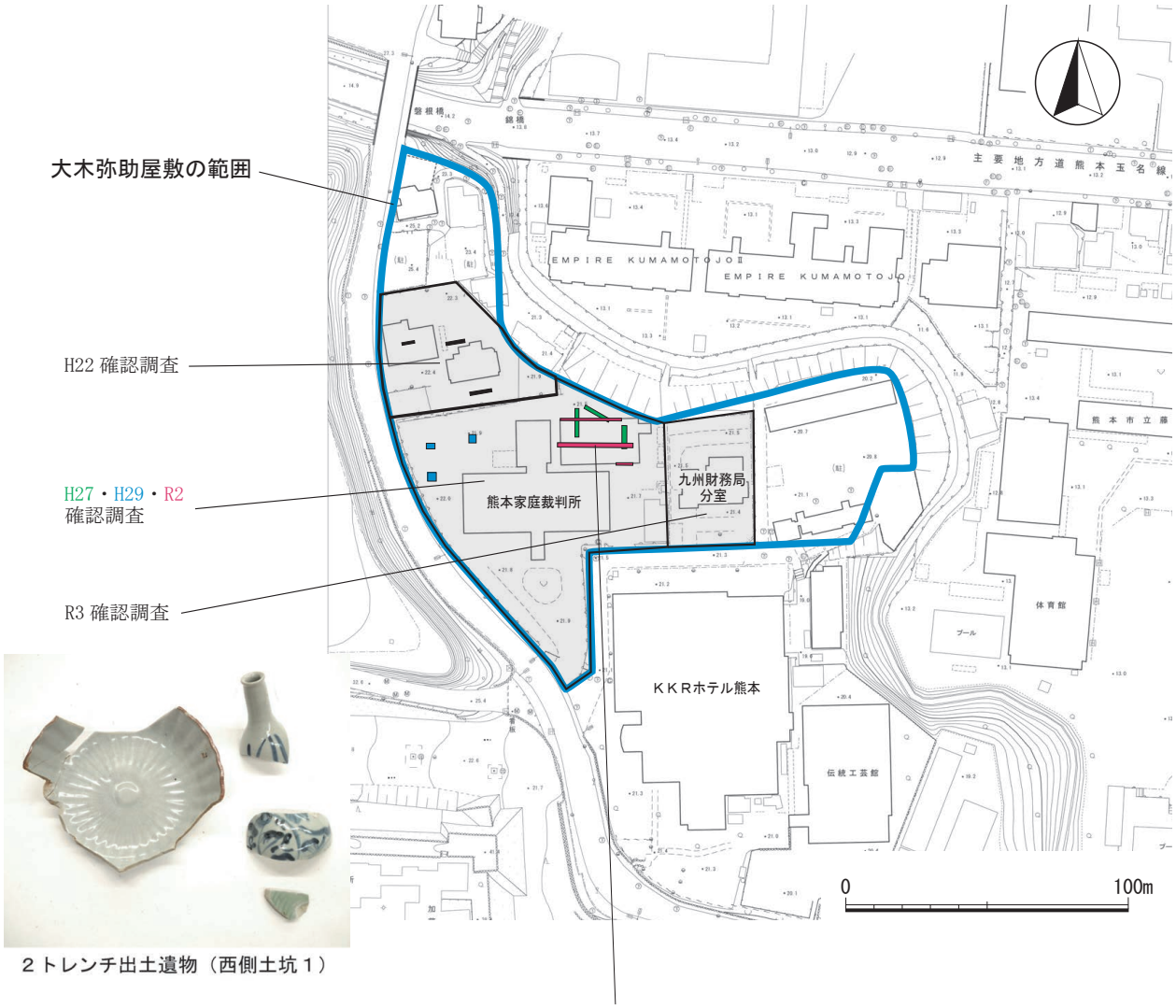


第42図　1地点で確認された旧坪井川（熊本城調査委員会 1976）

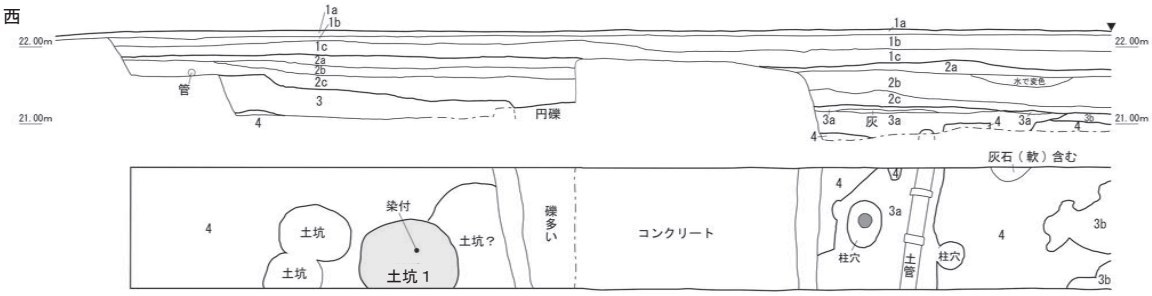
確認調査が行われ、江戸時代後期の遺物を含む造成土と、それを掘り込む土坑が確認された。また、庁舎増築に伴う確認調査も行われており、近世の土坑等が確認されている。6地点で行われた埋蔵文化財存在状況確認調査でも、近世の造成土や礎石、土坑が確認されている。

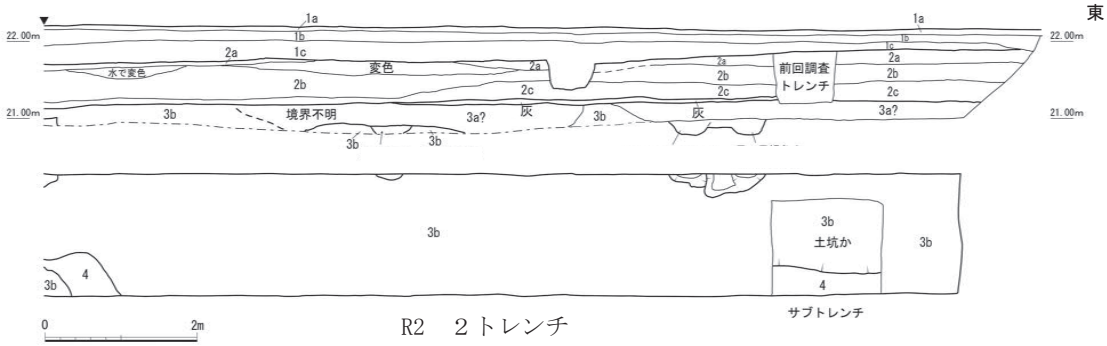
7地点は近世の絵図で屋敷地や御作事会所等の藩役所があった場所である。昭和55年(1980年)に行われた熊本県伝統工芸館建設に伴う発掘調査で、2つの造成土とそれに挟まれた整地土が確認されており、整地土は享保元年(1716年)の大火の片づけに伴うものと考えられている。そして、層位や出土遺物から下位の造成土は江戸初期の可能性がある。上位の造成土は大火後に屋敷地を盛土によって再度整地したものと想定されているが、その造成土の上面は近代以降の削平によってほとんど失われているとみられる。

11地点は近世に御仕置所や御賄物所等があった場所である。平成29年（2017年）に、ＪＴ熊本支店の解体工事に伴う埋設物確認の調査が行われ、玉川水路と考えられる溝が検出された。玉川水路は寛永11年（1634年）に棒庵坂下から坪井川まで開削された水路で、近世の絵図では石垣により護岸された水路



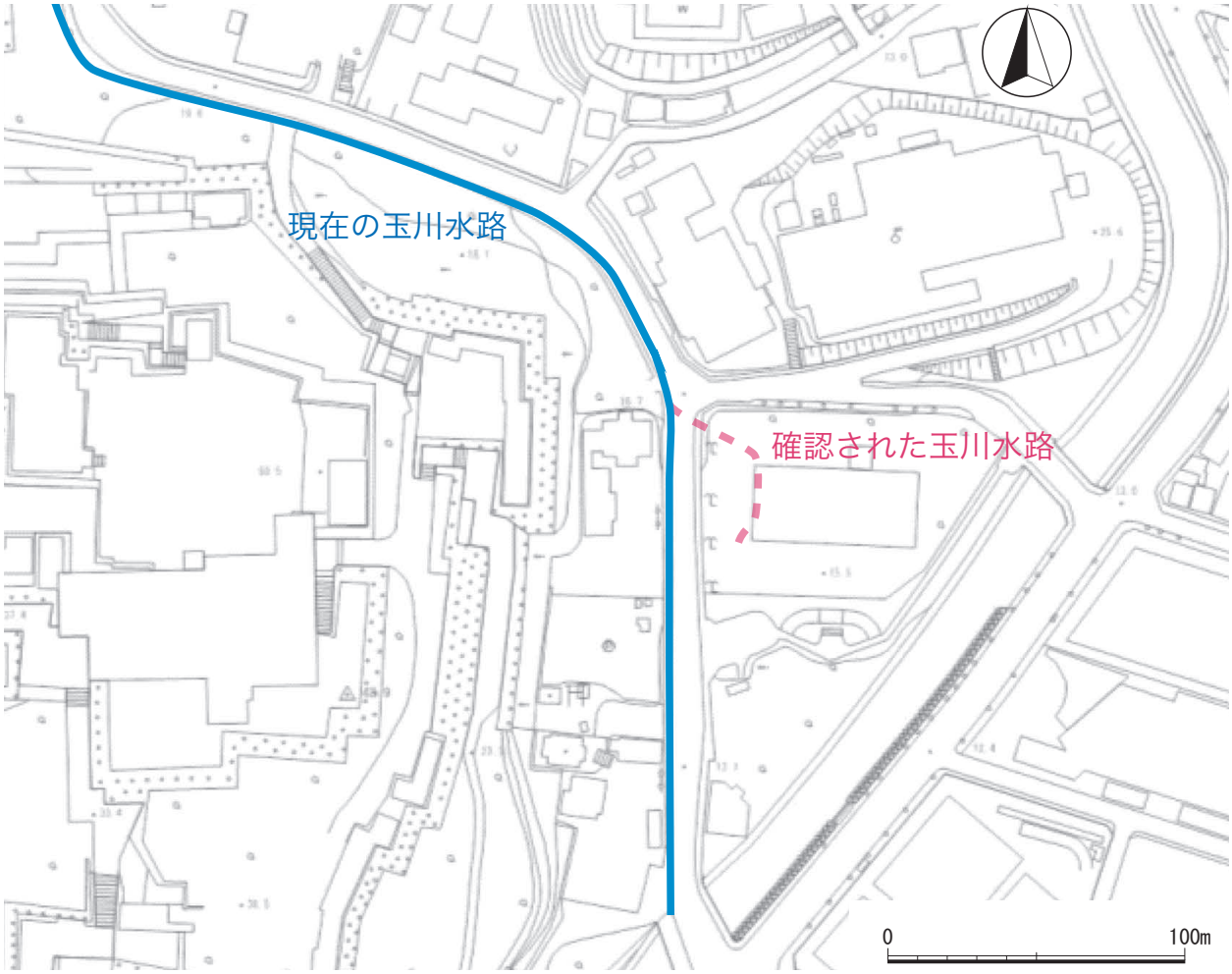
２トレンチ出土遺物（西側土坑１）

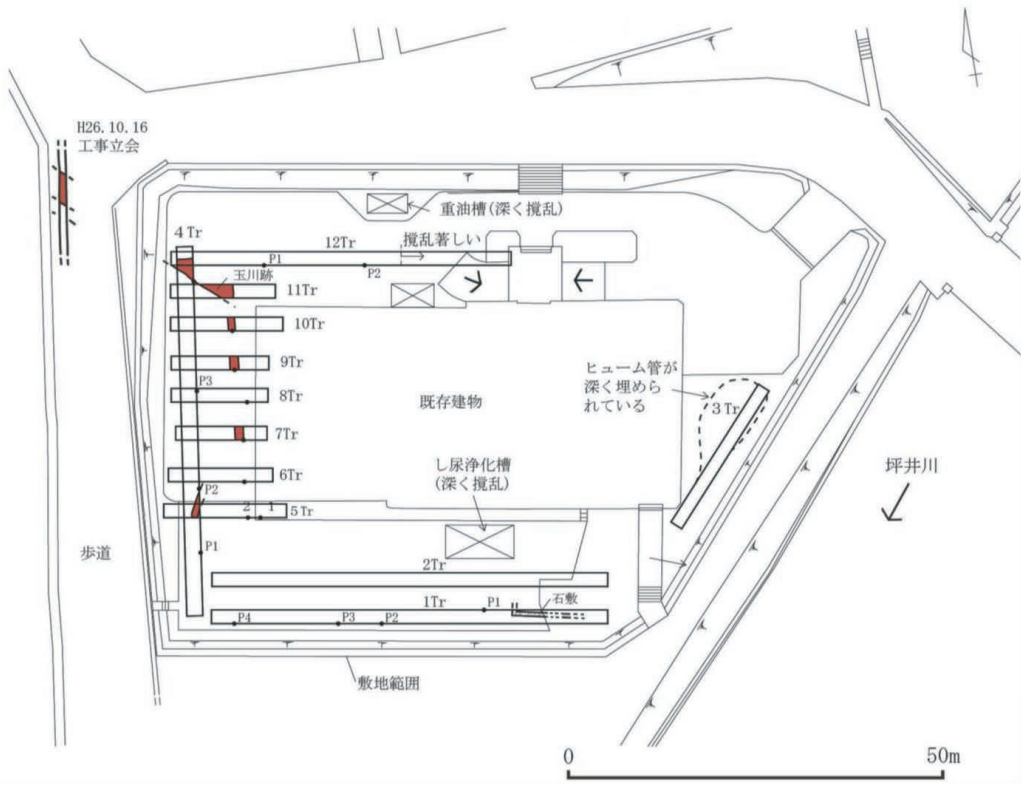




R2　２トレンチ

第 43 図　大木家屋敷地の調査成果（林田 2022 を一部改変）

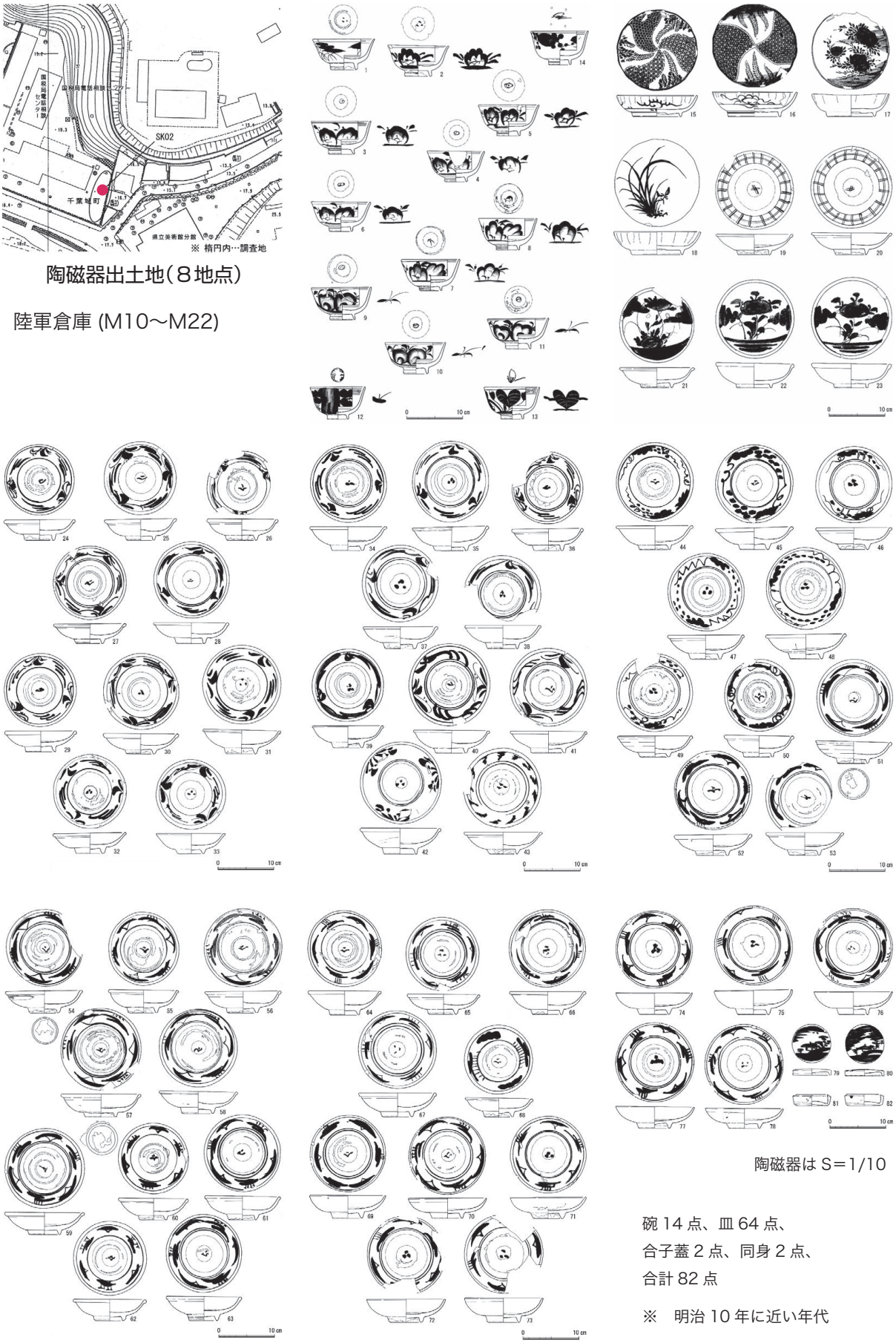




第 44 図　11 地点で確認された玉川水路の位置（林田 2022）

陶磁器出土地（８地点）

陸軍倉庫 (M10～M22)



陶磁器は S＝1/10

碗 14 点、皿 64 点、
合子蓋 2 点、同身 2 点、
合計 82 点

※　明治 10 年に近い年代

第 45 図　地点８のＳＫ 02 出土陶磁器（美濃口 2017）

が確認できる。見つかった玉川水路とみられる溝は、埋土中に安山岩の切石が認められるが原位置からは動いており、またコンクリート片を含むことから、近代以降に石組みを壊して廃絶されたものと考えられている。

近代以降を中心とする遺構等は、１・５・６・７・８・11地点で確認されている。１地点では上述した旧坪井川の石垣が近代以降のものと考えられる。

５地点では家庭裁判所の庁舎増築に伴う確認調査によって、近世に斜面であったところを近代以降に盛土を行い、敷地を広げている状況を確認している。また、存在状況確認調査で近代の可能性があるコンクリート基礎が確認されている。

６地点の存在状況確認調査では幕末から近代初頭の整地層、近代以降の整地層のほか、近代と考えられる安山岩性の開渠や陶製土管、小規模な溝状遺構が見つかっている。

７地点の発掘調査では、明治10年（1877年）から明治22年（1889年）に使用された陸軍倉庫に伴うと考えられる排水溝や列石等が確認されている。

８地点では、平成29年（2017年）３月に行われた石垣崩落部分の法面整形に伴う確認調査によって、土坑ＳＫ02から明治期の陶磁器が多量に見つかった。陶磁器の様相は本丸御殿の西南戦争焼土面出土陶磁器と共通することから、明治10年（1877年）に近い年代が与えられる。また、ＳＫ02が掘り込まれている造成土は近世後期から近代初頭と判断されている。

11地点の調査では、近代以降の石敷きや凝灰岩の石組みを伴う溝等が検出されている。

そのほか、９地点では平成３年（1991年）に熊本県立美術館分館の改修工事に伴う発掘調査が行われ、集水枡状遺構や土坑、礎石の根石、柱穴等が見つかっているが時期等の詳細は不明である。

（２）千葉城横穴群の調査

ａ．遺構

10地点の千葉城横穴群の発掘調査については、乙益重隆氏によって報告されている（熊本市教育委員会1971）。それによれば、昭和37年（1962年）３月５日、ＮＨＫ熊本放送会館の建設工事による敷地の拡張中に横穴が発見され、乙益が緊急の調査を行ったということである。横穴は丘陵の南東側に６基、南西側に４基の合計10基が確認され、第１号～第10号の番号が発見順に付けられた。

南東にある６基は、約100㎡の広場に入口をそろえて並ぶように発見されたという。乙益はこの広場について、南側斜面にめぐる自然のステップが前庭部として各横穴に共有されたものだろうと推定している。横穴の内部から副葬品は見つからなかったが、小型の第６号横穴から人骨の細片が検出された。また、第２号横穴の入口の前方約２ｍの位置から、須恵器の台付壺が１点見つかっている。

南西にある４基のうち、第７号横穴についてはブルドーザーにより破壊されたため完掘・実測することができなかった。南西の一群でも横穴の内部から副葬品は見つからなかったが、成人骨の細片が第３号横穴で２体分、第５号横穴で１体分検出された。第３号横穴は小型のものである。また、第５号横穴の前庭部付近で須恵器の甕が１点、高坏が５点、坏が２点、蓋が２点、台付壺が１点、土師器の高坏が１点、坏が３点まとまって発見された。これらの土器の出土はブルドーザーによる掘開作業中のことであり、乙益も出土状況については伝聞として報告し、配置や組合せなどは一切分からないとしている。

また、このときに発見された10基以外にも、千葉城の周囲の崖面には横穴がある可能性を指摘している。

ｂ．遺物

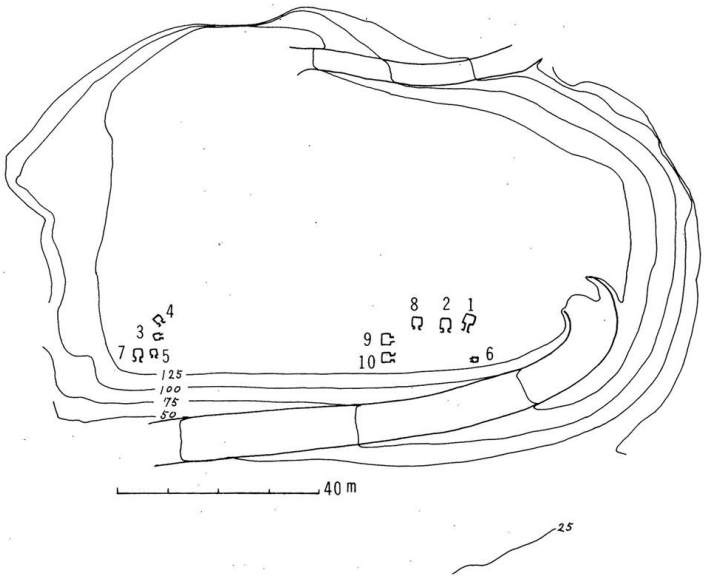
千葉城横穴の出土遺物は、第５号横穴の前庭部付近で見つかった須恵器の台付壺１点と、土師器の坏１点が乙益により報告されている。今回、これらの遺物を所蔵している熊本博物館の協力により、改め

て遺物の報告を行う。１～26は須恵器、27～35は土師器、36は土師質土器である。

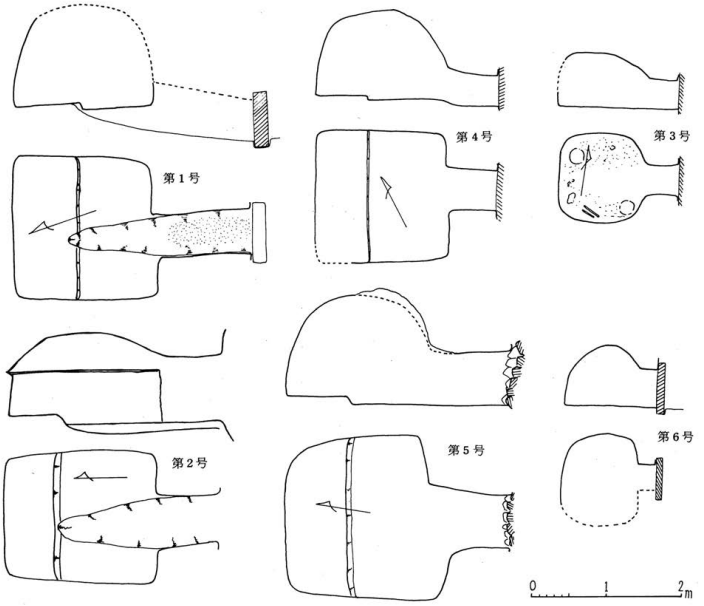
１は須恵器で坏蓋であろう。口縁部の破片で全体の形状は不明であるが、天井部と口縁部の境は屈曲している。内外面とも回転ナデで仕上げられており、天井部外面には白色の自然釉が認められる。

２・３は須恵器の坏身である。ともに口縁部にかえりを有する器形である。２は底部切り離し後ナデ調整で、内底面には静止ナデが施されている。３は底部切り離し後未調整で、ヘラ記号が描かれている。内底面には静止ナデが施されている。外面には白色の自然釉が認められる。宇城産とみられる。

４～７は須恵器の有蓋高坏蓋である。４は天井部外面にカキ目が見られ、頂部には乳状つまみを有する。外面の天井部と口縁部の境には浅い沈線がある。口縁部の内面には緩い沈線が巡り、天井部内面には静止ナデが施されている。５も天井部上面にカキ目が付き、頂部には擬宝珠つまみを有する。４と同様に天井部内面には静止ナデが施される。６は天井部外面の切り離し後未調整で、ヘラ切り範囲の外側に段がついている。頂部には扁平つまみを有し、天井部内面に静止ナデは施されていない。７は天井部外面の切り離し後に回転ヘラケズリが施され、頂部に扁平つまみを有する。天井部内面に静止ナデは施されていない。器表面が風化している。



第46図　千葉城横穴群配置図（熊本市教育委員会 1971）

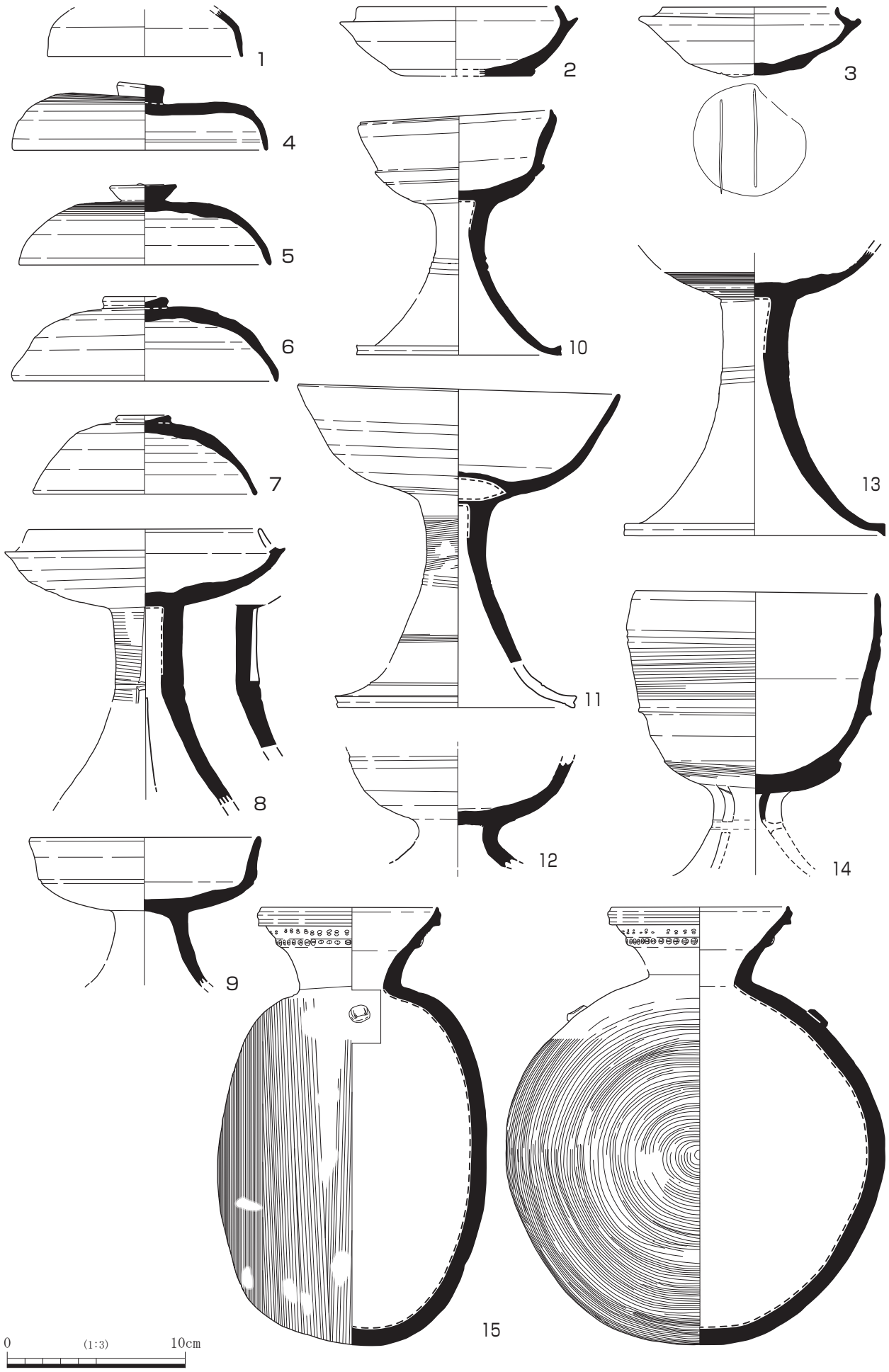


第47図　千葉城横穴群実測図（熊本市教育委員会 1971）

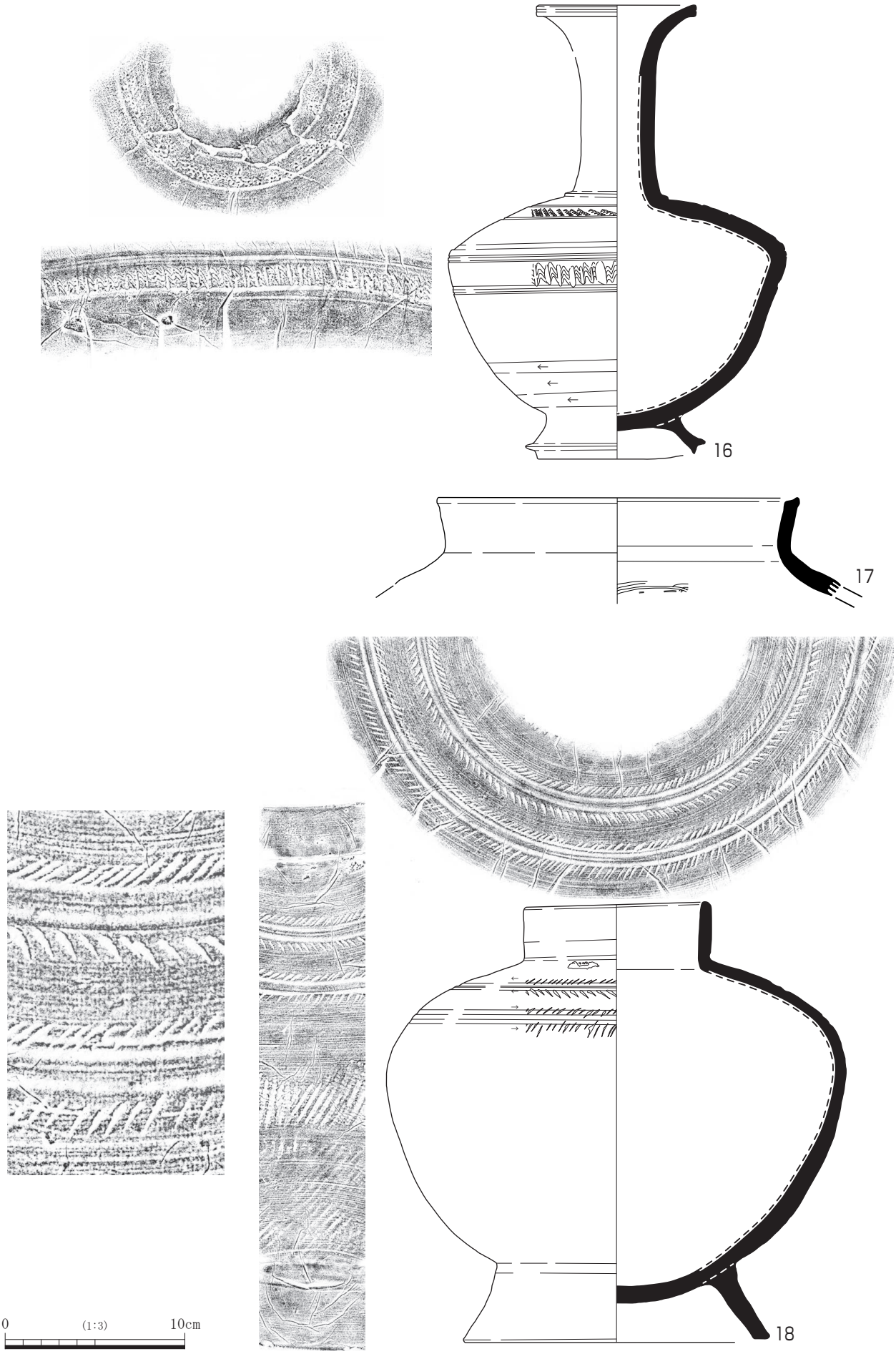
８は須恵器の有蓋高坏である。坏部は口縁部にかえりを有する器形で、内底面に静止ナデが施されている。脚部は長脚で、二段の透かし孔を有する。透かし孔は細い長方形を呈しており、配置は２方向である。上段は貫通していない。脚部の上段と下段の境には２条の沈線が巡るが、重なって１条になっている部分もある。また、カキ目が見られる。

９～11は須恵器の無蓋高坏である。９は脚部下半を欠損するが、小型のものとみられる。口縁部を打ち欠いているようにも見えるが、割れ面は新しい。坏部の屈曲部には１条の沈線が巡る。10は長脚で、脚部の中位に２条の沈線が巡る。透かし孔はない。坏部は底部付近に沈線や段を有し、口縁端部をつまみ上げる。11も長脚で、脚部の中位に２条、下位に１条の沈線が巡る。また、カキ目が見られる。坏部に沈線や段等はない。

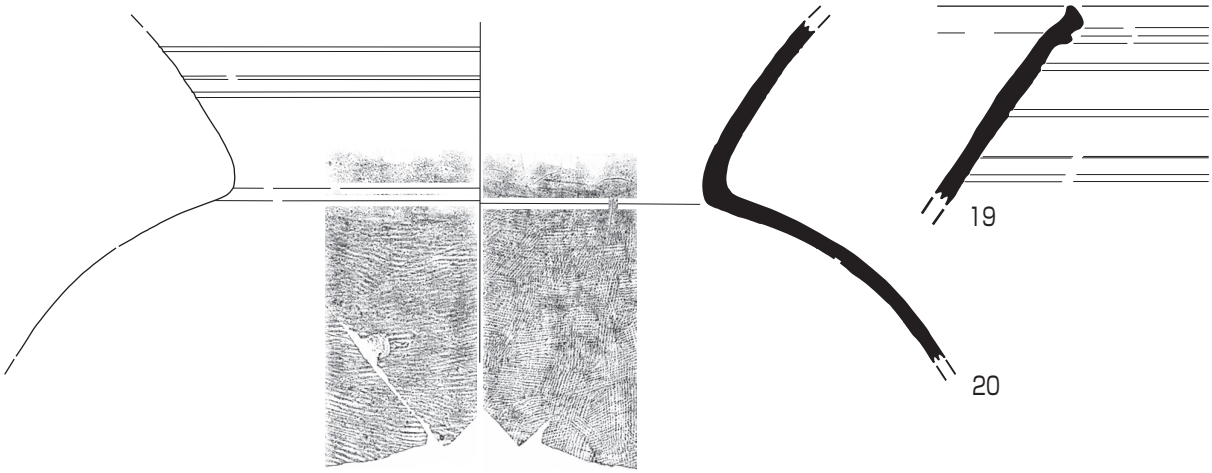
12・13も須恵器の高坏であるが、坏部の上位を欠いている。12は赤焼けの須恵器で、脚部を欠損しているが短脚になるとみられる。坏部も欠損しているが、２条の沈線が確認できる。13は長脚で、脚部の

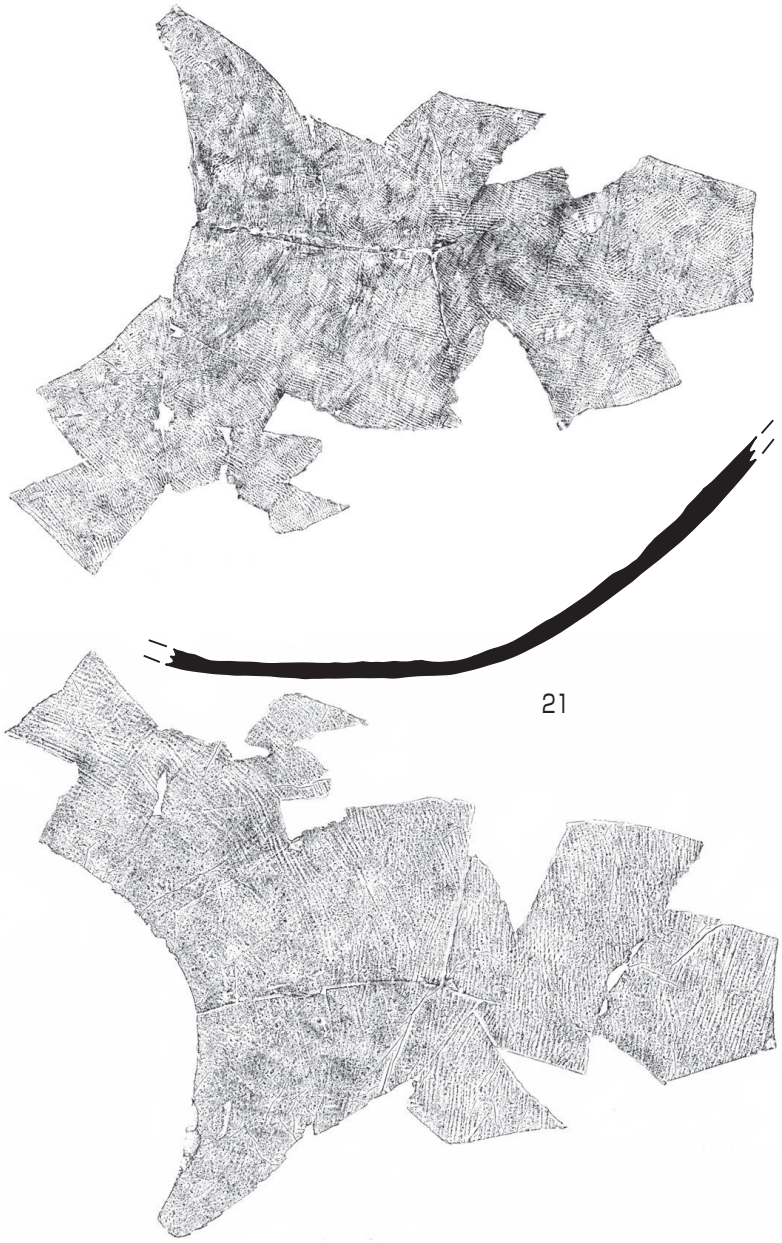


第 48 図　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物実測図 1



第 49 図　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物実測図２

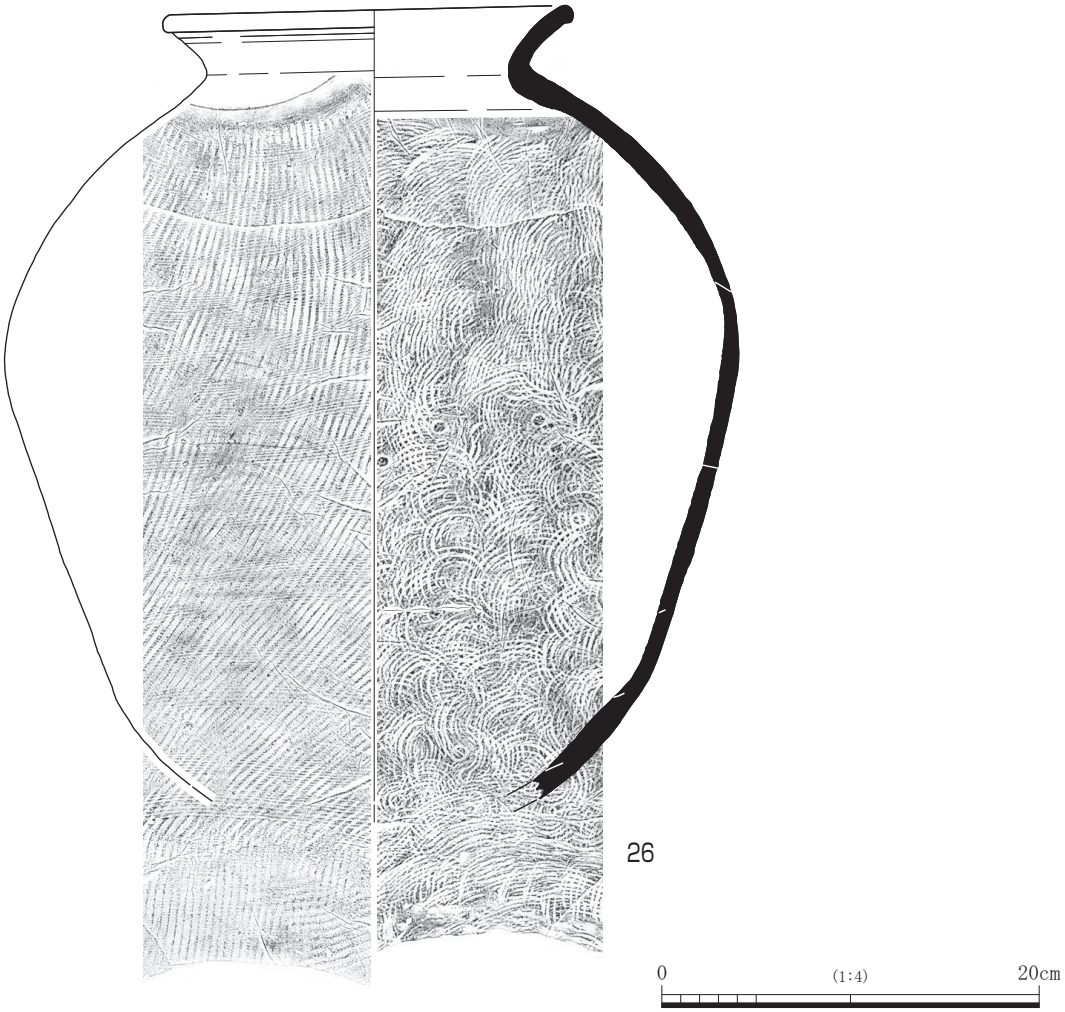




0 (1:4) 20cm

第 50 図　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物実測図３

第 51 図　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物実測図４



第 52 図　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物実測図５

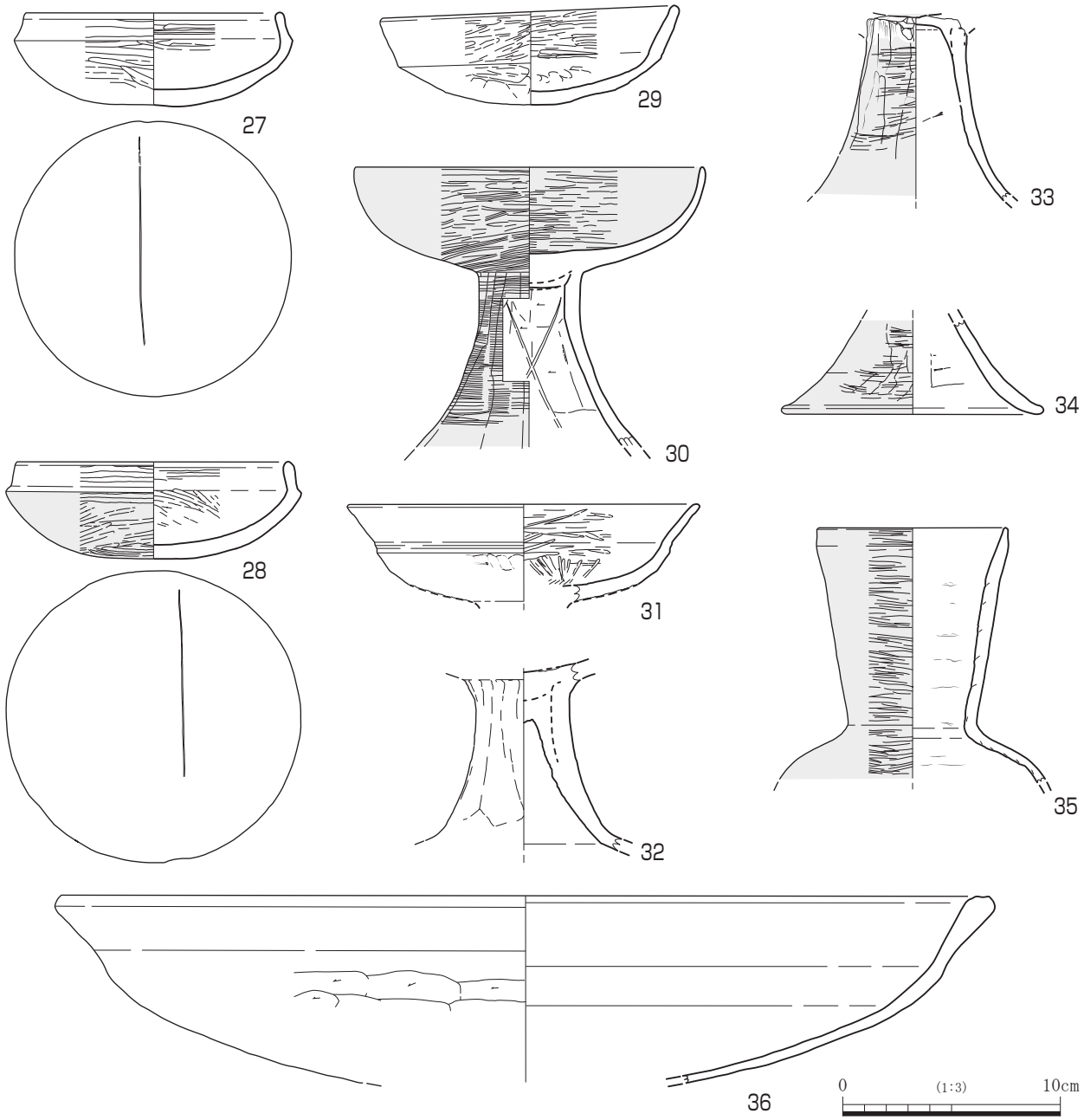
中位に沈線が２条巡る。透かし孔はない。坏部は全体の形状が分からないが、外底面にカキ目を有する。

14は金属器模倣須恵器の台付椀である。やや赤い発色で、白色の自然釉が顕著である。台部には刀子状の工具で開けた２段の透かし孔を有する。透かし孔は長方形で、配置は３方向である。上段は貫通していない。脚部の上段と下段の境には２条の沈線が巡る。椀部の下半には段や突帯を有し、上半には２条の沈線が巡る。また、カキメが施されている。宇城産とみられる。

15は須恵器の提瓶である。ボタン状把手を有し、胴部には同心円状にカキ目が見られる。頸部に巡る突帯は断面が半円状で、そこに先端が二又状になった工具による円形の連続刺突文が施されている。またその上にも、先端が二又状の工具による浅い連続刺突文が巡るが半周で途切れている。口縁部にも突帯が巡り、口縁端部はつまみ上げている。

16は須恵器の長頸瓶である。焼成中に口縁部が垂れ下がっているが、実測図は復元している。台が付き、胴部の形状は肩が張っている。胴部には細い沈線が、下半に２条、肩部に２条、上半に２条巡っている。胴部下半と肩部の沈線の間には粗雑な櫛描波状文が描かれ、その波状文の谷部に縦の連続直線文が入る。また、胴部上半の２条の沈線の間には、櫛状の工具による連続刺突文が施されている。胴部下半はヘラケズリされる。頸部の接合部には突帯が貼り付けられ、口縁端部にも細い沈線が１条巡る。

17・18は須恵器の台付壺である。17は口縁部付近の破片で、胴部内面の同心円文の当て具痕が残っている。18はほぼ完形品で、乙益により第５号横穴の前庭部付近で見つかった須恵器として報告されているものである。丸底の短頸壺にハの字状の台を貼り付けたもので、外面の胴部下半から底部にかけて格子状タタキ目が残る。内面には同心円文の当て具痕が確認できるが、上部はその上から回転ナデが施さ



第 53 図　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物実測図６

れている。胴部上半には２条で１単位の沈線が２カ所巡っており、それぞれの上下に板状工具によるとみられる連続斜線文が施されている。また、肩部付近から台にかけての外面にカキ目が付く。口縁部の周囲は円形に器表の色調が変わっており、窯着物も見られる。蓋を重ねて焼いた痕跡であろうか。

19～26は須恵器の甕である。そのうち、19～21は同一個体とみられる。19は口縁部の破片で、４条の沈線が確認できるが、そのうち１条は非常に浅くなっている。また、口縁端部はつまみ上げ、その付近に１条の突帯が巡る。20は頸部から胴部付近の破片で、19で見られた沈線の３条のみが残存している。胴部の外面には平行線タタキ目が付き、内面には平行文の当て具痕の上にハケ目が見られる。21は底部付近の破片で、20と同様に外面には平行線タタキ目が残り、内面には平行文の当て具痕の上にハケ目が見られる。19～20の破断面を見ると、内部の色調がえんじ色のサンドイッチ状である。

22は口縁部の破片で、カキ目の上から連続斜線文が描かれ、さらに沈線が巡る。

23・24はともに胴部片であるが、別個体であろう。それぞれ、外面には格子状タタキ目、内面には同心円文当て具痕が残る。

25は口縁部から底部まで残存している。胴部の外面には平行線タタキ目、内面には同心円文当て具痕がある。平行線タタキ目は頸部の外面にも残る。口縁部は端部を折り返して肥厚させる。口縁部の内側から肩部まで窯着物が多く、自然釉も顕著である。自然釉は部分的に底部付近まで掛かっている。

26は口縁部から胴部下半まで残存しているが、底部を欠損している。胴部の外面には格子状タタキ目、内面には同心円文当て具痕が見られる。また、胴部外面はタタキ目の上から横方向のハケ目が螺旋状に巡り、カキ目のようになっている。

27～29は土師器の坏身である。27は模倣坏で、体部、口縁部ともに内外面にヘラミガキが施されている。外底面にはヘラ記号が入っている。28も模倣坏で、体部、口縁部ともに内外面にヘラミガキが施されている。また、体部外面が赤彩され、外底面にはヘラ記号が入っている。29は乙益により第５号横穴の前庭部付近で見つかった土師器として報告されているものである。体部と口縁部の境には稜線が入る。口縁部の内外面と体部内面はヘラミガキで仕上げている。体部外面はヘラケズリが施されており、部分的にヘラミガキが確認できる。

30～34は土師器の高坏である。30は脚部の外面と坏部の内外面にヘラミガキ及び赤彩を施す。脚部は内外面ともにヘラケズリの痕跡が残り、内面にはヘラ記号が入れられている。ヘラ記号は一部欠損しているがＸ字状とみられる。31と32は接合点がないが、同一個体の坏部と脚部である。31の坏部は内面をヘラミガキで仕上げるが、外面には見られない。外面は口縁部が横ナデ、体部は風化しているが手持ちヘラケズリが施されている。32の脚部は内外面にヘラケズリの痕跡が残る。33は脚部の破片で、内外面にヘラケズリが施され、外面は赤彩されている。坏部との接合部にはカキヤブリが見られる。34も脚部の破片で、33と同様に内外面にヘラケズリが施され、外面は赤彩されている。

35は土師器の長頸壺である。内面はナデ調整で、外面はヘラミガキの上に赤彩されている。

36は土師質土器の焙烙で、近世の遺物であろう。内外面ともに回転ナデが施され、体部外面はヘラケズリされている。内外面ともに煤が付着しており、また体部下半は被熱により器表面が剥離している。断面の色調は中黒のサンドイッチ状を呈している。

以上、古墳時代の遺物として須恵器の坏蓋１点、坏身２点、高坏蓋４点、高坏６点、台付椀１点、提瓶１点、長頸瓶１点、台付壺２点、甕が口縁部の数で４点、土師器の坏身３点、高坏が脚部の数で４点、長頸壺１点を報告した。乙益の報告では台付壺１点が第２号横穴の入口付近で見つかったとしているが、今回台付壺として報告した18は乙益が第５号横穴前庭部付近で見つかったと報告している。今回長頸瓶として報告した16が、第２号横穴入口の付近で出土したものである可能性がある。乙益の報告では第５号横穴の前庭部付近から須恵器の坏が２点、蓋が２点、高坏が５点、台付壺が１点、甕が１点、土師器の坏が３点、高坏が１点出土したとされるので数量が一致しないことには注意が必要だが、今回報告した遺物から時期をみてみると、須恵器の坏や高坏、台付椀、提瓶等はTK209型式並行期に位置付けられるだろう。絶対年代では７世紀前半を中心とした時期が想定できる。台付壺や長頸瓶等は７世紀後半であろう。土師器の模倣坏は６世紀後半から７世紀初めとみられる。

参考文献

熊本市教育委員会 1971『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会

熊本城調査委員会 1976『熊本城跡旧坪井川畔遺跡調査報告書』熊本城調査委員会

林田和人 2022「考古資料からみる千葉城地区の歴史的変遷」『2022 年度熊本城復旧シンポジウム特別編　被災後追加指定‼特別史跡熊本城跡千葉城地区の歴史』熊本市熊本城調査研究センター

美濃口雅朗 2017「熊本城跡出土の近代陶磁器一括資料　－新出資料の紹介－」『熊本城調査研究センター年報』３　平成 28 年度　熊本市熊本城調査研究センター

第５表　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物観察表１

挿図No.	掲載No.	出土位置	種類	器種	法量：cm（　）は残存値			残存率	成形・調整		色調	焼成	胎土	備考
					口径	底部径	器高		内面	外面				
48	1	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	坏蓋	復元 /10.9	—	(2.6)	破片（口縁部）	回転ナデ	回転ナデ	内・外面：灰（7.5Y5/1）	良好	白色粒子、黒色粒子を含む	天井面外面に自然釉付着、黒色の噴出物あり。
48	2	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	坏身	かえり径：11.2 受部径：12.2	8.1	3.9	底部 1/2 ～ 口縁部 1/2	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ調整	内面：灰白（5Y8/1） 外面：灰白（7.5Y8/1）	良好	輝石、長石、白色粒子、黒色粒子を含む	
48	3	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	坏身	かえり径：9.8 受部径：11.5	6.3	3.9	ほぼ完存	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ、ヘラ切り後未調整	内面：灰白（2.5Y7/1） 外面：黄灰（2.5Y6/1）	良好	雲母、白色粒子、黒色粒子を含む	体部外面に自然釉付着、外底面にヘラ記号あり。
48	4	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	有蓋高坏蓋	14.1	—	3.8	口縁部 1/2 ～ 天井部完存	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ、カキ目	内・外面：灰（10Y6/1）	良好	白色粒子、黒色粒子を含む	外面一部に赤色顔料付着、黒色の噴出物あり。
48	5	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	有蓋高坏蓋	13.9	—	4.5	口縁部 1/2 ～ 天井部完存	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ、ナデ、カキ目	内面：褐灰（10YR4/1） 外面：灰（10Y4/1）	良好	輝石、白色粒子を含む	
48	6	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	有蓋高坏蓋	14.7	—	4.8	3/4 以上	回転ナデ、ユビオサエ	回転ナデ、ヘラ切り後未調整	内面：灰白（5Y7/1） 外面：灰白（2.5Y7/1）	良好	輝石、黒色粒子、褐色粒子を含む	
48	7	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	有蓋高坏蓋	12.3	—	4.4	ほぼ完存	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	内・外面：灰白（7.5Y8/1）	やや不良	長石、白色粒子、黒色粒子を含む	
48	8	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	有蓋高坏	かえり径：12.8 受部径：15.0	—	(15.5)	脚部 1/2 ～ 口縁部 1/2	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ、カキ目	内・外面：褐灰（10YR6/1）	良好	輝石、白色粒子、黒色粒子を含む	長脚二段透かし。透かし孔は２方向で上段未貫通。
48	9	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	無蓋高坏	12.6	—	(8.3)	3/4 ※坏部ほぼ完存	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ、ナデ	内面：灰白（5Y7/1） 外面：灰（5Y6/1）	良好	輝石、白色粒子、黒色粒子を含む	
48	10	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	無蓋高坏	10.6	復元 /11.4	13.7	脚部 1/3 ～ 坏部完存	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ	内面：灰（10Y5/1） 外面：褐灰（10YR6/1）	良好	黒色粒子、白色粒子を含む	内外面・脚部内面に自然釉付着、黒色の噴出物あり。長脚、透かし孔なし。
48	11	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	無蓋高坏	復元 /17.8	復元 /13.2	復元 /18.1	脚部 2/3 ～ 坏部 1/2	回転ナデ、ナデ（不定方向）	回転ナデ、カキ目	内・外面：灰白（10YR7/1）	良好	輝石、黒色粒子、白色粒子を含む	長脚、透かし孔なし。
48	12	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	高坏	—	—	(6.7)	胴部 ～ 脚部上位	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	内・外面：橙（5YR6/6）	良好	石英、雲母、角閃石、赤色粒子を含む	赤焼け須恵器。短脚。
48	13	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	高坏	—	14.5	(15.9)	脚部ほぼ完存 ～ 坏身体部 2/3	回転ナデ	回転ナデ、カキ目	内・外面：灰（5Y6/1）	良好	黒色粒子、白色粒子を含む	長脚、透かし孔なし。
48	14	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	台付椀	13.4	—	16.0	脚部 1/3 ～ 椀部はほぼ完存	回転ナデ	回転ナデ、カキ目	内・外面：極暗赤褐（10R2/2）	良好	黒色粒子、白色粒子を含む	金属器模倣須恵器。全体に自然釉付着、黒色の噴出あり。脚部は三方二段透かしで上段未貫通、下段貫通。
48	15	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	提瓶	復元 /9.8	2.7	24.6	ほぼ完存	回転ナデ	回転ナデ、カキ目	内・外面：灰（10Y6/1）	良好	長石、白色粒子、黒色粒子を含む	ボタン状把手を有する。
49	16	第２号横穴入口の前方部	須恵器	長頸瓶	復元 /8.4	8.7	25.2	脚部完存 ～ 胴部 5/6 ～ 口縁部完存	回転ナデ、ナデ（タテ方向）	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ユビオサエ、ナデ	内・外面：灰（10Y5/1）	良好	長石、黒色粒子を含む	外面の一部に自然釉付着。
49	17	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	台付壺	復元 /19.9	—	—	口縁部 1/6	同心円文の当て具痕、回転ナデ	回転ナデ	内・外面：灰（7.5Y5/1）	良好	白色粒子、黒色粒子を含む	内外面に自然釉付着。
49	18	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	台付壺	9.9	16.7	24.3	ほぼ完存	同心円文当て具痕、ナデ、回転ナデ	格子状タタキ目、回転ナデ	内・外面：灰（5Y6/1）	良好	長石、黒色粒子を含む	口縁部周囲は円形に変色と付着物あり。
50	19	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	—	—	(8.6)	口縁部破片	ヨコナデ	ヨコナデ	内面：灰（7.5Y5/1） 外面：灰（N4/）	良好	石英、白色粒子を含む	内面に自然釉付着。断面えんじ色。20、21 と同一個体。
50	20	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	—	—	(18.3)	頸部破片 1/4	平行文当て具痕、ハケ目、ユビオサエ、ヨコナデ	平行線タタキ目、ユビオサエ、ヨコナデ	内面：灰（N5/） 外面：灰（N4.5/）	良好	石英、白色粒子を含む	頸部 ～ 口縁部内側に自然釉付着。断面えんじ色。19、21 と同一個体。
50	21	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	—	—	(12.9)	底部破片 1/2	平行文当て具痕、ハケ目	平行線タタキ目、ナデ	内面：灰（N5/） 外面：暗灰（N3/） ～ 灰褐（5YR4/2）	良好	石英、白色粒子を含む	⑥-1、2 と同一個体と思われる。断面えんじ色。19、20 と同一個体。
51	22	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	復元 /22.7	—	(5.6)	口縁部 1/4	回転ナデ	回転ナデ、カキ目	内面：灰白（2.5Y7/1） 黄灰（2.5Y6/1）	良好	白色粒子、黒色粒子を含む	一部に自然釉付着。

第６表　昭和 37 年（1962 年）の千葉城横穴群出土遺物観察表２

挿図 No.	掲載 No.	出土位置	種類	器種	法量：cm（　）は残存値			残存率	成形・調整		色調	焼成	胎土	備考
					口径	底部径	器高		内面	外面				
51	23	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	—	—	(8.2)	胴部片	同心円文当て具痕、ナデ	格子状タタキ目、工具ナデ	内面：灰（N5/） 外面：灰（5Y4/1）～灰白（5Y7/2）	良好	白色粒子、黒色粒子を含む	
51	24	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	—	—	(20.9)	胴部片	同心円文当て具痕、ナデ	格子状タタキ目	内面：灰（5Y5/1） 外面：灰（5Y5/1）～褐灰（５YR5/1）	良好	白色粒子、黒色粒子を含む	
51	25	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	20.5	—	38.9	底部完存～胴部 3/4～口縁部 2/3	ヨコナデ、同心円文当て具痕	ヨコナデ、平行線タタキ目	内面：黄灰（2.5Y5/1） 外面：黄灰（2.5Y4/1）	良好	白色粒子を含む	口縁部内面～肩部外面に自然釉付着、口縁部内面～胴部外面中位まで窯着物が多い。内外面に黒色の噴出物あり。
52	26	第５号横穴前庭部一帯	須恵器	甕	復元 /21.0	—	(41.7)	胴部 3/4～口縁部 1/6	ヨコナデ、ナデ、同心円文当て具痕	ヨコナデ、格子タタキ目、ハケ目	内面：灰（5Y4/1） 外面：灰（5Y5/1）	良好	長石、輝石を含む	肩部に自然釉付着、外面のハケメは螺旋状。
53	27	第５号横穴前庭部一帯	土師器	坏	11.4	12.6	4.3	完存	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	内・外面：橙（7.5YR7/6）	良好	輝石、長石、雲母、赤色粒子、白色粒子を含む	模倣坏。外底面にヘラ記号あり。
53	28	第５号横穴前庭部一帯	土師器	坏	12.2	13.4	4.4	体部完存～口縁部 2/3	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	内・外面：浅黄橙（7.5YR8/3）	良好	長石、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子を含む	模倣坏。体部外面に赤彩、外底面にヘラ記号あり。
53	29	第５号横穴前庭部一帯	土師器	坏	13.5	—	4.55	ほぼ完存（口縁部、一部欠損）	ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	内面：にぶい橙（7.5YR7/4） 外面：橙（7.5YR6/6）	良好	角閃石、白色粒子を含む	口縁部近くに黒斑。
53	30	第５号横穴前庭部一帯	土師器	高坏	復元 /15.7	—	(12.8)	脚部 1/2～坏部 1/2	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	内・外面：橙（5YR6/6）	良好	輝石、白色粒子をむ	坏部内外面、脚部外面に赤彩、脚部内面にヘラ記号あり。
53	31	第５号横穴前庭部一帯	土師器	高坏	復元 /15.0	—	(4.5)	坏部 1/5	ミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ	にぶい橙（7.5YR7/3）	やや不良	石英、長石、輝石、角閃石、赤色粒子を含む	32 と同一個体。
53	32	第５号横穴前庭部一帯	土師器	高坏	復元 /15.0	—	(8.5)	脚部 1/2	ヨコナデ、ケズリ	ケズリ（ヨコ方向）、ナデ	にぶい橙（7.5YR7/3）	やや不良	石英、長石、輝石、角閃石、赤色粒子を含む	31 と同一個体。
53	33	第５号横穴前庭部一帯	土師器	高坏	—	—	(8.2)	脚部 1/4	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ、カキヤブリ、ヘラミガキ	内面：橙（7.5YR7/6） 外面：明褐色（2.5YR4/6）	良好	白色粒子を含む	外面に赤彩。
53	34	第５号横穴前庭部一帯	土師器	高坏	—	復元 /11.5	(4.3)	脚部 1/4	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	内面：橙 7.5YR6/6 外面（赤彩）：明赤褐（2.5YR5/8）	良好	雲母、赤色粒子、白色粒子を含む	外面に赤彩。
53	35	第５号横穴前庭部一帯	土師器	長頸壺	復元 /8.5	—	(11.4)	口縁部 1/4～頸部 1/4	ヨコナデ、ナデ	ヘラミガキ	内面：橙（7.5YR7/6） 外面（赤彩）：明褐（2.5YR5/8）	良好	白色粒子を含む	外面に赤彩。
53	36	第５号横穴前庭部一帯	土師質土器	焙烙	復元 /42.4	—	(8.5)	底部 1/8～口縁部 1/5	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	内・外面：浅黄橙（10YR8/4）	良好	角閃石、雲母、白色粒子、褐色粒子を含む	内外面に煤付着。断面黒色。

第３章　発掘調査の成果

１．発掘調査の方法と調査区の設定

発掘調査は、「近世遺構面と遺構の確認」、「近世の屋敷境の確認」、「旧地形の確認」を目的として行った。第２章第４節で述べたように、調査地は近世において武家屋敷であったことが絵図から分かる。時期によって屋敷割に変更があるが、２～４区画程度に分かれていたようである。これらの武家屋敷等に関する痕跡や、武家屋敷建設もしくはそれ以前の土地利用による地形改変の状況を確認することに主眼を置いて、調査を行った。また、第２章第５節で述べたようにＮＨＫ熊本放送会館建設時に発見された千葉城横穴群の遺構配置からは、横穴群築造時の崖面には自然のステップが存在していたことが想定される。

ＮＨＫ熊本放送会館解体時の立ち会いにより、建物による撹乱が広い範囲に及んでいることが明白であったため、建物基礎による撹乱が比較的深くないと見込まれる場所を中心としてトレンチを設定したが、調査を進めていくうちに撹乱の範囲が想定よりも大きいことが判明した。そこで現状変更の計画変更を行いトレンチの位置と本数を変更した。その結果、当初は 20 本のトレンチ調査を予定していたが最終的に 19 本のトレンチで調査を行った。掘削を取りやめたのは 18 トレンチで、欠番扱いとなっている。

掘削はＮＨＫ熊本放送会館建設工事の影響を受けている深さまで重機を用いて行い、それ以下を人力により遺物や土質の精査を行いつつ掘り下げていった。深い調査区は安全のため段堀りをしている。

調査の進行に伴い記録図面の作成と写真撮影を行った。各トレンチの土層断面図と遺物出土状況図は手測りで作成し、トレンチの平面図及び配置図は測量業務委託によりオルソ画像から作成している。

遺構名称は、トレンチ名の後に遺構略号と番号を付す形で記している。番号はトレンチごとの通し番号としている。

２．発掘調査の成果

（１）基本層序

調査地は、現代の建設工事によって土層が大きく乱されていた。地山の火砕流堆積物等の二次堆積も多く見られた。基本層序は以下のとおりに整理しているが、今後も検討を続けていく必要がある。なお、各トレンチでⅢ - １層、Ⅲ - ２層のように算用数字の枝番号を付しているが、これはトレンチごとに上から順に付したもので、すべてのトレンチで共通するものではない。

Ⅰ層：表土

Ⅱ層：令和２年度（2020 年度）のＮＨＫ熊本放送会館の解体整地土

Ⅲ層：昭和 37 年（1962 年）のＮＨＫ熊本放送会館の建設盛土及び建設時の表土

Ⅳ層：近代～現代の土層

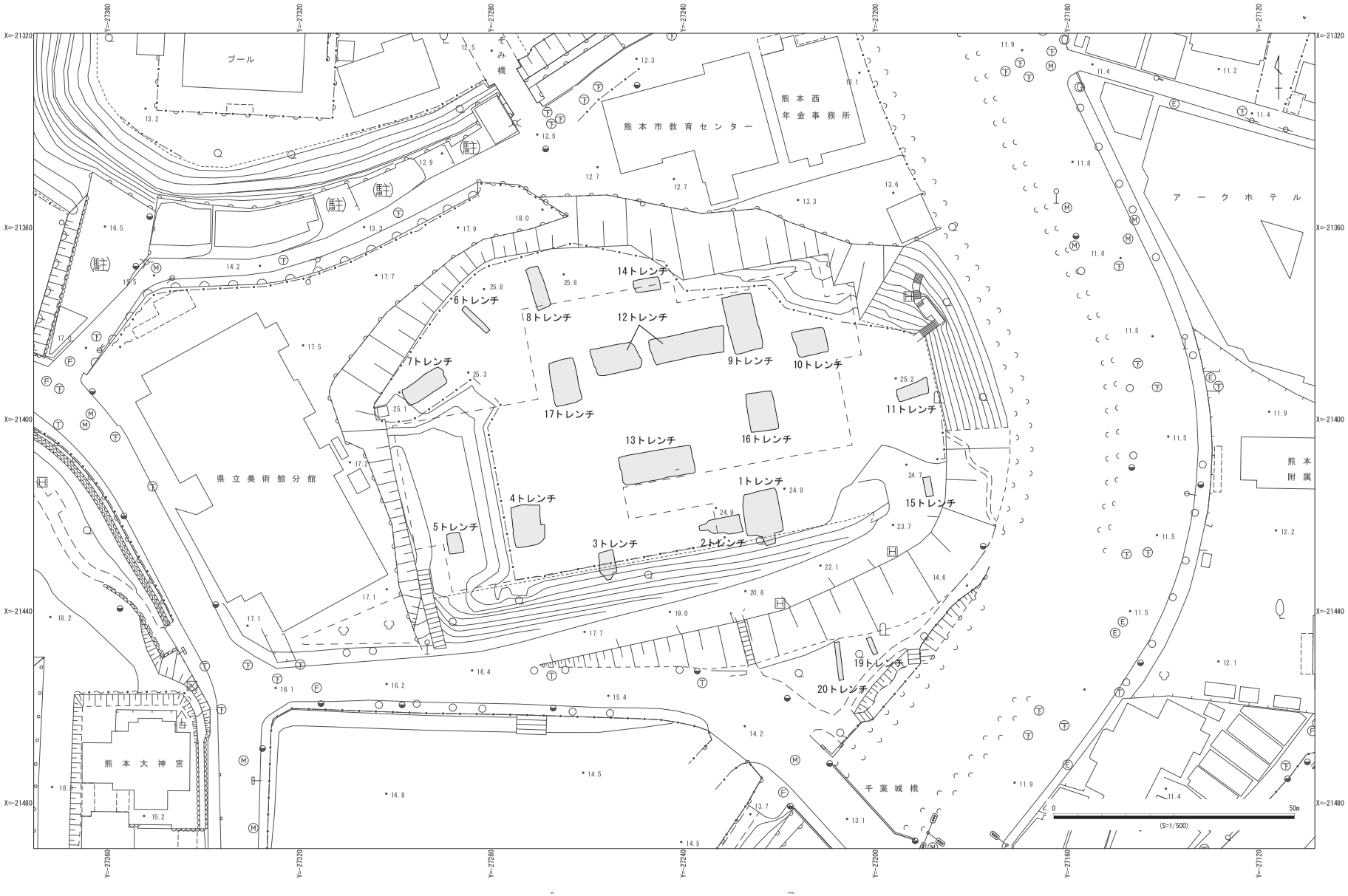
Ⅴ層：近世～近代の土層

Ⅵ層：地山の火砕流堆積物

（２）発掘調査の概要

１～20 トレンチ（18 トレンチは欠番）の調査を行ったが、調査地全体にわたって大きく撹乱されていた。撹乱は主に現代のもので、その下には近代の土層が残存しているところもある。調査目的であった近世の痕跡については、一部その可能性がある土層を確認しているが、確実なものは認められなかった。また、旧地形についても撹乱のために十分に把握できなかったが、敷地の北側と南側で斜面を埋めて敷地を拡張している様子が認められた。

遺物はほとんどが現代の土層からの出土である。近世以降の陶磁器や瓦が多いが、一部中世以前の遺物



第 54 図　トレンチ配置図

も見られる。４トレンチで古墳時代の鉄刀や耳環、須恵器が出土し、鉄刀をＸ線ＣＴ調査したところ紀年銘が確認できたことは特筆できる。千葉城横穴群との関係が想定される。

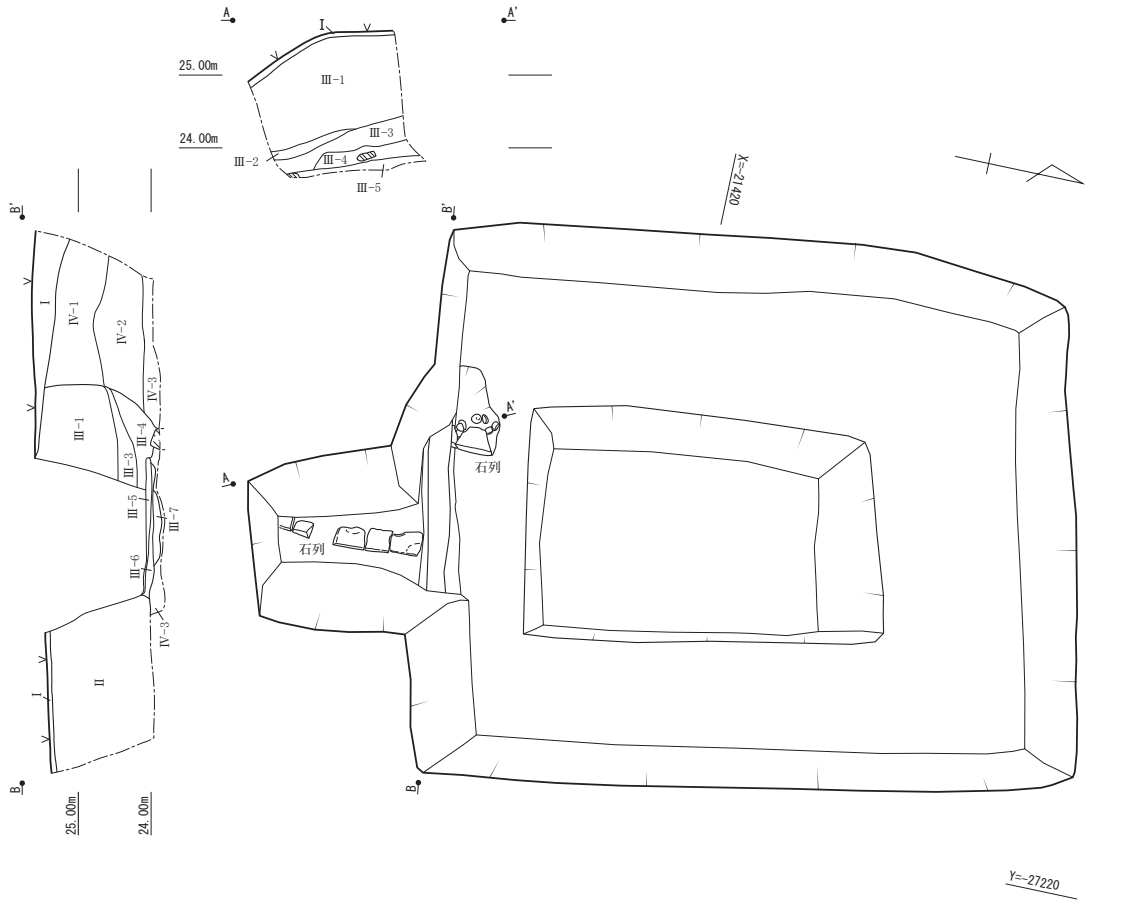
（３）各トレンチの所見

ａ．１トレンチ

１トレンチは南側の崖面際に設けた調査区である。昭和 37 年（1962 年）に調査された千葉城横穴群のうち、東側の一群と近い位置に設定した。表土の下にはＮＨＫ熊本放送会館解体時の撹乱であるⅡ層、ＮＨＫ熊本放送会館建設工事に伴うⅢ層、近代の造成土としたⅣ層が堆積している。Ⅳ層から遺物は出土していないが、軽石を多く含んだⅣ -2 層が３トレンチ等でみられた斜面の造成土と似ていることから、同じ時期だと考え、近代のものと想定している。これらの下は地山の火砕流堆積物であるⅥ層で、近世の土層は残存していなかった。

調査区の南側で南北方向に並ぶ石列を２列検出した。東側の石列はⅢ層中に構築されており、ＮＨＫ熊本放送会館建設時に設置されたものと判断している。５石が並んでいるが、間隔が空く箇所には本来もう１石があったと思われる。石材は安山岩で、石列の正面は東側である。

西側の石列はⅣ層中に構築されており、近代以降の所産である。検出したのは２石である。石材は安



Ⅰ　表土。
Ⅱ　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性弱く、しまりやや強い。コンクリート片、ビニールを含む。現代の解体整地土。
Ⅲ-1　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　粘性、しまり弱い。5～10cm 程度の円礫、5cm 程度の角礫、30cm 程度の凝灰岩を含む。現代の建築盛土。
Ⅲ-2　暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまり弱い。5～20cm 程度の円礫、軽石を多く含む。現代の建築盛土。
Ⅲ-3　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　粘性、しまり弱い。20cm 程度の円礫、2～5cm 程度の軽石、30cm 程度の凝灰岩を含む。現代の建築盛土。
Ⅲ-4　暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまり弱い。5～20cm 程度の円礫、軽石を多く含む。現代の建築盛土。
Ⅲ-5　褐色土(7.5YR4/6)　漆喰を含む。現代の建築盛土。
Ⅲ-6　オリーブ褐色土(2.5Y4/4)　粘性弱い。2～5cm 程度の軽石を含む。現代の建築盛土。
Ⅲ-7　暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱い。3cm 程度の軽石を含む。現代の建築盛土。
Ⅳ-1　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　コンクリート片を含む。近代か。
Ⅳ-2　黒褐色砂質土(2.5Y3/2)　粘性弱い。5～20cm 程度の軽石を多く含む。３トレンチ等の斜面の造成土と類似している。近代か。
Ⅳ-3　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　粘性、しまり弱い。気泡のようなものがみられる。近代か。
Ⅵ　黄灰色土(2.5YR4/1)　粘性弱く、しまり強い。地山。

第 55 図　１トレンチ平面図・土層断面図

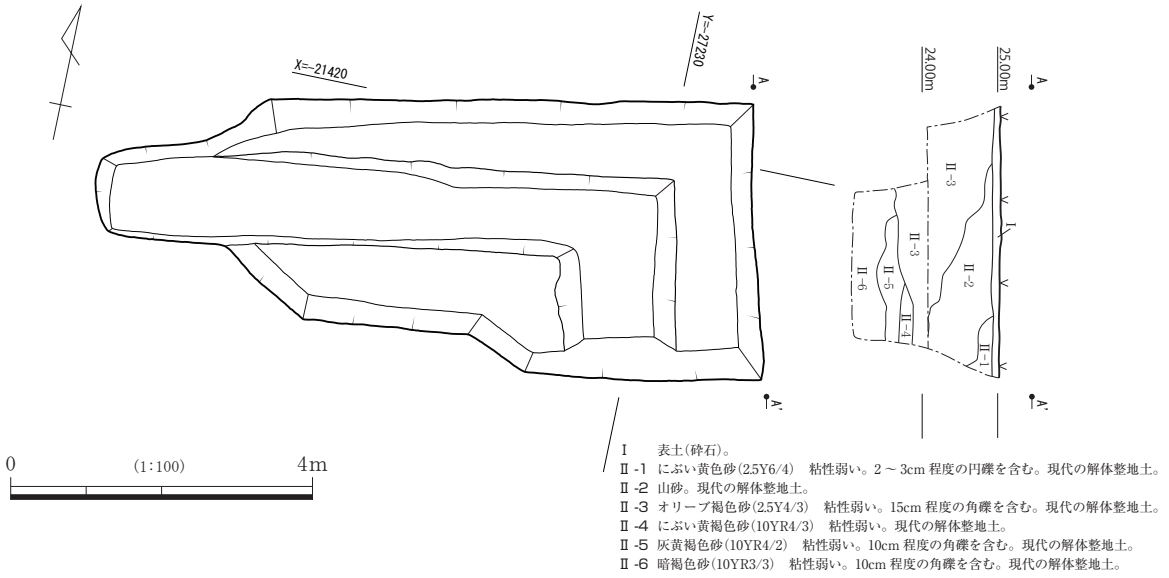
山岩で、石列の正面は東面である。背後に認められる円礫は裏込めであろう。敷地入口の道路に伴う可能性を想定して調査したが、石列の前面はⅢ層により掘り込まれており、硬化面等の道路の痕跡を検出することはできなかった。

遺物はⅡ層、Ⅲ層等から瓦、磁器、陶器のほか、瓦質土器、土師質土器、土製品等も出土している。

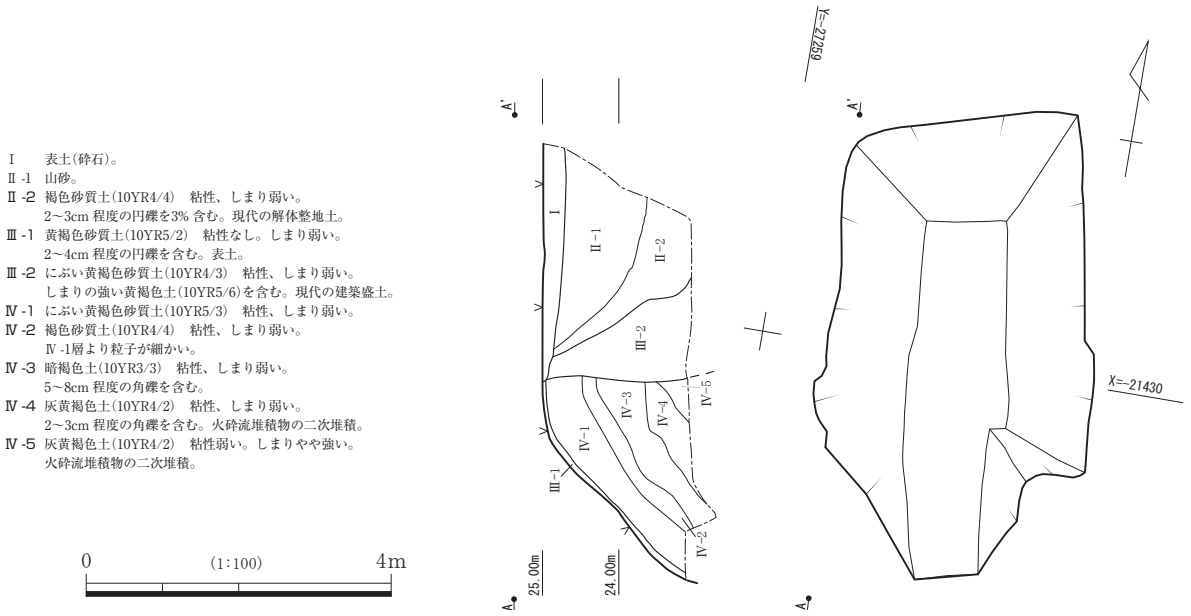
b. 2トレンチ

2トレンチは南側の崖面際、1トレンチの西側に隣接して設けた調査区である。昭和37年（1962年）に調査された千葉城横穴群のうち、東側の一群と位置が近い。表土の下はⅡ層で、少なくとも現地表面下約2mの深さまで堆積していることを確認した。隣接する1トレンチで地山のⅥ層が検出された高さを考えると、2トレンチでも近世の土層は残存していないと考えられる。

遺物は出土しなかった。



第56図　2トレンチ平面図・土層断面図

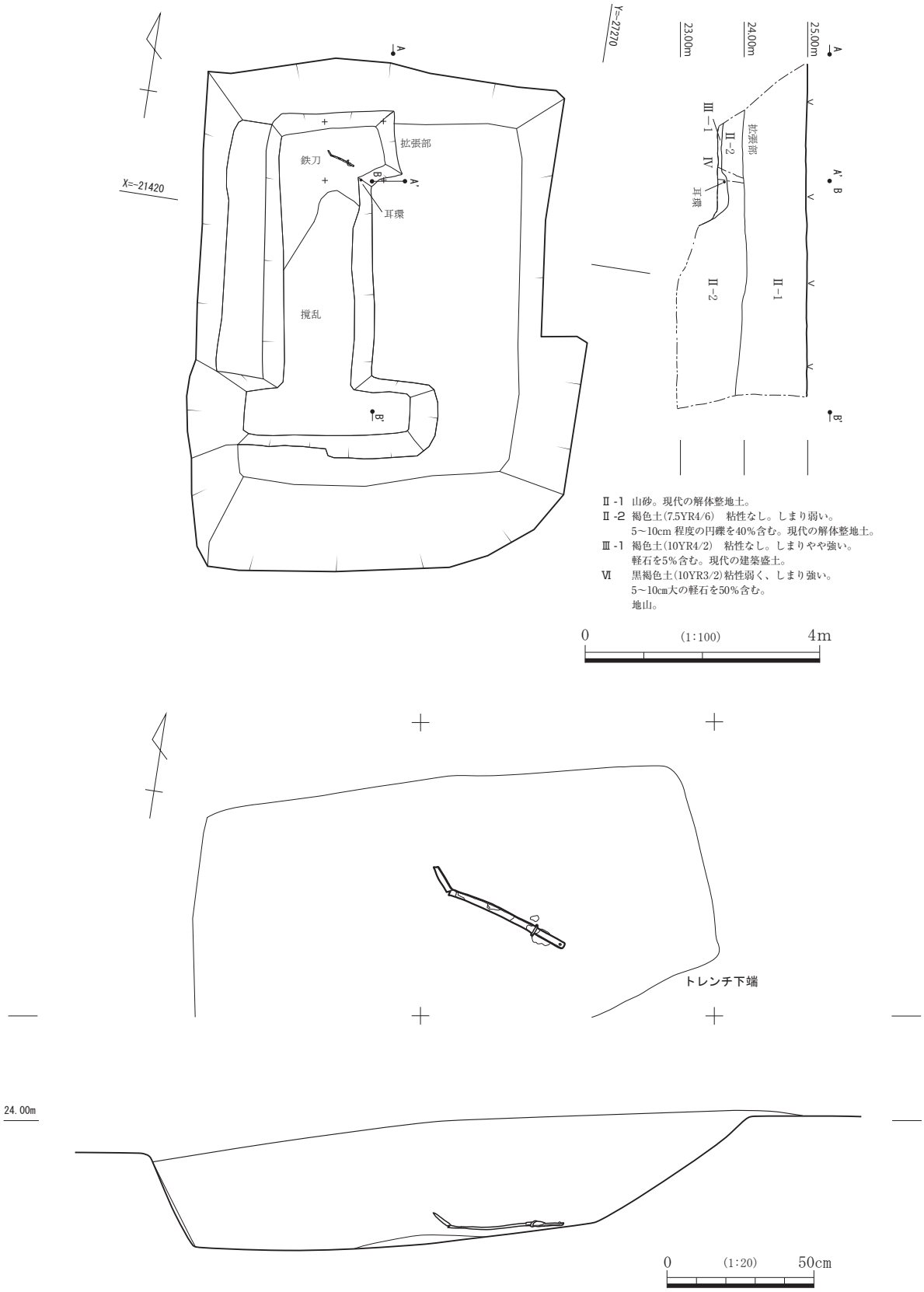


第57図　3トレンチ平面図・土層断面図

c. ３トレンチ

３トレンチは南側の崖面際に設けた調査区である。表土以下に、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層が堆積している。現地表面下約２ｍの深さまで調査を行ったが、近世の土層や地山の火砕流堆積物等は検出できなかった。

調査区の南側半分では、Ⅳ層が傾斜しながら崖面に堆積しており、北側半分ではそのⅣ層を掘り込んで、



第 58 図　４トレンチ平面図・土層断面図・鉄刀出土状況図

Ⅱ層とⅢ層が堆積している。

Ⅳ層には近代とみられる陶磁器や瓦が含まれる一方で現代の遺物は確認されなかった。また、Ⅳ層の下位には軽石が非常に多く含まれている。同様の軽石を多く含む土層が、１トレンチや９トレンチといった他のトレンチでも斜面を埋めるように堆積しており、３トレンチのⅣ層と同じ時期である可能性がある。遺物はⅢ層、Ⅳ層等から瓦、磁器、陶器、瓦質土器、土師質土器等が出土している。

d. ４トレンチ

４トレンチは、２段に造成された敷地西側の上段に設けた調査区である。昭和 37 年（1962 年）に調査された千葉城横穴群のうち、西側の一群と位置が近い。地表面に砕石等は敷かれておらず、最上位の層が現代の解体整地土であるⅡ層である。調査した現地表面下約２ｍまではおおむねⅡ層が堆積しているが、調査区北側では部分的にⅢ層とⅥ層が残存している。Ⅲ層の直下がⅥ層であることから、ＮＨＫ熊本放送会館の建設工事でⅥ層の火砕流堆積物まで掘削されていることが分かる。近世や近代の土層は残存していない。

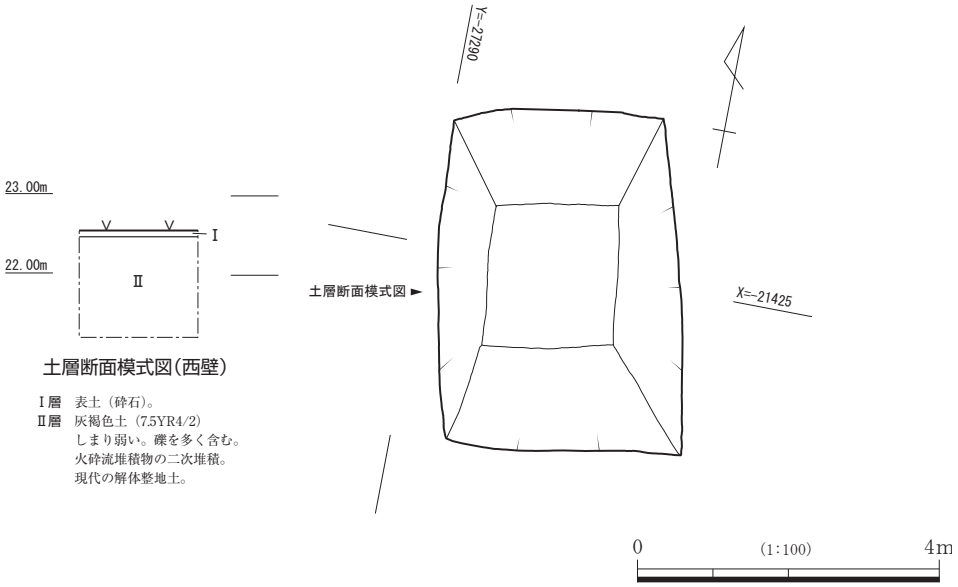
４トレンチからは古墳時代の遺物が出土している。特筆されるのが紀年銘象嵌鉄刀で、調査区の北端部で検出された。遺構に伴うものではなく、Ⅵ層直上のⅢ層中から出土した。また、鉄刀の周囲を北側と東側に１ｍずつ拡張して精査したところ、鉄刀と同じⅢ層から須恵器甕の破片と耳環が出土した。これらは出土層位から、ＮＨＫ熊本放送会館建設工事で動かされたものだと判断できる。そして、出土した位置が横穴に近いことと、建設工事が横穴の築造されているⅥ層まで及ぶものであったこと、想定される時代が近いことから、鉄刀や須恵器、耳環は横穴に伴うものであった可能性が考えられる。

上述した遺物以外にも、Ⅱ層から瓦、磁器、陶器、須恵器等が出土している。

e. ５トレンチ

５トレンチは、２段に造成された敷地西側の下段に設けた調査区である。昭和 37 年（1962 年）に調査された千葉城横穴群のうち、西側の一群と位置が近い。表土の下はⅡ層で、少なくとも現地表面下約 1.45 ｍの深さまで堆積していることを確認した。

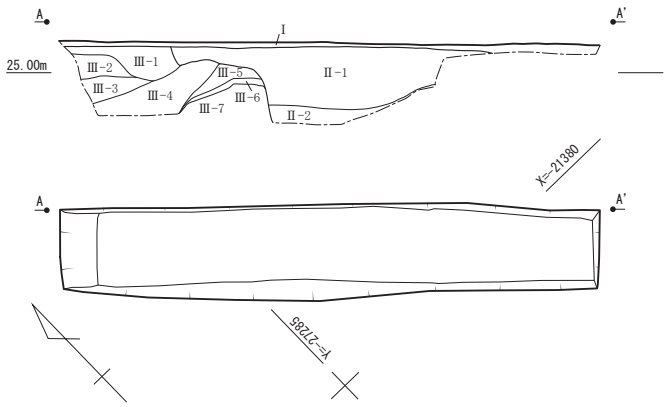
遺物は出土しなかった。



第 59 図　５トレンチ平面図・土層断面模式図

f. 6トレンチ

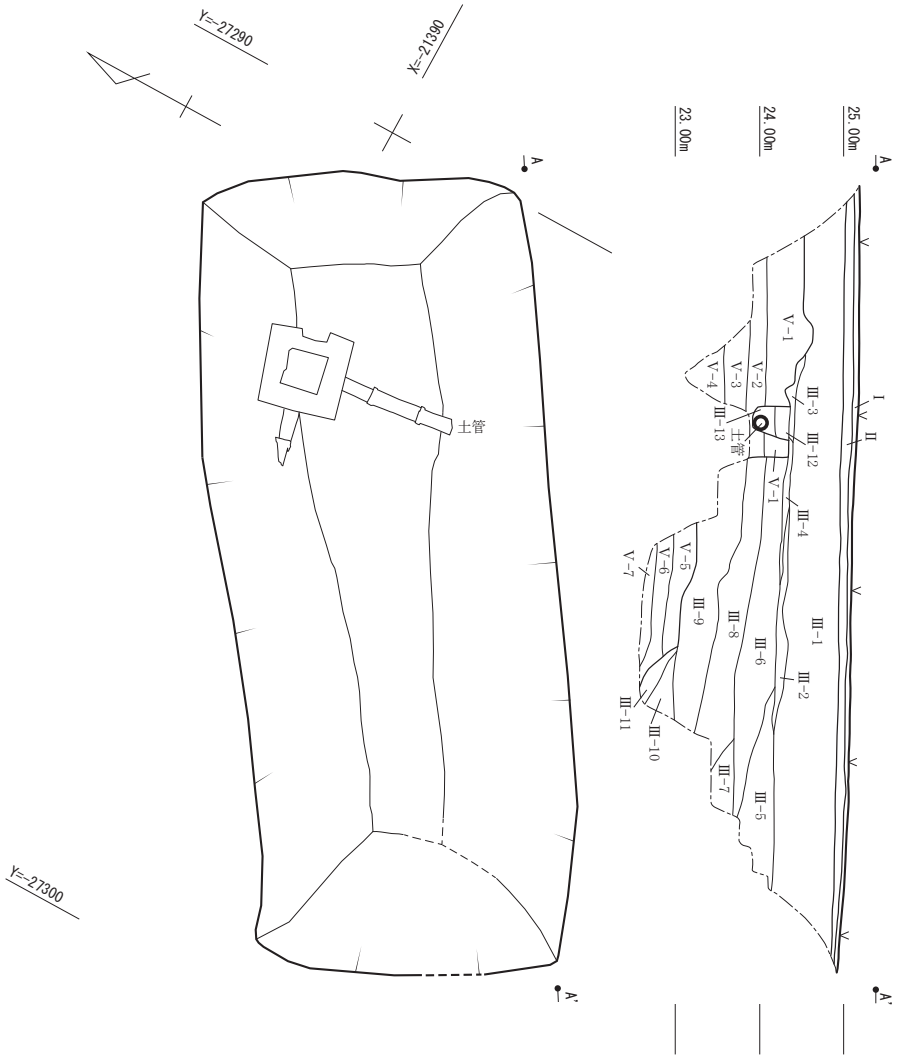
6トレンチは敷地の北西側に設けた調査区である。調査時にはⅢ-2・3・4層をⅣ層、Ⅲ-5・6層をⅤ層、Ⅲ-7層をⅥ層と判断していたが、部分的な検出であり遺物の出土もなかったため、明確ではない。発掘調査終了後に実施した地質調査の成果や、敷地全体の発掘調査成果からは現地表面下約0.55 mで火砕流堆積物が検出されるとは考えにくく、Ⅵ層と判断した土層は地山の2次堆積である可能性が高い。NHK熊本放送会館建設時に動かされた土層であろう。



Ⅰ　表土(砕石)。
Ⅱ-1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)粘性、しまり弱い。5cm 程度の角礫を含む。
現代の解体整地土か。
Ⅱ-2　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)　粘性やや強い。しまり弱い。
現代の解体整地土か。
Ⅲ-1　褐色砂質土(10YR4/4)　粘性弱い。しまりやや強い。
にぶい赤褐色土(5YR4/4)を含む。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-2　灰黄褐色砂質土(10YR4/2)　粘性、しまり弱い。5cm 程度の角礫を含む。
近代の盛土か。
Ⅲ-3　暗褐色土(10YR3/3)　粘性、しまり弱い。軽石を含む。
近代の盛土か。
Ⅲ-4　暗褐色土(10YR3/3)　粘性やや強い。しまり強い。
近代の盛土か。
Ⅲ-5　暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまりやや強い。
近代の盛土か。
Ⅲ-6　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘性弱い。しまりやや強い。
近代の盛土か。
Ⅲ-7　灰黄褐色砂質土(10YR4/2)　粘性弱い。しまり強い。
Ⅳ層の2次堆積か。近代の盛土か。

0　(1:100)　4m

第60図　6トレンチ平面図・土層断面図



Ⅰ　表土(砕石)。
Ⅱ　褐色土(10YR4/4)　粘性、しまり弱い。
現代の解体整地土か。
Ⅲ-1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性弱い。
しまりやや強い。
5cm 程度の角礫を5% 含む。現代の建築盛土。
Ⅲ-2　暗褐色土(7.5YR3/3)　粘性やや強い。
しまりやや強い。漆喰を5% 含む。
現代の建築盛土。
Ⅲ-3　黒褐色土(7.5YR3/2)　粘性弱い。しまりやや強い。
現代の建築盛土。
Ⅲ-4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性、しまりやや強い。
現代の建築盛土
Ⅲ-5　暗褐色土(10YR3/3)　粘性、しまり弱い。
5cm 程度の円礫を含む。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-6　黒褐色土(10YR3/2)　粘性、しまり弱い。
現代の建築盛土。
Ⅲ-7　黒褐色土(10YR2/2)　粘性やや強い。しまり弱い。
現代の建築盛土。
Ⅲ-8　暗褐色土(10YR3/3)　粘性やや強い。しまり弱い。
現代の建築盛土。
Ⅲ-9　灰黄褐色砂質土(10YR4/2)　粘性、しまり弱い。
現代の建築盛土。
Ⅲ-10　黒褐色土(10YR2/2)　粘性やや強い。しまり弱い。
Ⅲ-11　黒褐色土(10YR3/1)　粘性強い。しまりやや強い。
Ⅲ-12　暗褐色土(10YR3/3)　粘性弱い。しまりやや弱い。
土管の掘方。
Ⅲ-13　暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまり弱い。
土管の掘方。
Ⅴ-1　暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱い。しまりやや強い。
近世か。
Ⅴ-2　暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまりやや強い。
近世か。
Ⅴ-3　暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまりやや強い。
近世か。
Ⅴ-4　暗褐色砂質土(10YR3/4)
粘性弱い。しまりやや強い。
近世か。
Ⅴ-5　暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまりやや強い。
近世か。
Ⅴ-6　黒褐色土(10YR2/2)　粘性、しまり強い。
近世か。
Ⅴ-7　黒褐色土(10YR2/3)　粘性、しまり強い。
近世か。

0　(1:100)　4m

第61図　7トレンチ平面図・土層断面図

g. 7トレンチ

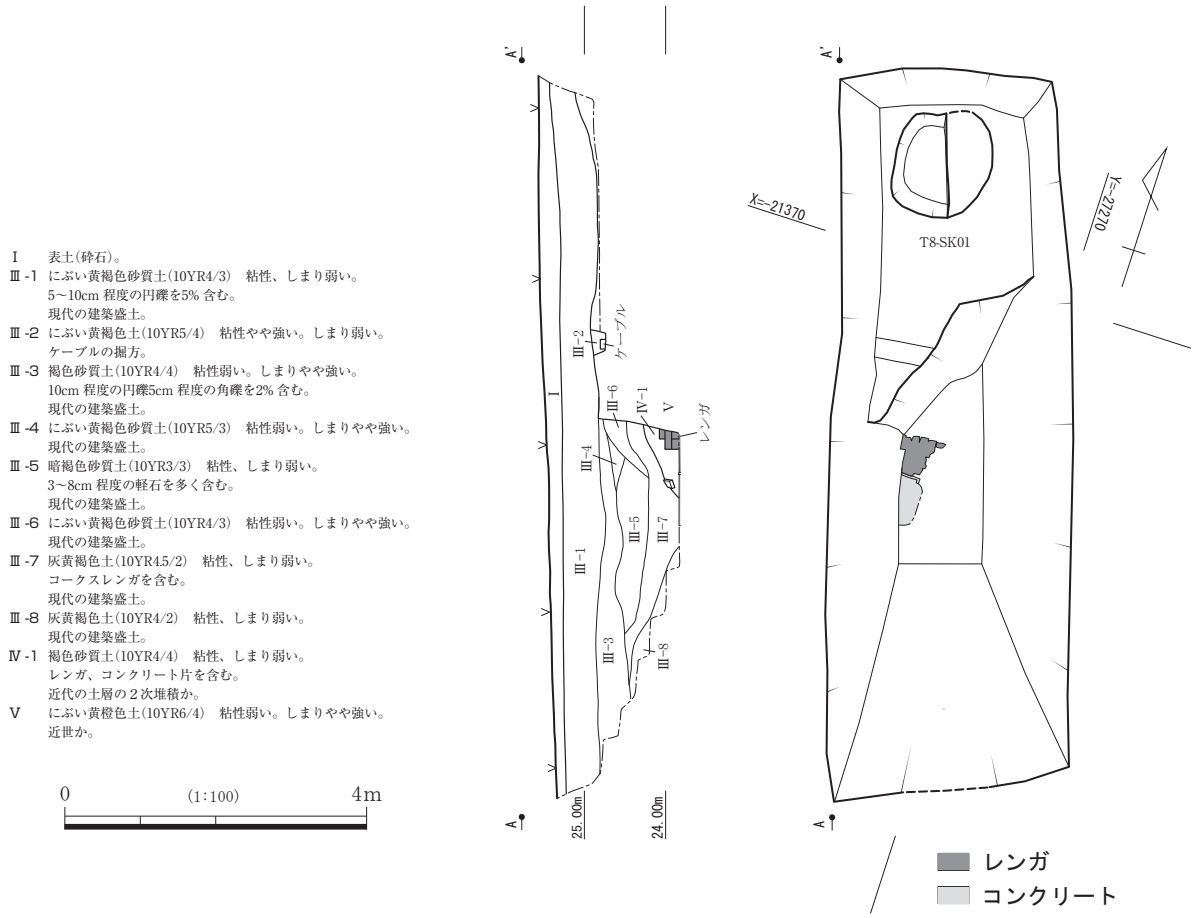
7トレンチは敷地の北西側に設けた調査区である。現代の集水枡を検出した。7トレンチは遺物の出土量が非常に多く、今回報告する遺物の大部分が本調査区のものである。表土下にⅡ層、Ⅲ層が堆積しており、その下には近世の遺物が多く認められる土層がある。この土層を調査時には近世の土層と判断してⅤ層とした。しかし、近世の遺物は7トレンチのⅢ層からも大量に出土しており、これのみでの時期決定には慎重を要する。今後も検討が必要であろう。

h. 8トレンチ

8トレンチは敷地の北側に設けた調査区である。壊されたレンガ構造物を検出した。その上に堆積している埋土は主にⅢ層とされることから、ＮＨＫ熊本放送会館建設工事で壊されたと考えられる。レンガ構造物は建設工事の昭和37年（1962年）以前のものと言えよう。大きく壊されているため構造を明確にすることは難しいが、レンガと並んでコンクリートも検出されており、またレンガ構造物の背後の土層はⅤ層と判断している。

そのほか、Ⅴ層に掘り込む土坑（T8-SK01）も確認したが、時期や性格は明確にできなかった。

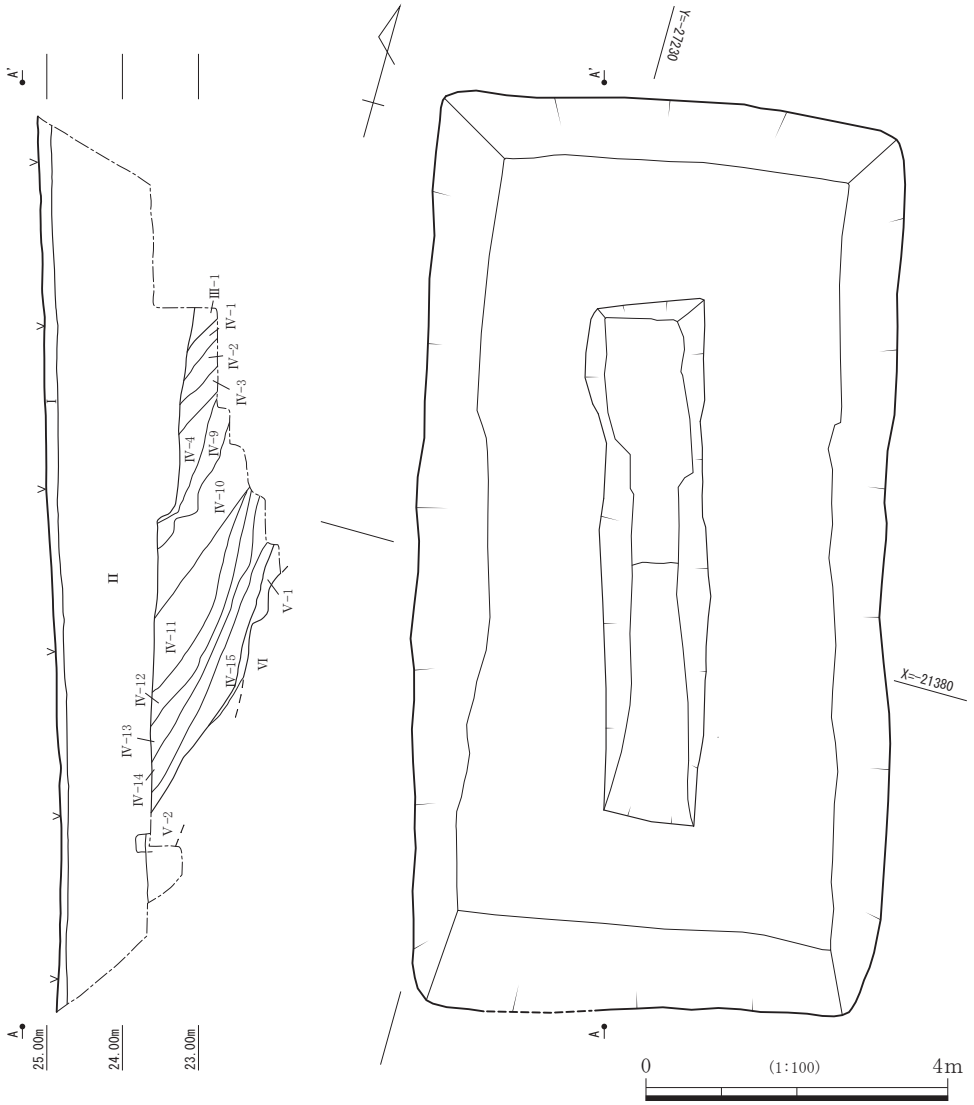
遺物はほとんどがⅢ層からの出土で、瓦や磁器、陶器等があった。



第62図　8トレンチ平面図・土層断面図

i. 9トレンチ

9トレンチは敷地の北東側に設けた調査区である。Ⅱ層、Ⅲ層の下に、南から北へ傾斜して堆積するⅣ層、Ⅴ層を確認した。堆積状況から、斜面を埋めた造成土であると考えられる。Ⅳ層とⅤ層の堆積状況は似ているが、土質が異なることや、Ⅳ層はⅤ層を掘り込むように堆積していることから、異なる時期のものだと判断している。Ⅳ層は軽石を多く含んでおり、３トレンチで見られたⅣ層と似ていることから近代



Ⅰ　表土（砕石）。
Ⅱ　暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまり弱い。0.5～40cm 程度の礫を 50% 以上含む。
現代の解体整地土。
Ⅲ-1　暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまり弱い。0.5cm 程度の炭化物、漆喰を 30% 含む。
現代の建築盛土。
Ⅳ-1　黒褐色土（10YR3/2）　粘性、しまりあり。1cm 程度の炭化物を 10% 含む。軽石を少量含む。
路面。
Ⅳ-2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　粘性、しまり弱い。0.5cm 程度の軽石を 40% 含む。
近代以降の盛土。
Ⅳ-3　暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまり弱い。3～5cm 程度の軽石を 3% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粘性、しまり弱い。1～8cm 程度の軽石を 40% 含む。炭化物を少量含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-9　暗褐色土（10YR3/4）　粘性、しまり弱い。1～3cm 程度の礫を 2% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-10 暗褐色土（7.5YR3/3）　粘性、しまり弱い。0.3～5cm 程度の礫を 40% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-11 暗褐色土（10YR3/3）　粘性弱い。0.5～3cm 程度の礫を 5% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-12 褐色土（7.5YR4/3）　粘性やや弱い。しまりあり。0.3～5cm 程度の礫を 3% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-13 灰褐色土（7.5YR4/2）　粘性、しまり弱い。0.3～5cm 程度の礫を 30% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-14 暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまり弱い。0.3～5cm 程度の礫を 30% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅳ-15 暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまり弱い。0.3～10cm 程度の礫を 40% 含む。
近代以降の盛土か。
Ⅴ-1　極暗赤褐色土（5YR2/3）　粘性、しまりあり。1cm 程度の軟質の礫を 3% 含む。
20cm 程度の角礫を含む。
近代以前の盛土か。
Ⅴ-2　褐色土（10YR4/4）　粘性、しまり強い。3～7cm 程度の角礫を 3% 含む。地山ブロックを含む。
近代以前の盛土か。
Ⅵ　赤褐色土（5YR4/6）　粘性、しまりあり。1～5cm 程度の非溶結凝灰岩片を 2% 含む。
地山。

第 63 図　９トレンチ平面図・土層断面図

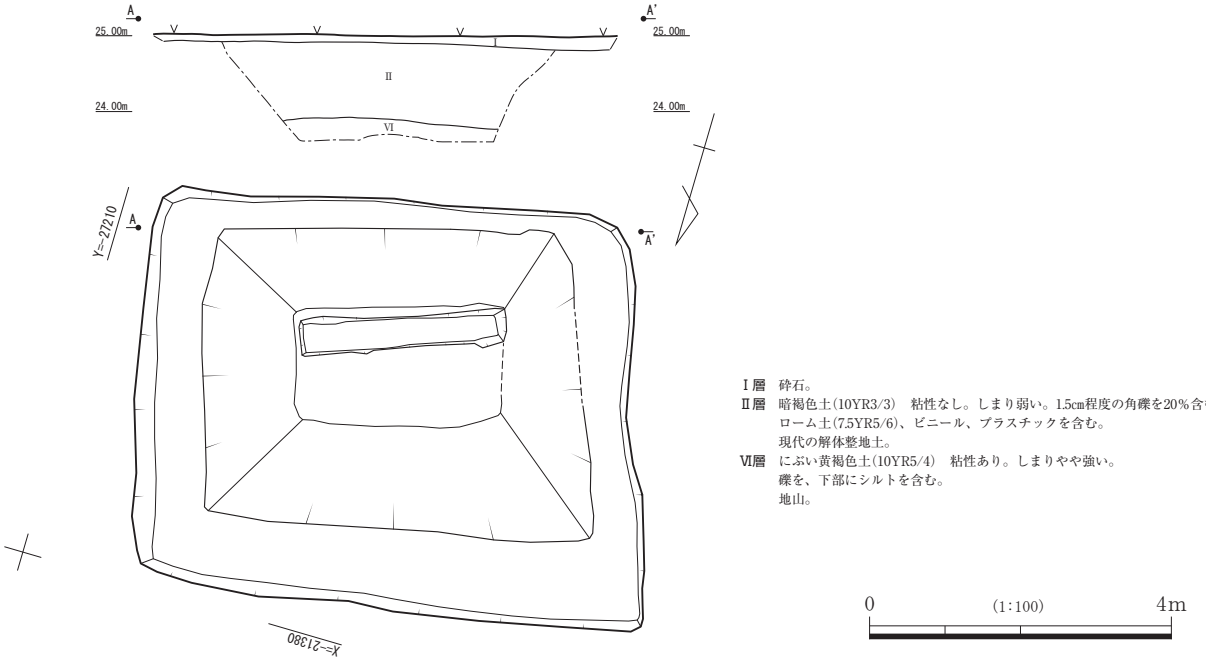
の土層と想定しているが、Ⅳ層、Ⅴ層ともに遺物が非常に少ないため、時期判断の決め手には欠けている。Ⅴ層の下は火砕流堆積物のⅥ層である。

遺物はⅡ層とⅢ層から出土したものが多く、瓦、陶器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、磁器等がある。

j.10 トレンチ

10 トレンチは敷地の北東側に設けた調査区である。表土の下はⅡ層とⅥ層のみが確認され、近世の土層は検出されなかった。

遺物は、Ⅱ層から瓦、磁器、陶器等が少量出土したが報告できるものはなかった。

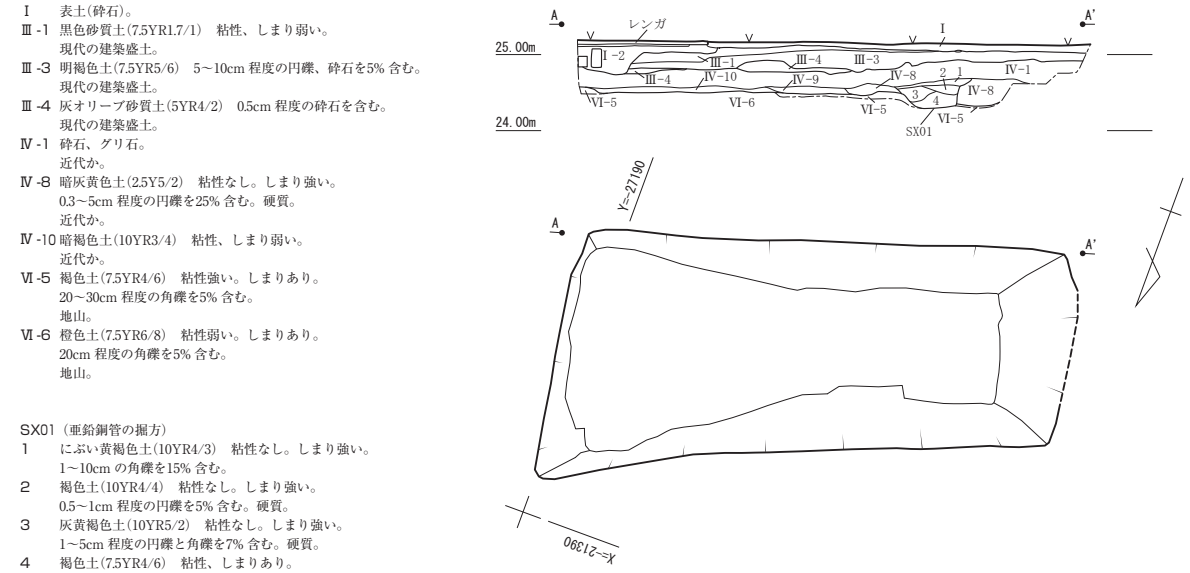


第 64 図　10 トレンチ平面図・土層断面図

k.11 トレンチ

11 トレンチは敷地の東側に設けた調査区である。表土の下にはⅢ層とⅣ層が堆積しており、その下は地山のⅥ層であった。11 トレンチ付近は古写真と絵図から、西南戦争時に塹壕が設けられた場所であることが推測できるが、これらの痕跡や近世の土層は確認できなかった。

遺物はⅢ層やⅣ層から磁器のほか、陶器や瓦質土器、土師質土器等が出土している。



第 65 図　11 トレンチ平面図・土層断面図

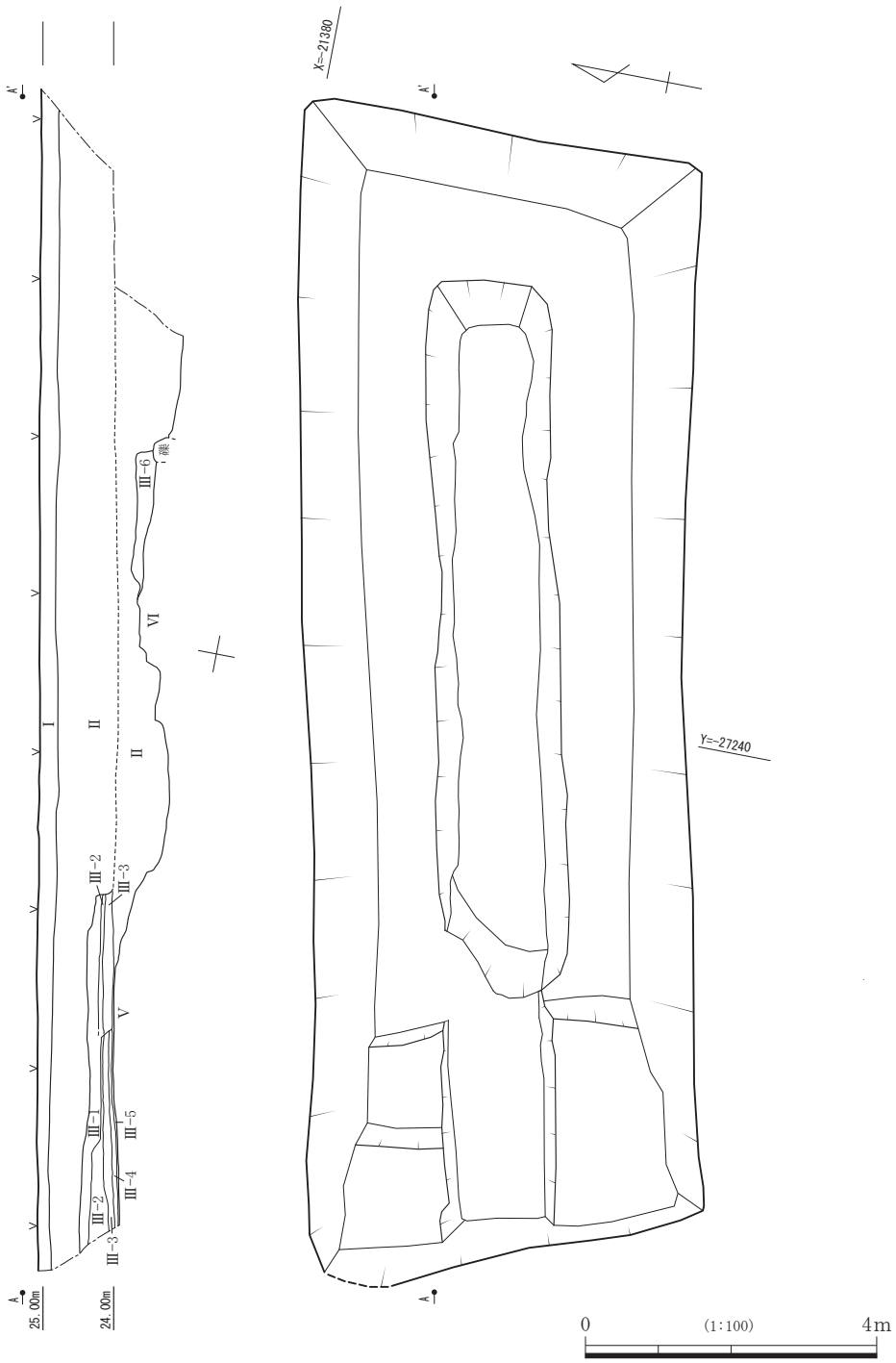
l.12 トレンチ

12 トレンチは敷地の北側に設けた調査区である。東西に分かれており、それぞれ 12 トレンチ（東側）、12 トレンチ（西側）と呼称する。

12 トレンチ（東側）は表土の下にⅡ層とⅢ層が堆積しており、その下はⅤ層及びⅥ層である。一方 12

トレンチ（西側）は現地表面下約 1.4 mまでⅡ層及びⅢ層が続いており、その下の土層は確認されなかった。

遺物は、Ⅱ層とⅢ層から瓦、磁器、陶器、瓦質土器、土師質土器等が出土しているが、報告書に図示できるものはなかった。



Ⅰ　表土（砕石）。

Ⅱ　灰褐色砂質土（7.5YR4/2）　しまりあり。
2～30㎝程度の角礫、ビニール、コークスレンガ片、コンクリート片を含む。
現代の解体整地土。

Ⅲ-1　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　しまりよい。
混じり多い。火砕流堆積物を主体とする。
現代の建築盛土。

Ⅲ-2　褐色砂質土（10Y R 4/4）　しまりあり。
1～10㎝程度の円礫を含む。
現代の建築盛土。

Ⅲ-3　暗褐色土（10YR3/3）粘性弱い。しまりやや強い。
0.5～5㎝程度の円礫を含む。
現代の建築盛土。

Ⅲ-4　灰黄褐色土（10YR4/2）　しまり強い。
火砕流堆積物を主体とする。硬質。
現代の建築盛土。

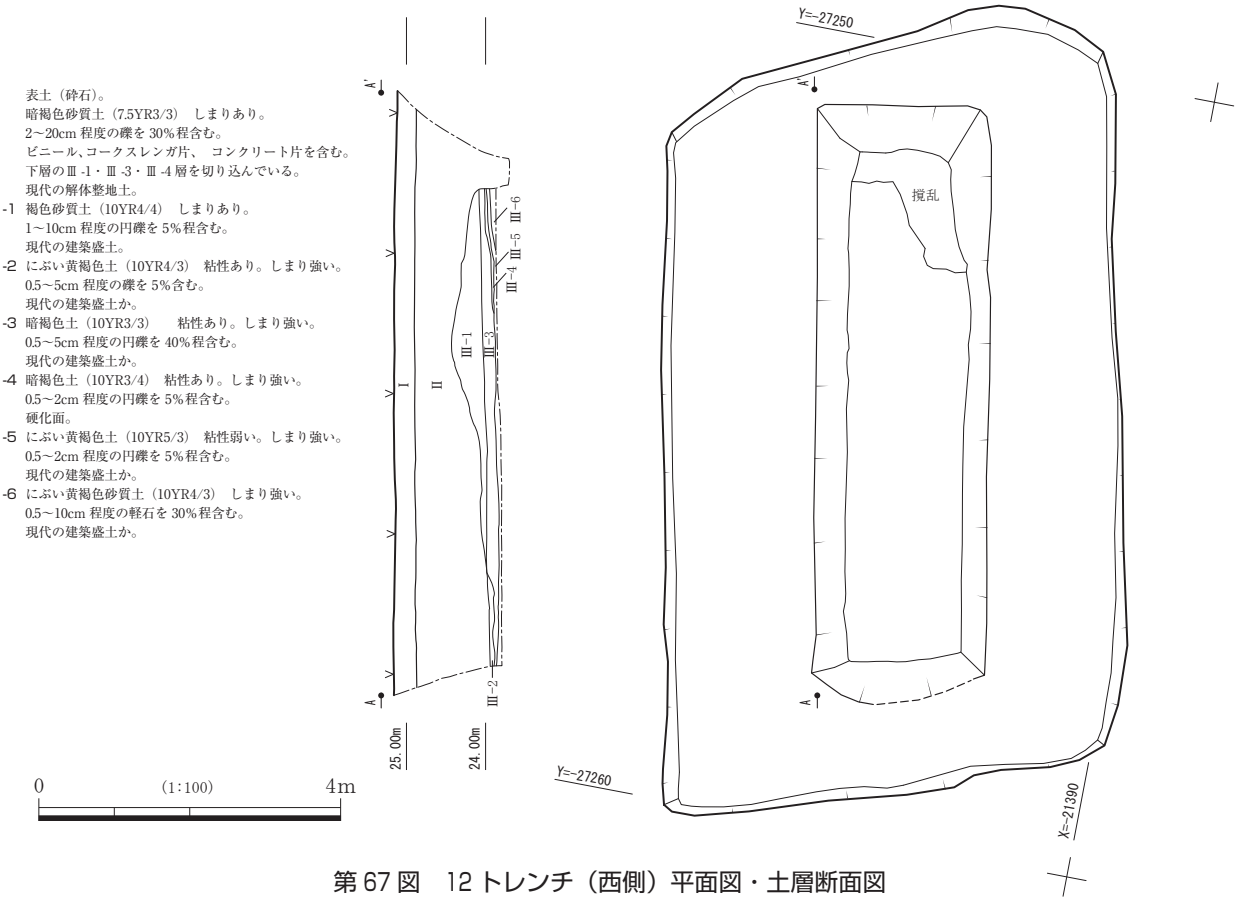
Ⅲ-5　暗褐色土（10YR3/4）　粘性弱い。しまりよい。
0.5～2㎝程度の円礫を含む。
現代の建築盛土。

Ⅲ-6　暗褐色砂質土（10YR3/3）
小礫、炭化物を含む。
現代の建築盛土か。

Ⅴ　にぶい橙色土（7.5YR7/4）　しまり強い。
風化した火砕流堆積物を主体とする。硬質。
近世の盛土。

Ⅵ　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　しまりやや強い。
礫を含む。
地山。

第 66 図　12 トレンチ（東側）平面図・土層断面図



第 67 図　12 トレンチ（西側）平面図・土層断面図

m.13 トレンチ

13 トレンチは敷地の中央部に設けた調査区である。表土の下はⅡ層とⅥ層のみが確認され、近世の土層は検出されなかった。

遺物は、Ⅱ層から瓦、磁器、陶器等が出土しているが報告書に図示できるものはなかった。

n.14 トレンチ

14 トレンチは敷地の北側に設けた調査区である。表土の下は主にⅢ層が堆積しており、部分的にⅡ層も認められた。Ⅲ層の下はⅥ層であった。

遺物はⅡ層とⅢ層から瓦等が出土しているが、報告書に図示できるものはなかった。

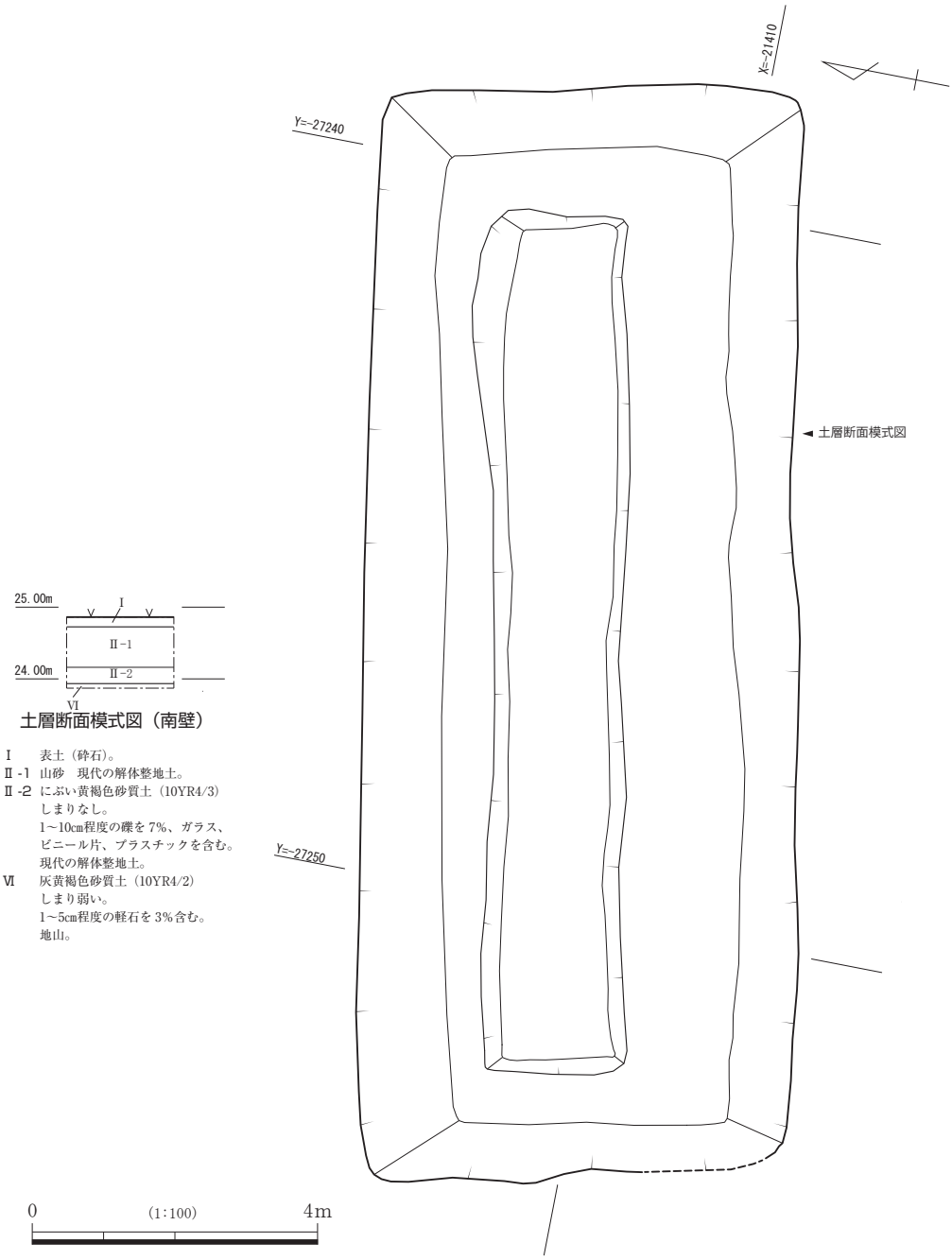
o.15 トレンチ

15 トレンチは敷地の南東側に設けた調査区である。アスファルトの下には、互層状に堆積する硬質の層が 0.8～0.9m 程度の厚さでみられた。この互層状の堆積層のうち、Ⅲ - 6 層上面ではコンクリートの側溝を検出した。これをＮＨＫ熊本放送会館建設時の地表面だと考えると、これ以下の土層は近代の可能性がある。また、Ⅳ - 7 層は互層状の堆積状況ではない上に、硬質であった上の層に比べてしまりが弱いため上の層とは性格が異なると思われる。3 トレンチ等でみられた軽石を多く含むⅣ層と似ている。Ⅳ - 7 層の下には、非常に硬い灰黄褐色の土層が部分的に見られ、近世の造成土の可能性がある。

遺物は多くないが、Ⅲ層とⅣ層から瓦や磁器、陶器、土師質土器等が出土している。

p.16 トレンチ

16 トレンチは敷地の中央部に設けた調査区である。表土の下はⅡ層及びⅢ層が、少なくとも現地表下



第68図　13トレンチ平面図・土層断面模式図

約1.9ｍの深さまで堆積していることを確認した。

遺物はⅡ層から瓦や磁器、陶器が少量出土している。報告書に図示できるものはなかった。

q.17トレンチ

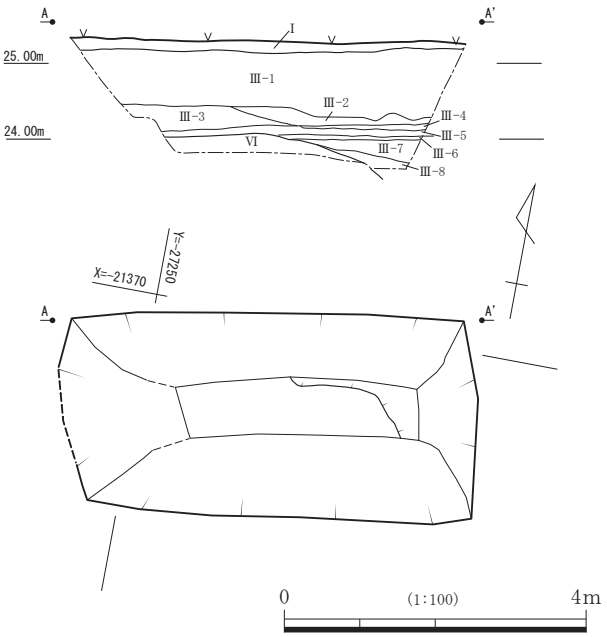
17トレンチは敷地の北側に設けた調査区である。表土の下はⅡ層が堆積しており、その下は地山のⅥ層である。

遺物はⅡ層から瓦、磁器、陶器等が出土している。

r.18トレンチ

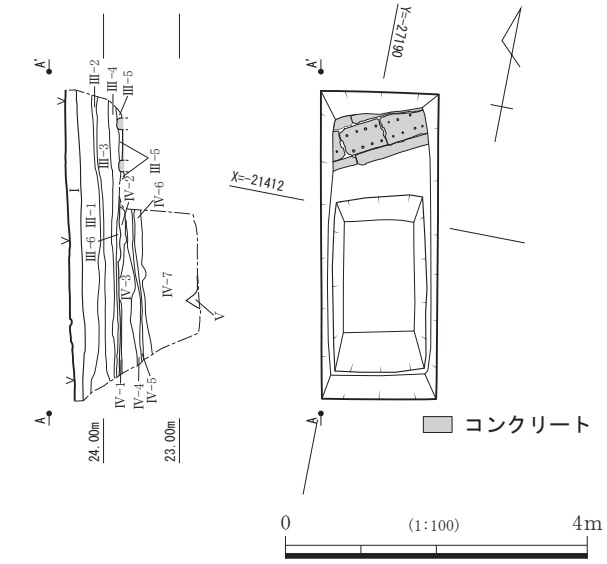
18トレンチは欠番である。

Ⅰ　表土（砕石）。
Ⅲ-1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）　粘性、しまり弱い。
1～20cm 程度の円礫、軽石を多く含む。
3cm 程度の地山ブロックを部分的に含む。
現代の建築盛土。
Ⅲ-2　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）　粘性弱い。しまりあり。
1～5cm 程度の円礫を含む。地山ブロックを部分的に含む。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-3　明褐色砂質土（7.5YR5/8）　粘性弱い。しまりあり。
1～10cm 程度の軽石を含む。　Ⅵ層を由来とした盛土。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-4　黒褐色砂質土（10YR3/2）　粘性、しまり弱い。
1cm 程度の円礫、7cm 程度の軽石を少量含む。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-5　黒褐色砂質土（10YR2/3）　粘性強い。しまりあり。
5cm 程度の円礫、軽石を含む。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-6　褐色砂質土（10YR4/4）　粘性弱い。しまり強い。
3cm 程度の軽石、ガラスを含む。炭化物を少量含む。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-7　黒褐色砂質土（7.5YR2/2）　粘性、しまり弱い。
2cm 程度の軽石を多く、赤褐色の砂質ブロックを部分的に含む。
現代の建築盛土か。
Ⅲ-8　黒褐色土（7.5YR3/1）　粘性あり。しまりあり。
0.2cm 程度の炭化物、赤褐色の砂質ブロックを含む。
現代の建築盛土か。
Ⅵ　明褐色砂質土（7.5YR5/6）　粘性あり。しまり強い。
非溶結凝灰岩を主体とする。
地山。



第 69 図　14 トレンチ平面図・土層断面図

Ⅰ　表土（アスファルト）。
Ⅲ-1　暗赤褐色土（2.5YR3/4）　上位に栗石と砕石を含む。
現代の建築盛土。
Ⅲ-2　オリーブ黒色土（7.5YR3/1）　粘性なし。しまり非常に強い。硬質。
Ⅲ-3　にぶい黄褐色土（10YR4/3YR/）～暗灰黄色土（2.5YR4/2）1～5cm 程度の礫を含む。
Ⅲ-4　褐色土（10YR4/4）　粘性あり。しまり強い。1～2cm 程度の礫を含む。硬質。
Ⅲ-5　黒褐色土（2.5YR3/1）　しまり強い。砂粒を多く含む。硬質。
コンクリート側溝の堀方埋土。
Ⅲ-6　オリーブ黒色土（7.5YR3/1）　粘性なし。しまり非常に強い。3mm 程度の砂利を含む。
NHK 熊本放送会館建設時の表土か。
Ⅳ-1　褐色土（7.5YR4/6）　粘性なし。しまり強い。2～5cm 程度の礫を 1%含む。硬質。
近代の造成土か。
Ⅳ-2　明褐色土（7.5YR5/6）　しまり強い。3～5cm 程度の礫を含む。硬質。
近代の造成土か。
Ⅳ-3　黒褐色土（2.5YR3/1）　粘性なし。しまり非常に強い 5～10cm 程度の軽石を含む。硬質。
近代の造成土か。
Ⅳ-4　オリーブ褐色土（2.5YR4/4）　粘性なし。しまり強い。
5cm 程度の軽石、10cm 程度の凝灰岩を含む。硬質。
近代の造成土か。
Ⅳ-5　灰オリーブ色土（5YR4/2）　粘性なし。しまり強い。2cm 程度の円礫を含む。硬質。
近代の造成土か。
Ⅳ-6　オリーブ褐色土（2.5YR4/6）　粘性なし。しまり強い 5～10cm 程度の軽石を含む。硬質。
近代の造成土か。
Ⅳ-7　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粘性あり。Ⅰ～Ⅲ-6 層に比べてしまり悪い。
下部に軽石を多く含む。
近代の造成土か。
Ⅴ　灰黄褐色土（10YR4/2）　しまり非常に良い。硬質。
近世の造成土か。



第 70 図　15 トレンチ平面図・土層断面図

s.19 トレンチ

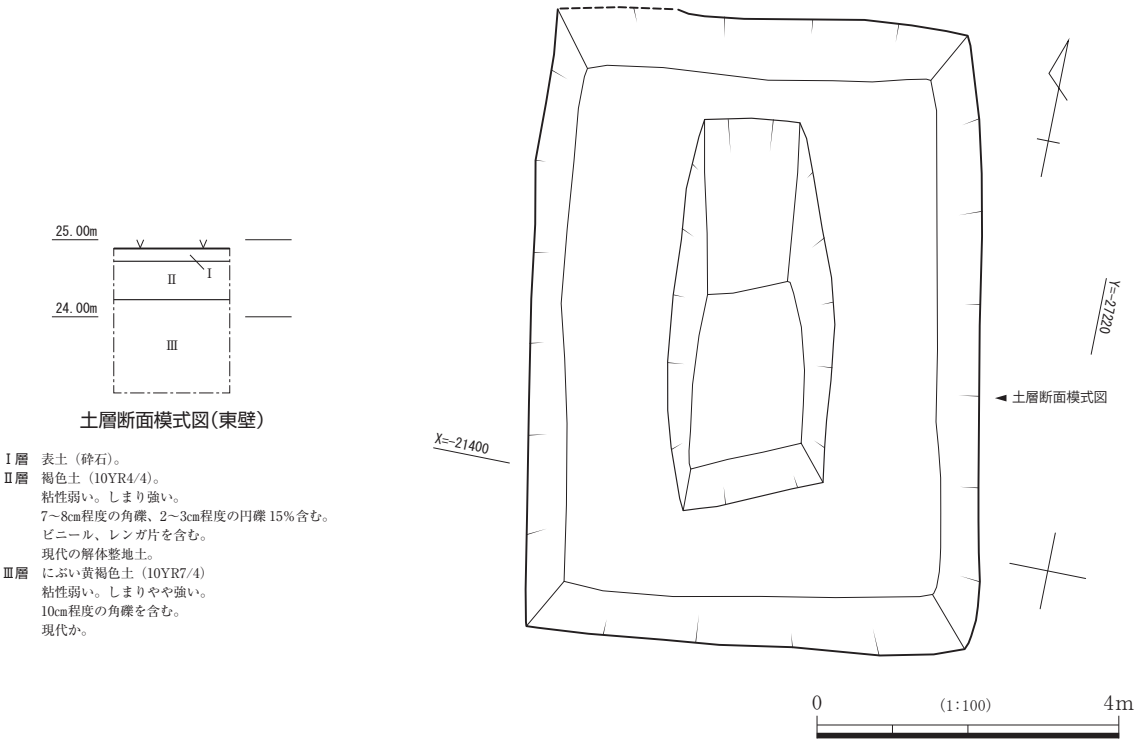
19 トレンチは南側崖面の下､敷地全体の南東隅に設けた調査区である。表土の下はⅢ層が堆積しており、その下にはⅥ層を確認した。埋設の電気ケーブルや調査区幅全体にわたる石等が検出され、Ⅵ層まで掘り下げられたのは一部であった。

遺物はⅢ層から瓦や磁器、陶器、瓦質土器等が出土している。

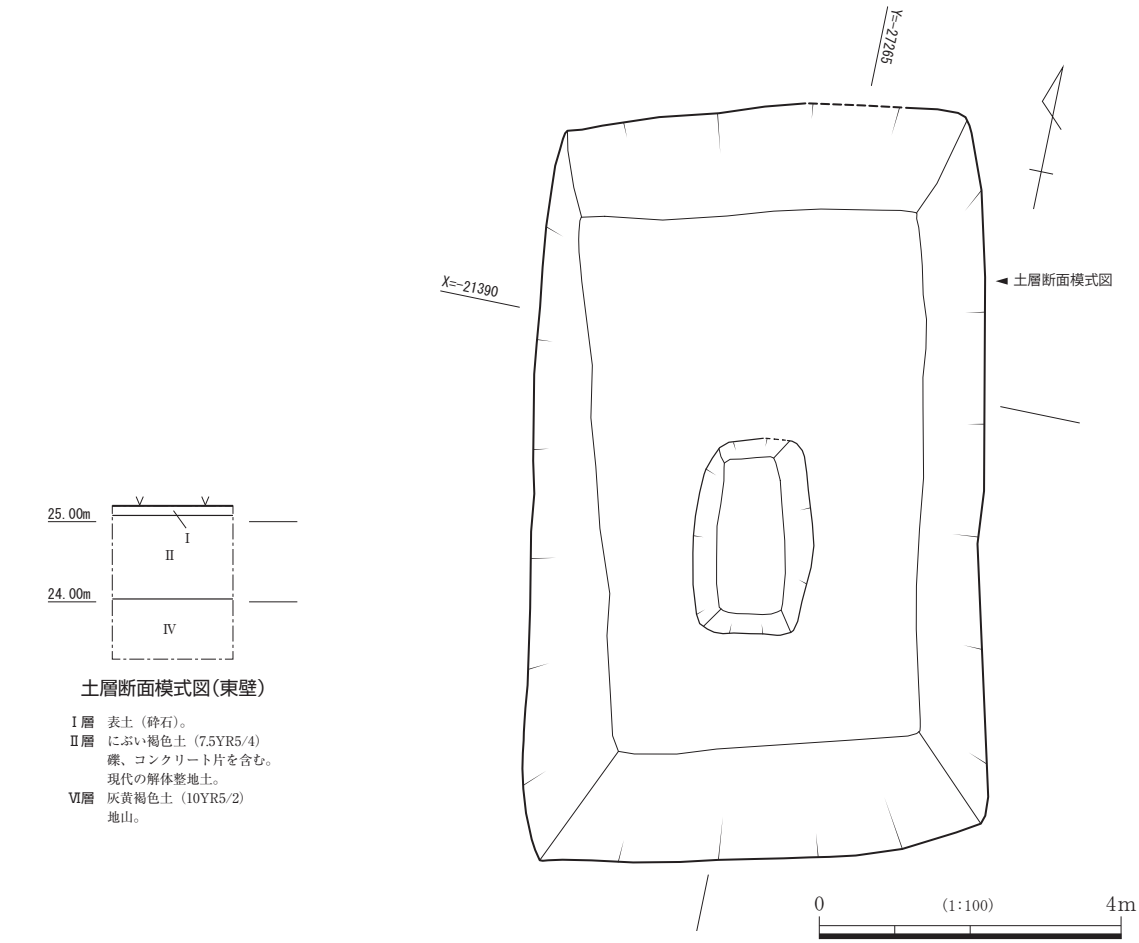
t.20 トレンチ

20 トレンチも南側崖面の下、敷地全体の南東隅に設けた調査区である。19 トレンチと同様に電気ケーブル等の埋設配管が見られた。Ⅲ - 6 層とⅣ - 8 層の境でコンクリートの側溝が検出された。これがＮＨＫ熊本放送会館建設前の地表面だと考えると、これ以下の土層は近代の可能性があるため、Ⅳ層としている。Ⅳ - 3 層とⅣ - 7 層は硬化しており路面であると考えている。Ⅳ層の下には地山だと判断しているⅥ層を検出しているが、部分的であるため明確ではない。

遺物はⅢ層とⅣ層から瓦や磁器、陶器、土師質土器等が出土しているが報告書に図示できるものはなかった。

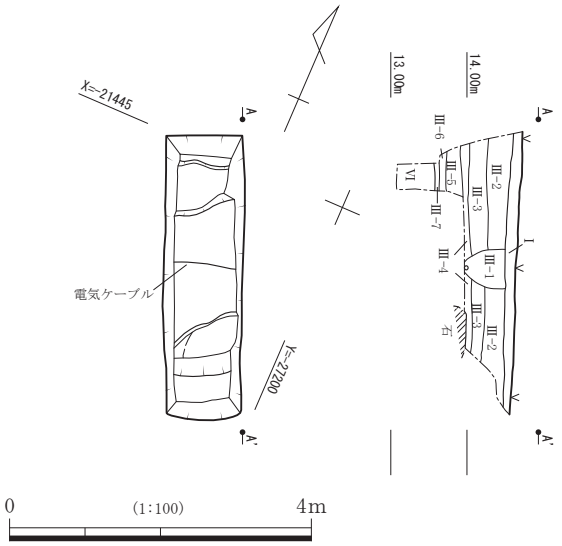


第 71 図　16 トレンチ平面図・土層断面模式図

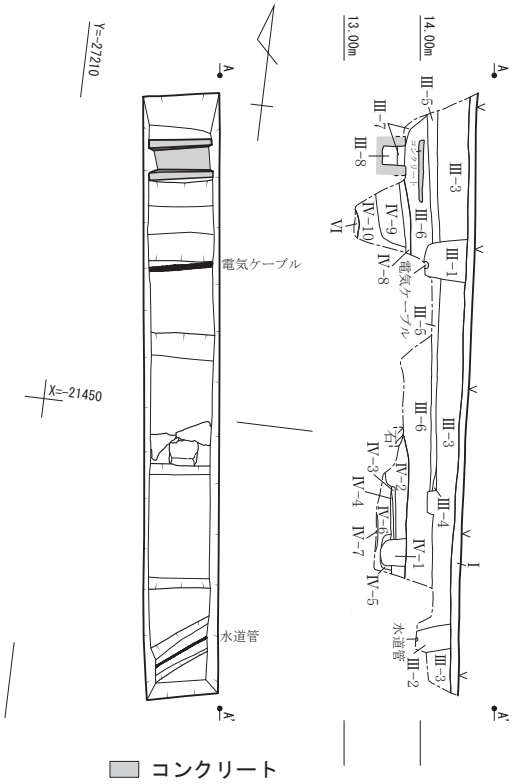


第 72 図　17 トレンチ平面図・土層断面模式図

Ⅰ　黒褐色土（10YR2/3）　表土。
Ⅲ-1　黒褐色土（10YR2/2）　粘性、しまり弱い。10cm 程度の軽石、3cm 程度の炭化物を含む。
電気ケーブルの掘方。
Ⅲ-2　暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまり弱い。3cm 程度の円礫、15cm 程度の軽石、炭化物を含む。
Ⅲ-3　黒褐色土（10YR2/3）　粘性やや強い。しまり強い。
Ⅲ-4　黒色土（10YR1.7/1）　粘性強い　しまり強い　5～10cm 程度の角礫、軽石を含む
Ⅲ-5　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　粘性弱い。しまり強い。50cm 程度の礫を含む。
現代の造成土。
Ⅲ-6　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　粘性、しまり弱い。非溶結凝灰岩の円礫を 30% 含む。
現代の造成土か。
Ⅲ-7　黒褐色土（7.5YR3/1）粘性強い。しまり弱い。1～3cm 程度の円礫を 5%、コンクリートを含む。
現代の造成土か。
Ⅵ　橙色土（7.5YR6/8）粘性、しまり強い。非溶結凝灰岩を含む。
地山。



第 73 図　19 トレンチ平面図・土層断面図



Ⅰ　黒褐色土（10YR2/3）
表土。
Ⅲ-1　黒褐色土（10YR2/3）　粘性、しまり弱い。
電気ケーブル掘方。
Ⅲ-2　黒褐色土（10YR2/3）　粘性、しまり弱い。
水道管掘方。
Ⅲ-3　黒褐色土（10YR3/3）　粘性、しまり弱い。
3cm 程度の円礫、15cm 程度の軽石、炭化物を含む。
Ⅲ-4　黒褐色土（10YR2/3）　粘性、しまり弱い。2cm 程度の円礫を 1%、炭化物を含む。
Ⅲ-5　黒色土（10YR1.7/1）　粘性、しまり強い。5～10cm 程度の角礫、軽石を含む。
Ⅲ-6　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　粘性弱い。しまり強い。
現代の盛土か。
Ⅲ-7　黒褐色土（10YR2/2）　粘性、しまりやや強い。
Ⅲ-8　にぶい黄橙色土（10YR6/3）　粘性やや強い。しまり弱い。5cm 程度の円礫を 10% 含む。
側溝埋土。
Ⅳ-1　暗褐色土（10YR3/4）　粘性、しまりやや強い。5cm 程度の軽石を含む。炭化物を少量含む。
近代か。
Ⅳ-2　黒褐色土（10YR2/3）　粘性、しまりやや強い。5cm 程度の軽石を含む。
近代か。
Ⅳ-3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粘性弱い。しまり強い。硬化面を形成している。
近代か。
Ⅳ-4　暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまりやや強い。
近代か。
Ⅳ-5　暗褐色土（10YR3/3）　粘性やや強い。しまり弱い。
近代か。
Ⅳ-6　黒褐色土（10YR2/2）　粘性やや強い。しまり弱い。
Ⅳ-7　黒褐色土（10YR2/3）　粘性、しまり強い。硬化面を形成している。
近代の路面か。
Ⅳ-8　暗褐色土（10YR3/3）　粘性、しまりやや強い。
Ⅳ-9　黒褐色土（10YR2/2）　粘性強い。しまりやや強い。褐色土（10YR4/6）を 3% 含む
Ⅳ-10　黒褐色土（10YR3/1）　粘性、しまりやや強い。
Ⅵ　灰黄褐色土（10YR6/2）　粘性強い。しまりやや強い。
地山か。

第 74 図　20 トレンチ平面図・土層断面図

（4）遺物の所見

ａ．Ⅱ層出土遺物

1～11 はⅡ層から出土した遺物である。1～4 は磁器、5～9 は陶器、8 は瓦質土器、10 は土師質土器、11 は瓦である。

1、2 は染付の皿である。1 は底部付近の破片で、高台の畳付は釉剥ぎされている。17 トレンチから出土した。2 は輪花皿で、底部から口縁部の破片である。底部は蛇の目凹形高台、口縁端部は口錆になっている。2 トレンチから出土した。

3 は白磁の碍子で、完形品である。3 トレンチから出土した。

4 は青磁の瓶で、底部付近の破片である。底部は釉剥ぎの上アルミナを塗布し、内面は無釉である。残

存状態がよくないが、体部外面に横方向の２条の沈線が確認できる。17 トレンチから出土した。

５は陶器の変形皿であろう。口縁部の破片で、内面に鉄絵が施されている。外面は口縁部付近にのみ釉薬が掛けられている。絵唐津である。９トレンチから出土した。

６は陶器の碗である。底部付近の破片で、兜巾状高台となっている。見込みには胎土目の痕跡がある。９トレンチから出土した。

７、８は陶器の擂鉢である。ともに９トレンチからの出土である。７は口縁付近の破片で、口縁端部をわずかにつまみ上げる。口縁部のみ鉄釉が掛かりそれ以下は無釉である。内面には擂目が残る。８も口縁部付近の破片で、擂目は残っていない。口縁部は受口状で、口縁部のみに鉄釉が掛けられてる。

９は瓦質土器の擂鉢で、底部付近の破片である。摩耗しているが、擂目がわずかに認められる。外面には煤が付着している。９トレンチから出土した。

10 は土師質土器の坏である。体部の破片でやや歪んでいる。底部はない。９トレンチから出土した。

11 は丸瓦で、玉縁部の破片である。凹面に刻印があるが残存状態が良くない。「元禄十二ウノ土山源四郎」の刻印であろうか。凹面には布目痕と布目の撚れ痕が認められる。９トレンチから出土した。

ｂ．Ⅲ層出土遺物

12～123 はⅢ層から出土した遺物である。遺物はⅢ層の出土量が最も多く、12～57 が磁器、58～91 が陶器、92 が土師質土器、93、94 が瓦質土器、95～118 が瓦、119 が銭貨、120～123 が古墳時代の遺物である。

12～34 は磁器の碗及び碗蓋である。31 は３トレンチから、他はすべて７トレンチから出土した。12 は染付の碗である。口縁部付近の破片で、薄手である。青花の可能性がある。13 は染付の広東碗蓋で、つまみから口縁部の破片である。つまみの端部は釉剥ぎされている。14 も染付の広東碗蓋で、つまみから口縁部の破片である。つまみの端部は釉剥ぎされている。15 は染付の広東碗で、底部から口縁部の破片である。16 は染付の端反碗蓋で、つまみから口縁部の破片である。つまみの端部は釉剥ぎされている。17 も染付の端反碗蓋で、つまみから口縁部の破片である。つまみの端部は釉剥ぎされている。18 も染付の端反碗蓋で、つまみから口縁部の破片である。つまみの端部は釉剥ぎされている。19 は染付の端反碗で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。20 も染付の端反碗で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされ、見込に三足ハマの痕跡がある。21 も染付の端反碗で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。22 は染付の碗で、高台～胴部の破片である。高台は撥形で、畳付は釉剥ぎされる。23 も染付の碗で、底部から胴部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされ、高台内に銘が認められる。24 も染付の碗で、底部付近の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。高台内には崩れた角福銘があり、方形枠は一重である。25 も染付の碗で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。外面の文様はコンニャク印判で、内外面の腰部付近には貫入がある。26 も染付の碗で、底部から胴部の破片である。見込みに蛇の目釉剥ぎが施されている。高台の畳付は平たく成形され、釉剥ぎされている。27 も染付の碗で、底部付近の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。28 は青磁の碗で、口縁の破片である。やや外反している。29 は染付の湯呑碗で、底部から口縁部の破片である。小ぶりで、胴部から口縁部は直線的な形状である。径の広い高台が付き、畳付には釉剥ぎが施されている。主文に家と山水を描き、清朝風である。30 は染付の小碗で、底部から口縁部の破片である。小ぶりで、胴部は丸みを帯びる。高台は撥型になっている。畳付と口縁端部が釉剥ぎされており、蓋が付く。31 は染付の筒形碗で、口縁部付近の破片である。32 は染付の小丸碗で、底部から口縁部の破片である。口縁部付近は直線的な形状である。径の狭い高台が付き、畳付には釉剥ぎが施されている。33 は白磁の碗で、底部から口縁部の破片である。高台は兜巾状で、畳付は釉剥してアルミナを塗布している。34 は白磁で蓋物の碗である。底部から口縁部の破片で、高台の畳付は釉剥ぎしてアルミ

ナを塗布している。口縁端部も釉剥ぎ、見込は蛇の目釉剥ぎが施されている。

35～48 は磁器の皿である。40 が 8 トレンチから、47 が 3 トレンチからの出土で、他はすべて 7 トレンチの出土である。35 は青花の皿で、口縁部付近の破片である。薄手で、口縁部は外反する。36 も青花の皿で、口縁部付近の破片である。口縁部は外反している。37 も青花の皿で、底部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。いわゆる芙蓉手である。38 も青花で、多角皿であろう。口縁部付近の破片で、薄手である。五角もしくは六角とみられる。39 は染付の皿で、底部の破片である。外底面に草書体の角福銘が描かれる。40 は染付の輪花皿であろう。底部付近の破片で、内面に縞を持つ。高台の畳付は釉剥ぎされている。41 は染付の皿である。底部の破片で、高台の畳付は釉剥ぎされている。高台内には銘が描かれ、二重方形枠の角福銘であろう。42 も染付の皿で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされており、見込には蛇の目釉剥ぎが施されている。また、見込にはコンニャク印判の五弁花文がある。43 も染付の皿で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされる。見込の文様はおそらくコンニャク印判の五弁花文である。44 も染付の皿で、底部付近の破片である。被熱して表面が爛れている。45 は染付の輪花皿で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされる。見込に五弁花文があり、高台内にも二重方形枠が描かれる。46 も染付の輪花皿で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされる。47 は染付の八角皿とみられる。底部から口縁部の破片で、高台の畳付は釉剥ぎされる。48 は色絵の皿であろう。内面に金銀彩等の上絵が剥離したと思われる白い痕跡が薄く認められる。底部付近の破片で、高台の畳付は釉剥ぎされる。内面には陽刻文がある。

49、50 は鉢である。ともに 7 トレンチから出土した。49 は染付の鉢で、口縁部付近の破片である。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。口縁端部は口錆が施されている。50 は染付の八角鉢で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。顔料は化学コバルトであろう。

51 は染付の猪口で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎされている。また、透明釉が部分的に白濁している。7 トレンチから出土した。

52 は染付の段重で、底部から口縁部の破片である。底部の受け部と見込みは釉剥ぎの上アルミナが塗布されている。7 トレンチから出土した。

53 は染付の蓋の破片である。7 トレンチから出土した。

54 は色絵で、壺の口縁部付近の破片であろう。7 トレンチから出土した。

55 は青磁で、鉢であろう。高台の畳付は釉剥ぎされ、外面には蓮弁文が彫り出されている。7 トレンチから出土した。

56 は白磁の紅皿で、底部から口縁部の破片である。型押し成形である。1 トレンチから出土した。

57 は白磁の戸車で、完形品である。1 トレンチから出土した。

58～65 は陶器の碗である。58 は 1 トレンチから、59～65 は 7 トレンチから出土した。58 は底部から胴部の破片で、高台は露胎である。高台は若干兜巾状を呈し、ケズリ痕には縮緬皺が出ている。59 は京焼風陶器で、底部から胴部の破片である。高台は無釉である。60 は底部から口縁部の破片で、現川焼の蛍手である。61 は底部から胴部の破片である。高台が若干兜巾状である。内面外面ともに刷毛目を施す。62 は底部から胴部の破片で、底部の無釉部にアルミナを塗布している。63 は底部から胴部の破片で、底部付近が無釉になっている。64 は底部から口縁部の破片である。口縁部外面に銅緑釉を施す。65 も底部から口縁部の破片である。口縁部は外反し、内面に銅緑釉を施す。見込に三足ハマの痕跡がある。

66、67 は陶器の皿で、すべて 7 トレンチから出土した。66 は底部付近の破片である。見込には蛇の目釉剥ぎ施され、砂目積みの痕跡が残る。口縁付近で大きく外反する。67 は口縁付近の破片である。変形皿であろう。

68、69 は陶器の水差であろう。68 は口縁部の破片、69 は底部の破片で、ともに 7 トレンチからの出土

である。

70 は陶器の土瓶蓋である。7 トレンチからの出土である。

71～73 は陶器の鉢である。すべて胴部から口縁部の破片で、7 トレンチから出土した。71 は外面に刷毛目が施され、内面は全面白土である。

74 は陶器の釜の胴部片で、外面上半に鉄釉を掛ける。3 トレンチからの出土である。

75 は陶器の火入で、底部から口縁部の破片である。口縁部を内側に巻く。7 トレンチからの出土である。

76、77 は陶器の灯火具で、底部から口縁部の破片である。両者鉄釉掛けで、底部に糸切り痕を残す。ともに 7 トレンチからの出土である。

78 は陶器のドアノブの破片で、絞胎様の胎土である。残存状態は悪いが、凹部にネジ山が認められる。イギリス産であろうか。1 トレンチから出土した。

79～85 は陶器の擂鉢である。80 が 3 トレンチからの出土で、ほかの 79、81～85 は 7 トレンチから出土した。79 は小型の擂鉢で、内外面に鉄釉を掛ける。80 も小型の擂鉢で、底部から口縁部まで残っている。底部には糸切り痕が残り、口縁部のみ鉄釉を掛ける。81 は胴部から口縁部の破片で、胴部外面にタタキメが残る。内外面に鉄釉を掛ける。82 は底部付近の破片である。内外面に鉄釉を掛ける。83 は口縁部付近の破片で口縁部のみに鉄釉を掛ける。84 は胴部から口縁部が残っており、内外面に鉄釉を掛ける。85 は口縁部付近の破片で、内外面に鉄釉を掛ける。

86～91 は陶器の甕である。88 が 1 トレンチ、90 が 3 トレンチ、86、87、89、91 が 7 トレンチから出土した。86 は胴部から口縁部の破片である。肩部には横方向のハケ目が見られる。胴部下半にはケズリの痕跡が残る。87 は小型の甕で、胴部から口縁部が残る。外面に格子タタキ目、内面に格子状の当て具痕が残る。88 は胴部の破片で、外面に 2 条の突帯が巡る。内面には格子状の当て具痕が残る。鉄釉の上から灰釉掛けをしている。89 は口縁部付近の破片である。内面に粗い格子状の当て具痕が残る。外面は鉄釉の上から灰釉掛けをし、内面は無釉である。90 は口縁部付近の破片である。外面は鉄釉の上から褐釉を掛け、内面は無釉である。91 は口縁部付近の破片で、内面に格子状の当て具痕が残り、外面の肩部に三条の沈線が回る。口縁部は内側に折り返している。内外面ともに鉄釉掛けであるが、頸部には施釉されていない範囲がある。

92 は土師質土器の焙烙で、胴部から口縁部の破片である。胴部の外面にはヘラケズリが施され、底部付近の外面には煤が付着している。7 トレンチからの出土である。

93 は瓦質土器の焜炉で、口縁部付近の破片である。突起接合部付近にはカキヤブリがある。7 トレンチからの出土である。

94 は瓦質土器の火鉢で、口縁付近の破片である。外面に文様がある。7 トレンチからの出土である。

95、96 は軒丸瓦である。95 は蛇の目紋軒丸瓦で、瓦当部付近のみが残る。キラコが見られ、よく燻されている。3 トレンチからの出土である。96 は無文の軒丸瓦で、瓦当部のみが残る。瓦当面は若干のふくらみを有し、表面をナデで仕上げている。表面にキラコが付着している。瓦当部の接合面にはカキヤブリが見られる。7 トレンチからの出土である。

97～99 は丸瓦で、すべて 7 トレンチから出土した。97 は玉縁部付近の破片で、凹面に布目痕と布の撚れ痕が認められる、凸面に刻印があり、「二郎」であろう。98 も玉縁部付近の破片で、凹面に布目痕と布目の撚れ痕がある。凸面に「二郎兵へ」の刻印がある。99 は筒部の破片で、凹面に布目と鉄線切りの痕跡が見られる。また、凸面に「イ」の刻印がある。

100 は平瓦であろうか。小口面が残存している。また凹面に「〔　〕土山」の刻印がある。

101～104 は軒桟瓦で、101～103 が 7 トレンチから、104 が 19 トレンチから出土した。101 は軒丸瓦当部の破片で、瓦当文様は桔梗紋である。瓦当部の接合面にはカキヤブリがあり、顎に漆喰が付着してい

る。よく燻されている。102 も軒丸瓦当部の破片で、瓦当文様は三巴紋である。瓦当部の接合面にはカキヤブリがあり、キラコの付着が顕著である。103 も軒丸瓦当部の破片である。瓦当文様は三巴紋であるが、102 の三巴紋より太い。キラコが付着している。104 は軒平瓦当部の破片で、瓦当文様は左右に唐草文を配する。中心飾は不明である。瓦当部は顎貼り付け技法で成形されている。

105～107 は軒目板桟瓦で、105、106 は 7 トレンチから、107 は 3 トレンチから出土した。105 は軒丸瓦部が欠損し、軒平瓦部のみ残る。軒平瓦部の瓦当文様は、中心飾に九曜紋、左右に唐草文を配置している。瓦当部は顎貼り付け技法で成形され、軒丸瓦部との接合面にはカキヤブリが見られる。平瓦部凹面に「猿渡」の刻印がある。106 は軒丸瓦部がほぼ完存し、軒平瓦部も一部残存している。軒丸瓦部は瓦当文様が九曜紋である。軒平瓦部の瓦当文様は、中心飾に九曜紋、左右に唐草文を配置している。軒平瓦当部は顎貼付け技法で成形されており、接合面にはカキヤブリが見られる。また、キラコの付着が見られる。107 も軒丸瓦部がほぼ完存し、軒平瓦部は一部残存している。軒丸瓦部の瓦当文様は九曜紋である。軒平瓦部の瓦当文様は唐草文が確認できる。

108～110 は軒平瓦としたが、軒目板桟瓦の可能性もある。すべて 7 トレンチから出土した。108 は瓦当部付近の破片で、瓦当文様は中心飾に九曜紋、左右に唐草文を配置する。瓦当部は顎貼付け技法で成形している。109 も瓦当部付近の破片で、瓦当文様は中心飾に九曜紋、左右に唐草文を配置している。瓦当部は顎貼付け技法で成形している。110 も瓦当部の破片である。瓦当文様は唐草文が確認できる。瓦当は顎貼付け技法で成形され、キラコの付着が認められる。

111～114 は目板桟瓦で、111 と 113 が 7 トレンチから、112 が 3 トレンチから、114 が 19 トレンチから出土した。111 は丸瓦部がほぼ完存し、平瓦部も半分程度残存している。丸瓦部の凸面に釘穴があるが貫通はしていない。平瓦部の凹面に「御用□」の刻印がある。112 は丸瓦部、平瓦部ともに一部欠損している。丸瓦部の横断面はやや扁平である。113 は丸瓦がほぼ完存し、平瓦部は半分程度が残存している。114 は丸瓦部と平瓦部の接合部付近の破片で、平部の前端部の 1 辺が一部残存している。平瓦部の凹面に刻印があるが判読できない。

115 と 116 は平瓦である。ともに小破片であるが 1 辺のみ端部の一部が残っており、凹面に刻印がある。115 の刻印は九曜紋、116 は菱形の刻印である。115 は 3 トレンチから、116 は 1 トレンチから出土した。

117 は桟瓦である。丸瓦部の横断面は直線的で、「へ」の字に近い。小口に「若森」の刻印がある。7 トレンチから出土した。

118 は伏間止瓦の瓦当部である。瓦当文様はなく沈線で囲むのみで、表面はナデ調整である。7 トレンチから出土した。

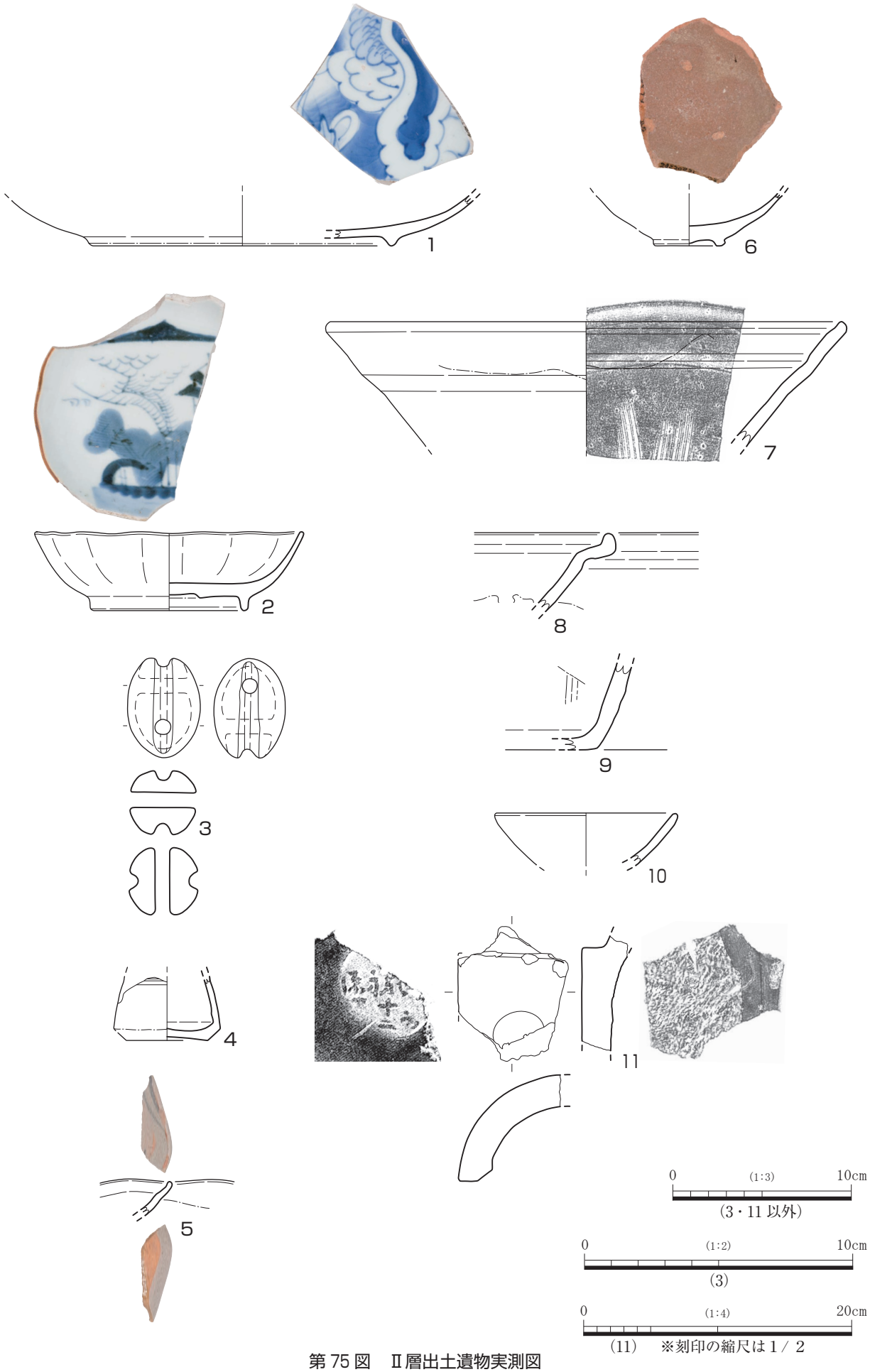
119 は 7 トレンチから出土した銭貨で、寛永通宝である。

120 は須恵器の甕である。肩部付近の破片で、内面には同心円文の当て具痕、外面には平行タタキ目が残る。またカキ目が外面に見られ、上に自然釉が掛かっている。外面器表に黒色の噴出物が認められる。4 トレンチから出土した。

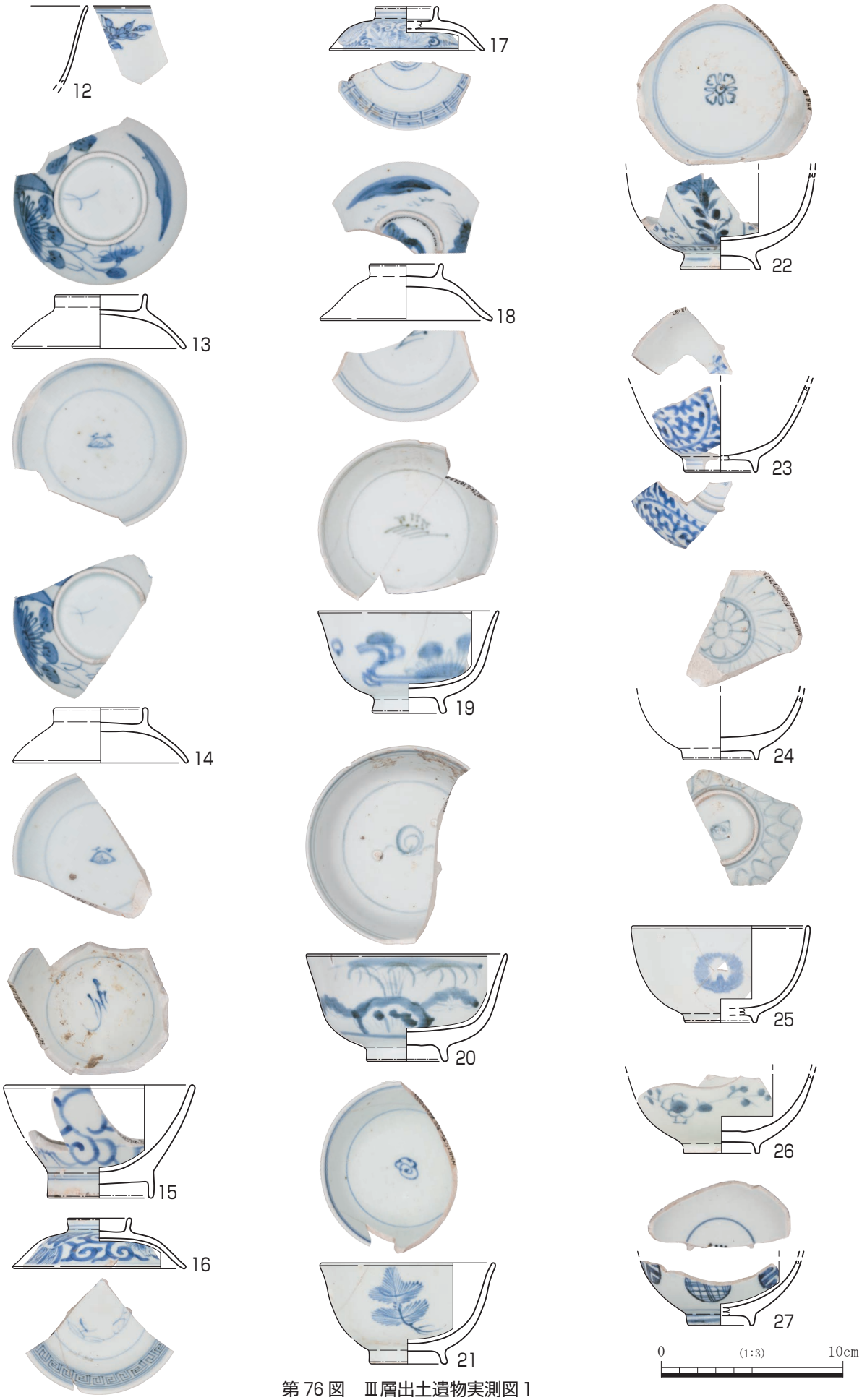
121 は須恵器の坏蓋である。口縁部付近の破片で、かえりが付いている。小破片であるが、かえりで計測した口径は 9.2cm に復元される。9 トレンチからの出土である。

122 は耳環である。表面は緑青に覆われているが、熊本博物館で蛍光 X 線分析をしたところ、青銅に含まれる銅・錫・鉛とともに銀が検出された。一方で金と水銀は検出されなかった。耳環の外径は約 2 cm である。4 トレンチから出土した。

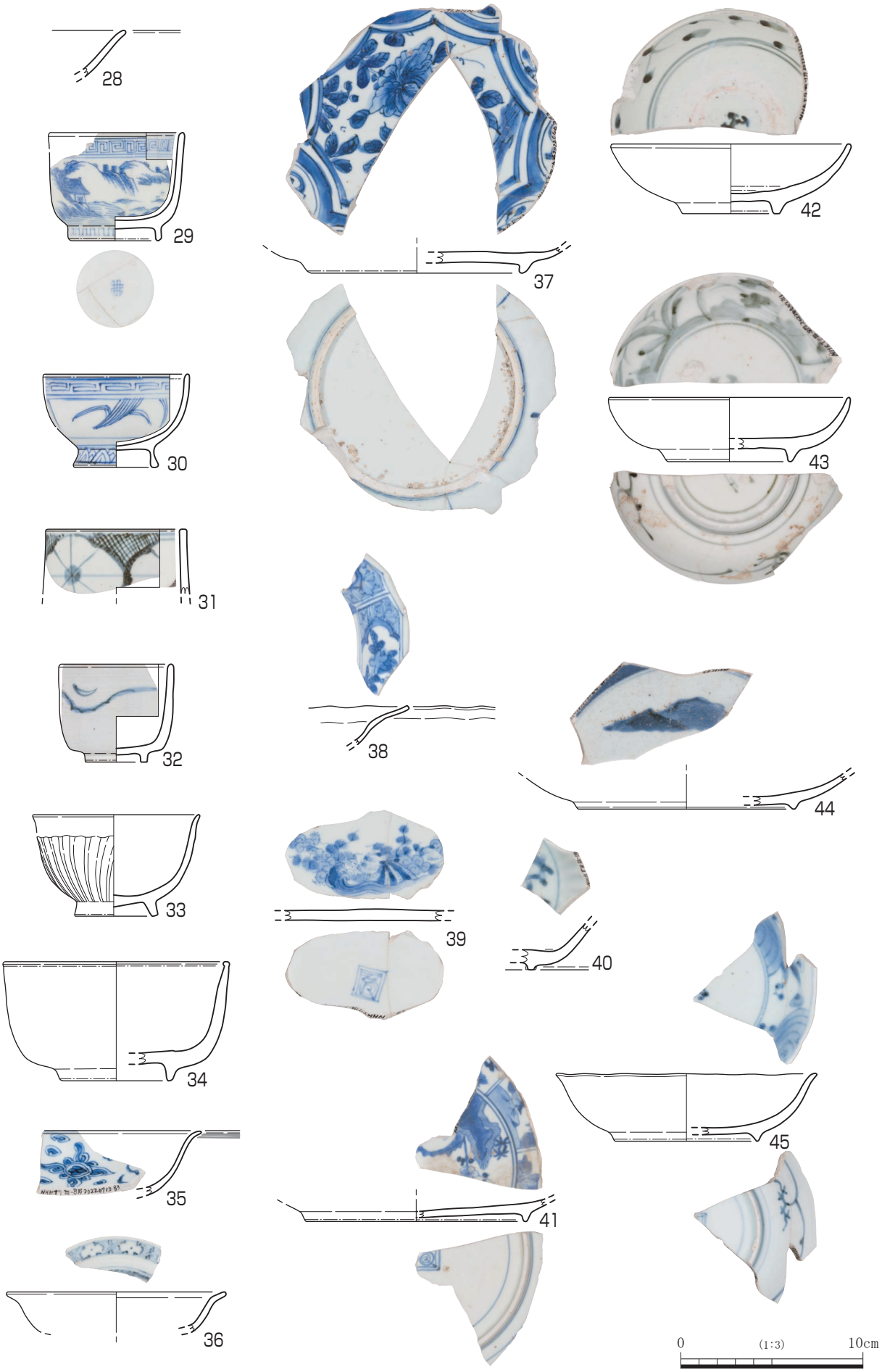
123 は紀年銘象嵌鉄刀で、4 トレンチから出土した。切先を除いて刀身から茎まで残存している。刀身と茎の表面には木質が残存しており、その繊維の方向から鞘と柄の材質であると考えられる。刀身部分が折れ曲がっているが、これはおそらく工事で重機に動かされた際に折れ曲がったものであろう。折れ部は



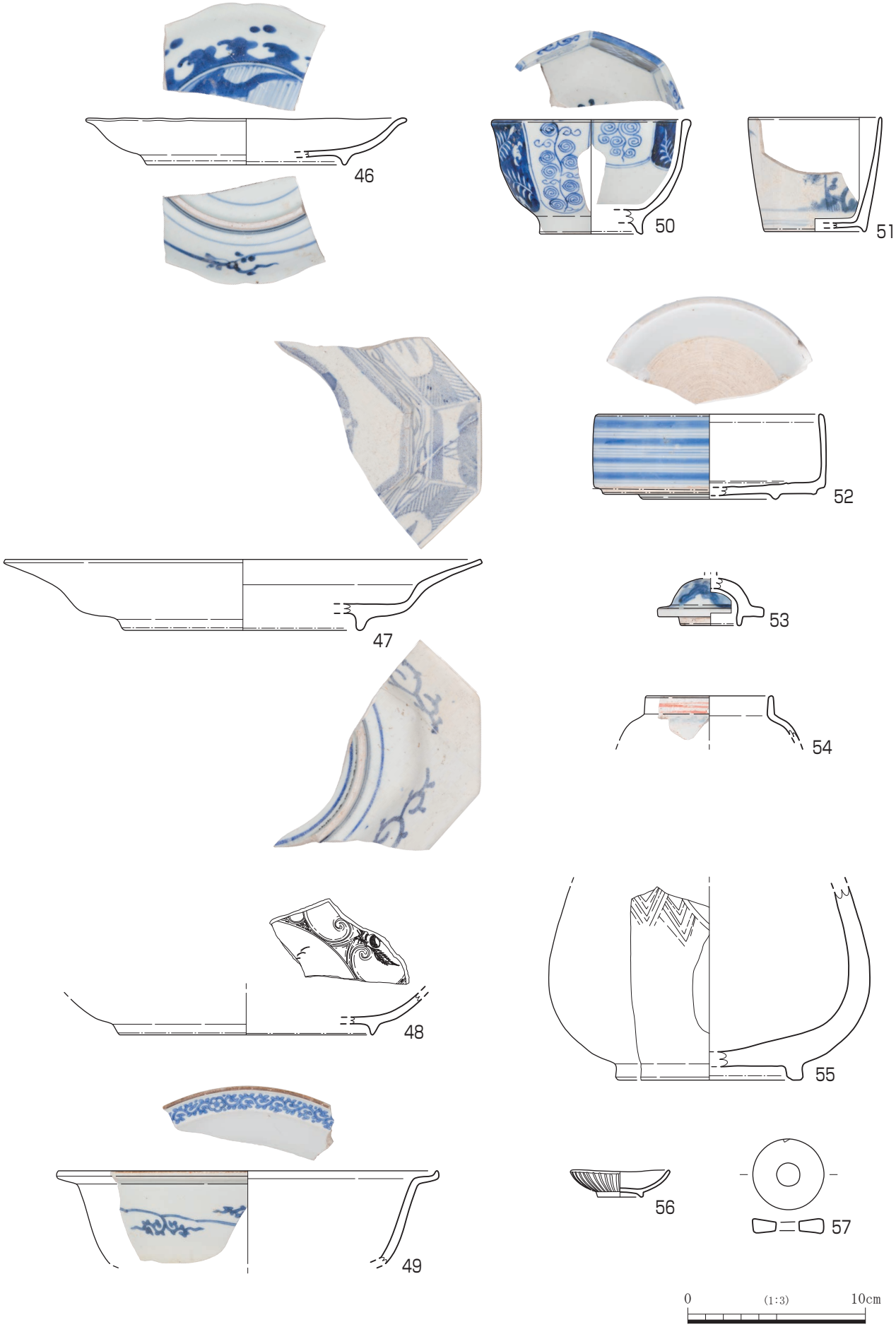
第 75 図　Ⅱ層出土遺物実測図



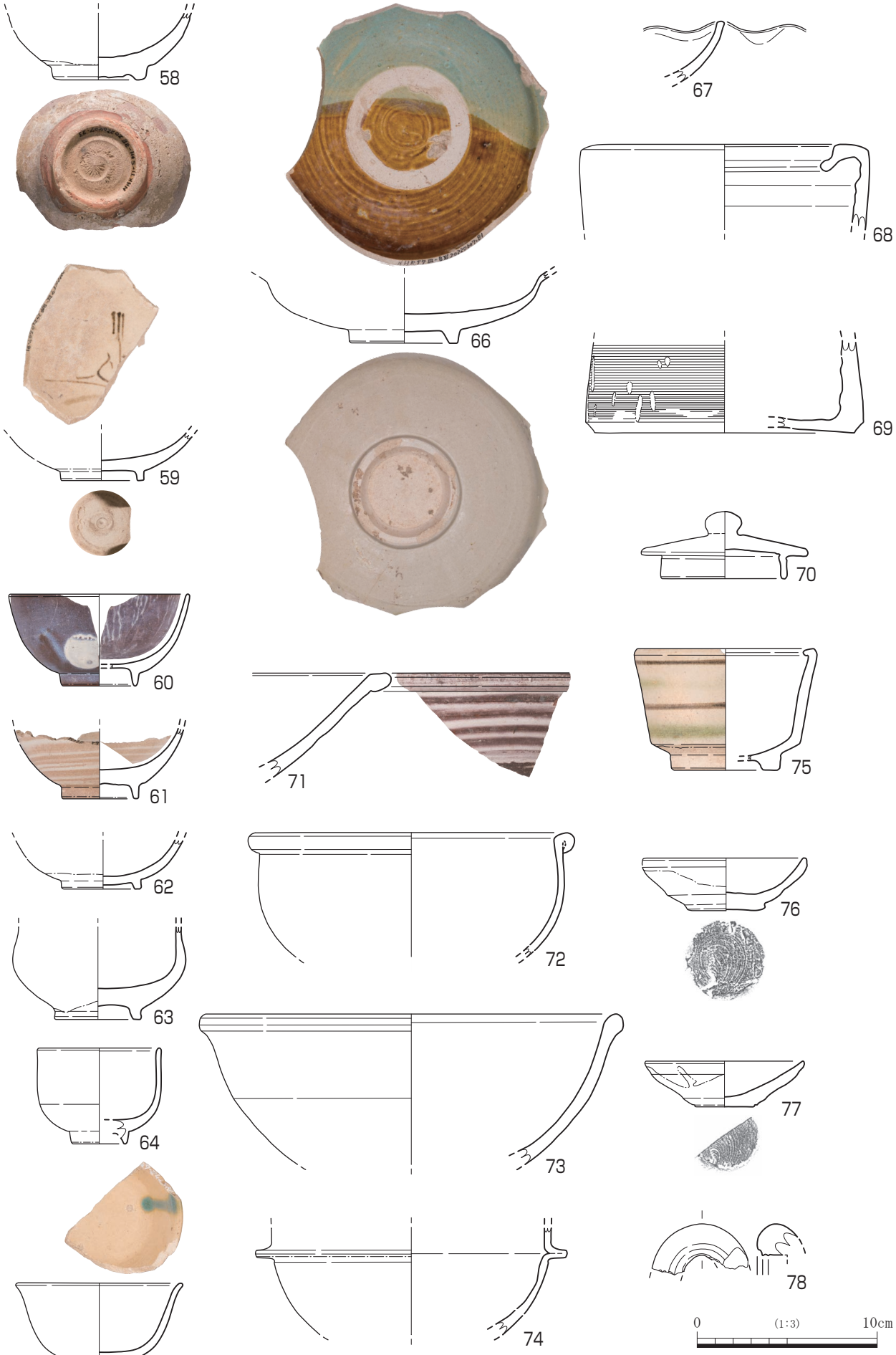
第 76 図　Ⅲ層出土遺物実測図 1



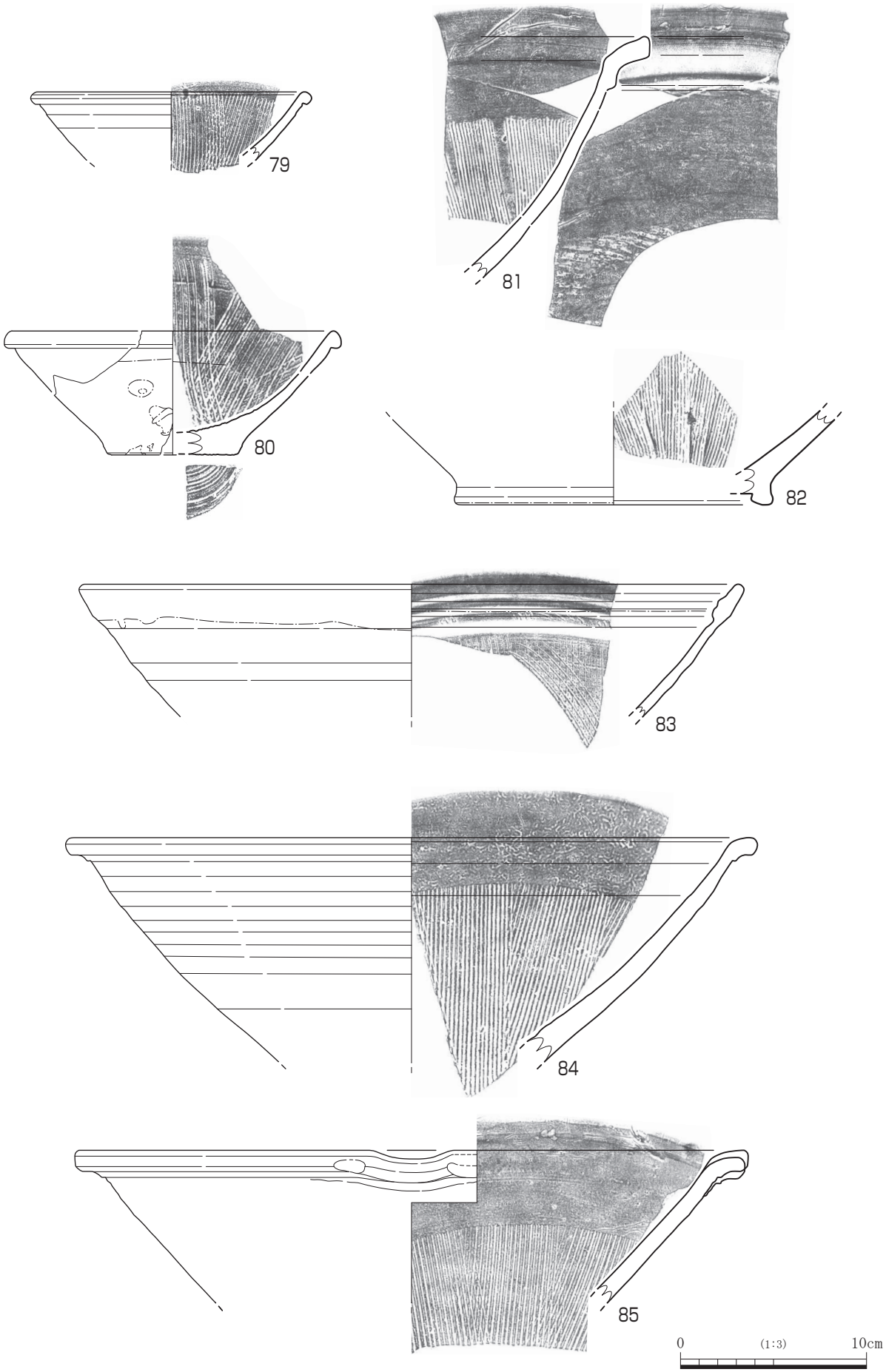
第 77 図　Ⅲ層出土遺物実測図２



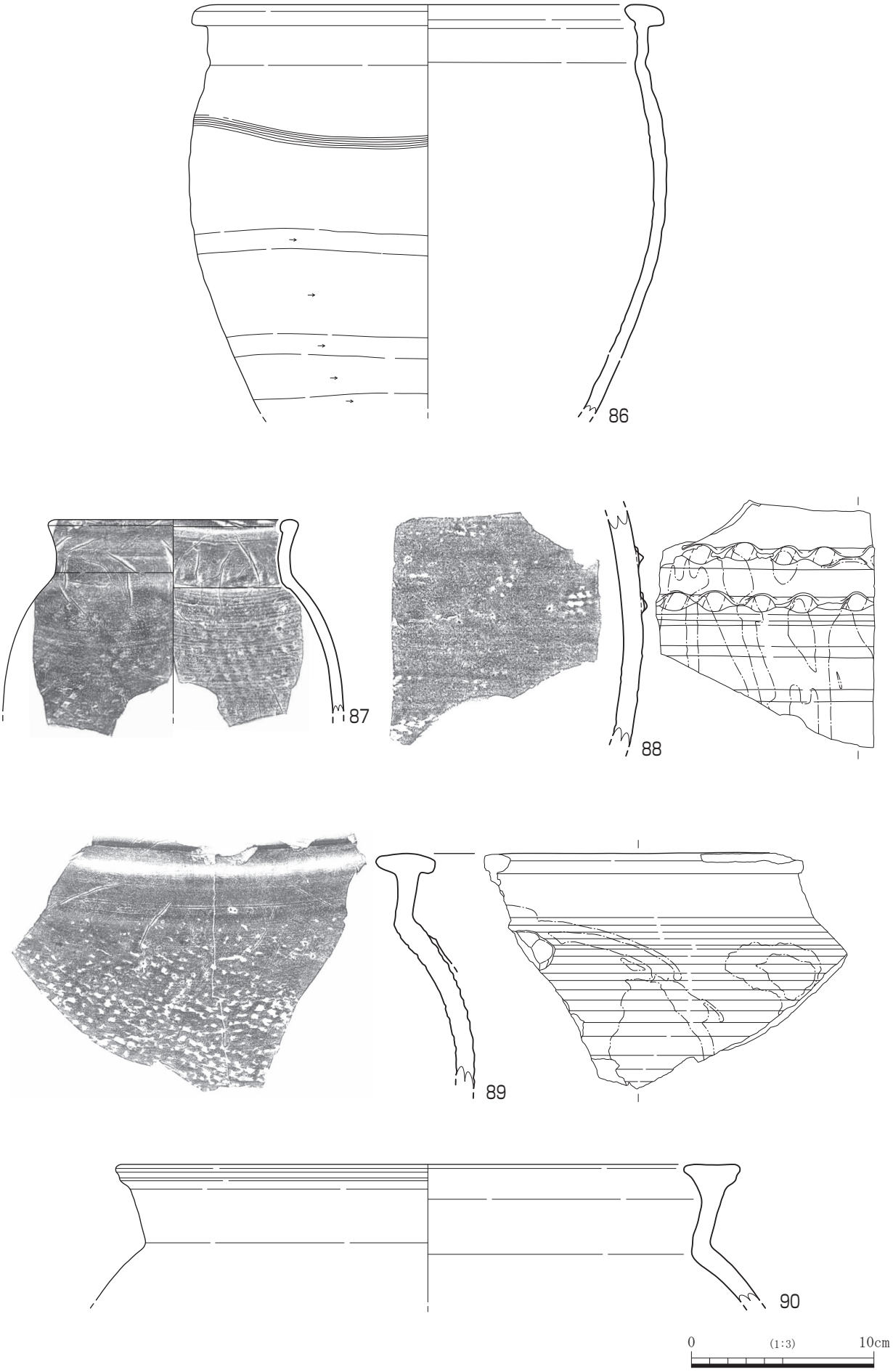
第 78 図　Ⅲ層出土遺物実測図３



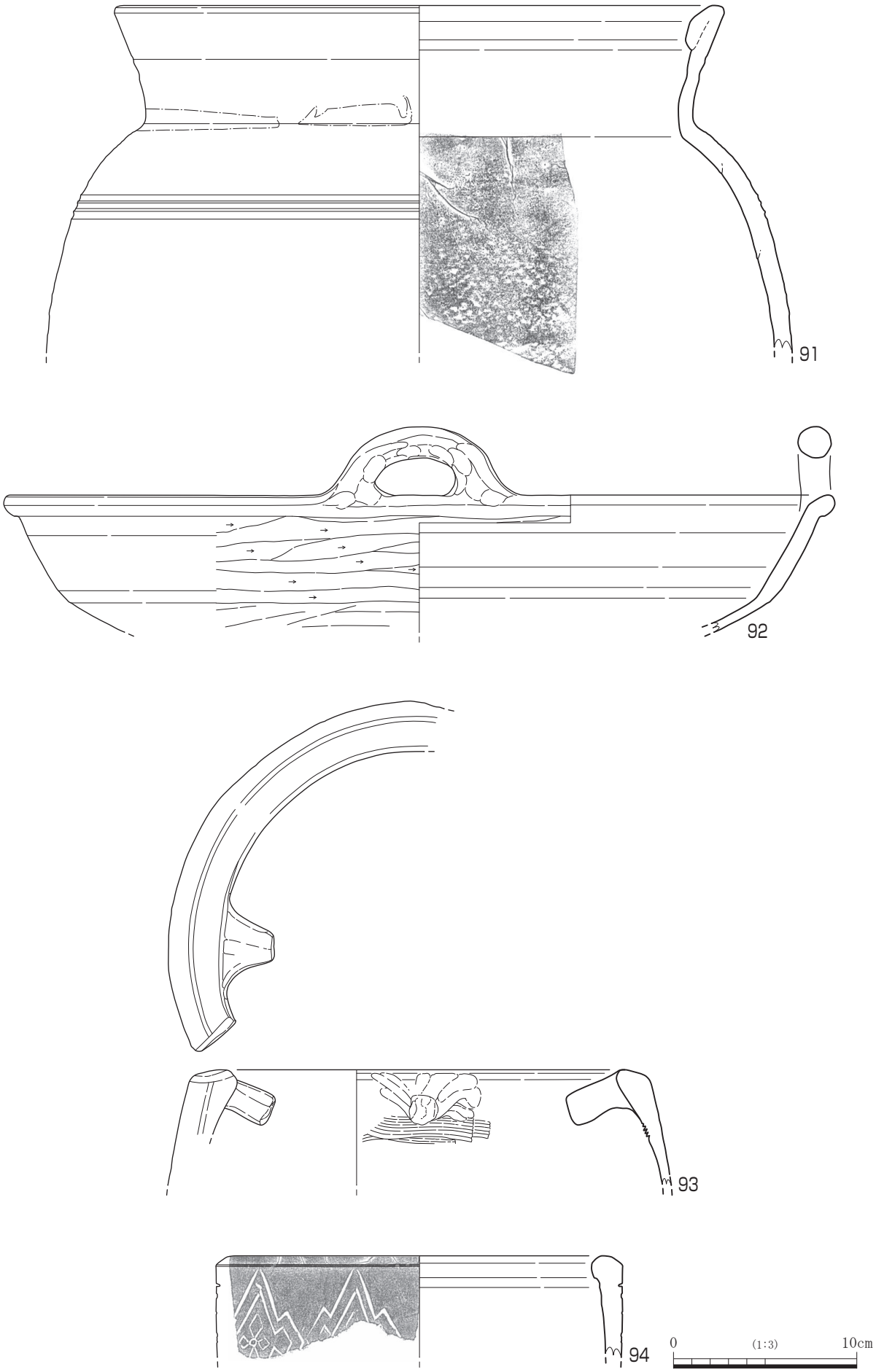
第 79 図　Ⅲ層出土遺物実測図４



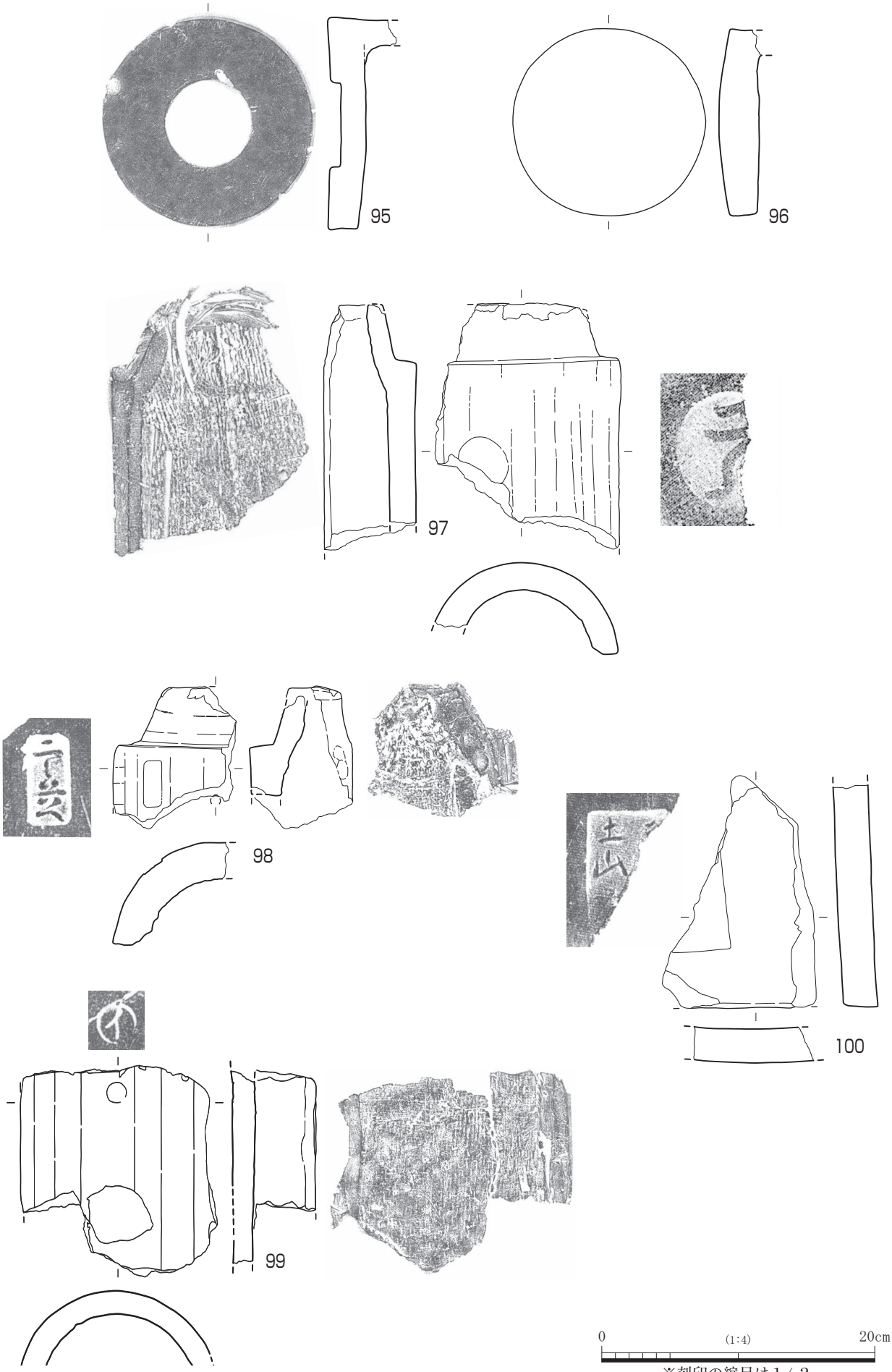
第 80 図　Ⅲ層出土遺物実測図５



第81図　Ⅲ層出土遺物実測図6

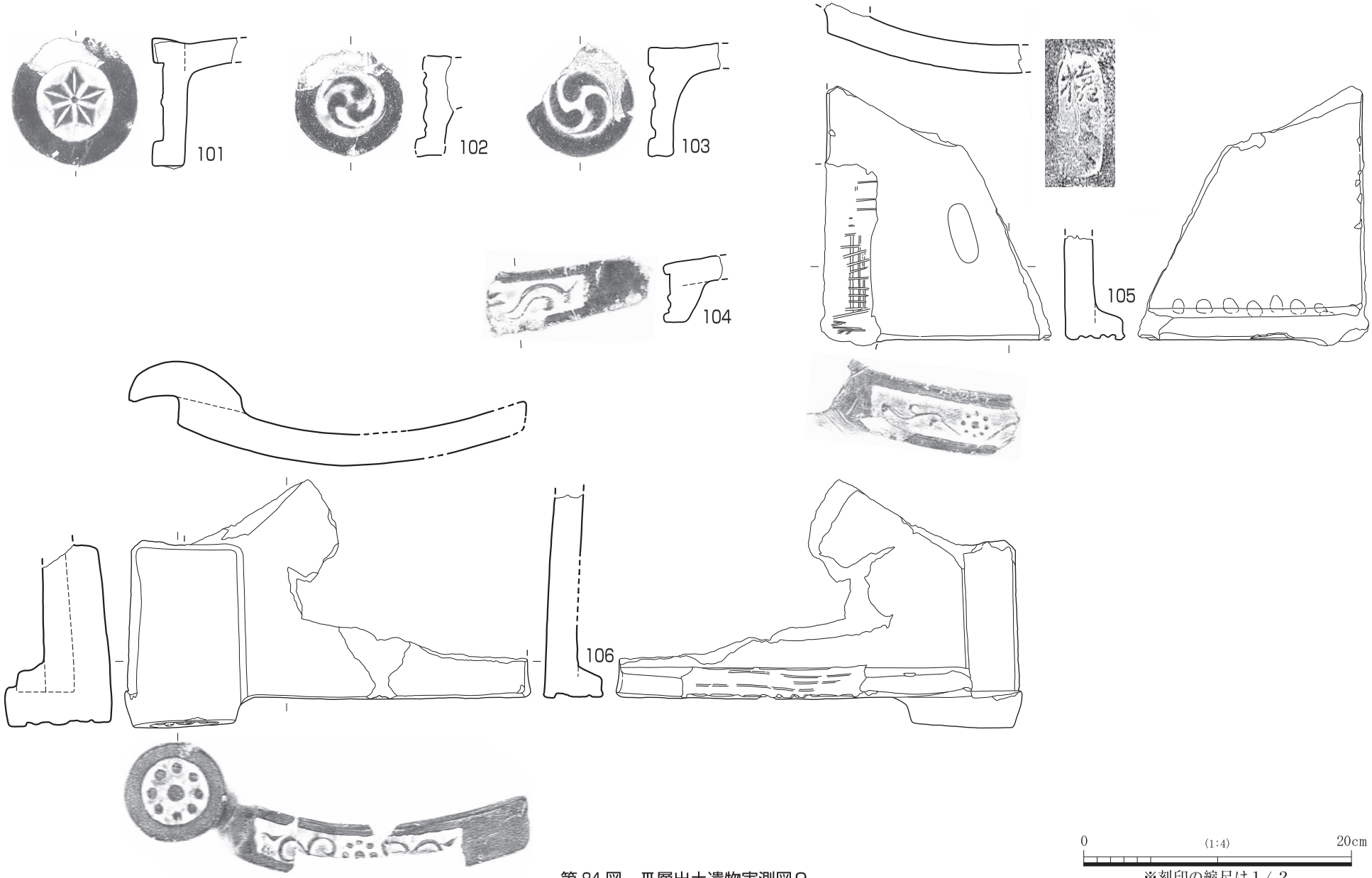


第 82 図　Ⅲ層出土遺物実測図７



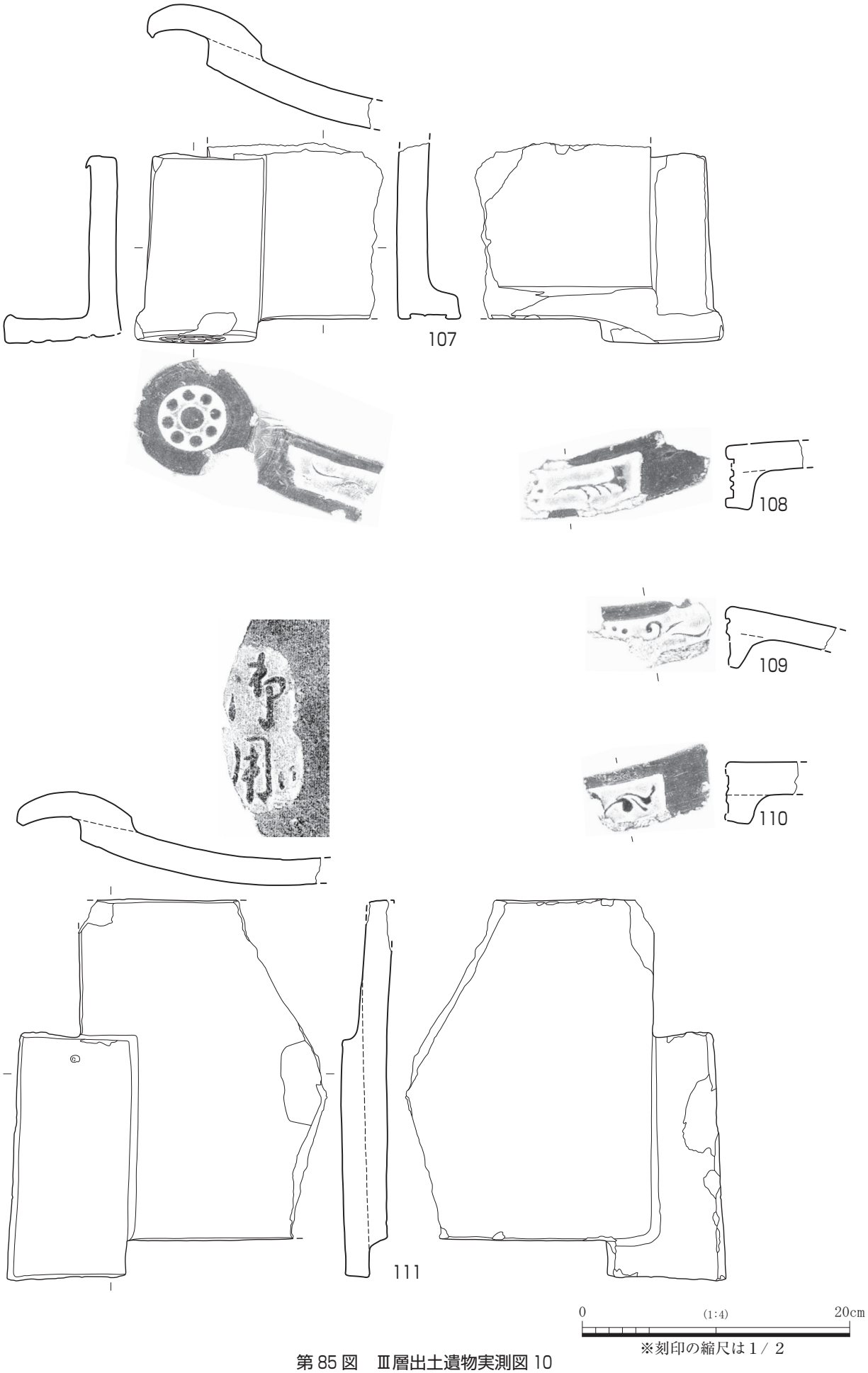
※刻印の縮尺は１／２

第 83 図　Ⅲ層出土遺物実測図８



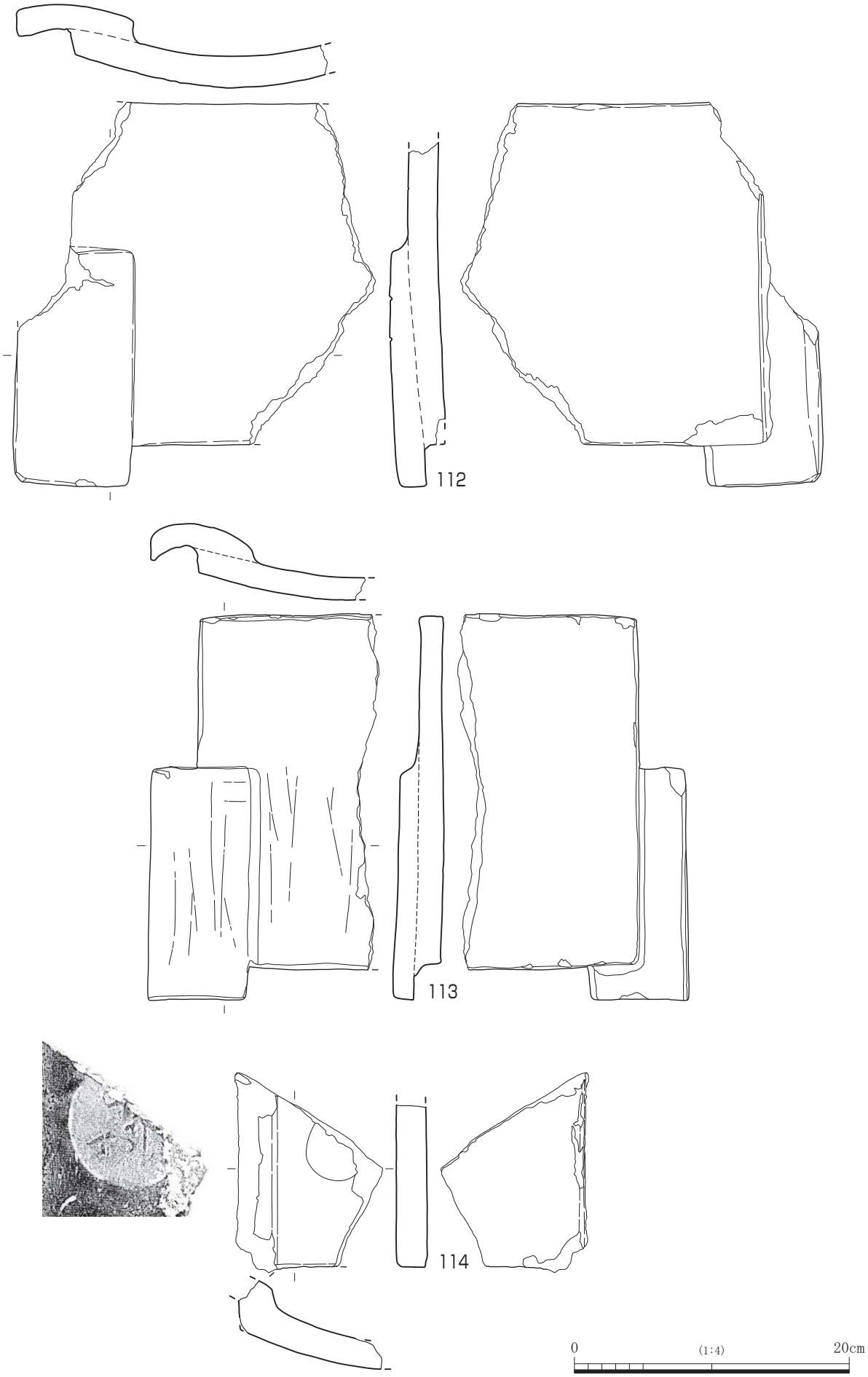
第 84 図　Ⅲ層出土遺物実測図９

※刻印の縮尺は１／２



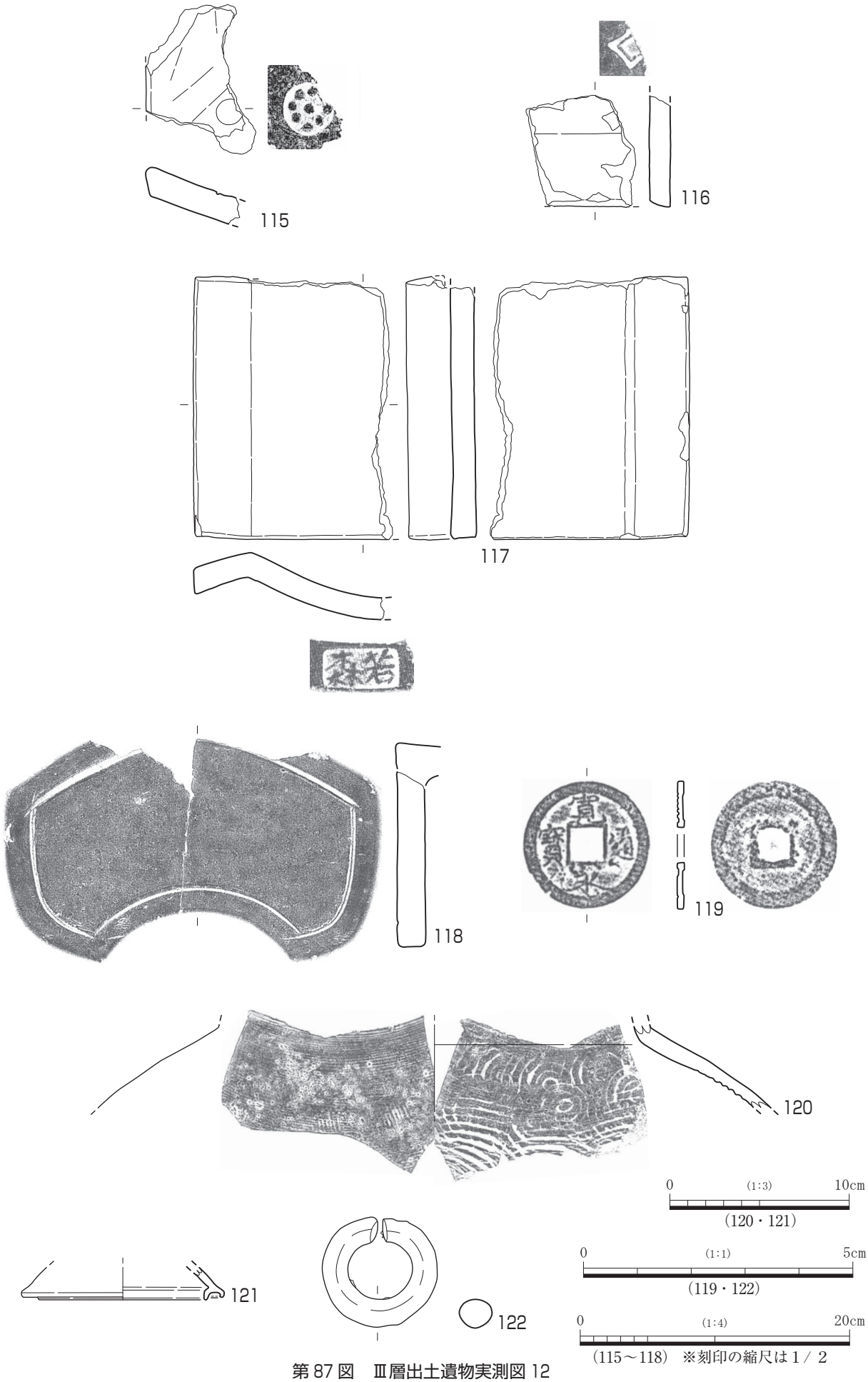
※刻印の縮尺は1／2

第85図　Ⅲ層出土遺物実測図10

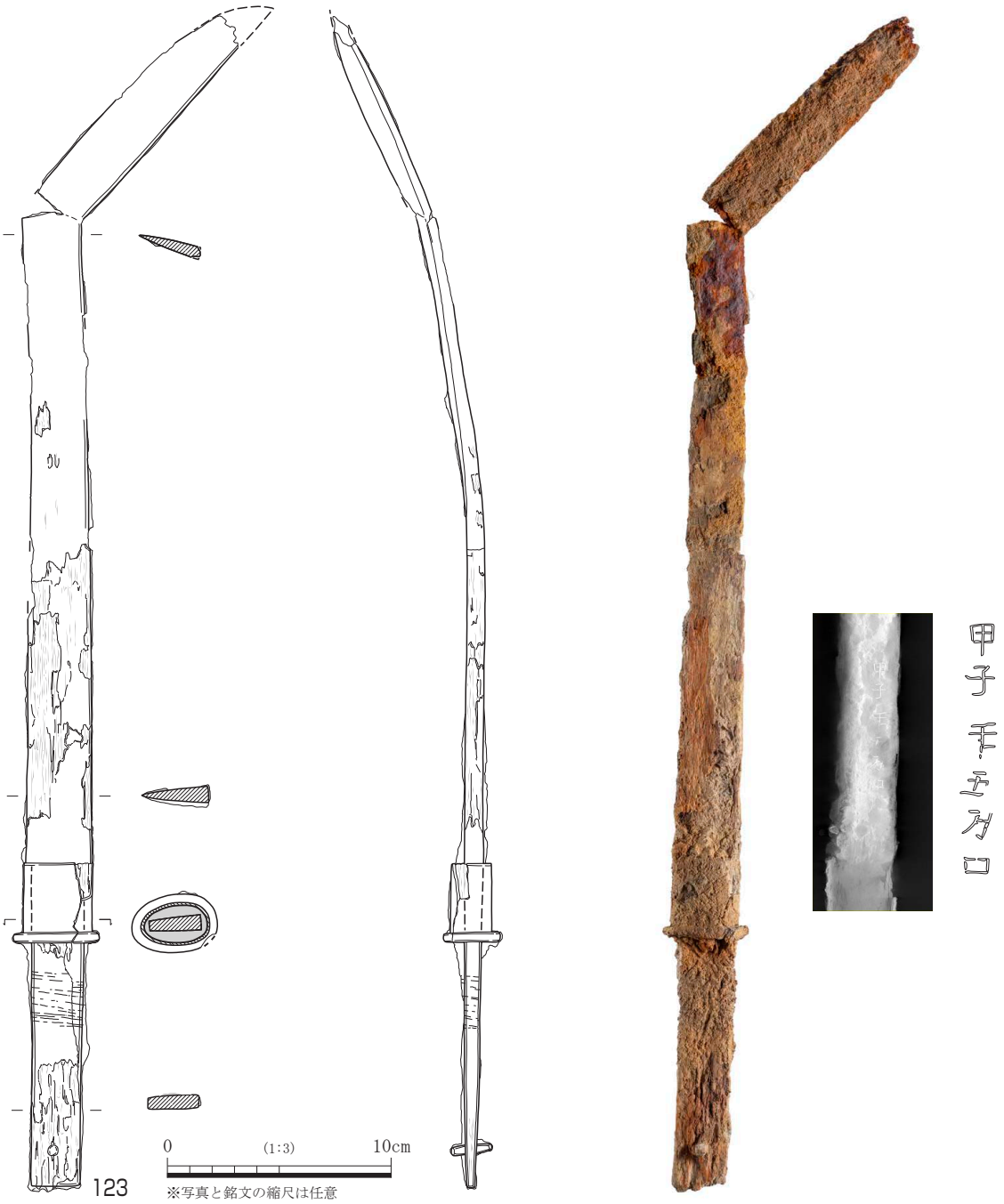


※刻印の縮尺は１／２

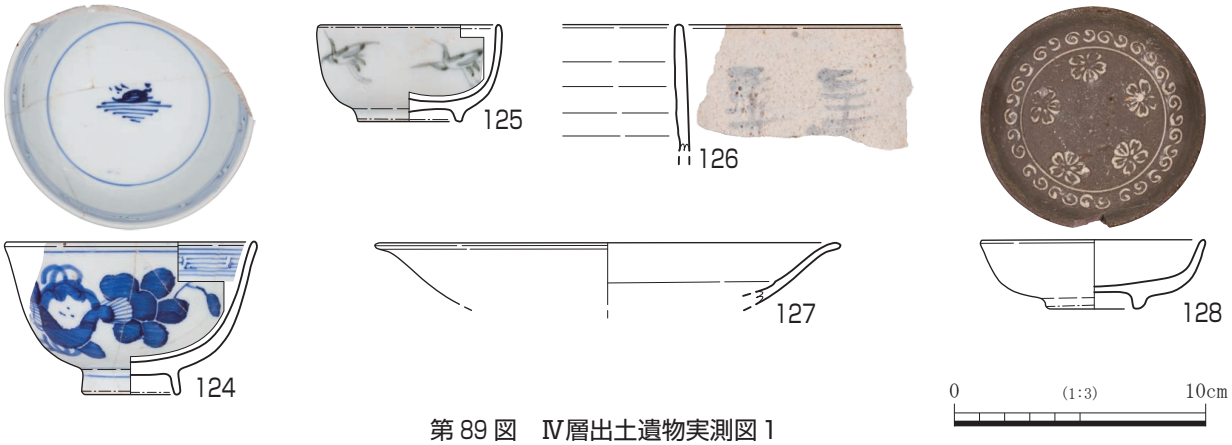
第 86 図　Ⅲ層出土遺物実測図 11



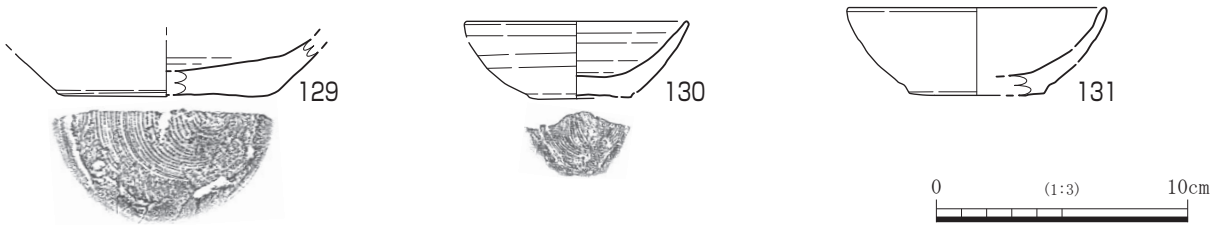
第87図　Ⅲ層出土遺物実測図12



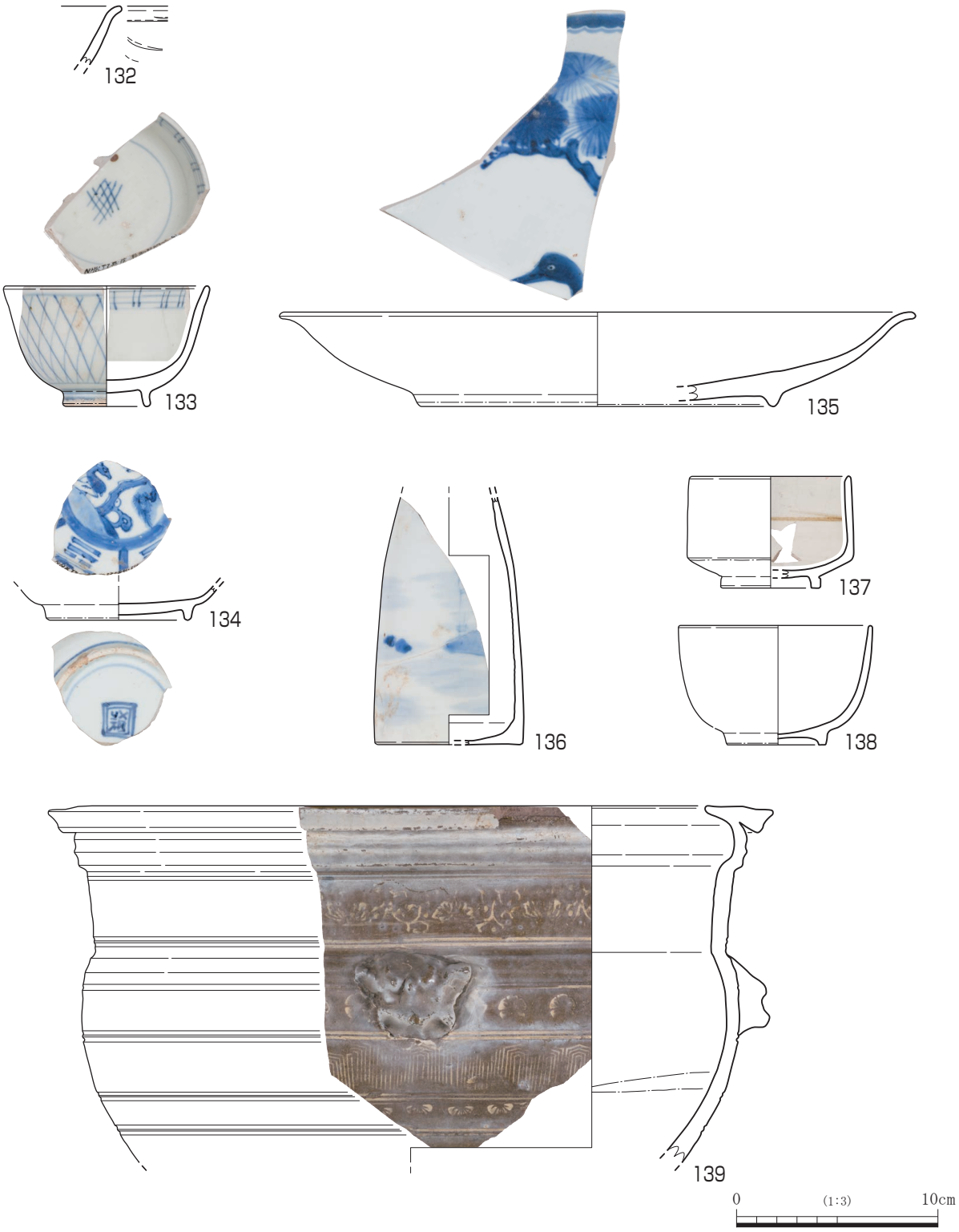
第 88 図　Ⅲ層出土遺物実測図 13 及び写真とＸ線 CT 画像、銘文のトレース図（断面のトーン部は木質）
（Ｘ線ＣＴ画像は熊本大学キャンパスミュージアム推進室所蔵）



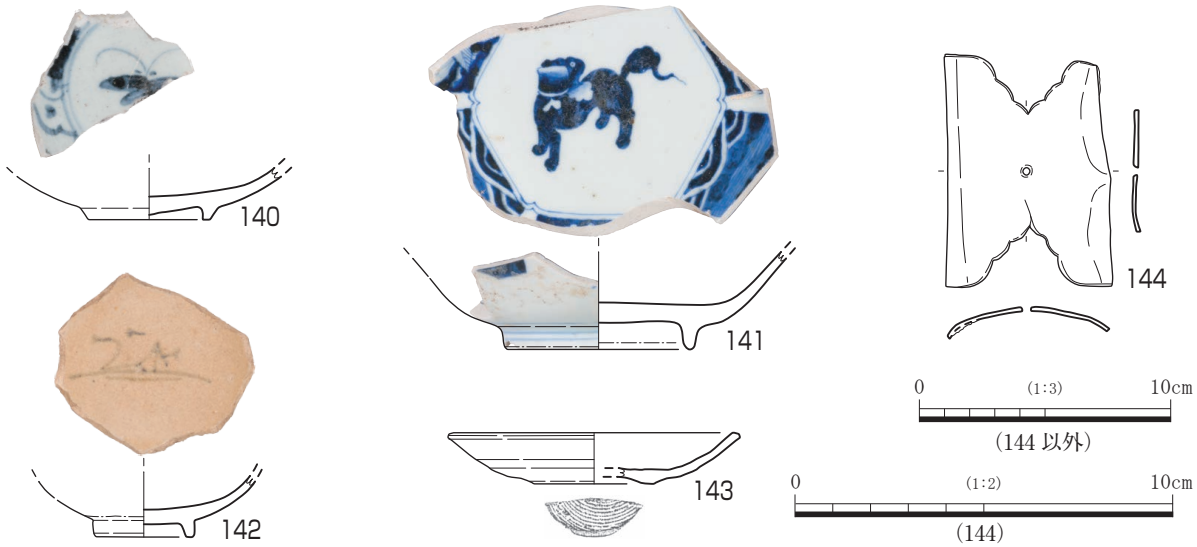
第 89 図　Ⅳ層出土遺物実測図 1



第 90 図　Ⅳ層出土遺物実測図２



第 91 図　Ⅴ層出土遺物実測図



第 92 図　排土出土遺物実測図

破断しており、折り曲げ鉄器ではない。折れ曲がった状態での残存長は 52.1cm で、折れ曲がっていない状態を復元すると残存長約 54.5cm となる。

刀身は反りのない直刀である。先端が欠損しているため、切先の正確な形状は不明であるが、弧を描いているように見られる。X 線ＣＴ画像により、茎に近い棟寄りの位置に「甲子年五□（月ヵ）□（中ヵ）」の象嵌銘があることが分かる。象嵌の材質は現段階では不明である。関は鏶のために観察しにくいが、X 線ＣＴ画像によると鏶の上端部に位置しているようである。両関である。関までの刀身残存長は、折れ曲がっていない復元値で約 40.1cm である。刀身幅は関付近で 2.9cm、刀身厚は関付近で 0.9cm である。

柄部分には鏶と喰出鍔が装着されている。ともに鉄製である。鏶は長さ 3.1cm で、一部欠損している。断面は長軸 3.1cm、短軸 1.9cm の倒卵形を呈し、鉄板の厚さは 0.1cm 程度と見られる。鏶と茎部の間には柄の木質が残存している。鍔は鏶からのはみ出しが 0.4cm 程度の喰出鍔である。長軸 3.8cm、短軸 2.6cm の倒卵形で、厚さは 0.5cm である。

茎は直線的な形状で、茎尻に近い位置に 1 ヶ所目釘穴がある。茎尻は一文字である。木質を除いた茎尻から関までの全長は 14.4cm で、幅は喰出鍔付近と目釘穴付近でほとんど変わらず 2.2cm である。厚さは茎尻に近いほど薄くなり、喰出鍔付近で 0.8cm、目釘穴付近で 0.5cm となっている。目釘穴には鉄製の目釘が残存しており、径が 0.5cm、長さが 1.8cm である。

ｃ．Ⅳ層出土遺物

124～131 はⅣ層から出土した遺物で、124･125 は磁器、126～128 は陶器、129～131 は土師質土器である。

124、125 は染付の碗である。124 は一部欠損しているものの底部から口縁部まで残存している。文様の顔料は化学コバルトである。３トレンチから出土した。125 も一部欠損しているが底部から口縁部まで残存している。口縁端部と高台の畳付は釉剥ぎされている。外面に描かれる鶴は３羽が残存しているが、本来は４羽とみられる。11 トレンチから出土した。

126 は陶器の向付である。口縁部付近の破片で、外面は白濁した釉の下に、筆による絵付けが施されている。志野焼である。15 トレンチから出土した。

127、128 は陶器の皿である。127 は口縁部付近の破片である。口縁部は外反し、内面に段を有している。９トレンチから出土した。128 は小皿で、ほぼ完形品である。内面に三足ハマの痕跡があり、象嵌で桜花と渦を描いている。松尾焼である。３トレンチから出土した。

129～131 は土師質土器の坏である。すべて 9 トレンチから出土した。129 は底部の破片で、外底面に糸切り痕跡が残る。内面は回転ナデ調整である。130 は底部から口縁部の破片で、外底面に糸切り痕跡が残る。体部内外面及び内底面を回転ナデで仕上げる。131 も底部から口縁部の破片で、底部はわずかしか残っていない。体部内外面及び内底面を回転ナデで仕上げる。

ｄ．Ⅴ層出土遺物

132～139 はⅤ層から出土した遺物である。132～136 は磁器、137～139 は陶器である。

132 は青磁の碗で、口縁付近の破片である。小破片であるが、外面の文様は蓮弁文であろう。7 トレンチから出土した。

133 は染付の端反碗で、底部から口縁部の破片である。高台の畳付は釉剥ぎ後にアルミナを塗布している。7 トレンチから出土した。

134 は皿で、青花であろうか。底部付近の破片で、高台の畳付は釉剥ぎされている。高台内には二重方形枠の銘があり、角福銘であろう。7 トレンチから出土した。

135 は染付の皿で、底部から口縁部の破片である。口縁部は外反し、高台内にハリの痕跡がある。7 トレンチから出土した。

136 は染付の瓶で、底部から胴部の破片である。底面と内面は無釉である。7 トレンチから出土した。

137、138 は陶器の碗である。ともに 7 トレンチから出土した。137 は底部から口縁部の破片で、筒形碗である。腰部より下位は露胎となっており、内面胴部に 1 条の圏線を描く。138 は底部から口縁部の破片である。

139 は陶器の甕で、胴部から口縁部の破片である。外面は胴部に象嵌で文様が描かれ、動物の顔を模したものが貼られる。7 トレンチから出土した。

ｅ．排土出土遺物

140～144 は排土から見つかった遺物である。

140 は染付の皿で、底部付近の破片である。高台の畳付は無釉で、砂目の付着が 1 ヶ所確認できる。出土した日付からⅤ層に伴うものの可能性がある。7 トレンチからの出土である。

141 は染付の六角鉢である。底部から胴部の破片で、高台の畳付は釉剥ぎされている。焼き継ぎの痕跡が見られる。1 トレンチからの出土である。

142 は陶器の碗で、底部から胴部の破片である。透明釉が掛かり、見込みに文様が描かれている。高台付近は無釉となっている。京焼風陶器である。1 トレンチからの出土である。

143 は土師質土器の坏で、底部から口縁部の破片である。外底面には糸切りの痕跡が残る。体部内外面及び内底面を回転ナデで仕上げる。9 トレンチからの出土である。

144 は銅製品で、建築金物であろうか。H の字に近い形状で、短軸の断面は弧を描いている。中央部には 1 ヶ所穴が開いている。11 トレンチからの出土である。

145 は小破片であるため図版のみでの報告であるが青花とみられる。9 トレンチの排土から見つかった。

第７表　軒桟瓦（桔梗紋）観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	法量												残存率	調整		胎土	焼成	色調		備考
				瓦当直径	文様区径	中央厚さ	内区			外区			周縁部				内面	外面	粗・密		内面	外面	
							直径	雌蕊径	雄蕊径	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚								
84	101	7	Ⅲ層	9.5	5.5	1.9	5.2	0.4	4.2	0.2	-	-	-	0.7	2.4	瓦当部丸瓦部ほぼ完存	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ、ケズリ	密	良	暗灰（N3/）	暗灰（N3/）	瓦当部文様：丸瓦部 桔梗紋。接合面にカキヤブリあり漆喰付着。

第８表　軒桟瓦（三巴紋）観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	法量														残存率	調整		胎土	焼成	色調		備考
				瓦当直径	文様区径	中央厚さ	内区				外区				周縁部				内面	外面	粗・密		内面	外面	
							直径	巴巻き方向	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚								
84	102	7	Ⅲ層	(7.6)	4.6	(1.7)	4.0	左		あり	-	0.3	-	-	1.3	0.3	2.1	瓦当部丸瓦部ほぼ完存	ナデ	ナデ	密	良	灰（N4/）	灰（N4/）	瓦当部文様：丸瓦部 三巴紋。接合面にカキヤブリあり、キラコ付着。
84	103	7	Ⅲ層	8.1	5.0	1.8	4.6	右		あり	-	0.2	-	-	1.5	0.5	1.8	瓦当部丸瓦部ほぼ完存	ナデ	ナデ	密	やや軟質	灰（N4/）	灰（N4/）	瓦当部文様：丸瓦部 三巴紋。キラコ付着。

第９表　軒桟瓦（その他）観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	法量			残存率	調整		胎土	焼成	色調		備考
					全長	幅	厚さ		内面	外面	粗・密		内面	外面	
84	104	19	Ⅲ層	軒桟瓦	(6.7)	(12.3)	1.8	瓦当部平瓦部 1/3	ナデ	ナデ、ケズリ	密	やや軟質	灰（N4/）	灰（N4/）	瓦当部文様：平瓦部 唐草文。キラコ付着。

第 10 表　（軒）目板桟瓦観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	法量			調整		胎土	焼成	色調		備考
					全長	幅	厚	内面（凹面）	外面（凸面）	粗・密		外面（凸面）	内面（凹面）	
84	105	7	Ⅲ層	軒目板桟瓦	(19.2)	(17.1)	2.1	ケズリ、ナデ	指オサエ、ナデ、ヨコナデ	密	良	灰（5Y5/1）	灰（5Y5/1）	瓦当部文様：丸瓦部 九曜紋、唐草文。 平瓦部瓦凹面に平瓦部「猿渡」の刻印あり。丸瓦部の接合面にカキヤブリあり。
84	106	7	Ⅲ層	軒目板桟瓦	(18.5)	30.1	2.4	カマ切り、ナデ、ケズリ、工具ナデ、ヨコナデ	工具ナデ、ヨコナデ	密	良	灰（N4/）	灰（N4/）	瓦当部文様：丸瓦部 九曜紋。 平瓦部 九曜紋、唐草文。 軒平部の接合面にカキヤブリあり、キラコ付着。
85	107	3	Ⅲ層	軒目板桟瓦	(14.5)	(18.1)	2.2	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ、ケズリ、ナデ	密	良	暗灰（N3/）	暗灰（N3/）	瓦当部文様：丸瓦部 九曜紋。 平瓦部 唐草文。
85	111	7	Ⅲ層	目板桟瓦	27.7	(23.2)	2.0	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	密	良	灰（N5/）	灰（N5/）	平瓦部凹面に「御用□」の刻印あり。丸瓦部に釘孔あり。
86	112	3	Ⅲ層	目板桟瓦	27.9	(26.3)	2.3	カマ切り、ケズリ、ナデ、工具ナデ	カマ切り、工具ナデ	やや粗	良	灰（N5/）	灰（N5/）	
86	113	7	Ⅲ層	目板桟瓦	28.0	(16.8)	1.7	工具ナデ、ナデ	ケズリ、工具ナデ	密	良	灰（N4/）	灰（N4/）	
86	114	19	Ⅲ層	目板桟瓦	(14.5)	(10.7)	2.2	工具ナデ、ケズリ、ナデ	カマ切り、工具ナデ	やや粗	良	灰（N5/）	灰（N5/）	平瓦部凹部に刻印あり。
87	117	7	Ⅲ層	桟瓦	(19.2)	(14.6)	1.8	工具ナデ、ナデ	工具ナデ	粗	良好	黒褐（2.5Y3/1）	黄灰（2.5Y4/1）	小口に「若森」の刻印あり。

第 11 表　軒丸瓦観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	法量										残存率	調整		胎土	焼成	色調		備考
				瓦当直径	文様区径	中央厚さ	内区		外区		周縁部				内面	外面	粗・密		内面	外面	
							直径	文様	幅	文様	幅	高さ	側縁厚								
83	95	3	Ⅲ層	15.5	-	1.8	6.1	-	-	-	4.7	1.0	2.2	瓦当部完存	ナデ	ナデ、ケズリ	密	良	暗灰（N3/）	暗灰（N3/）	瓦当部文様：蛇の目紋。接合面にカキヤブリあり、キラコ付着
83	96	7	Ⅲ層	13.7	-	2.9	-	-	-	-	(1.6)	-	2.1	瓦当部完存	ナデ	ナデ、ケズリ	1mm 以下の石英、長石を含む	良	灰（N4/）	灰（N4/）	瓦当部文様：無文。キラコ付着。

第 12 表　軒平瓦観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	文様種		法量													残存率	調整		胎土	焼成	色調		備考
				中心飾	左右飾	上弦幅	下弦幅	弧深	上外縁幅	下外縁幅	文様区高	文様区幅	左脇区幅	右脇区幅	面取り幅	顎部上厚	顎部下厚	顎部高		外面	内面	粗・密		外面	内面	
85	108	7	Ⅲ層	九曜紋	唐草文	(4.9)	(10.5)	(2.7)	0.8	0.5	2.7	(8.0)	-	(4.6)	0.2	2.2	2.0	2.2	瓦当部2/3	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	やや粗	良	灰（N5/）	灰（N5/）	瓦当部文様：九曜紋、唐草文。
85	109	7	Ⅲ層	九曜紋	唐草文	(4.8)	(4.2)	-	0.8	0.6	2.4	-	-	-	0.5	1.7	(0.6)	(1.7)	瓦当部1/4	ナデ	ケズリ、ナデ	密	良	灰（N4/）	灰（N4/）	瓦当部文様：九曜紋、唐草文。
85	110	7	Ⅲ層	-	唐草文	(8.9)	(6.6)	(1.8)	0.6	0.4	2.6	-	-	3.1	0.5	2.5	1.9	1.7	瓦当部1/4	ナデ	ケズリ、ナデ	密	良	黄灰（2.5Y5/1）	黄灰（2.5Y5/1）	瓦当部文様：唐草文。キラコ付着。

第 13 表　丸瓦観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				全長	筒部幅	厚さ	残存率	凸面	凹面	粗・密		内面	外面	
75	11	9	Ⅱ層	(10.0)	(8.2)	2.2	1/6	工具ナデ、ヨコナデ	カマ切り、布目	やや粗	良	灰（N4/）	灰（N4/）	凸面に刻印あり、「元禄十二ウノ土山源四郎」か。
83	97	7	Ⅲ層	(18.0)	(13.4)	2.0	1/2	板ナデ、ナデ	カマ切り、布目	やや粗	良	黄灰（2.5Y6/1）	黄灰（2.5Y6/1）	凸面に「二郎」の刻印あり。
83	98	7	Ⅲ層	(10.4)	(9.0)	2.7	1/6	工具ナデ、ヨコナデ	カマ切り、工具ナデ、指オサエ、布目	精	良	灰（N5/）	暗灰（N3/）	凸面に「二郎兵へ」の刻印あり。
83	99	7	Ⅲ層	(15.4)	(14.4)	1.7	1/3	工具ナデ	鉄線切り、カマ切り、布目	精	良	灰（N5/）	灰（N5/）	凸面に「イ」の刻印あり。

第 14 表　平瓦観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	法量				残存率	調整		胎土	焼成	色調		備考
				全長	広端部幅	狭端部幅	厚さ		凸面	凹面	粗・密		凸面	凹面	
83	100	7	Ⅲ層	(12.8)	-	-	2.0	小片	ナデ、カマ切り	ナデ、ケズリ	密	やや軟質	灰（N5/）	灰（N5/）	凹面に「［　］土山」の刻印あり。
87	115	3	Ⅲ層	(11.1)	-	-	2.0	小片	工具ナデ	ナデ、カマ切り、工具ナデ	粗	良	灰（N4/）	にぶい黄橙（10YR7/2）	凹面に九曜紋の刻印あり。
87	116	1	Ⅲ層	(8.2)	-	-	1.6	小片	ナデ	ナデ、カマ切り	粗	良	黄灰（2.5Y5/1）	黄灰（2.5Y5/1）	凹面に菱形の刻印あり。

第 15 表　道具瓦観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	法量			調整		胎土	焼成	色調		備考
					全長	幅	厚さ	内面	外面	粗・密		内面	外面	
87	118	7	Ⅲ層	伏間止瓦	(15.5)	28.1	2.0	ナデ	ケズリ、ナデ	やや粗	良	灰（N4/1）	灰（N4/1）	瓦当部文様：沈線で囲むのみ。

第 16 表　陶磁器・土器観察表 1

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	器種	法量：cm（　）は復元・残存値 口径	底部径	器高	残存率	成形・調整 内面	外面	色調 内面	外面	胎土	焼成	年代	産地	備考
75	1	17	Ⅱ層	染付	皿	-	(16.6)	(2.8)	底部1/8	施文・施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	17世紀か	肥前か	
75	2	1	Ⅱ層	染付	皿	(14.8)	(8.3)	4.4	底部5/8～口縁部1/6	施文・施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀半ば～	肥前	輪花、口錆、蛇ノ目凹形高台。
75	3	4	Ⅱ層	白磁	碍子	最大長 3.7	最大幅 2.7	最大厚 2.7	完存	施釉	施釉			精	良	近代～	国産	
75	4	17	Ⅱ層	青磁	瓶	-	4.5	(3.6)	底部完存	回転ナデ	回転ナデのち施釉			精	良	17世紀後半	肥前	底部にアルミナ塗布。
75	5	9	Ⅱ層	陶器	皿	-	-	(1.9)	口縁部小片	施釉	ヨコナデ、施釉			精	良	16世紀末～17世紀前半	唐津	絵唐津。
75	6	9	Ⅱ層	陶器	碗	-	3.7	(2.9)	底部完存	施釉	ナデ			精	良	16世紀末～17世紀初	肥前か	兜巾状高台、見込に胎土目の痕跡。
75	7	9	Ⅱ層	陶器	擂鉢	(28.4)	-	(7.0)	口縁部1/8	回転ナデ、擂目、施釉	回転ナデ、施釉	にぶい黄橙 (10YR7/4)		精	良	17世紀後半～か	肥前	
75	8	9	Ⅱ層	陶器	擂鉢	-	-	(4.4)	口縁部小片	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉			精	良	17世紀前半か	肥前	
75	9	9	Ⅱ層	瓦質土器	擂鉢	-	-	(4.8)	底部小片	擂目	ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	黄灰 (2.5Y4/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	良		在地	外面に煤付着。
75	10	9	Ⅱ層	土師質土器	杯	(10.0)	-	(2.9)	口縁部1/4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm 以下の石英、長石、雲母、赤色粒子を含む	良	16世紀代か	豊前か	歪みあり。
76	12	7	Ⅲ層	染付	碗	-	-	(4.3)	口縁部小片	施釉	施文・施釉			精	良		肥前、中国か	青花か。
76	13	7	Ⅲ層	染付	碗蓋	9.3	つまみ径 4.9	3.0	つまみ完存～口縁部3/4	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀末～19世紀	肥前	広東碗蓋。
76	14	7	Ⅲ層	染付	碗蓋	(9.4)	つまみ径 4.9	3.0	つまみ2/3～口縁部1/5	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀末～19世紀	肥前	広東碗蓋。
76	15	7	Ⅲ層	染付	碗	(10.3)	5.6	6.2	底部3/4～口縁部1/16	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀末～19世紀	肥前	広東碗。
76	16	7	Ⅲ層	染付	碗蓋	(9.3)	つまみ径 (3.3)	(2.8)	つまみ1/3～口縁部1/4	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半～半ば	肥前	端反碗蓋。
76	17	7	Ⅲ層	染付	碗蓋	(8.3)	つまみ径 (3.3)	(2.4)	つまみ1/3～口縁部1/4	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半～半ば	肥前	端反碗蓋。
76	18	7	Ⅲ層	染付	碗蓋	(9.2)	つまみ径 (3.9)	(3.1)	つまみ1/3～口縁部1/3	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半～半ば	肥前	端反碗蓋、つまみに歪みあり。
76	19	7	Ⅲ層	染付	碗	9.8	3.8	5.6	底部完存～口縁部3/4	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半～半ば	肥前	端反碗。
76	20	7	Ⅲ層	染付	碗	10.9	4.8	5.9	底部3/4～口縁部1/2	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半～半ば	肥前	端反碗、見込に三足ハマの痕跡。
76	21	7	Ⅲ層	染付	碗	(9.5)	4.0	5.6	底部完存～口縁部1/3	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半～半ば	肥前	端反碗。
76	22	7	Ⅲ層	染付	碗	-	(4.8)	(5.3)	底部3/4～胴部1/8	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前	撥形高台。
76	23	7	Ⅲ層	染付	碗	-	(3.8)	(4.8)	底部1/4～胴部1/6	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前	高台内に銘あり。
76	24	7	Ⅲ層	染付	碗	-	(3.9)	(3.5)	底部2/3	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀後半	肥前	高台内に角福銘あり。
76	25	7	Ⅲ層	染付	碗	(9.6)	(3.7)	5.3	底部1/4～口縁部1/2	施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀	肥前	コンニャク印判。
76	26	7	Ⅲ層	染付	碗	-	4.0	(4.3)	底部1/2～胴部1/4	施文・施釉、釉剥ぎ	施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前	見込に蛇の目釉剥ぎあり。

第 17 表　陶磁器・土器観察表２

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	器種	法量：cm（　）は復元・残存値			残存率	成形・調整		色調		胎土	焼成	年代	産地	備考
						口径	底部径	器高		内面	外面	内面	外面					
76	27	7	Ⅲ層	染付	碗	-	(3.5)	(3.5)	底部1/3	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀前半 ～ 19世紀初	肥前	
77	28	7	Ⅲ層	青磁	碗	-	-	(2.5)	口縁部小片	施釉	施釉			精	良		肥前	
77	29	7	Ⅲ層	染付	碗	(7.2)	4.7	5.9	底部完存～口縁部1/8	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前	湯呑碗、中国趣味。
77	30	7	Ⅲ層	染付	碗	(7.8)	4.5	5.1	底部完存～口縁部1/5	施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良			小碗、口縁部掻き取り、撥形高台。
77	31	3	Ⅲ層	染付	碗	7.6	-	(3.6)	口縁部2/3	施文・施釉	施文・施釉			精	良	18世紀後半	肥前	筒形碗。
77	32	7	Ⅲ層	染付	碗	(6.0)	(3.4)	(5.4)	底部3/4 ～ 口縁部1/4	施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半 ～ 半ば	肥前か	小丸碗。
77	33	7	Ⅲ層	白磁	碗	(9.0)	4.2	(5.5)	底部完存～口縁部1/2	施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		国産	兜巾状高台、高台にアルミナ塗布。
77	34	7	Ⅲ層	白磁	碗	(12.2)	(5.2)	(6.5)	底部1/5 ～ 口縁部1/8	施釉、釉剥ぎ	施釉、釉剥ぎ			精	良		国産	蓋物、見込に蛇の目釉剥ぎあり、高台にアルミナ塗布。
77	35	7	Ⅲ層	青花	皿	-	-	(3.6)	口縁部小片	施文・施釉	施文・施釉			精	良			
77	36	7	Ⅲ層	青花	皿	(11.8)	-	(2.2)	口縁部1/8	施文・施釉	施文・施釉			精	良		中国	
77	37	7	Ⅲ層	青花	皿	-	(11.5)	(1.4)	底部1/2	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	16世紀末 ～ 17世紀初	中国	芙蓉手。
77	38	7	Ⅲ層	青花	皿	-	-	(2.1)	口縁部小片	施文・施釉	施釉			精	良		中国	多角皿。
77	39	7	Ⅲ層	染付	皿	-	-	(0.6)	底部小片	施文・施釉	施文・施釉			精	良	17世紀後半 ～ 18世紀	肥前	外底面に角福銘あり。
77	40	8	Ⅲ層	染付	皿	-	-	(2.5)	底部小片	施文・施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前	輪花。
77	41	7	Ⅲ層	染付	皿	-	(12.0)	(1.2)	底部1/5	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	17世紀後半 ～ 18世紀前半	肥前	高台内に銘あり。
77	42	7	Ⅲ層	染付	皿	(12.9)	(5.5)	3.8	底部1/2 ～ 口縁部1/3	施文・施釉、釉剥ぎ	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀 ～ 19世紀初	肥前	見込に蛇の目釉剥ぎ、五弁花文あり。
77	43	7	Ⅲ層	染付	皿	(13.0)	(6.7)	3.5	底部1/2 ～ 口縁部1/3	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀 ～ 19世紀初	肥前	見込に五弁花文あり。
77	44	7	Ⅲ層	染付	皿	-	(11.8)	(1.9)	底部1/4	施文・施釉	施釉			精	良		肥前か	被熱している。
77	45	7	Ⅲ層	染付	皿	(14.0)	(7.8)	3.7	底部1/8 ～ 口縁部1/8	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀	肥前	輪花、見込に五弁花文、高台内に二重方形枠あり。
78	46	7	Ⅲ層	染付	皿	(17.6)	(11.0)	2.6	底部1/4 ～ 口縁部1/4	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀	肥前	輪花。
78	47	3	Ⅲ層	染付	皿	(26.6)	(13.1)	4.0	底部1/6 ～ 口縁部1/6	施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀	国産	八角皿。
78	48	7	Ⅲ層	色絵	皿	-	(14.2)	(2.4)	底部1/6	施釉、色絵	施釉、釉剥ぎ			精	良	17世紀後半 ～ 18世紀前半か	肥前	内面に陽刻文あり。
78	49	7	Ⅲ層	染付	鉢	(21.2)	-	(5.2)	口縁部1/5	施文・施釉	施文・施釉			精	良	17世紀か	肥前	口錆。
78	50	7	Ⅲ層	染付	鉢	(10.7)	(5.6)	6.4	底部1/5 ～ 口縁部1/3	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	近代	肥前	八角鉢、化学コバルト。
78	51	7	Ⅲ層	染付	猪口	(7.4)	(5.6)	6.4	底部1/2 ～ 口縁部1/8	施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀末 ～	肥前	
78	52	7	Ⅲ層	染付	段重	(10.4)	(5.4)	4.7	底部1/3 ～ 口縁部1/3	施釉、釉剥ぎ	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	近代か	肥前	釉剥ぎ部にアルミナ塗布。
78	53	7	Ⅲ層	染付	蓋	-	(3.2)	(2.7)	口縁部1/2 ～ 天井部1/2	施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前？	
78	54	7	Ⅲ層	色絵	壺	(7.0)	-	(2.5)	口縁部1/6	無釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良			

第 18 表　陶磁器・土器観察表３

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	器種	法量：cm（　）は復元・残存値 口径	底部径	器高	残存率	成形・調整 内面	外面	色調 内面	外面	胎土	焼成	年代	産地	備考
78	55	7	Ⅲ層	青磁	鉢	-	(9.4)	(10.8)	底部1/5	施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	17世紀か	肥前	
78	56	1	Ⅲ層	白磁	皿	(5.5)	2.5	1.5	底部2/3～口縁部1/3	施釉	施釉、無釉			精	良	18世紀末～19世紀半ば	肥前	紅皿、歪みあり。
78	57	1	Ⅲ層	白磁	戸車	最大長4.0	最大幅4.0	最大高0.8	完存	無釉	施釉			精	良	18世紀半ば～	肥前	
79	58	1	Ⅲ層	陶器	碗	-	4.1	(3.7)	底部完存～胴部1/10	施釉	施釉			精	良	17世紀か	肥前	兜巾状高台。
79	59	7	Ⅲ層	陶器	碗	-	4.5	(2.6)	底部3/4～胴部1/8	施文・施釉	施釉			精	良	18世紀前半	肥前	京焼風陶器。
79	60	7	Ⅲ層	陶器	碗	(9.8)	(4.0)	5.1	底部1/4～口縁部1/8	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	17世紀末～18世紀前半	現川	蛍手。
79	61	7	Ⅲ層	陶器	碗	-	4.1	(3.9)	底部ほぼ完存～胴部3/4	施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀	肥前	兜巾状高台、内外面に刷毛目。
79	62	7	Ⅲ層	陶器	碗	-	4.2	(2.7)	底部完存～胴部1/4	施釉	施釉			精	良		熊本	無釉部にアルミナ塗布。
79	63	7	Ⅲ層	陶器	碗	-	(4.6)	(5.1)	底部1/2～胴部1/4	施釉	施釉			精	良		肥前か	兜巾状高台。
79	64	7	Ⅲ層	陶器	碗	(6.6)	(2.9)	5.3	底部1/12～口縁部1/4	施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀	九州	
79	65	7	Ⅲ層	陶器	碗	(9.0)	(3.6)	4.9	底部1/2～口縁部1/8	施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	18世紀末～19世紀	九州	見込に三足ハマの痕跡あり。
79	66	7	Ⅲ層	陶器	皿	-	5.8	(3.7)	底部完存	施釉、釉剥ぎ	施釉			精	良	17世紀末～18世紀前半	肥前	見込に蛇の目釉剥ぎあり、内面と高台に砂目付着。
79	67	7	Ⅲ層	陶器	皿	-	-	(3.4)	口縁部小片	施釉	施釉			精	良			変形皿。
79	68	7	Ⅲ層	陶器	水指	(14.0)	-	(4.7)	口縁部1/5	施釉	施釉			精	良		熊本	
79	69	7	Ⅲ層	陶器	水指	-	(14.4)	(5.1)	底部1/5	施釉	カキメ、ナデ、施釉			精	良		国産	
79	70	7	Ⅲ層	陶器	土瓶蓋	6.8	つまみ2.0	3.7	ほぼ完存	回転ナデ	施釉	にぶい黄橙(10YR6/3)		精	良	19世紀～	国産、	小代焼か。
79	71	7	Ⅲ層	陶器	鉢	-	-	(5.8)	口縁部小片	施釉	施釉			精	良	18世紀後半～	肥前	外面に刷毛目。
79	72	7	Ⅲ層	陶器	鉢	(17.2)	-	(6.9)	口縁部1/8	施釉	施釉			精	良			
79	73	7	Ⅲ層	陶器	鉢	(22.7)	-	(8.3)	口縁部1/6	施釉	施釉			精	良		国産	
79	74	3	Ⅲ層	陶器	釜	-	胴部径(17.2)	(5.9)	胴部1/8	回転ナデ	回転ナデ、施釉	灰褐(7.5YR5/2)		精	良		国産	
79	75	7	Ⅲ層	陶器	灰落とし	(10.1)	(5.8)	(6.7)	底部1/4～口縁部1/4	回転ナデ	回転ナデ、施釉	淡黄(2.5Y8/3)		精	良		国産	
79	76	7	Ⅲ層	陶器	灯火具	(8.6)	3.5	2.9	底部完存～口縁部5/8	施釉	回転ナデ、ナデ、施釉			精	良		肥前	回転糸切離し。
79	77	7	Ⅲ層	陶器	灯火具	8.7	2.6	2.6	底部1/2～口縁部1/2	施釉	回転ナデ、施釉			精	良		国産	回転糸切離し。
79	78	1	Ⅲ層	陶器	ドアノブ	最大長(2.6)	最大幅(5.3)	最大厚(2.0)	把手小片	施釉、無釉	施釉			精	良	近代か	イギリス産か	
80	79	7	Ⅲ層	陶器	擂鉢	(14.1)	-	(3.6)	口縁部1/8	擂目、施釉	回転ナデ、施釉			精	良	17世紀末	肥前	
80	80	3	Ⅲ層	陶器	擂鉢	(17.2)	(7.0)	6.7	底部1/6～口縁部1/16	擂目、施釉	回転ナデ、施釉			精	良	17世紀末	肥前	回転糸切離し。
80	81	7	Ⅲ層	陶器	擂鉢	-	-	(12.9)	胴部1/10～口縁部1/12	回転ナデ、擂目、施釉	タタキ目、ナデ、施釉			精	良	17世紀末～	肥前か	

第 19 表　陶磁器・土器観察表４

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	器種	法量：cm（　）は復元・残存値 口径	底部径	器高	残存率	成形・調整 内面	外面	色調 内面	外面	胎土	焼成	年代	産地	備考
80	82	7	Ⅲ層	陶器	擂鉢	-	16.6	(5.0)	底部1/8	擂目、施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前か、九州	
80	83	7	Ⅲ層	陶器	擂鉢	(35.0)	-	(7.0)	口縁部1/5	回転ナデ、擂目、施釉	回転ナデ、施釉			精	良		肥前	
80	84	7	Ⅲ層	陶器	擂鉢	(18.3)	-	(12.0)	胴部1/8～口縁部1/6	擂目、施釉	施釉			精	良	17世紀末～	肥前	
80	85	7	Ⅲ層	陶器	擂鉢	(35.6)	-	(8.2)	口縁部1/8	回転ナデ、擂目、施釉	回転ナデ、施釉			精	良	17世紀末～	肥前	
81	86	7	Ⅲ層	陶器	甕	(23.6)	-	(22.3)	胴部1/5～口縁部1/4	回転ナデ、施釉	回転ナデ、ケズリ、ハケメ、施釉			精	良		肥前	
81	87	7	Ⅲ層	陶器	甕	(12.9)	-	(10.5)	胴部1/10～口縁部1/4	タタキ、施釉	タタキ、施釉			精	良	17世紀後半～	肥前	
81	88	1	Ⅲ層	陶器	甕	-	-	(12.9)	胴部小片	タタキ、ナデ、施釉	回転ナデ、施釉			精	良	17世紀～	肥前	
81	89	7	Ⅲ層	陶器	甕	-	-	(12.9)	口縁部1/6	タタキ、回転ナデ	回転ナデ、施釉	灰赤(2.5YR5/2)		精	良	17世紀後半～	肥前	
81	90	3	Ⅲ層	陶器	甕	(34.0)	-	(7.5)	口縁部1/4	タタキ、回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉			精	良	17世紀後半～	肥前	
82	91	7	Ⅲ層	陶器	甕	(31.8)	-	(18.8)	口縁部1/8	タタキ、ナデ、施釉	回転ナデ、沈線３条、施釉	褐灰(7.5YT5/2)		精	良	18世紀～	肥前	
82	92	7	Ⅲ層	土師質土器	焙烙	(11.1)	-	(44.2)	胴部1/6～口縁部1/4	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ、指オサエ、ナデ	にぶい橙(7YR7/4)	にぶい橙(7YR7/4)	1mm 以下の石英、長石、赤色粒子を含む	良	近世か	在地	外面に煤付着。
82	93	7	Ⅲ層	瓦質土器	焜炉	(21.8)	-	(6.2)	口縁部1/4	回転ナデ、ナデ、カキヤブリ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm 以下の石英、長石を含む	良		在地	窓あり。
82	94	7	Ⅲ層	瓦質土器	鉢	(19.5)	-	(5.5)	口縁部1/6	回転ナデ、ナデ、ヘラ描き文様	回転ナデ、ナデ	黒褐(2.5YR3/1)	黒褐(2.5YR3/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	良		在地	
87	120	4	Ⅲ層	須恵器	甕	-	-	(4.6)	肩部1/6	ナデ、当て具痕	タタキ、カキメ	灰(N4/)	暗灰(N3/)	精	良		宇城	外面肩部に自然釉付着、外面器表に黒色の噴出物あり。
87	121	9	Ⅱ層	須恵器	杯蓋	(9.2)	-	(1.8)	口縁部1/6	回転ナデ	回転ナデ	灰(N4/)	灰(N6/)	1mm 以下の石英、長石を含む	良		在地	
89	124	3	Ⅳ層	染付	碗	9.8	3.6	6.1	底部ほぼ完存～口縁部2/3	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	近代		化学コバルト。
89	125	11	Ⅳ層	染付	碗	7.1	4.0	3.9	底部完存～口縁部3/4	施釉、釉剥ぎ	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前か	
89	126	15	Ⅳ層	陶器	向付	-	-	(5.0)	口縁部小片	施釉	施文・施釉			1mm 以下の石英、長石を含む	良	安土桃山	志野	志野焼。外面の釉下に筆による絵付けあり、文字か。
89	127	9	Ⅳ層	陶器	皿	(8.4)	-	(2.4)	口縁部1/6	施釉	施釉			精	良		肥前か	
89	128	3	Ⅳ層	陶器	皿	8.8	3.6	2.7	ほぼ完存	施文・施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀	熊本か	内面に三足ハマの痕跡、象嵌あり。
90	129	9	Ⅳ層	土師質土器	杯	-	8.2	(2.2)	底部1/2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm 以下の石英、長石を含む	良	13世紀か	在地	回転糸切離し。
90	130	9	Ⅳ層	土師質土器	杯	(8.8)	(4.1)	3.1	底部1/2～口縁部1/2	回転ナデ	回転ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1mm 以下の石英、雲母を含む	良	17世紀か	豊前か	回転糸切離し。

第 20 表　陶磁器・土器観察表５

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	種類	器種	法量：cm（　）は復元・残存値			残存率	成形・調整		色調		胎土	焼成	年代	産地	備考
						口径	底部径	器高		内面	外面	内面	外面					
90	131	9	Ⅳ層	土師質土器	杯	(10.3)	(5.4)	3.5	底部1/4～口縁部1/24	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm 以下の長石、1mm 以下の石英、雲母を含む	良		豊前か	
91	132	7	Ⅴ層	青磁	碗	-	-	(2.9)	口縁部小片	施釉	施文・施釉			精	良	15世紀か	中国	
91	133	7	Ⅴ層	染付	碗	(10.0)	(4.2)	6.0	底部3/4～口縁部1/8	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良	19世紀前半～半ば	肥前	端反碗、高台にアルミナ塗布。
91	134	7	Ⅴ層	青花か	皿	-	(6.9)	(1.7)	底部1/4	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		中国か	高台内に銘あり、角福銘か。
91	135	7	Ⅴ層	染付	皿	(31.7)	(17.6)	4.7	底部1/4～口縁部1/10	施文・施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	17世紀後半～18世紀	肥前	高台内にハリの痕跡あり。
91	136	7	Ⅴ層	染付	瓶	-	(7.0)	(12.3)	底部1/3～胴部1/6	無釉	施文・施釉、釉剥ぎ	灰白(5Y8/1)		精	良		肥前	
91	137	7	Ⅴ層	陶器	碗	(7.8)	(4.8)	5.6	底部1/3～口縁部1/4	施文・施釉	施釉			精	良		瀬戸か	
91	138	7	Ⅴ層	陶器	碗	(9.0)	4.9	6.0	底部3/4～口縁部1/4	施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良		国産	
91	139	7	Ⅴ層	陶器	甕	(33.0)	-	(17.7)	胴部1/8～口縁部1/8	回転ナデ、施釉	施釉			精	良		八代か	外面に象嵌あり。
92	140	7	排土	染付	皿	-	(4.8)	(2.1)	底部1/3	施文・施釉	施釉、釉剥ぎ			精	良	17世紀前半か	肥前か	高台に砂目あり。
92	141	1	排土	染付	鉢	-	7.2	(3.8)	底部ほぼ完存～胴部1/10	施文・施釉	施文・施釉、釉剥ぎ			精	良		肥前	六角鉢。
92	142	1	排土	陶器	碗	-	3.8	(2.5)	底部完存～胴部1/10	施文・施釉	施釉			精	良	17世紀末～18世紀前半	肥前	京焼風陶器。
92	143	9	排土	土師質土器	杯	(11.0)	(4.8)	2.0	底部1/3～口縁部1/6	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm 以下の石英、長石を含む	良	16～17世紀	豊前か	回転糸切り離し。
	145	9	排土	青花	-	-	-	(3.5)	胴部小片	施文・施釉	施文・施釉			精	良		中国	

第 21 表　金属製品観察表

挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土層位	名称	計測値		重量	材質	備考
					全長	全幅			
87	122	4	Ⅲ層	耳環	2.05	2.0	6.88	青銅	
88	123	4	Ⅲ層	刀	(52.3)	3.9		鉄	紀年銘象嵌あり、「甲子年五□（月ヵ）□（中ヵ）」。
92	144	11	排土	隠し金具か	6.2	5.5	14.97	青銅	

第 22 表　銭観察表

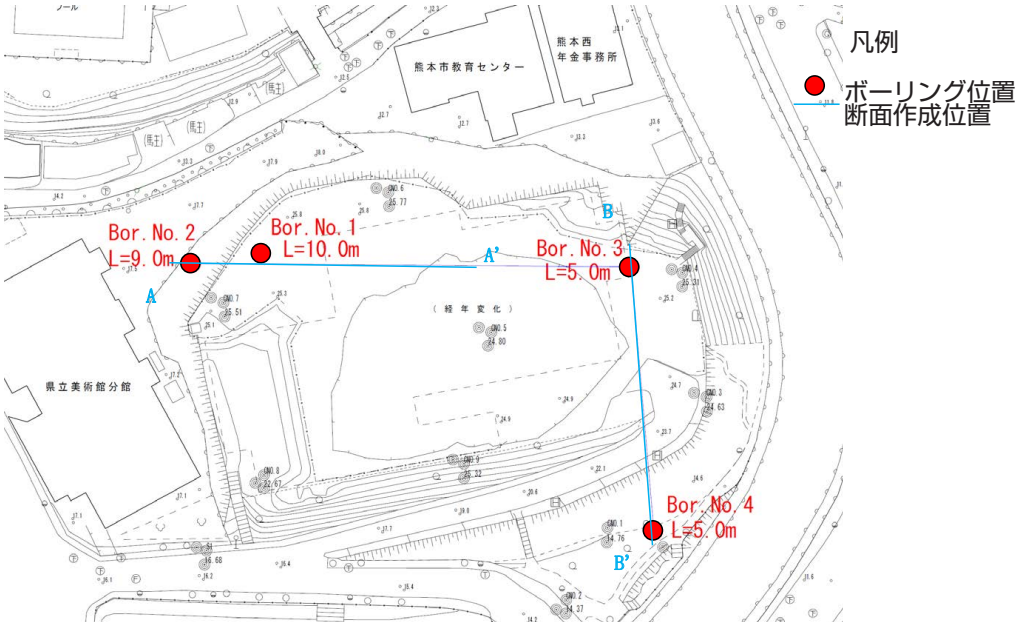
挿図No.	掲載No.	出土トレンチ	出土位置	名称	法量							重量（g）	材質	備考
					外径	内径	厚 a	厚 b	厚 c	方孔 a	方孔 b			
87	119	7	Ⅲ層	銅銭	2.35	0.95	0.1	0.1	0.1	0.75	0.75	2.23	青銅	寛永通宝。

第４章　地質調査

１．調査方法

地形の成り立ちや詳細な地質を把握して発掘調査成果を補足することを目的として、発掘調査後の 12 月 26 日付で現状変更の許可を受け、地質調査を行った。調査内容は、調査ボーリング、標準貫入試験、室内土質試験である。なお、調査ボーリング及び標準貫入試験は４カ所で実施した。

調査ボーリングでは、採取したコアを観察して、地質区分、土質・岩種などの判定を行い、地質分布を把握した。標準貫入試験では、原位置における土の硬軟、あるいは締まり具合の相対値を知るためのＮ値の測定と、乱した試料の採取を行った。室内土質試験は、土の力学的性質の推定や工学的な分類、現場の土の状態の把握をするために行った。具体的には、土の含水比試験、土粒子の密度試験、土の粒度試験、土の液性限界・塑性限界試験、土の湿潤密度試験、土の三軸圧縮試験を行っている。



第 93 図　調査地点位置図

２．調査成果

調査結果をまとめると、調査地の地質は以下の第 23 表のように区分される。

第 23 表　調査地の地質層序表

地質時代	地 層 名	記号	層　　相	Ｎ値の範　囲	設計Ｎ値
現世	表土・盛土	B	礫混じり砂質粘土を呈す。 礫はφ 30mm 程度の亜角礫が点在する。 砂分は粗砂主体である。	1～12	4
新生代第四紀完新世～更新世	河床堆積物	rd	礫混じり火山灰質砂～砂礫を呈す。 砂は粗砂主体であり所々にφ 30mm 程の軽石礫を含む。 全体にφ 5～10mm 程の亜円礫を含む。	13～18	15
	阿蘇４火砕流堆積物	Aso4	礫混じり火山灰質粘性土を呈す。 φ 50mm 程の礫を多く含む。 白灰色の微細な軽石礫を含む。	1～9	5
	凝灰角礫岩強風化部	Tb-Hw	マトリックスは強風化し礫混じり砂質粘土を呈す。 全体的に凝灰岩や安山岩の巨礫を含む。 親指の指圧により解せる程度の固さである。	9～27	16

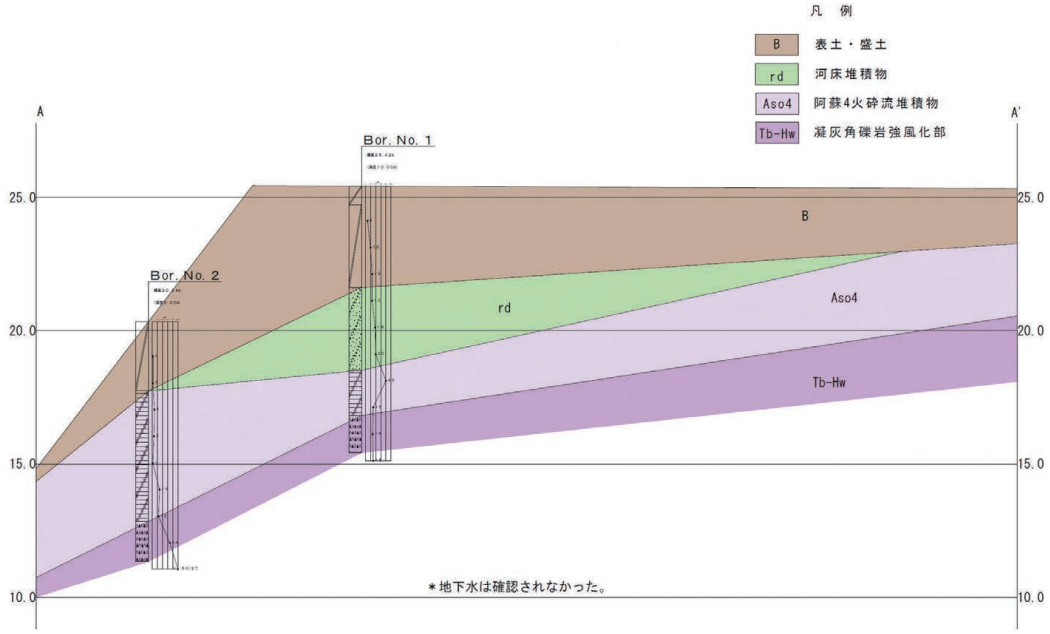
また、各調査地点の概要は次のとおりであり、これら調査成果を基に地質断面図を作成している。なお、今回の調査で地下水位は確認されなかった。

№1の現地表面の標高は25.4mである。現地表下0.7 mまでは現代の整地層で、その下に約3.0 mの厚さで阿蘇4火砕流砂質土（Aso-4s）を主体とする盛土が堆積する。その直下から標高18.5 mまでは約3.0 mの厚さで坪井川に由来する河川堆積物を確認した。その下標高16.8 mまでは阿蘇4火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。現地表下約9.0 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

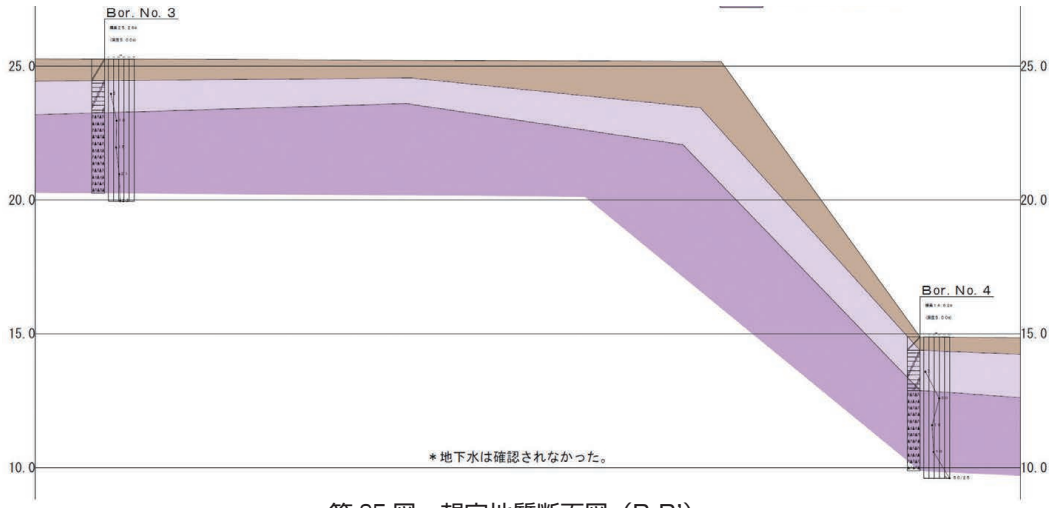
№2の現地表面の標高は20.3 mである。現地表下2.6 mまでは阿蘇4火砕流砂質土（Aso-4s）を主体とする盛土が堆積する。その直下から標高12.8 mまでは阿蘇4火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。現地表下約7.5 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

№3の現地表面の標高は25.2 mである。現地表下0.8 mまでは現代の整地層で、その下に約1.0 mの厚さで阿蘇4火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。現地表下約2.0 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

№4の現地表面の標高は14.6 mである。現地表下0.5 mまでは現代の整地層で、その下に約1.5 mの厚さで阿蘇4火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。現地表下約2.0 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。



第94図　想定地質断面図（A-A'）



第95図　想定地質断面図（B-B'）

第５章　総括

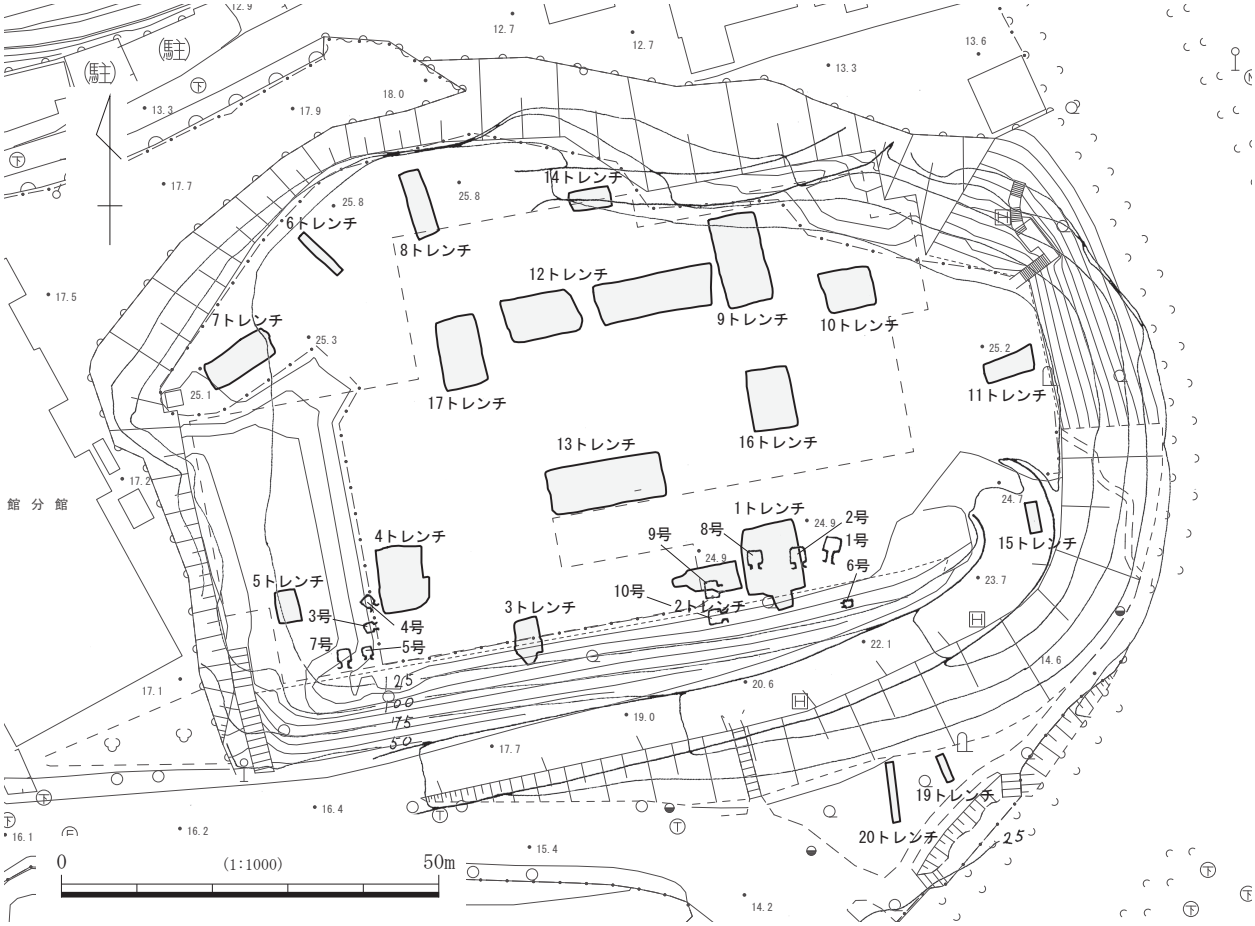
１．出土遺物について

今回出土した遺物についてまとめると、大多数が近世の資料で、他には古墳時代、中世、近代以降のものが含まれる。土器や陶磁器が主であるが、古墳時代の遺物については須恵器の他に鉄刀や耳環が出土しており、墓から出土することの多い遺物である。これらの遺物は、ＮＨＫ熊本放送会館建設時の土層とされるⅢ層からの出土が大部分であるため厳密な価値付けが難しいが、近世の遺物が多いことは調査地が近世に武家屋敷であったことを反映している可能性がある。

近世陶磁器は 17 世紀後半以降の資料の数量が多く、肥前系の染付が主体である。17 世紀前半以前のものには青花や国産陶器等があるが、17 世紀後半以降のものに比べると少量である。

近代以降の資料は化学コバルトを用いた染付や碍子、ドアノブ等がある。軍の施設や偕行社等との関連を想起させる。

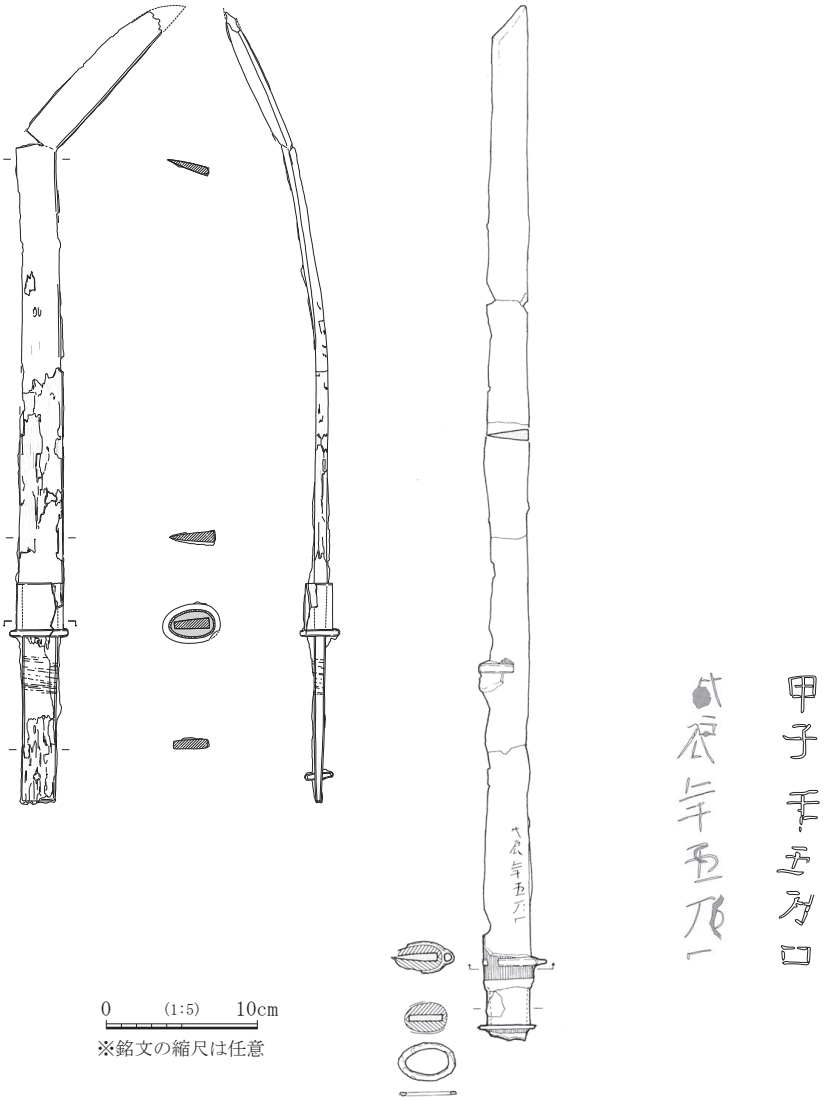
瓦には丸瓦、平瓦、目板桟瓦、桟瓦、道具瓦がある。目板桟瓦は熊本城内では江戸期から用いられている（美濃口 2020）が、近代以降も作られている。桟瓦は熊本城内では明治時代以降に用いられており、軍等の施設との関係が考えられる。刻印がある瓦は 11 点である。内訳は、軒目板桟瓦が１点で「猿渡」、目板桟瓦が２点で「御用□」と判読不能なもの、桟瓦が１点で「若森」、丸瓦が４点で「元禄十ニウノ土山源四郎？」、「二郎」、「二郎兵へ」、「イ」、平瓦が３点で「〔　〕土山」、九曜紋、菱形である。このうち「猿渡」は、加藤期以後、幕末まで瓦師棟梁を勤めた猿渡家のことと考えられる。「二郎」や「二郎兵へ」も工人の名前であろう。「土山」は瓦が製造された地名を指していると考えられる。上益城郡益城町小池にあたり、前述の猿渡家や北村家等の瓦師が住んでいた。



第 96 図　調査区と横穴の位置関係の概略図

特筆されるのは４トレンチから出土した鉄刀である。熊本大学との合同調査によるＸ線CT調査で「甲子年五□（月ヵ）□（中ヵ）」の象嵌銘があることが判明した。この紀年銘象嵌鉄刀に関する所見は、今後詳細な調査や保存処理を行っていく中で変更が生じる可能性があるが、現状の所見を以下にまとめる。

紀年銘象嵌鉄刀は鏻と喰出鍔を有している。このような鉄刀が普及するのはTK43型式期以降である。また、Ｘ線ＣＴ画像を見ると鏻の下には刃と背の両側に関があることが分かるが、この関の深さが両側で同じ均等両関のようである。均等両関の鉄刀は７世紀以降に位置付けられる（臼杵1984）。また、豊島直博氏のご教示によれば、茎の先端付近に目釘穴をあける特徴があり、福島県白河観音山３号墓例、群馬県旧藤岡町例など、圭頭大刀Ｂ類覆輪式（７世紀第１四半期）に類例があるとのことである。



第97図　千葉城地区と箕谷２号墳の紀年銘象嵌鉄刀と銘文

紀年銘象嵌鉄刀は４トレンチのＮＨＫ熊本放送会館建設に伴う土層であるⅢ層から出土したものであるが、第３章第２節の各トレンチの所見で述べたように、本来は古墳時代の横穴に伴うものであった可能性がある。今回の調査区と横穴の厳密な位置関係を示すことは難しいが、丘陵に上がる道を基準にして両者をおおむね重ね合わせたものが第96図である。この図から、４トレンチは丘陵の南西側にある横穴の一群と近いことが分かる。そして、第２章第５節で述べたように、この南西の一群では第５号横穴の前庭部付近から７世紀前半を中心とした時期の土器が見つかっている。４トレンチから出土した紀年銘象嵌鉄刀がこの南西の一群の横穴のものであったと断定はできないものの、想定される鉄刀の時期と土器の時期に矛盾がないことが確認できる。これらのことから、鉄刀に刻まれた甲子年は604年と想定するのが妥当であろう。

千葉城地区から出土した紀年銘象嵌鉄刀の銘文と類似しているのが、兵庫県箕谷２号墳（八鹿町教育委員会1987）から出土した紀年銘象嵌鉄刀である。箕谷２号墳は東西12ｍ、南北14ｍの円墳と推定されており、主体部は無袖式の横穴式石室である。石室内から出土した鉄刀の１つに「戊辰年五月中」の銅象

嵌が入っており、戊辰年は608年が想定されている。千葉城地区の例と同様に、刀身の茎に近い棟寄りの位置に紀年銘があり、書かれている内容も似ている。今後、より詳細に比較していく必要がある。

２．土層及び遺構について

調査の成果で述べたとおり、調査地は大規模に撹乱されていた。火砕流堆積物である地山のⅥ層の上に堆積しているのは近世以降の土層で、中世までの堆積層は確認されなかった。中世以前の土層は削平されていると考えられ、当時の状況を発掘調査で明らかにすることは難しい。ただし、古墳時代の横穴は火砕流堆積物を掘り込んで築造されているため現代まで残存しており、ＮＨＫ熊本放送会館建設時に調査されたことはすでに述べたとおりである。

近世の遺構等の確認が主要な調査目的であったが、近代以降に様々な土地利用がなされた結果、近世の痕跡についてもほとんど確認することができなかった。近世の可能性がある土層をⅤ層としているが、今回Ⅴ層も確認したのが７トレンチ、８トレンチ、９トレンチ、12トレンチ（東側）、15トレンチの５本のトレンチである。また、８トレンチのⅤ層で検出したT8-SK01も近世の可能性を推定しているが、これらの土層や遺構で遺物等から近世と判断できるものはなく、堆積状況等からの推定であるため、これらの時期については今後も検討が必要である。

ＮＨＫ熊本放送会館建設時の土層であるⅢ層より下位で、近世以前ではないと認められる土層をⅣ層としている。現場では近代と想定して調査を行っているが、ＮＨＫ熊本放送会館の建設が始まったのが昭和37年（1962年）であるため、それ以前であっても現代を含んでいる可能性がある。Ⅳ層もかなり失われており、確認したのは部分的である。９トレンチでは、斜面を埋めるようなⅣ層の堆積があり、それには軽石が多く含まれていた。１トレンチや３トレンチでも軽石を多く含む土層が斜面に堆積していることを確認しており、その類似性から同時期に敷地の斜面を埋め立てた造成工事の土層である可能性がある。ただし、Ⅳ層についても出土遺物は少なく、その詳細な時期については今後も検討を続けていく必要がある。ＮＨＫ熊本放送会館建設で横穴が発見されたのは敷地の拡張中だと報告されており（熊本市教育委員会1971）、少なくとも横穴が発見された敷地南側では、現代に斜面を埋めている可能性もある。

近代の可能性がある遺構としては、８トレンチで検出したレンガ構造物がある。大きく破壊されているため本来の構造は明らかでない。調査時の所見ではレンガ構造物を壊した土坑に堆積しているのは主にⅢ層であり、一部Ⅳ層が含まれている。土層図を見る限りⅢ層がⅣ層を掘り込んではおらず、同一土坑中の堆積のようであることから、レンガ構造物を壊したのはＮＨＫ熊本放送会館建設時、つまり現代であった蓋然性が高いだろう。しかし、ＮＨＫ熊本放送会館以前にあった教育研究所も戦前の旧偕行社を使用していたとされるため、レンガ構造物が偕行社以前の近代の所産である可能性は十分に想定できる。他に、１トレンチの石列についても、Ⅳ層中の構築であることから、近代の可能性もある。15トレンチのⅣ層を構成する硬質の土層や、20トレンチのⅣ層中に形成された硬化面についても、近代の道路の可能性を想定している。

Ⅲ層より上は現代の土層である。調査の結果、敷地は現代に大きく削られており、近代以前の残存状態が非常に悪いことが明らかとなった。現代の土層の直下が火砕流堆積物であるところも多い。今回出土した紀年銘象嵌鉄刀はⅢ層から出土した。ＮＨＫ熊本放送会館の建設により動かされたものであることは明らかで、工事により壊された周囲の横穴の副葬品であった可能性がある。

３．調査地の旧地形について

旧地形の復元には、発掘調査成果に加えて地質調査成果と、横穴の配置が参考となる。調査地の南斜面に調査区がかかっている１トレンチと３トレンチでは、斜面にⅢ層やⅣ層が堆積している状況が見られた。

また、昭和 37 年（1962 年）に調査された横穴の位置を見てみると、現在の崖面よりもやや内側のようである。さらに、横穴は敷地の拡張工事中の発見であると報告されている。これらのことから、現在の敷地の南側は盛土で多少なりとも拡幅されたものだと考えられる。盛土は複数回行われた可能性もあるが、今回の調査では近代から現代の土層で斜面が埋められている状況が明らかとなっている。

敷地南側と同様な斜面へ盛土した状況は敷地北側の９トレンチでも確認した。また、地質調査の成果によると、６トレンチ付近の敷地北東側では表土や盛土が非常に厚く堆積している。９トレンチと６トレンチの間にある 14 トレンチでも傾斜している地山にⅢ層が堆積しており、敷地北側でも盛土による平坦面の拡幅が行われているとみられる。堆積している土層は主にⅢ層とⅣ層であり、南側の状況と似ている。部分的にⅤ層と判断されている土層が堆積しているが薄く、これのみで敷地の平坦面を拡幅したと言えるような堆積状況ではない。南側と同様に、盛土は複数回行われた可能性も当然あるが、今回の調査で明らかとなったのは近代から現代の土層で斜面が埋められている状況と言えるだろう。

敷地の東側は、11 トレンチの調査成果から平坦な地山が東端部付近まで続いていると見られ、また盛土も敷地北東部のように厚くない。地質調査の成果を見ても、敷地東側は盛土が薄く地山の火砕流堆積物が比較的平坦になっており、斜面を埋めて平坦地を拡幅している状況は認められない。また、敷地の西側については、５トレンチでＮＨＫ熊本放送会館の解体整地土が確認されたのみであるため、詳しい状況は不明である。

以上のように、今回調査した旧ＮＨＫ熊本放送会館の敷地は南側と北側で盛土により平坦面の拡幅がなされたもので、その時期は近代以降とみられる。それ以前にも地形の改変が行われた可能性はあるが、少なくとも南側斜面では横穴が残存していた状況を考えると、古墳時代以降大きく斜面が削られた状況は考えにくいだろう。

参考文献

臼杵勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX

熊本市教育委員会 1971『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会

豊島直博 2023「圭頭大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第 105 巻第２号　日本考古学學會

美濃口紀子 2020「熊本城の出土瓦編年試案」『特別史跡熊本城跡総括報告書』 調査研究編　第２分冊
　熊本市熊本城調査研究センター

八鹿町教育委員会 1987『箕谷古墳群』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第６集　八鹿町教育委員会

写 真 図 版

調査地遠景 (東から)

1 トレンチ全景（北から）

1 トレンチ西壁（南半部分、東から）

1 トレンチ石列（北西から）

２トレンチ全景（北から）

３トレンチ西壁（南半部分、東から）

３トレンチ全景（北から）

４トレンチ全景（北端に鉄刀、南から）

４トレンチ東壁 (北端に鉄刀、西から）

４トレンチ鉄刀出土状況 (西から）

５トレンチ全景（北東から）

６トレンチ全景（南東から）

７トレンチ全景（西から）

８トレンチ SX01(西から）

８トレンチ全景（南から）

８トレンチレンガ構造物（南東から）

9 トレンチ全景 (南から)

9 トレンチ西壁（北東から）

10 トレンチ全景（西から）

10 トレンチ南壁（北から）

11 トレンチ全景 (西から)

11 トレンチ南壁（北から）

12 トレンチ (西側) 全景（東から）

12 トレンチ (東側) 全景（東から）

12 トレンチ (西側) 北壁（南東から）

12 トレンチ (東側) 北壁（南東から）

13 トレンチ全景 (西から）

13 トレンチ南壁 (北から）

14 トレンチ全景（西から）

15 トレンチ全景（南から）

14 トレンチ北壁（南西から）

15 トレンチ西壁（東から）

16 トレンチ全景 (北から)

16 トレンチ東壁 (西から)

17 トレンチ全景（北から）

17 トレンチ東壁（南西から）

19 トレンチ東壁 (西から）

20 トレンチ東壁（西から）

19 トレンチ全景 (南から）

20 トレンチ南半（北から）

20 トレンチ北半 (北から）

第 75 図2

第 75 図3

第 75 図4

第 75 図5

第 75 図 11

第 76 図 12

第 77 図 28

第 77 図 33

第 77 図 34

第 77 図 35

第 77 図 36

第 77 図 37

第 77 図 38

第 77 図 45

第 78 図 46

第 78 図 47

第 78 図 48

第 78 図 49

第 78 図 53

第 78 図 54

第 78 図 55

第 78 図 56

第 78 図 57

第 79 図 58

第 79 図 59

第 79 図 62

第 79 図 63

第 79 図 64

第 79 図 65

第 79 図 67

第 79 図 68

第 79 図 69

第 79 図 70

第 79 図 72

第 79 図 74

第 81 図 86

第 81 図 88

第 79 図 73

第 79 図 76

第 79 図 78

第 81 図 87

第 81 図 89

第 81 図 90

第 82 図 93

第 82 図 91

第 82 図 94

第 82 図 92

第 83 図 97

第 83 図 95

第 83 図 98

第 83 図 99

第 83 図 100

第 84 図 101

第 84 図 102

第 84 図 103

第 84 図 105

第 84 図 104

第 84 図 106

第 84 図 107

第 84 図 108

第 85 図 109

第 85 図 110

第 86 図 114

第 87 図 115

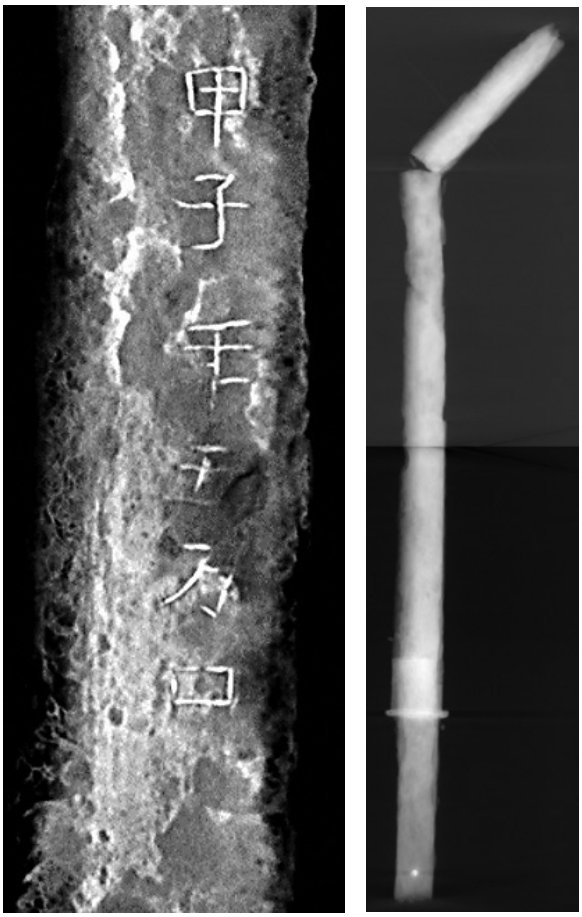
第 87 図 116

第 85 図 111

第 87 図 117

第 87 図 118

第 88 図 123



第 88 図 123 X 線 CT 画像
（熊本大学キャンパスミュージアム推進室提供）

第 87 図 120

第 87 図 121

第 87 図 122

第 89 図 127

第 91 図 132

第 89 図 128

第 90 図 130

第 91 図 137

第 91 図 138

第 92 図 142

第 92 図 144

第 92 図 143

145

第48図1

第48図2

第48図3

第48図8

第48図4

第48図5

第48図6

第48図7

第48図9

第 48 図 10

第 48 図 11

第 48 図 13

第 48 図 12

第 48 図 14

第 48 図 15

第 49 図 16

第 49 図 18

第 50 図 19・20・21

第 49 図 17

第 51 図 23

第 51 図 25

第 52 図 26

第 53 図 27

第 53 図 28

第 53 図 29

第 53 図 30

第 53 図 31・32

第 53 図 33

第 53 図 35

第 53 図 36

報告書抄録

ふりがな	くまもとじょうあと　はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	熊本城跡発掘調査報告書５
副　書　名	整備基本計画策定に向けた千葉城地区の発掘調査
シリーズ名	熊本城調査研究センター報告書
シリーズ番号	第７集
編 著 者 名	三好栄太郎（編）木下泰葉　永島さくら
編 集 機 関	熊本市熊本城調査研究センター
所　在　地	〒860-0806　熊本市中央区花畑町９番６号　TEL 096-355-2327
発行年月日	令和６年（2024 年）３月 26 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		発掘期間	発掘面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
くまもとじょうあと 熊本城跡 ちばじょうちく 千葉城地区	くまもとけん 熊本県 くまもとし 熊本市 ちゅうおうく 中央区 ちばじょうまち 千葉城町 ２－５	43201	246・247	32° 48′ 24″	130° 42′ 33″	20220310 ～ 20220930	228.8	活用目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊本城跡 千葉城地区	城館、横穴	古墳時代 中世 近世 近代		紀年銘象嵌鉄刀、須恵器、耳環、土師質土器、瓦器、陶器、磁器	現代の撹乱層から近世や近代の陶磁器とともに、紀年銘象嵌鉄刀や耳環等が出土。

要 旨	特別史跡熊本城跡の東部に位置する千葉城地区は、中世に出田秀信が構えた隈本城があったとされるが、詳細は分からない。近世には主として武家屋敷、近代以降は学校や軍の施設等が置かれた。また、古墳時代には横穴が築造されていたことも、過去の発掘調査で分かっている。 今回、特別史跡の整備基本計画策定に向けて近世の遺構等の確認を目的として発掘調査を行った。その結果、現代の撹乱のために近世の遺構や土層はほとんど残されていなかった。中世から近代の土器や陶磁器、瓦等が出土したが、ほとんどが現代の土層からである。また、鉄刀や耳環、須恵器といった古墳時代の遺物も現代の土層から出土した。鉄刀をＸ線ＣＴ調査したところ、「甲子年五□（月カ）□（中カ）」と読める銘文が確認された。鉄刀の型式学的位置付け等から、「甲子年」は 604 年と想定される。遺構に伴うものではないが、発掘調査で出土した銘文鉄刀は全国でも 10 例に満たず、貴重な発見である。兵庫県箕谷２号墳出土の紀年銘象嵌鉄刀のような類似例と比較検討することで、当時の社会状況や国家形成過程の実像に迫りうる非常に重要な資料である。

熊本城調査研究センター報告書　第７集

熊本城跡発掘調査報告書５

－整備基本計画策定に向けた千葉城地区の発掘調査－

2024 年３月

発行　熊本市熊本城調査研究センター
〒 860-0806　熊本市中央区花町９番６号
TEL 096-355-2327
印刷　有限会社　あすなろ印刷
〒 860-0821　熊本市中央区本山３丁目３番１号
TEL 096-335-8880